

# アルベド二人旅

神谷涼

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

一人だけど二人で転移してきたアルベドさんが、旅する話です。あの意味で憑依？ 他のナザリツク勢は出てきません。一応はGLですが、キレイな百合展開はたぶん皆無です。がつつりドロドロしたことをします。

20話：草原からカルネ村に移動したままです。旅……してません！

26話：ついにカルネ村から旅立ちました！……観光旅行に

34話：カルネ村に帰ってきました！ 日帰りで（汗）

## 目次

1 : 性欲をもてあます	1
2 : 頭がフットーしそうだよおっつ	8
3 : MUGENの闇	21
4 : やってくれた喃	29
5 : 命を刈り取る形	36
6 : いとしいしと!	43
7 : アッー!	51
8 : スゴいね人体♡	58
9 : その痛みに反逆する	65
10 : 残酷な神が支配する	75
11 : オイオイオイ 死ぬわアイツ	84
12 : この方の心には闇がございます	91
13 : 親方!	102
14 : さっすが、○○様は話がわかるツ	109
15 : べっ別にあんたのことなんて好きじゃないんだからね!!	116
16 : なんとという冷静で的確な判断力なんだ!!	125
17 : 殺して解して並べて揃えて晒してやんよ	134
時系列メモ	141
18 : えっ	146
19 : こりやホンマ勃起もんやで……	153
20 : マスク・ジ・エンド!!	162
21 : モノを食べる時はね	171
22 : 喜べ少年。君の望みはようやく叶う。	178

23	ペロツ……これは	188
24	滅日（ほろび）（前編）	198
25	滅日（ほろび）（後編）	206
26	まだ慌てるような時間じゃない	218
27	何この可愛い生き物	226
28	あ ひよつとして犬語じゃないと駄目かな？	236
29	人類は滅亡する！	246
30	神か……最初に罪を考え出したつまらん男さ	257
31	俺は暴力が嫌いだ そいつは嘘じゃねえ	263
32	ハイクを詠め	274
33	少し泣く	280
34	ああつ女神さまっ	288
35	『僕は悪くない』	298
36	えーマジ童貞!? キモーイ	304
37	ひぐらしのなく頃に	313
閑話1	ないわー	321
38	来ちゃった	330
39	美しさは罪	342
閑話2	激しい「喜び」はいらない……そのかわり	353
40	プランBでいこう	363
カルネ村の詳細		373
41	……ところがどっこい……夢じゃありません……!	382
42	……言い忘れていたな、私は非常に我儘なんだ	398
43	……考えろ、考えろ、マクガイバー	407
44	……天下三分の計	416

閑話3：言葉の意味はよくわからんがとにかくすごい自信だ	428
45：大丈夫だ、問題ない	436
46：拙者にときめいてもらうでござる	445
47：世界は美しくなんか無い。そしてそれ故に、美しい。	454
48：みんな いっしょうけんめい たたかっている	464

## 1：性欲をもてあます

DMMO—RPGユグドラシル、サービス最終日。

モモンガはただ一人で、己のギルド拠点たるナザリック地下大墳墓の最奥——玉座の間にいた。

NPCはいるが……コマンド通りの動きしかできない彼らを人は呼べまい。

かつての仲間ほとんど来ず、最後の時を共にしてくれなかった。触れられるほど傍に居るのは、ただ一体のNPC。

守護者統括アルベド。

そんな彼女の設定を、ふと覗けば。

あまりにもあまりな末文を見た。

完璧な設定を与えられた彼女の『ちなみにビッチである』というメに、モモンガは——最後の最後を共にしてくれる唯一の存在たる彼女に、あわれみを感じてしまう。

いつもなら彼女の造り手たるタブラ・スマラグデイナの意志を優先したであろうに。

誰一人共に残らなかったギルメンへの小さな怒りを込めて。

モモンガは、アルベドの設定を書き換えた。

「モモンガを愛している、と……うわ、恥ずかし！」

書き換えておいてから、一人で恥ずかしくなっていたばたしてしま  
うが。

もうわずかな時間しか存在も許されない設定なのだ。

せめてもの我儘、己の証と、そのままウインドウを閉じ。

改めてアルベドを見る。

ひびきます  
跪く姿も美しく。

白いドレスが、その美しい肢体を強調する。

上からなので、谷間も見えていた。

最終日だからと、無理をして有給をとり。延々と入り浸って、誰か来ないかと待ち続けたモモンガ——鈴木悟。

彼はここ一週間ばかり、まったく発散していない。

さっきの、タブラ氏の設定が頭の中で何度も響く。

(ビッチ……アルベドがビッチ……つまり設定上ではこの体は既に……)

己だけがハブられて知らなかっただけで。

他のギルメンにさんざん、慰み者にされていた。

汚されたアルベドは、ここでじつとモモンガに抱かれる日を待っていたのでは？

そう、ギルメンはユグドラシルではなく、アルベドの肉体に飽きたのでは？

そして何も知らないモモンガを陰で……

そんな想像で、リアルにおいて鈴木悟の肉体は、激しく反応していた。

「……………」

アルベドの谷間をガン見し。

むらっとしてしまう。

視線をそらせば、露出された腰骨と尻のラインが見える。

そう、アルベドが既にさんざん弄ばれていたのなら。

ギルマスである己が最後に手を出してもいいのではないか？

さつき、己を愛していると書き換えたのだ。

こんな谷間を見せつけて(跪いているだけです)。

尻を後ろに突き出して(跪いているだけです)。

誘っているとした見えない(跪いてるだけだっば)。

睡眠不足と欲求不満とルサンチマンを抱えた彼が、性衝動を抱くのも。

仕方あるまい。

「……………はっ!?!」

我に返れば、どれだけガン見していたのか、サービス終了まであと10秒。

「そうか……もう終わりか。ならどうせ最後だし」

そう、最後なのだ。

「運営も、こんな最後の最後まで仕事しないだろ」

サービス終了まであと3秒。

「……『立て』」

目の前に、間近で立ったアルベド。

しつかりと、無意味に凝って作り込まれた胸が、目の前で揺れる。

サービス終了まであと2秒。

躊躇する暇はない。

モモンガは骨の両手を突き出し、アルベドのたわわな胸をわしづかみにした。

サービス終了まで1秒を切つて。

モモンガの手がアルベドの乳房を掴むと同時に。

やたら厳格なユグドラシルの運営AIは、この最後の最後すら反応する。

規約に基づき、わずかなタイムラグでモモンガを垢BANしたのだ。

サービス終了まで0秒。

モモンガはユグドラシルからBANされ消滅した。

鈴木悟は、それがサービス終了か、R18行為の代価か、わからないまま。

なぜか現実にはログアウトせず。

気が付けば、草原に立っていた。

しばし、時間が止まったように、呆然としてしまう。

草の匂い。

爽やかな風。

足の裏に感じるわずかな土や小石の凹凸。

電脳上の仮想空間では説明できない無数の、リアルな感覚。

「え？」

上を見れば、ナザリツクの天井はなく。

満天の星空。

「ええっ？」

足下を見ようとすれば。



白いものが邪魔をして見えない？

「???

混乱しながらよく見れば。

それは……さつき、ガン見した谷間ではないか。

「ええええー!？」

手を見る。

白い手袋に包まれた手。

肘のあたりは肌が見えるが、きめ細かく美しい線。

顔を触ってみる。

柔らかい、暖かい顔。

骨ではない……それにしても暖かい。

いや、体温が高すぎないかとも思うが。

「アルベドの体、なのか？」

口から出る声も、鈴木悟のそれではない。

美しく、艶を感じる声。

思案しながら、むらむらとした気持ちを抱え続けるモモンガは。

無意識に己の——アルベドの胸を揉んでいる。

なぜか体温が上がる。

(っ……あっ♡ ああっ♡)

押し殺したような声が、どこかからした。

「誰だ？ 誰かいるのか!？」

この場がどこなのかもわからないのだ。

モモンガは、きよろきよろと周囲を見回す。

両手は執拗に、アルベドの胸を揉み続けて離さないため。

かなり間抜けなポーズである。

「なっ？ なんだ……？ 状態異常かっ？ ……くう」

やたらと動悸が激しくなる。

下腹部が熱く、体の芯がじんじんと痺れる。

アルベドの胸に触れようとした時の比ではないほどの。

鈴木悟が感じたことのない、昂ぶりを感じる。

(ひう♡ あっ♡ ひあっ♡)

「女淫魔<sup>サキユバス</sup>の体、だからかっ?」

乳房の先端が固くなり、自身の手で感じる。

無意識に内股になり、太腿を擦り合わせてしまう。

そして唐突に全身がびくびくつと痙攣し。

大量の液体が内から溢れだすのを感じた。

地面にへたり込み、夜空を見つめる。

「はあ、はあ♡なんだ……いったいどうなって、いる?」

（はあっ♡ はあっ♡ も、モモンガ様、下っ、下も触れてくださいませっ♡）

今度は明確な言葉だった。

「む!?! 誰だっ!?!」

言葉は、己の中から聞こえていた。

いや、言葉ではない。

明確な意思がただ、響き、感じ取れるのだ。

（あ、アルベド……です……モモンガ、様あ♡）

「はあ? あっ♡ ちよっ♡ ああっ……♡」

何を言っているのかと、問い返すより早く。

ねっとりと甘え絡みつく欲望が、ぶつけられる。

己の中にもう一人の誰かがいて。

それがアルベドを名乗り……モモンガに欲情をぶつけるのだ。

肉体もそれに合わせるように疼き、反応する。

どうすればいいか。

何をするのか。

内なる誰かが囁き、させてくる。

モモンガは言われるままに、白いドレスを乱し。

下品なほどふしだらな体勢を取りながら。

己の指で、己の体を隅々まで確かめるしかない。

数時間後。

いろいろと女体の隅々まで教えられ、一周して冷静になったモモン

ガ。

とりあえず、女性の体に賢者モードがないことは理解していた。

いや、女淫魔サキユバスだからなのかもしれないが。

「はあ……はあ♡ お前は……私の中にいるのは、アルベド、なのかな？」

(いえ……その♡ どちらかといえば、モモンガ様が私の中に……♡)

また興奮し始めている。

今の会話のどこに興奮する要素があるのか、モモンガにはわからないが。

内なるアルベドは酷く興奮し、昂ぶっていた。

「こ、こら、落ち着け！ 熱い……っ、奥が、またあっ♡」

(くふーっ♡ モモンガ様が私の中につ♡ 私のっ♡ 中がつ♡ あああああ熱いつて♡ 奥っ、そう♡ もつと奥なんです！ 私、もう壊れてしまいそう♡ いえっ♡ 壊してくださいっ♡)

内なるアルベドが何を言っているかわからない。

モモンガは、ペロロンチーノほど趣味人ではないのだ。

「お、おいつ、から、体が——」

(モモンガ様モモンガ様モモンガ様っ♡ いまっ♡ 私がつ♡)

昂ぶり切ったアルベドの精神が津波のように押し寄せ、モモンガから肉体の制御権を奪う。

二つの精神がこの体にある。

ユグドラシルではないどこかにいて。

本来は自我を持たないNPCのアルベドが、なぜか自意識を持っている、と。

モモンガは冷静に考え始めていたのだが。

一秒もたたぬうちに、思考は未知の快楽で押し流された。

アルベドが己の体を抱きしめながら身をよじり。

頭の中で喘ぎよがるモモンガをオカズに、先刻以上に濃厚な行為を開始したのだ。

さらに数時間後。

朝日が昇る中、ようやく満足したアルベドが体の制御を渡してくれた。

「あ……ちようちよ……」

といつても、いろいろと恐ろしいものを見て感じて知ったモモンガは、放心状態である。

しかも、そんなモモンガの精神を、アルベドの精神が今もスライムの如く這いまわり、感情と意識と記憶を舐めまわしているのだ。

現実を空ろに認識しながら、モモンガは未だ精神世界でアルベドにしゃぶり尽くされていた。

そう、それはただ……アルベドの注意が、己の体ではなく、内なるモモンガの精神に向いたがゆえの。

そんな、あまりにも儂い制御権移行であつた……。

## 2：頭がフットーしそうだよおっつ

「——はっ」

太陽が完全に頭上に昇った頃。

ようやく、モモンガは我に返った。

(モモンガ様、大丈夫ですか？ おっぱい揉みます？)

反射的に揉んでいた。

「ふう……と、ともあれ、アルベドよ、ここがどこかわかるか？ なぜおまえの体に私がいる？」

(いえ、申し訳ありません。私にもまるで……モモンガ様が私の胸を揉んだ瞬間、ここに転移していたかと)

落ち着いているのだろう。

冷静な言葉でアルベド(脳内)が言う。

モモンガの手はまだ、アルベドの胸を揉んでいる。

「ううむ……ここは……それにさつきまでの行為を思えば、明らかにユグドラシルではない……」

(そうなのですか？ アルフヘイムあたりかと思ったのですが)

モモンガは(己の肉体の)胸を揉みながら思索する。

現在進行形のR18行為は、リアルでだって普通ありえない。

何より、肉体感覚が男のそれとはまったく違うのだ。

鈴木悟がそこまで、性的想像力豊かとは思えない。

(リアルで頭がおかしくなって、妄想のアルベドと楽しんでいる可能性……ないとは言えんが、あの鮮明すぎる上に、延々と繰り返した感覚を考えると……)

(はい！ 私とモモンガ様の初体験が妄想なんてありえませんか！

はっ、でも常々に妄想されるほど私のことを……!?)

頭の中で考えても、筒抜けである。

プライバシーも何もない。

おかげで、アルベドの愛情というか欲望も、裏表なく直球でぶつかってくる。

「うう……お前が心から愛してくれるのは嬉しいが……もう少し恥じ

らいというか、その手心を……」

(そんな！ 至高の御方を愛するに、どうして恥じる必要がありません！)

声に出した方が、無軌道な思考を避けられると、敢えて言葉にする。己に言い聞かせるように、言葉として思考を形にするのだ。

だが、アルベドはモモンガの羞恥を知った上で、ガンガン愛情をぶつけてくる。

頭の中で何度も「くふーっ！」と、多幸感と情欲を混ぜ合わせた笑みを浮かべ。

汲めど尽きぬ泉の如く、多大な好意と愛情が浴びせられる。

アルベドの感情が、モモンガが制御しているはずの肉体を一部動かし、翼をぱたぱたさせた。

モモンガとて嬉しい、とても嬉しいのだが……やはり照れてしまうのだ。

「ま、まあいい。リアルを想像すると、いろいろ恐い考えになる。手だてを考えよう」

(はあはあ♡ 私はこのままモモンガ様と二人きりでも)

「いやいやいや、体は一人じゃん！」

(くふーっ！ 一心同体ですね！ 結合する前に完全合体してしまいましたね！)

「う……そ、そういうこと言うなよ」

(あつ、モモンガ様、体が反応しましたね！ 私、こんなこともあろうかと考案したテクニクが——)

「うわああああ、卑猥な想像やめろよ！ そんなポーズしちやダメだろー！」

(うふふふふ、そんなこと言いながら、ものすごく反応してらっしやいますね?)

明け透けなやり取りは、(性的な意味でなく)心地よかった。

鈴木悟にとって、裏表なく接せられる相手など、今まではギルドメンバーだけだったのだ。

それとて、おっかなびつくりのやり取りで。

常に遠慮し、己を抑えていたのだが。  
同じ肉体を共有するアルベドは、何も隠させてくれないし。  
なのに、己を上位者と認めてくれる。  
それがとても心地よくて。

つい、隠すべきことも普通に言ってしまった。

「はあ、これもタブラさんにビッチ設定つけられてたせいかな？」

(は？ ビッチ？ 私が……？ タブラ・スマラグデイナに？)

「ま、まて、その前に現状確認だ！」

酷く怖い感情が、ぞわりとモモンガの意識を撫でて来た。

彼女が、己の造り手であるタブラに好感情を抱いていないとわかる。  
る。

だからごまかすように、ずっと懸案していた行動をする。

両手は乳房を掴んだままだが。

「GMコール……ダメか。運営に連絡が取れん。〈伝言〉……ダメだ

な。〈伝言〉〈伝言〉〈伝言〉〈伝言〉。どれもつながらんか」

(ジーエムコール？ モモンガ様、ウンエイとは……ええ？ ゲーム？)

モモンガが運営に連絡を取り、連絡の魔法で運営側NPCやプレイヤー、またナザリックNPCにも連絡してみるが。いずれも返答はない。ゲームの中でない以上、まったく理解できない状況に陥っているようだ。

だが、これはこれで悪手だった。

アルベドが質問すること、モモンガの精神は無意識に彼女の質問する言葉を考えてしまう。一般人の鈴木悟には並列思考や精神思考制御などできない。言われるまま浮かぶ記憶を、アルベドが芋づる式に読み取ってしまうのだ。

(では、私に書かれていた設定とは……)

「ああ、それはな……」

結局、隠し立てしても仕方ないと、モモンガは全てを明かした。

脳内で、だが。

ユグドラシルというゲーム。

鈴木悟というプレイヤー。  
リアルという過酷な世界。

ナザリック獲得とNPC作成。

離れていったギルドメンバー。

アルベドがこれらを知って怒りはせず。ただ、他のギルドメンバーについての悲しみや怒りを、モモンガと共有するのみ。逆に、アルベドはこの世界に来る以前、己が自律行動できなかった点を、ただ「そういうもの」としか認識していなかった。

「……意外だな。書き換えについて怒らないのか？」

（至高なるモモンガ様の行いを、どうして否定いたしましょう！ それに、ビッチなどという下賤な設定を、モモンガ様への想いに書き換えていただけるなんて……）

「ありがとう……そんなお前に私は……」

（えっ？ 私……他のギルドメンバーの慰み者に……？）

もつとも最終日、モモンガに書き換えられる以前の記憶は、アルベドにとつて曖昧。

書き換えられてから全身を視姦され、乳房をわしづかみにされた認識だけが明確。

その記憶をアルベドにぶつけられると、モモンガは——あのギルメンに失礼な妄想を思い出してしまう。

「うあ……ち、違うぞ、お前の設定を見てつい、想像してしまっただけなんだ！」

（ああ、ビッチとはそうだった……私がかつてそのような穢れた立場だったとは……モモンガ様！ これからの私は、モモンガ様ただ一人のための体でございます！ 今もしているように、存分に私の体を味わってください！）

脳内に響くアルベドの感情は冷たいのに熱く、おぞましきすら感じる。

なのに、未だにモモンガはアルベドの豊満な乳房から手を離せていなかった。

「あつ！ いや、これはだな……お、お前の体があまりに魅力的だから



……その)

(くふーっ！ 魅力的！ も、モモンガ様っ！ アルベドは、アルベドはもうっ♡」

脳内で押し倒される(?)。

肉体の制御が奪われ、そのまま……。

結局、日が暮れ始めるまで、延々とアルベドの火照りと快楽に翻弄されるのだった。

とつぷりと日も暮れた中。

ようやくアルベドが再び満足したらしい。

いろんな液体でどろどろになった体を、よろよると、モモンガが起こす。

「う、うう……アルベド、とりあえず、この二人で一つの体はさすがに問題だっ」

(そうですか？ 私としては常にモモンガ様に入られている状態、まさに頭がフットーしそうなのですが！)

また体が火照り始める。

アルベドが欲望を募らす限り、これは延々と続くのだと、モモンガはようやく気付きつつあった。

「やめろっ！ いつまで続ける気だっ！」

(は。申し訳ありません)

怒鳴られれば、アルベドがしゅんと委縮する。

体を奪った身で悪かったかなと、悩んでしまう。

ひよっとしたら、アルベドは普段から日常的に暇さえあれば……。

(はい！ モモンガ様のお望みとあらば、暇さえあればいたします！)

「ヤメテー！」

いずれにせよ、この状況は疲れる。

「そ、それより、さっきは直感的に使ったが……アルベドは〈伝言<sup>メッセージ</sup>〉が使えるのか？」

(いえ……私が使える呪文は信仰系第6位階までです。MPも高くありませんし)

そう。

アルベドは戦士系である。ブラックガード等の聖騎士系クラスによって信仰系呪文を最低限取得しているのみ。

だが、モモンガは直感で魔法を使っていた。

先刻の〈伝言メッセージ〉も、発動した上でつながらないと、理解できている。だとすれば。

「……〈ドラゴン・ライトニング 龍 雷〉」

草原を雷が走る。

威力の詳細まではわからないが、第5位階魔力系呪文を普通に撃てた。

乳房から名残惜し気に手を離し、足元の小石を拾い上げてみる。

そして指を離しながら。

「〈タイムストップ 時間停止〉……アルベド、動けるか？」

空中に石が止まる。

「はい。私の意識は止まっておりません」

智者と設定された彼女は、即座に主の意図を読む。

「では武器を……ん？ これは真なる無だど？」

「(は。タブラめが私に持たせました)」

「ちよ呼び捨て……って、世界級アイテムを勝手に持ち出したのか！

むう……来たなら私に一言断るべきだろうに」

「まったくです！ 私にも変な設定持たせましたし！」

「お、おう。そうだな。まあ、私の装備も失われたと見ていい、この場合一つでも世界級があつて助かったと……」

そりゃ、あんな設定されたら恨むよな……などと思いながら会話する間に、時間が戻った。

ぼとりと、石が落ちる。

「……第10位階魔法〈タイムストップ 時間停止〉は、使い手の魔法攻撃力によって効果時間が決まる。体感だが、今のは私の使用時と変わらなかつたな」  
(は。私の知識でも、この身の拙い魔法攻撃力では不可能な効果時間だつたかと)

つまり、モモンガの魔法能力を引き継いでいるということだ。

「MP消費はどうだ？ 私は問題ないが……お前だけ疲労したりはしていないか？」

（いえ、まった問題ありません）

第10位階を使ってほぼ影響なし。

「ライフ・エッセンス〈生命の精髓〉マナ・エッセンス〈魔力の精髓〉……おおおおお！」

（これは……！）

そしてHPとMPの残量をチェックしてみれば。

HP総量はアルベド、MP総量はモモンガ。

リソース総量にして1.5倍以上。

「……〈絶望のオーラV〉」

震える声で、次はスキルを試す。

周囲の草が一瞬で枯れ果て、モモンガⅡアルベドを中心に円形の荒地となる。

「〈上位アンデッド作成〉アイポール・コープス集眼の屍」

無数の眼球を持つ、浮遊した肉塊が現れる。

「スキルも全て問題なく使えるとはな……周囲を調査してこい」

浮かれた声で、作成したアイポール・コープス集眼の屍を周囲の偵察に飛ばす。

（昨日から、まるでモンスターもプレイヤーも見かけませんね）

「あんな痴態を見られなくてよかったがな……」

己の能力変化への興奮と共に、昨夜の行為を思い出すと体が火照る。

（あっ！ いたしますか？）

「せん！ 本当は昨日の内に周辺を調べたかったのだからな！」

激しくツツコミを入れる。

というか、この一人でわめいている状況の方が、見られると問題かもしれない……とは、気づかないモモンガである。

（申し訳ありません。あまりに素晴らしい状況だったので……）

「ま、まあ私もその……確かによかったが」

しかも、アルベドが少し申し訳なさそうにすると、すぐ折れる。

（くふーっ！ も、モモンガ様っ！）

「さんざんしただろうが！ ひとまず待て！ まずは周囲の把握が急

務だ！」

精神内で飛び掛かってくるアルベドを留める。

「…………お前の得意は長柄武器だったな」  
ポールウエボン

(は。その通りです)

即座に冷静な思考へと切り替えるアルベドに、呆れ感心しつつも。

モモンガは真なる無ギンヌンガガブをハルバードに形態変化させる。

「使えるか…………？ へ凶 撃！」  
ドレッド・スマイト

ブラックガードの基本スキル。

大地に叩きつけたハルバードが、衝撃によって巨大クレーターの如き穴を作る。

真なる無ギンヌンガガブの対物破壊効果。同時にクレーター内と周囲が凍てつき、さらにドス黒い瘴気で、飛び散る土が瞬時に塵に変わって、モモンガの身を穢す前に消滅する。

〈凶 撃〉は武器特性に氷属性と負属性の重複ダメージを加え、さらに継続ダメージのバッドステータスを与えるのだ。

「おお…………アルベド、お前は何か念じたか？」

(いえ、私は何も…………)

モモンガの中にじわじわと歓喜が満ちる。

「ふ…………ふふ、ふはははははははははは！！」

(おめでとunggぎいます。私の体を気に入ってくださいさり望外の喜びです！)

そうだ。

今のモモンガは、1000レベル魔法職の能力のままに、1000レベル戦士職の身体能力とスキルを備えた。

かつての体を持っていた装備を失ったのは、正直悔しいが。

能力値はいいと取り、スキルが単純に考えて二倍、武器防具装備も戦士準拠。

「すばらしい！ すばらしいぞアルベド！ こんなチートを得たプレイヤーは他にいまい！」

それもアルベドは防御において、ナザリック最高。  
つまり1000レベルの最高峰。

そしてモモンガも、魔法の持ち札ではプレイヤー最高峰。多種多様な魔法を使いこなすタンク。

使い勝手の悪かった接触系魔法も使い放題。

防御系バフだって、ただの保険ではなくなる。

プレイヤーの夢の結晶だ。

モモンガはひとしきりテンション高く歓喜し。

「さて、次の実験だ。さすがに二人で一つの体を共有は、緊急時の対応に難がある。手数でもな」

(……名残惜しいですが、おっしやられる通りです)

思考を読み取ったアルベドが、残念そうに頷く。

とはいえ、本当に名残惜しそうに思念が絡みついてくるのだが。

「……〈複製体作成〉」

第9位階魔法により、モモンガの前にもう一つのアルベドの肉体が現れる。

自身の複製の肉体を作り、倒された時の予備とする魔法だ。装備は失うし、術者自身にしか使えないが、蘇生魔法と違ってレベルダウンがないし、HPも最大値に回復する。もともと、予め唱えておいた場所(他者に破壊されてはいけないので基本的に本拠地)に戻る。何より1体しか作っておけないため、さほど使い勝手のいい呪文ではない。

本来のモモンガの肉体が現れるかと心配していたが……杞憂だったらしい。

ただ、ユグドラシルでは薄布をまとった形だったのに。ここでは全裸で肉体のみ。

「アルベド、どうだ。移れそうか？」

(外見が同じですが……かまわないのでしょうか？ 私の肉体をモモンガ様が使われるのですしたら、同じ姿は不敬かと思うのですが……) 全裸のアルベドから目をそらしつつ、己の中からアルベドを押しやるようにする。

同一人物としてカウントされるなら、アルベドの精神のみでも移れるはず。

「何を言う。私がお前の肉体に……その、なんだ、魅力を感じたから、このような事態に陥ったのだ。お前はそのままが美しい。早く移って何か着ろ。目の毒だ」

（くふーっ！ 承知いたしました！ 私の体で私にするというのも、倒錯的でいいですね！」

あつさりとアルベドの精神のみ、新たな肉体に移り。

そのまますり寄って来るアルベド。

順応が早いというレベルではない。

「飛びついて来るな！ ほら、お前だけでは呪文も使えないだろう！ この鎧はお前が装備しておけ！」

「もう……わかりました。この体に移っても、モモンガ様との確かなつながりを感じますし……」

魔法職の能力が、モモンガの精神体に由来するなら、アルベドが同じ能力を持ったりはすまい。

アイテムボックスから慌てて、彼女用に用意されていたスーツアーマー、バルデイツシュ、カイトシールドといった装備一式を渡す。

確かに、アルベドとはじんわりと精神的につながっているを感じる。

しかも、本来は術者自身しか移れない肉体に、アルベドが移った。今のモモンガとアルベドは完全に同一アカウント扱いなのだ。

「……つまり、我々は自身のみを対象にした呪文やスキルを互いに使えるのだな」

「はっ、確かに……」

ますます夢が広がる。

モモンガは大いに喜びで満たされた。

「私は戦士としての技倆に欠けるからな。戦士装備は基本、アルベドがしてくれ。ただ、真なる無はギンヌンガガブこちらで持たせてくれ」

「は、承知いたしました……♡」

万一、同じ世界級ワールドアイテムが使われた場合、本体たるモモンガが第一に保護されねばならないのだ。

そうして鎧を身に着けて行くアルベドをガン見しつつ、アイテム

ボックスを探る。

だが、アルベドのアイテムボックスは、恐ろしく品数が少ない。「あとは……：防御補強アクセサリ系と。騎乗動物召喚用のアイテムか。予備装備も消耗品も入っていないとは……：タブラさん、設定ばかり凝ったんだな」

「まったく、タブラは最低ですね！」

いや、言い過ぎだろ……と思うが、この内心が伝わる様子はない。ただ、アルベドからの好意、タブラへの怒りは伝わってくる。

強い感情だけ、互いに感知できるらしい。

「どれ……アルベドの騎乗動物は……ほう、バイコーン双角獣か」

「はい。ウォーバイコーンロード戦用双角獣王とも呼ぶべき、100レベル魔獣です」

モモンガが召喚アイテムを使ってみると、恐るべき負のオーラを放つ強力な魔獣が現れる。

「これは助かるな！ 100レベルオーバーになった私、100レベル戦士職のアルベド、それに100レベル騎乗魔獣が加われば、十分にパーティーとしての連携が取れるだろう！ よし、乗ってみ……」  
ウォーバイコーンロード戦用双角獣王が身を震わせていなないた。

乗ろうとしたモモンガを振り落とす。

「なっ！ この獣、モモンガ様に無礼な！」

アルベドが近づけばこれも嫌がる。

魔獣は弱り切って座り込んでしまった。

「ど、どういうことだ？ お前の騎獣ではないのか？ ……いや。もしや……まさか」

「知っているのですか、モモンガ様……っ、あつ、そんな、また視姦だなんてっ♡」

モモンガが、じつとアルベドを見る。

悶々とした感情が、アルベドにも伝わってくる。

「ちちちち違っ！ バイコーンは処女を嫌い、淫らな女を好むという設定を思い出ただけだ！ ビッチだったお前の体が処女のわけもない、要因は別にあるだろう！」

「いえ、私……ソロプレイならともかく、そういった経験はないのです

が……」

早口&大声で言うモモンガに、アルベドがぼつりと……少し恥ずかしそうに言う。

「えっ」

「いえ、ですから処女ですよ？」

「マジで？」

「マジですよ」

「……………」

モモンガから伝わってくる安堵の感情が、アルベドにはとても嬉しい。

本気で他のギルメンにどうこうされているとも思っていたのか……とも言えるが。

「モモンガ様」

「な、なんだ？」

アルベドの肉体だが、貌を赤くして慌てるモモンガが、ひどく庇護欲をかきたてさせる。

「この魔獣は戦力上必要です」

「ん？ そうだな」

きよとんとしつ、頷く。

狡猾な己と違い、無垢で少女性を持った主が愛らしい。

アルベドはモモンガと違い……己の感情を敢えて制御する術を知っている。

「ですから、モモンガ様。せつかく二人になりましたし、お互い処女じゃなくなりましたよ」

「なるほど……ん？」

意味が咄嗟にわからなかった様子で、首をかしげている。

悟られないよう、アルベドは己の内心の欲情すら隠す。

「大丈夫です。指でも舌でも、きつと喪失カウンントされますよ！」

「指？ 舌？ ま、待て！ なんで鎧を脱い……んむーっ！」

何となく察し始めた主の口を、プレイヤースキルの差で塞いで。

アルベドは戦力増強のため、互いの肉体から純潔をなくさんと動き



始めた。

なんといつても女淫魔サキユバスの体である。

草原に響く声が悲鳴から嬌声に変わるまで、さしたる時間はかからなかつた。

### 3…MUGENの闇

なぜかさらに数日経ってさらに次の朝。

草原で二人を背に乗せ、魔獣が歩いていて。

その背には甲冑の女騎士が跨り……さらに背後に、横座りで乗るドレスの女淫魔サキユバスがいる。

「……無事に乗れるようになりましたね」

「……アルベドとだけならよかったんだがな。おい、わかっているのか？」

モモンガがへ絶望のオーラVを放ち、騎乗する獣を睨む。

魔獣——戦用双角獣王ウォーバイコーンロードが唸りながら怯えすくんだ。

100レベルだけあつて即死耐性こそ持っているが、怖いものは怖い。

しかも、オーラに合わせて周囲の草が枯死し、虫が死に、鳥が落ち、土中ではミミズだつて死んでいる。

密着中のアルベドだつてきつい。

「ま、まあ、私たちがそれだけ魅力的だったということですよ……」

「こいつが雄で、しかもあんな所まで双角だとはな……」

あれこれした結果、二人が貞操を失った途端……興奮した魔獣に襲われ。

後脚部の間にあつた双角で、二人いっしょにいたただかれてしまったのだ。

乗る前に乗られた二人である。

そもそも。

知性の高い魔獣の前で、盛って見せたのが問題であつた。

彼は会話こそできないが、人の言葉をしっかりと理解できるし。

不浄を好む知的魔獣として、美的感覚も人間と同じなのだ。

一日以上耐えただけでも、讚えられるべき自制心だろう。

だが、憑依で得たモモンガの絶対的格差が、反論を許さない。

騎乗後……というか、モモンガがむくりと起き上がって以来、魔獣は己の愚行を後悔することしきりである。

「とにかく、あのような関係になった以上、名なしではいかん。アルベドはこれにどんな名を与えているのだ？」

「は。ナザリックでも最強級の魔獣として、トップ・オブ・ザ・ワールドと名づけるつもりでした」

「長つ！ 呼びづらいだろー！」

「た、確かに……ではモモンガ様に名付けてはいただけませんか？」

ウォーバイコーンロード  
この会話に、戦用双角獣王はなぜか寒気を感じた。

「ふむ、そうだな……やはり二本あるのが最大の特徴……山羊……黒い……」

一応は馬っス、と抗議しても魔獣の心はモモンガに届かない。

「ヤギスケ……フタマタ……うま波兵……」

ぶつぶつと名前候補を並べるモモンガ。

アルベドは上機嫌で、己に密着する主を堪能している。

そんな中。

冷や汗を流し、身を震わせ、精一杯抗議するウォーバイコーンロード戦用双角獣王。

彼はあくまでアルベドに帰属する存在であり、モモンガに直接の従属はしていない。

センスはアルベド準拠なのだ。

「まあ、モモンガ様に名付けてもらえるからって、こんなに喜んで」

ちがう！ といなくなが、振り落したりすれば殺されかねない。

「よし！ 決めたぞ。お前の名前はクロマルだ！」

「まあ、k u r o m a r u ! 素晴らしい命名かと！」

アルベドが絶賛する。

なぜかローマ字表記で。

ウォーバイコーンロード  
戦用双角獣王、否クロマルは絶望した。

「MUUUUGEEEEENN!!」

「ふふ、この子もこんなに喜んで」

「その名に恥じぬよう、あんなことはもうするなよ！」

必死の抗議の叫びすら、喜びと受け止められてしまう。

魔獣は、心の底から己の愚行を後悔した。

というか、その名前で他に何をしろと言うのか。

「それにしても、アルベドの肉体を二つ同時に味わうとか……羨ましい」

「モモンガ様……♡」

そんなクロマルの背で二人はいちゃついていた。

「ずっと待たせた集眼の屍には悪いことを……ん？」

「どうなさいました？」

アイボール・コープス  
集眼の屍には主に見た者を伝える能力もある。

発見したという村を監視させていたのだが。

「村が襲われているな。相手は武装した兵士らしいが……ずいぶんみすばらしいな」

「あら……どういたしますか？ 情報収集の予定でしたが」

アイボール・コープス  
じつと、集眼の屍の視界を共有しつつ。

村人がろくに抵抗できず虐殺される様子を眺める。

戦士の肉体を得たモモンガの目で見ても、たいした連中ではない。

「ふむ。村人を助け、騎士を数人拘束しよう。弱者についた方が、恩は売れる」

「は。では……適度にタイミングを見ますか？」

「いや、急いでやれ。村人は簡単に死んでいる。遅れると全滅しかねん……」

「では！ k u r o m a r u、行きますよー！」

アルベドが手綱を引く。

やっと戦闘の役目が訪れたと、クロマルは疾駆した。

「MUGEEEN！」

未だ、命名への抗議のいななきを続けながら。

元より、たいした距離だったわけでもない。

一瞬と言つてもいい時間で、彼女らはカルネ村に至る。

最後の跳躍は、天に至らんが如くであり。

二人の超越者を乗せた、超級魔獣の接近に……村の誰も気づかなかった。

襲撃者たちも含めて。

「エンリ！ ネムを連れて逃げ——」

その日、必死に襲撃者に抗っていた男は奇跡を目にした。

「魔法三重最強化」トリプレットマキシマイズマジック「魔法の矢」マジック・アロー

数十もの輝く矢が天より降り注ぎ、襲撃してきた兵士どもを撃ち抜いたのだ。

今にも男の背に剣を突き立てんとした兵士は吹き飛ばされ。

男の命は、すんでのところを守られていた。

逃げろと言った娘らも立ちすくみ。

妻にのしかかっていた兵士など、頭を撃たれ首が折れて転がっている。

兵士らとて何が起きたか理解できない。

空から聞こえた声は「魔法の矢」マジック・アロー。

彼らはこれでも、特殊部隊の末端。

魔法についても少なからず知っている。

初歩的な攻撃呪文であり、己なら数回は耐えられるはずなのだ。

最高位の使い手でも数本が限度……それが数十本。

威力も桁違い。一撃で明らかに数発分の威力がある。

何ごとか、と。

誰もが天を仰いだ。

そして、黒き獣と騎士を伴い、女神が降臨した。

「……おい。魔法の矢」マジック・アローでけっこうな数が倒れたぞ」

「最強化したとはいえ……10レベルなさそうですね」

「弱すぎないか？」

「そうですね……」

50レベルくらいかなと思いい、己にヘイトを集中させるつもりで放った第1位階魔法が。

思わず、相手を半壊させているのだ。

モモンガもアルベドも、クロマルすら啞然としていた。

しかも、これで襲撃者側は戦意を失ったらしい。

「フレンドリーファイア有効っぽいし、村人らは味方ですらない。範

「囲攻撃は控えるか」

「絶望のオーラだけで、村ごと滅ぼせるでしょうしね」

昨夜、子宮口で思い知ったフレンドリーファイアである。

「魔法三重最強化」〈魔法の矢〉

撃ちきれなかった兵士らをさらに撃つ。

逃げ出し始めた。

「魔法三重最強化」〈魔法の矢〉

逃げようとしている兵士らをさらに撃つ。

倒れ呻く兵しかいなくなつた。

「……弱すぎるだろ」

「連携テストになりませんでしたね……」

クロマルも含めた三体での連携テストのつもりで挑んだのだ。

チャージングバツシュや、ランページの使用も想定していたのに。

初手のヘイト稼ぎで半壊&戦意喪失など、想定外である。

強化スキルこそ使ったが、1レベル呪文3回だ。

消耗とも言えない。

二人で溜息をついていると。

「うおおおお！ 武器を捨てろッ！ 魔法を使うなアッ！」

「きやあーっ！」

「え、エンリ！」

「お姉ちゃん！」

一人の村娘を後ろから捕え、一際下卑た兵士が現れる。

モモンガは少しだけ関心を向けるが。

「このスレイン法国貴族ベリユース様が！ こんなところで終わるわ

けか——ひっ」

しかし、瞬時にびくびくつと身を震わせながら倒れる。

いつの間にか背後に、目玉だらけの巨大な肉塊がいた。

不可視化で伏兵として配置されていた集眼の屍である。

「不可視化を見破れない。麻痺の魔眼に抵抗できない、か」

「ありていに言つて、ザコ以下ですね……」

ため息をつき、麻痺した兵士——ベリユースにトドメを刺す。

「魔法の矢」

悲鳴もあげられぬベリユースに集中した十発の魔法弾は、その体をひしゃげさせ、巨獣に踏みつぶされたように変えた。

「本当にもろいな」

「まさしく虫と呼ぶにふさわしいかと」

全力で蹂躪した方が早いのでは……と思えるが。

まだまだ一つの村で全てを判断すべきではない。

「増援が来るかもしれん。一応、護衛を作っておくか……へ中位アンデッド作成」

おぞましい音を立て、死んだ兵士の骸が、武装した巨漢のアンデッドとなる。

防御力について信頼できる死の騎士だ。

その光景に、村人らはひれ伏し。

かろうじて生き残った兵士らは絶望と共に目を閉じる。そして、多くは希望と共に、命すら失ってしまった。

「死体に移り移るのか……グロイエフェクトだなあ」

思わぬ仕様変更に、モモンガ当人は困った顔をしていた。

「女神様！　ありがとうございます！」

「女神様！」

「女神様！」

救われた村人たちは一斉にひれ伏し、モモンガを拝み始める。

無理もあるまい。

虐殺は止まり、村人の犠牲はほぼなく終わったのだ。

しかも、モモンガは白いドレスに身を包んだ、まさに天上の美と呼ぶにふさわしい美女。

角や翼は人ならざる存在と示すが……同じ人間に殺戮されんとした者らには、些細な問題にすぎない。

「ええ………ああ、うん、とりあえずまだ生きている兵を縛り上げなさい。それから、重傷を負った村人を連れて来るように」

うろたえつつ答えるモモンガに、村人らが我先にと動き出す。

救い手たる女神に、己の働きを見せんとしているのだ。

「モモンガ様、人間風情にこのような……よろしいのですか？」

甲冑姿のアルベドが具申する。

適当な個体に〈支配〉<sup>ドミネイト</sup>を使った方が早いのでは……と考えてだ。

「我々はこの世界について何もわかっておらん。味方を作っておくべきだろう」

アルベドをなだめ。

連れてこられた兵士——数人しか生きていなかった——を、クロマルに見張らせ。

傷ついた村人らを、アルベドに回復させる。

村人らの死者は四人……襲撃を考えれば、案外と少ないと言えるだろう。

(ふむ……そうすると、HPが0になったからと死亡するとは限らないか。頭を狙わず、腕や足を狙えば、兵士も全員生きのまま無力化できたかもしれない。まあ、多数の捕虜など邪魔にしかならんが……) 「村人らの死体をこちらへ。我が祝福を与えよう。そして兵士の死体も集めよ。悪しき行いの罰を与える」

わずかな村人は警戒を見せるが。

多くの村人が、率先して死者を並べて行く。

「悪しき者に蹂躪されし子らよ、未だ怒りあらばこの地に残れ」

(……ちよつと厨二すぎるか?)

モモンガ(アルベドの肉体)が、黒い翼を広げ、死した男を黒い光で包む。

その肉体が急激に失われ、目に赤い光が宿る。

衣服はローブに変わり、手には杖。

生前の面影を残しつつも、それは強大な力を見せていた。

「こ、これは……俺は、兵士に襲われ死んだはず……! それにこの溢れる力は……!」

生前の声、仕草で「それ」は言葉を発する。

村人たちは目の前の奇跡に息を呑んだ。

その姿は恐るべきアンデッドだが、意識は当人のもの。



「お前を蘇らせたるは、お前自身の未練。理不尽に対する怒りが、その姿で蘇らせたのだ。その力は村を守り、敵を討つ力と知れ」

「ああ……偉大なる主よ！　ありがとうございますー！」

復活した男——死者の大魔法使いが平伏する。

（知性あるアンデッドなら、当人の記憶が戻るのか……へ中位アンデッド作成）もかなり使えるな。効果時間で消えたなら、成仏した扱いでいいか……記憶は死亡後時間にもよるかもしれない。残った兵士も殺して、時間差を試してみるべきだろうか……ああ、呪文でも死体に移るのか？）

かくして、カルネ村に四体の死者の大魔法使いが生まれ。

多数の骸骨戦士が、農奴として与えられた。

これらは彼の地を守護し続け、将来の聖地を守る存在となる。

生き残った兵士らも、女神の威光に撃たれ、知る限りのことを話した。

帝国の仕業に見せかけんとした、スレイン共和国の卑劣な行いは明らかとなり。

この地を発信源として、反共和国の機運が高まった。

黒翼の女神モモンガ。

黒き守護騎士アルベド。

暗黒の神獣クロマル。

偉大なる三柱による、新たな神話の始まりであった。

#### 4：やってくれた喃

ほどなく効果時間が切れて姿を消した集眼アイボールド・コープスの屍を追加で呼び出し、村の周辺警戒を任せる。

(しまった……さっきの死体から一体はこれを作っておくべきだったな)

景気よく魔法強化スキルを使い過ぎたと、へ上級アンデッド作成＜スキルを温存したゆえのミスであつた。

この世界では、死体から作れば永続化できるので。

死体を補充できないかな、とチラツと周りを見るが。

村人たちはまだ、モモンガたちを拝んでいる。

名前を名乗れば女神モモンガと呼ばれ……皆がぶつぶつと「モモンガ様」と呟いている。

(さすがに彼らを死体にするのはまずいな……)

女神と呼ばれるに至った状況について、考える。

モモンガとしては、原始人にライターを見せて崇められ始めた気分だ。

「女神か……やはり美人は違うな」

「そんな、美人だなんて……」

「骸骨の私では魔王がせいぜいだ。お前のおかげだぞ」

「くふーっ♡ ありがとうございますー!」

兜で顔を隠したアルベドが、身をよじる。

モモンガは己が得たアルベドの肉体をとことん褒めるし、時には欲情がじわりとアルベドにも伝わってくる。

(ぐへへ、たまんねえなあ、おい)

思わず、アルベドが下卑た欲望を濁流の如く垂れ流す。

この欲望の相共鳴による高まりが、二人を三日以上も草原に留めたのだ。

アルベドとしては下等生物人間どもの目など気にせず、モモンガと愛し合いたい。

のだが!

(くっ、意識するとまたアルベドに欲情してしまう……!)

あいにくと、モモンガは人目を気にしていた。

理性で抑え。

冷静に情報収集に努める。

「……村の代表は無事か?」

「は、女神モモンガ様、私めが村長でございます」

一人の老人が進みでる。

「私は下界について、詳しくない。このような襲撃は多いのか?」

「いえ、村が始まって以来初めてでございます」

「村を守る兵はいないのか?」

「このような開拓村を守る兵など……」

そうして、この世界——いや、彼らの知識の範囲で世界について聞く。

過酷な労働、法外な税金、皆無な教育、非道な兵役、論外の搾取。

ろくに保護義務を果たさない貴族の存在に、モモンガは呆れた。

リアルより酷い。

底辺社畜のモモンガとて、ゲームをする程度の余裕はあったし。

最低限でも、セキュリティと福祉の恩恵を受けていた。

しかも、貴族は先の兵士程度のザコしか、暴力手段を持たず。

当人は戦闘力を持たないというではないか。

見せられた貨幣も、汚く質が悪い。

ついでに、捕虜に<sup>ドミナイト</sup>へ支配をかけて聞き出した情報も、大差はなく。

この村の属するリ・エステイーズ王国は、大陸でもっとも腐敗した掃き溜めの如き国と言う、酷い評価であった。

「アルベドよ。この国の統治と状況をどう考える」

「実に稚拙で愚昧な、私の知る中でも、この上なく無価値なシステムかと。手に入れる価値すら感じられません」

深々と、モモンガが頷いた。

「労働には対価を与えねばならん。保護すらなく、この様では彼らは奪われるのみだ。労働意欲も高まるまい。ただ生きるためだけに働いておるに過ぎん。当人らの言葉のみを鵜呑みにはできません」

したるモンスターも見かけんこの世界。貴族とやらには、あまり好感が持てんな」

「私としてはこの、矮小な者たちもあまり好意は持てませんが……」  
苛立ちを込めたアルベドの言葉に、ぴくりとモモンガの眉が上がる。

「おい、アルベド。彼らは私たちを感謝し、崇めているのだ。そのように……ん？ ああ……そういえば、お前はそんな風に作られていたのだな」

たしなめるように言いかけるが。

流し読みした際、チラリと見えたタブラ・スマラグディナ作の設定の一部を思い出す。

そして彼女が、人である以前にNPCだったのだとも。

モモンガは、アルベドの兜をいたわるように撫でた。

「は？ タブラのクソが？ じゃあ、モモンガ様のおっしやる方が正しいですね」

「え、えええー」

態度がガラリと変わり、モモンガはずっこけかけた。

NPCとは何だったのか。

己が作ったパンドラズ・アクターも、ダサイ設定を内心すごく嫌がっていたのかも……と、少しナイーブになるモモンガ。

「あまり私に盲従して欲しくないぞ……私だってミスはする。ミスで、アルベドを失ったりしたら……私は、一人になってしまおうではないか。思う所があらば、きちんと進言してくれ」

潤んだ目で、愛する人にそう言われ、NPCが身を火照らせずいられようか。

しかも、結合した精神から、主の不安と孤独が、すぐりつくように流れ込んでくる。至高の御方が不安にさいなまれ、アルベドを心から頼ってくれているのだ。

また、ナザリック最高の美女を自認するアルベドは、相応にナルシストでもあった。己の体と絡み合う嫌悪感など皆無……いや、むしろモモンガが己の体を褒め、欲情してくれるごと、好感度は上限突破で

上昇しっぱなしである。

（くっふおおおほー！ー！ツ！ こ、これはアレっしょ!? 今すぐやりたいですって言ったたら、恥ずかしそうにくくんって頷いてくれるシチュっしょ!? やっべー！ マジやっべー！ 下等生物が周りに何匹いよーと関係ねーし！ はあはあ、モモンガ様はやりすぎとか言っちゃいましたけど、まだまだ私は消化不良なんですうー！ 物足りないんですうー！ 良妻として、元が私の体でも、モモンガ様にありとあらゆる快楽を味わっていただくため、一切の労苦をいと思いますし！ というか、進んで開発させていただきますし！ ぐへへ、うへへ、いいひいいひ♡ それじゃあ、いただきます——）

アルベドは業火と呼ぶも生やさしい、欲情を超えた情炎をモモンガの精神に伝え。

飛び掛からんとした、まさにその時。

「んんん？ ——なッ！」

その熱量に、モモンガがうろたえ——そして同時に。

真剣な顔で目を見開いた。

「いいいいかがいたしました、モモンガ様っ！」

息も荒く、欲情しすぎて捕食顔になっているアルベドだが。

兜のおかげで、モモンガにも村人にも見られていない。

「さすがだな、アルベド！ アイボール・コープス 集眼の屍より早く、接近する気配に気づくとは！」

「——は？ はあ」

思わぬ言葉に、アルベドは虚を突かれ、とりあえず頷く。

村人らは、神々の言葉にうろたえた。

新たな襲撃者が現れたというのだ。

まさか本隊がいたのでは……とも疑う。

「同じ肉体を得ても戦闘感覚は大きく違うか……私も鍛錬せねばな。思えばさっきの連中は、私の魔法で全て倒してしまった。戦士として力を振るえなんだお前が、不満を抱くのはもっともだ」

「アッハイ」

主が何を言っているかわからないが、シモベとして反論は許されな

い。

「それにしても、敵らしき気配を感じただけで、そんな火傷しそうな戦意を燃え上がらせるとは。戦士として血がたぎるのだな。相手の出方次第だが、敵ならば……お前の刃を存分に振るうがよい」

「ハイ……アリガタキシアワセ」

コキュートスのような口調になったアルベドに、モモンガは満足そうに頷いた。

これがアルベドの戦闘モードか、と感慨を込めて。

（違う！ 違うんですモモンガ様！ 振りたいのは指と舌と腰なんです！ 私に振るってくれるのも歓迎です！ わかってください！）  
思いよ伝われ、とばかりに念じるが。

「ははは、そう昂ぶるな。私まで戦いたくなってしまおうではないか。お前の見せ場を奪わせないでくれ」

「ふしゆるるるるる」

（私のご褒美を奪わないでください！）

いろいろ熱くなりすぎて、変な鼻息を出すアルベド。

噛み合わない二人だが。

村人たちは、頼もしい言葉に安堵し。

なお一層強く、この神々へと祈りを捧げる。

「さて、接近してくる戦士職集団に、森近くに潜む魔法職集団——どちらが敵か、どちらも敵か」

気に入ったのか、女神ロールプレイのまま。

モモンガは眩き。

四体の死者エールダーの大魔法使リッチたちに命令する。

「お前たちは骸骨戦士スケルトン・ウォリアーを指揮しつつ村を守れ。伏兵や遊撃部隊がいるかもしれない」

「承知いたしました、偉大なる主よ！」

「御身より授かった力、怨敵を討つべく……！」

アンデッドたちが瞬時に部隊となり、村の四方を守る。

「村長よ、この死の騎士デス・ナイトを、お前たちの守りにつける。村人を避難させよ」

「おお……再び我らを守ってくださいるのですか、偉大なる女神モモンガ様！」

感動と共に村長が……そして、残る村人も頭を地にすりつける。

「よい。お前たちは我が加護を受けた。私はお前たちを全力で守ろう」

「ああ！　なんと……！」

傾き始めた太陽。

夕陽の中で微笑むモモンガに、村人たちは失神せんばかりである。

そして、一方で。

「……………」

（クソが、クソがツ！　クソがああああああああああああああああアツ！！　こともつ！　こともあろうに、モモンガ様をいただくベストタイミングをツ……不安と孤独を、このアルベドで癒していただく最高の時をオオ……はかった喃……はかってくれた喃……ぜったいにゆるさんぞ虫ケラども！！　じわじわとなぶり殺しにしてくれる！！）

ギリギリ、めきめき、バキバキとと異様な音を立て、目から赤い光を放つアルベド。

世界を滅ぼさんばかりの殺意の波動が噴き出し。

紫色のおぞましいオーラを残しつつ、神獣クロマルの背に跨る。

神獣の体がみしみしと軋み、クロマルが苦痛の呻きと共に、屈服するように頭を下げた。

アルベドの太腿が、その屈強な胸を挟み潰さんとしていたのだ。

並みの馬なら一瞬で挟み潰され、両断されていただろう。

そんな破壊神とも呼ぶべきアルベドの姿に、村人たちは恐怖と――絶対の敬服を感じていた。

（なんて強そうでかっこいいんだ……俺もできるようにならなきゃ）

そしてモモンガも、厨二的な意味で畏敬を感じていた。

粉塵を巻き上げ、騎馬集団が駆けて来る。

不揃いな装備だが、油断はできない。

油断はできないが……アルベドがいれば、どうとでもなる。

モモンガはそんな、確かな信頼を感じるのだった。

(殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺……！)

アルベドの怒りは、半ば風ともなり渦巻いている！

(ううむ、ブラックガードか暗黒騎士ダークナイトのスキルだろうか。すごいな……)

もはや接近する連中に見る価値はなしと。

頼もし気にアルベドを見つめるモモンガであった。



## 5：命を刈り取る形

戦士長ガゼフ・ストロノーフは、夕陽の中で遠目に見えるカルネ村の様子に首をかしげ。

率いる戦士団に急ぎ、指令を下す。

「待て！ あの村は襲われている様子がない……周囲を警戒せよ！ 村を襲わんとする者がいないか、探りつつ進め！」

これまでの、煙を立ち昇らせ、破壊された村とは明らかに違う。

破壊痕もなく、焼かれた様子もない。

これから襲われんとしているのか。

あるいは今まさに襲われているのか。

だが、近づきつつあつても、悲鳴の類は聞こえてこない。

他の村が襲われていた様子に、罨を警戒していたが……どういうつもりか。

帝国兵だと言う襲撃者について、思い悩むガゼフだった。

一方、森近くに潜伏し、ガゼフらを包囲せんとしていた陽光聖典隊長ニグン・グリッド・ルーインは激昂した。

「ええい！ 奴らが散開してしまうではないか！ ベリユースめ、あんな小村の焼き討ちもできんのか!？」

午前中にベリユースらの部隊はバハルス帝国騎士に扮し、カルネ村を襲ったはず。

村に戦力はない。これまで以上にたやすく焼き捨てられる村だ。

だが、襲われた様子は確認できない。

不審に思ったのだろう、戦士団は散開し、周囲を警戒しつつある。

「まずい……まずいぞ……」

陽光聖典は魔法詠唱者の集団だ。

召喚魔法を用いた集団戦術による、殲滅戦を得意とする。

逆に言えば、戦士との正面戦闘では、真価を発揮できない。騎馬で行動する彼らが、逃げ出さんとすればなおさらだ。

王国貴族との策略により、戦士長ガゼフ・ストロノーフは、最低限

の装備で出撃している。貴族のいやがらせで、戦士団には制服も階級章もない。つまり、戦士長とて一般兵と変わらぬ装備——散開して逃げ出されれば、戦士長の特定など、運任せにするほかない。

ベリユースたちは何をしているのか。

村を襲ったまま、中でくだらぬ乱痴気騒ぎでもしていれば……中で乱戦となるはず。

それなら村ごと包囲して襲撃できるが……。

「クソっ、祈るしかないのか……！」

暗殺任務など己の本分ではないというのに。

苛立たしく、スルシャーナの聖印を握るニグンであった。

そんな両者の様子を、不可視化した集眼アイボールド・コープスの屍が、じつと見聞きしていた。

全てを主たるモモンガに報告しながら。

「ふむ……アルベドよ。あちらの魔法職集団に向かえ。指揮官はアンデッド化させる。あまり壊しすぎるな」

未だ隠れ続ける、明らかに村に敵対的な集団を指さす。

「承知イター——」

最後までは聞こえなかった。

普通にダメージの入る勢いで蹴られ。

ウォーパイクォンロード戦用双角獣王が疾駆したのだ。

100レベル乗騎は、戦場内を一瞬で駆け抜ける。

音の速度か、それ以上で。

甲冑のアルベドを乗せ、魔獣が走る。

「隊長、村の方から何かが！」

気づいた陽光聖典隊員が、指揮官たるニグンに報告できたのは。それ自体が奇跡的な功績だったろう。

だが。

無意味だ。

「ん？ ベリユースの奴がやっトツ——」

ニグンは何が起きたかわからぬまま。

開いた口を後頭部まで貫かれ、絶命した。

そのまま、彼の骸が上へと、吊り上げられる。

アルベドが、手にした長柄斧——バルディッシュュを持ち上げたのだ。

「隊長？」

突然、指揮官が宙に飛び上がったようにしか見えず。

報告した隊員が、間の抜けた声を発する。

周囲の隊員らも、状況把握ができず、呆けた顔をするばかり。

「クフツ、イヒツ——クヒヒヒヒヒ」

突然現れた、恐るべき騎士が笑っている。

アルベドの兜の中、瞳が紅い光を放ち。

紅い尾を引きながら、周囲を見回す。

他に地位の高そうな者はいない。

「指揮官確保オ——ブラッドステールブレイド〈鮮血鋼刃〉ツ！」

バルディッシュュがどくと脈打ち、赤い血管状の模様が浮かぶ。

攻撃後に武器強度とダメージを上昇させ、負属性も付与する、

ダークナイト暗黒騎士のスキル。

ニグンの死体を貫き持ち上げたまま。

死体もろとも、発動したのだ。

貫かれたニグンの骸も武器の一部と認識され赤い模様を浮かべ。

武器と一体化して硬化する。

ぶら下がる彼の体は、おぞましい装飾を凝らした武器の一部としか見えない。

懐からはみ出して青白く光る水晶など、まさに装飾の宝石だ。

ニグンの身を以てバルディッシュュは、大鎌と化し。

命を刈る形を得た。

「隊長？」

陽光聖典隊員が、もう一度空ろな声を発した。

この状況を理解も受容もできず。

浮かび上がった、己の指揮官を見上げる。

そこには、ただ歪な、巨大な、暴力だけが。  
「え？」

猛悪なる何かが、黒騎士と化して立つ。  
吐き出されるは、理不尽なる殺意の渦。  
憤怒と殺戮衝動が奔流と化して。  
彼らの正気と生命を、押し流す。

「死イイイイネエエエ——!!!」  
2メートルを超える長柄武器。

その先に硬直固定された、2メートル近い長身の男。  
100レベル戦士の筋力は、これをたやすく振り回す。  
アルベドの腕の長さが加わり。

騎士クラスを極めたゆえの人馬一体が加わり。

半径10メートル以上を、くまなく一閃する範囲攻撃と化す。

バルデイツシュに斬られる者。

ニグンの足に踏み砕かれる者。

魔獣の蹄にて踏み潰される者。

過剰な攻撃力で、あるいは両断、あるいは爆散、あるいは挽肉。

夕陽の中の、その光景は酷く酷く幻想的で。

血も肉も臓腑も、飛び散る紙吹雪のようで。

その非現実さが。

残る隊員から、逃げ出すべき時間を奪った。

「死死死死死死死死」

容易に死に過ぎる彼らでは、アルベドの殺意を抑えられない。

甲冑には一片の肉、一滴の血すらついていない。

殺意の風は、さらなる獲物を求める。

「ひっ………！」

「あっ、あっ」

殺意に晒され、初めて残る隊員らも己の死地に気づく。

背を向け、この黒い死神から逃げ出さんとするが。

時、すでに遅し。

「逃ガスカアアアア!!!」

咆哮と共に暗黒の騎士は駆け。  
全ての陽光聖典隊員を刈り取っていく。  
夕陽に照らされる平原に。  
人体が爆散し、血煙が幾度も噴きあがる。  
そんな惨劇を。  
不可視化して浮かぶ集眼アイボールの屍だけが見ていた。  
正しくはその主と共に。

「ふふ、あんなにはしゃいで……よっぽど戦いたかったんだな」  
モモンガはほっこりと、アルベドの戦う姿を眺める。

「あの『殺殺殺』とか『死死死』ってどう発音すればいいんだろう」  
その光景は、モモンガの厨二魂にダイレクトヒット。  
武器強化スキルの応用も、思わず膝を叩く見事さだ。

「あのスキルにあんな使い方があるとはな……さすがアルベドだ」  
にこにこ微笑み頷く様子は、女神そのもの。

悪魔系種族の肉体に引つ張られてか、人間の死にざまにはまるで抵抗を覚えない。

むしろ、妙に興奮を覚え……。

「んん？ アルベドめ、戦いながら興奮しているのか？ ま、まあ戦いの後は昂ぶると言うからな！ 私にまで伝わってくるほど高まるとは、か、帰って来た時……だいじょうぶか？」

己の在り方に違和感を感じる前に。

アルベドの興奮と思い、どぎまぎする。

戻って来たアルベドに押し倒される時を少し、期待してしまうのだ。

(うう……淫魔の体のせいかな？ なぜ期待する……？)

そんな想いが、アルベドにも伝わり、相互に高め合っている。  
(とと、いかんいかん。私は私で、あの連中の相手をせねば)

モモンガはぺちぺちと、己の頬を軽く叩いた。

傍らには死デスの騎士ナイト。

真なる無はアイテムボックスに、隠しておく。アルベドは瞬間装備

スキルも持っている。当人ほど使い慣れていないが、瞬時に取り出し振るえることは、実験済だ。

實力の多くを隠し、待ち構える。

「さて、貴族の犬はどう受け取るかな。アルベドが戻る前に、対処を決めたいものだが……」

モモンガが抱く戦士団の認識は、遅まきながら村の救援に来た貴族の兵士。

あまり好意的に接するつもりはない。

アルベドは既に、皆殺しを終えつつある。

まだまだ興奮しているようだし、彼女がいては、交渉も面倒そうだ。「……このまま殺して、なかったことにしちやダメかなあ」

モモンガ自身、アルベドが恋しく、そんな考えを弄び始めてしまう。

そんな時、ようやく濃い顔のおっさんと、いかつい連中が村に来た。

アイボール・コープス集眼の屍越しに見た時もあったが、さっきの騎士と違い、傭兵か

山賊の集団にしか見えない装備。人相が悪ければ、他の何者でもなかったろう。

「私はリ・エステイーゼ王国所属の王国戦士長、ガゼフ・ストロノーフ！ ご婦人はいったい？」

貴族とでも思っているのか、先頭の男が誰何すいかして来た。

背後の戦士らには、明らかに好色な目をモモンガ——アルベドの肉体に向けている者もいる。

モモンガとしては正直、皆殺しにしたい。

「私はモモンガ。此の地に降りたった神」

蛇のような目で彼らを睨み。

ふわりと翼で浮き上がりながら。

〈絶望のオーラⅡ〉を放出する。

相手のレベル帯では、Ⅲでも会話にならぬ可能性があると見てただが。

しかし。

「な———！」

「ひ、ひいひい！」

IIでも、戦士長以外は全て恐怖のあまり漏らしながら失神。  
戦士長も怯え切ってしばらく話にならなかった。

## 6…いとしいしと！

馬もまた、気を失った。

兵士たちは落馬しつつも、恐怖に固まったまま意識を戻せない。ガゼフ一人が、何とか着地して、のろのろと立ち上がっている。

「……穢れた目を向けた者に、ふさわしき姿だな」

（ええー、何それ……追加で状態異常『失禁』とか付いてるの？）

数十人のむくつけき男が股間を濡らしながら倒れる様は、気分のないものではない。

液体が妙に茶色いのもいたが、見て見ぬふりをする情が、モモンガにもあった。

「どうした？ 私に相対できぬ者が私に何を問う？」

硬直した戦士長ガゼフ・ストロノーフを睨みつける。

遠く背後では、村人らが心配そうに女神を眺め。

ガゼフらには敵意を向けている。

名乗りすら聞いていない村人らにとって、戦士団——いや、武装した人間は心の許せぬ存在なのだ。

「わ、私は王の代理。この近隣の村を襲う賊を、討伐に……」

ガゼフは、神を名乗る女の目に絶望を見た。

どれほど美しくとも、触れれば死しかありえぬ存在。

顎が、舌が重い。

新兵以下の酷い名乗り、酷いもの言い。

「この村を襲った不埒者には罰を与えた。お前の任は既がない」

冷たく返す様子には、ガゼフへの好意など欠片も見えない。

いや、対等の存在と目に映してすらない。

ただ虫を見る目だ。

事実、この場で斬りかかろうとガゼフでは……いや、戦士団全てでも、けしてモモンガに勝てないと確信できた。

「む、村を救っていただき、感謝を……賊は、王国の法にて罰するゆえ、引き渡して、もらいたい……」

女神の目に、苛立ちが浮かぶ。



それだけで、ガゼフは死を覚悟した。

「感謝？ 私には、私に祈りを捧げた者を救ったのみだ。それに言ったぞ。既に罰は与えた」と

(実際に祈って来たのは助けた後だけだ)

子供に諭すような、やわらかな口調。

「そ、それでも王国の村である以上……」

恐ろしい予感に、敢えて抗い。

ガゼフは言葉を何とか吐き出した。

神と称する女に、屈服してしまいそうになる。

ただただ平民に生まれた王国国民の性根が、王の剣としての矜持が、死地へと踏み込ませた。

「この地は既に我が守護を得た。王国とやらの略奪は許さん」

冷たく、そして王国では誰もが思えど……口にしらない言葉だった。

国も貴族も、見下し切った言葉だ。

背後で村人たちが喝采をあげる。

農村に生まれたガゼフには、彼らの気持ちも痛いほどわかった。

「りや、りやくだつなど……」

その言葉に、モモンガが目を閉じた。

ちやうど、戦士団の来た方向を探索する集眼アイボール・コープスの屍が、焼かれた村の跡を見つけたのだ。

生存者こそ救出され護送されていたが。

多数の屍が転がっている。

子供も容赦なく殺され、女は凌辱された後に殺されていた。

目を閉じてその光景を共有しつつ、モモンガは眉をひそめた。

「村が焼かれた後で来るのが、王国の守り方か？」

「そんな、つもりは……」

なおも抗弁せんとするガゼフだが。

モモンガが手を前に出し、言葉を封じる。

彼が仕える王より、遥かに権威と優雅を兼ね備えた動き。

人々に……いや、世界に君臨するにふさわしい存在と見てしまう。

少しでも気をゆるめれば、足元にひれ伏し祈りたくなる。

「なぜ守りの兵を置かない？ 彼らの収穫を奪う代わりに、お前たちは彼らに何を与えた？」

「そ、それは……」

土地の開拓権、農具等の貸与など。

細かく言えば与えている。

与えているが……そんな意味でないと、ガゼフとてわかった。

王国貴族は根本的に……平民を守る気などない。

平民は勝手に増えるものであり、貴族に糧を捧げるが当然、と考えている。

モンスターや盗賊によって村が困窮しても、変わらぬ税を搾り取るうとし。

払えねば、奴隷として売られるのだ。

ガゼフ自身が平民だけに、モモンガの言葉こそが正しく思えてしまう。

「お前が犬ならば、帰れ。そして主に伝えるがよい。この地は我が守護を得た。盗賊の略奪は受けぬ」

「な……！ 王は決して、貴族どものような……！」

心から仕える王を貶める言葉に、最後の意地で激昂するが。

「その貴族どもを野放しにする王か」

鼻で笑う、モモンガ。

今までとは比べ物にならぬ絶望が、彼女から噴き出す。

「人ならば、この地で悩み、答えを出すがいい」

酷くやさしい、女神の微笑を最後に。

〈絶望のオーラⅢ〉を受け、王国戦士長ガゼフ・ストロノーフは意識を手放した。

「やれやれ。脅しはこんなものか……」

肩をすくめ、全員に〈睡眠〉<sup>スリープ</sup>をかけ。

戦士長に〈支配〉<sup>ドミネイト</sup>を施す。

王国の在り様、貴族の内情を、法国や村人とは別の視点で聞きたかった。

「アンデッドにはしないのですか？」

クロマルに乗ったアルベドが近づき、声をかける。

とうに帰還していたが、主の邪魔をせぬよう隠れていたのだ。

ザコとはいえ多数を殺戮し、アルベドの機嫌も戻った。

ニグンの死体が、どさりとバルデイツシユから振り落とされ、転がる。

「密かに力を蓄えてもかまわんが……情報には、あちらから来てもらった方がラクだからな」

モモンガが〈上位アンデッド作成〉で、ニグンを指揮能力に優れた地下聖堂クリプトロードの主に変える。新鮮な死体だったせいも、青ざめた顔色と黒い眼球以外はほぼ、人間と変わらない。

「ですが、ここが拠点と喧伝しては、いかなる敵が現れるか……」

ここはナザリックではない。

ろくな防備もなく、護衛はアルベドとクロマル、戦力とも呼べぬアンデッドのみ。

「ここそと隠れ棲むか？ リアルと……異形種の境遇を見たお前ならわかるだろう」

「……………」

もつと誰もいない場所に、二人で行くべきだったろうかと、アルベドは少し後悔した。

「この男からの情報収集はすぐ終わらせる。戦ったからと、そう興奮するな」

「くふっ！ はい！ お待ちいたしますっ♡」

後悔したが。

モモンガの期待するような濡れた目を見て、一瞬で忘れた。

「〈絶望のオーラⅢ〉で気絶したこいつが、諸国最強の戦士……だと？」  
「思った以上に、程度が低いのですね……」

支配状態になったガゼフから、情報を聞き出すが。

悪い意味で、モモンガは驚いていた。

クロマルから降りて、横で聞くアルベドも呆れ顔になる。

「ふむ……王が優れているのは、ある程度の人徳のみか」

「少なくとも、有能な君主ではありませんね」

ガゼフの主観以上には、褒める点もない。

弱気で、人情家に過ぎ、支配自体できていない。

「貴族については、村人や騎士らの言う通り……か」

「異種族による支配ならともかく、同種族の統治構造とは思えません。家畜の方がマシかと」

貴族の横暴を聞き、モモンガは不快を露にした。

「もうよい。王国とやらは敵とみなして問題あるまい――

〈要塞創造〉  
クリエイトフォートレス

村の入り口、街道側を覆うように。

分厚い巨壁を持つ、漆黒の城塞が現れる。

二人の足元も盛り上がり、石段となっていた。

目の前には黒い扉。

「モモンガ様……？」

まだ、たいした情報は得ていない。

いくらすぐ終わらせると言っても、もつと聞くべきことがあるのでは……と進言しようとしたアルベドだが。

「村人らよ！ 私とアルベドはこの城で村を守る！ この戦士らは放置し、休んでおくがいい！ 問題あらば、クロマルに言え！ クロマルは村人らの頼みを聞いてやるのだ！」

「え？ え？」

朗々と、主が命令をください。

築かれた要塞の扉は開き、豪華な中身を見せる。

アルベドとしては、主が何をせんとしているかわからない。

（私の殺して来た死体を集眼のアイボールド・コープス屍にするのでは？ それに、リアルではろくな料理がなく、ユグドラシルには味覚がなかったと……村での食事を楽しみにしてらしたはず。私が手料理を振舞っても……あるいは、何か早急に相談すべきことがあるのかしら……）

聞き出すべき情報も多い。

軽くキス程度の褒美を期待していたのだ。

本番の褒美は夜だろう。

「……アルベド、早くせよ！」

「は、はい！ 申し訳ありません！」

モモンガが、考え込むアルベドの腕を掴み急かす。

至高の御方にして、いとしいしとたるモモンガの言葉は絶対だ。

アルベドは慌てて主に従い、要塞の中に入った。

二人の背後で、重厚な扉が閉じた。

要塞の玄関ホールは豪華な絨毯で覆われていた。

天井には煌々とシャンデリアが輝き、二人を幻想的に照らす。

扉が閉じればすぐ、モモンガが足を止めた。

数歩歩いただけである。

「兜を取れ、アルベド」

「はっ」

言われるままに、兜を取る。

殺戮の火照りもおさまり、怜悯な美貌が現れた。

表情以外はまったく同じ、二つの顔が向き合う。

「まったく……戦っている間……いや、その前からか。お前は昂ぶりすぎだ」

「申し訳ありません、少し苛立ってしまっただけ」

小言なら情報収集をきちんとしてからでも……と、内心で少し不満を感じるアルベドだが。

「お前と違って、私は女淫魔サキュバスの体には馴れていない。お前が昂ぶるたびに……その、胸や下腹部が熱くなって……困るんだ」

恥ずかしそうに少し猫背になって、目を潤ませながらチラチラを上目遣いで見て来る。

「ぶふおっー」

完璧な守護者統括として、ありえない音を口から出してしまった。

（えっ、これ夢？ 夢でしょ。都合よすぎるわ。モモンガ様めっちゃ誘ってるやん）

シヨックで、脳内音声が関西弁になってしまう。

「だから……わかるだろう。鎧を……脱いでくれないか？」  
「ヨロコンデー！」

夢でもここは全財産を賭けるべき時！

アルベドは、いそいそと鎧を脱ぐ。

モモンガも……ドレスを脱ぎ始めていて。

ふと、鎧を脱ぐ己の匂いが気になった。

サキユバス女淫魔ゆえに、淫らなフェロモン臭だが。戦って汗を帯びた身で主

に触れてよいものかと。転移以来、水浴びも入浴もしていないのだ。

それに、御方とするならば、ベッドにまずは向かうべきではないか。

「どうした、アルベド。いやだったか？」

脱ぎかけたまま止まったアルベドに、モモンガがおどおどと心配そうに尋ねる。

「とととんでもないです！ モモンガ様！ このお城のベッドルームはどこに!? できれば、その前にお風呂にも！」

慌てて噛みながら問うアルベドに。

モモンガが拗ねたような顔を見せ、うつむいた。

「……絨毯の上は、いやか？」

「ぎよひよーっ♡♡♡」

(夢どころじゃねえ！)

アルベドは奇声を発して、いろいろ爆発した。

鼻と耳から血が噴き出したが、よく覚えていない。

一瞬で甲冑を脱いだはずだが、よく覚えていない。

己と同じ顔の御方を貪ったが、よく覚えていない。

ただ。

「目が覚めた時、愛する人が寝てるって最っつっ高……お♡」

びちやびちやになった絨毯の上で目を覚まし、モモンガが己にぴったりと寄り添っているのを見て。

寝顔を眺める恋人の気分を味わう。

モモンガが目を覚ます頃には、アルベドの情欲は再び高まり。

二人は夜が明けても、外には出てこなかった。

次の夜が訪れても。

そして、城塞の玄関ホール以外の部屋に誰かが踏み入る日も、なか  
なか来なかった。

村人たちは女神の現れぬ理由を、戦士団が失礼を働いたせいとし。  
ガゼフたちにつらく当たり。

彼らは漏らした尻とズボンのみ洗い、濡れたそれを履いたまま村を  
発った。

かろうじてアルベドの存在を聞いた彼らは、カルネ村に降臨した“  
女神”について報告せねばと、王都に急ぎ帰る。

命令を与えられなかった地下<sup>クリプトロード</sup>聖堂の主ニグンは、アルベドとモモン  
ガが睦み合う扉の前でじつと立っていた。

クロマルも、特にすることなく草を食べたり、作物をもらったりす  
るばかり。

陽光聖典の死体は、草原で腐敗を始めている。

そうして、黒い城塞の中にモモンガとアルベドがこもり始めて幾日  
か過ぎる頃。

「え？ ええ？ 何あれえ？」

スレイン法国から逃避行中だった、元漆黒聖典第九席次クレマン  
ティーヌ。

彼女が辺境の開拓地に場違いな、黒い要塞を見つけていた。

## 7：アツーーー！

クレマンティーヌは隠れ、迂回しつつ、奇妙な城塞に近づく。

(陽光聖典が出張<sup>で</sup>つてたんでしょ？ 僻地の開拓村で……焼き討ちさせて回るって任務のはず。作戦中のドサクサだから、抜けやすいって思ってたんだけど……)

そんな様子はない。

こんな国境に、王国が城塞を築いたりすれば、帝国が止める。

帝国の城塞にしては、飛び地過ぎるし補給路もない。

これほどの城塞が築かれれば、クレマンティーヌだって知っているはず。

陽光聖典が、そんな場所で何の作戦行動をするのか？

建設初期ならともかく、ここまで完成しては妨害も無意味。

城塞へのいやがらせか、兵糧攻め？

それ以前に、王国にこんな城塞を築く余力があるのか？

(いや、もっと根源的な問題があるよな)

クレマンティーヌ自身、作戦行動でこの街道を一度ならず通っている。

頻繁ではなくとも……こんな建物を築いていればわかる。

ひと月やそこらで築けるようなものではない。

(ええつと……前に来た時は辺鄙<sup>へんぴ</sup>な村しかなくて……素通りしたはず)

建てるなら、人も物も金も情報も、流れるのだ。

この先の都市エ・ランテルでも、大きな動きが起きる。

(じゃあ何だつっの？ 幻術？ あんな大きさの幻あるわけないし……)

匍匐前進で近づいていく。

城塞の周りには誰もいない。

漆黒の城塞は真新しいのかと思えるほど月光に輝き。

門は重厚な石の扉で閉ざされている。



(新築だからかなー……今まで見たどの城より立派に見えるんだけど)

ぐるりと回り込めば、街道側の半分のみが城壁で覆われているとわかった。

途中からは、急ごしらえの丸太の柵。

石の城壁がすっぱりと終わり、石組の予定すら見えず置かれている様子があまりにも不自然。

まるで最初から建っていた城塞を、何者かが利用しているだけのようでもある。

(後ろに城壁を築く予定はないっての？ 柵で中を隠して、麻薬栽培でもしてるわけ？ 朝になれば、隙間から中を見れるかなあ)

びつしりと丸太を立てて柵にしており、土地を囲んでいる。

モモンガたちがこもっている数日の間に、死者の大魔法使いとスケルトン・ウォリアー骸骨戦士が休みなく働いて仕上げたものだ。クロマルも時には力を貸していたが、絶賛発情中のモモンガとアルベドは知らない。

柵の外には、まばらに兵士が立っている。

(ええ……マジで前線基地？ こんな夜中まで警備だつてえ?)

城塞都市の類でも、城壁を見張りなど形だけだ。

壁の外に武装した兵を配置するなど、ありえない。

しかも、この兵たちは痩せてはいても背筋を伸ばしており、一流の戦士並みの気配を漂わせている。

(ヤバ……どんだけ精鋭置いて……ん?)

月光が兵士を照らした。

それらは目を赤く光らせる白骨の戦士。

(あれれ〜？ アンデッド？ ブルーラーノーン関係？ 聞いてないんだけど)

スレイン法国を抜け、秘密結社ブルーラーノーンの幹部として席を得たクレマンティーヌだが。

こんな場所に拠点があるなど、聞いていない。

(どっちにしても、夜が明けてからもう一度様子見かな？ 忍び込むにもアンデッド相手じゃ、昼の方が視界も広くなって有利だし。

マジックキャスター  
魔法詠唱者か知性あるアンデッドがいれば、匿ってもらえる可能性も高いはず……。カジツちゃんが主なら助かるけど、さすがに――)

距離を置こうとしつつ。

そんな風に展望を考えていた時。

――ズン！

と、クレマンティーヌの上から、周囲の土をめり込ませて何か以降って来た。

「はっ？」

這っていた体の周囲にちょうど、四本の棒。

机でも降ってきたかと、間抜けな声をあげてしまう。

少なくとも殺気を持った人間ではなかったし。

魔法の類でもなかった。

どう反応すればいいか、英雄級の彼女にもわからなかったのだ。

それが己の前足の間……。下にいるクレマンティーヌを覗き込んだ

時、ようやく上から降って来た物体が馬だと、気づいた。

反応するにはもう、遅かった。

獣は口を開き……

――MUUUUGEEEN

朦朧化のブレスを吐く。

カルマ値がマイナスに振り切った魔獣のそれは、凶悪なドラッグの混成物同然。

圧倒的なステータス差が、抵抗を許さない。

「な……。ぐ……。これ、はあ……。」

酔ったような、高揚感と眩暈が襲う。

体が熱く、脱力と緊張が、不規則なリズムで訪れる。

「うえ……。あつ、あつい……。」

のたのたと、無様に蠢きながら、武器を探るが。

――MuGeNN！

馬の口が、クレマンティーヌのマントを啜え、引きはがす。

(あ……。すすし……)

下着同然の部分鎧が露になり、野原を転がる。



アルベドとモモンガをセットで味わうという、贅沢すぎる行為を経験したばかりに、性的妄想が尽きず。R18制限のあったユグドラシルでも、ありえなかったほどに昂ぶってしまい。

100レベル魔獣でありながら、屈辱的にも夢精せんばかり。

それが今夜の、彼である。

幸いにも、彼は「カルマ感知」というスキルを持っていた。

これは周囲のカルマ値を自動的に感覚として把握する、バイコーンやユニコーン独自の感覚。一部の悪魔も所持する感覚だ。もつとも、認識できるのはカルマ値のみ。中立の獣や虫はたいてい見過ごすし——中立の者が不可視化していても、ろくに気づけない。

だが、カルマ値が偏った存在ならば、かなり遠くからでもわかる。単なる不可視状態では隠れられず、カルマ値をごまかそうとしてもわかる。バイコーン自身にもアルベドにも、善よりの者に高ダメージを与えるスキルが複数ある。入り乱れての乱戦の中、最大限の戦果を出すべく、彼の感覚は有効とされたのだ。

これにより、クロマルは村を探るカルマ値マイナスの存在を感知した。

中立の多い森のモンスターとは、明らかに異なる。

その「悪なる存在」は注意深く村に近づいてきて……脅威と感じたか、退こうとしていた。

この時にはギリギリ、匂いも感じられた。

雌である。

魔獣か悪魔か亜人か人間かわからないが、とにかく雌である。

カルマ値マイナスの存在が村を探り、逃げ出そうとしている。

これを捕らえることは、「村を守る」に含まれるのではないか？

彼は最大限、命令を拡大解釈した。

そして。

朦朧化のブレスを用い、クレマンティヌと言う雌を手に入れたのだった。

数日を経ても、二人はなおも城塞の玄関にいた。

「ふう……風呂かベッドでするべきだったかな」

べたつき、臭気すら放ち始めた入り口絨毯じゅうたんがさすがに気になってきたモモンガである。

「少し身も清めてはいかがでしょう?」

アルベドが浴室の使用を提案する。

「そうだな。アルベドの美しい体を穢したくはない……〈道具破壊〉ブレイク・アイテム」

モモンガが床に手をつき、絨毯を消滅させる。

「あら……よかったですか?」

裸体のまま、アルベドが首をかしげる。

絨毯がなくなつた入り口は、随分と寒々しい。

「誰かに洗わせるのも恥ずかしいではないか。それに……また玄関でする時は、〈道具作成〉クリエイト・アイテムを使えばいいし……」

「くふーっ! ですねですねっ! 問題ありません!」

主の言葉に、アルベドはいろいろと昇天寸前である。

「さて、では風呂に……」

そうして二人で風呂場に行こうとした時。

ドンドンと、要塞の扉が叩かれた。

「モモンガ様! アルベド様! 昨夜クロマル様が侵入者を捕らえました!」

村長ではない、まだ若い娘の声だ。

「……ふむ。さすがに風呂に入ればまたしてしまいそうだな。アルベド、お預けになってすまないが、身づくろいになる呪文はあるか?」

「は。承知いたしました——〈魅力祝福〉プレス・アビエランス」

アルベドが己に実験として用いてみる。

体中にべつたりとついていた体液やキスマークが消え、肌が汗ばみ、甘い香りが漂う。

うまくいったと、アルベドが微笑を浮かべて見せた。

「おお、見事だ! 私にも頼むぞ」

その姿に、モモンガはまた欲情してしまうが。

異常が起きたなら、己を崇める者らを待たせるわけにはいかない。理性で抑え、アルベドを急かす。

「はいっ、お任せください♡」

アルベドは、主の反応に満足を覚えながら。

モモンガの容姿を整え、互いに装備を身に着けるのだった。

そして城塞を出た途端、身づくろい前の己たちより遥かに酷い有様の侵入者——クレマンティーヌを見ることとなる。

## 8：スゴいね人体♡

そこには多数の村人が、不安と好奇心と……隠せぬ色欲によって集まり、遠巻きに見ていた。

二柱の女神と、漆黒の神獣。

そして足元に転がる女。

これらの傍には、女神らを呼んで来た娘——エンリもいる。

「やりすぎだバカ！」

「そうよ、反省なさい」

「M U ~ ~ ~ g e n ~ ~ ~」

モモンガが叱るが、クロマルは不服そうにいない。

主たるアルベドが、特にどうとも思っていないとわかるからだ。

彼はあくまでアルベドに召喚された魔獣であり、モモンガに服従しているわけではない。アルベドを介して、一応は命令を聞いているに過ぎない。

「不純を司るバイコーンが、ここまで淫獣だったとは……」

「まあ、私たちもやられましたし……」

肩を落とすモモンガに、アルベドがあっけらかんと言う。

これもまたサキユバス脳ゆえか。

村はずれに転がる女を、二人はしげしげと見た。

「で……これは、まだ生きてるのか？」

「今、鼻提灯ができましたし生きていますか」と

白濁粘液が鼻腔から泡となって膨らむ。

元の容姿は悪くないだろうに。

何とも酷い有様である。

「腹部が膨らんでるように見えるが、妊娠したのか？」

「寄生型のローパー等ならともかく、いくら魔獣でも、孕ませて即座に成長させる能力はありません。単に子宮と胃腸に、大量の液体を流し込まれたせいかと。じきに排出されて戻りますよ」

凌辱モノのエロゲみたいだな……とは思ったが言わないモモンガである。

よく考えなくても実際、彼女は凌辱されたのだ。

「脚とかおかしな方に曲がってないか？」

「股関節脱臼ですね。骨折ではないため、回復は容易かと」

他にも擦り傷や粘膜裂傷が多数。

しかも、ぽっかりと開いた穴から止めどなく粘液が溢れだしている。

「血といっしょに、なんか黄色っぽいのが大量に出て来てるんだが、大丈夫なのか？」

「血はともかく、他は全て出されたものです。当人の体液や内臓ではありません。子宮破裂の様子もないため、回復は難しくありません。う」

アルベドの声は冷静だ。

彼女としては正直、人間の惨状などどうでもよい。

「お、おう……：そうなのか。いろいろすごいな」

「まあ、出産を前提とする以上、容易には壊れませんよ。モモンガ様も、私の体を乱暴に扱ってくださいてもかまわないのですが……」

そう言われても、一応ノーマルなモモンガとしては興味のない世界。

今だって、あまり痛そうなこと言わないで欲しいと思っているくらいだ。

アルベドが兜の中で歪んだ笑みを浮かべているのも、わからない。

「いや、アルベドは私の最も大事な存在だ。こんな扱いはとてもできません」

「……っ！ あ、ありがとうございます！」

（うおっほおっ！ これ実質プロポーズじゃね？ 最も大事！ 最も大事だぜえ！） 他のギルドメンバー連中とか、どうでもいいってことですね！ タブラのクソが現れても私を渡したりしないってことですなえ！ 私が一番！ 私が最高！ シャルティア、アウラ、プレアデスやメイドのみんな、ごめんねー！ 顔も見たことないパンドラズ・アクターちゃんも、パパを奪っちゃってごめんね？ モモンガ様、私が一番大事なんだってさー！ 私はモモンガ様と新天地で、み



んなの分まで幸せになるから！ たまには思い出してあげてくれるから許してね！ モモンガ様には、絶対に思い出させないけどね！ けえどおねえ〜！)

びくんびくんと震えて、中で変な汗まで出しているアルベドは、暴走しかけているようにも見えた。

「おいアルベド」

(やっぱ人間は玩具にして、モモンガ様と面白おかしく暮らせるように……いや、でも先日の情熱的な求め方を考えると、小虫が邪魔でない僻地で二人きりで暮らすのも……迷うわああ！ 夢がひろがりんぐ〜！)

幸福過ぎて、トリップしたまま戻ってこないアルベド。

己を抱きしめ、身をよじらせる様子には、異様な迫力があつた。

「おい、アルベド！ 大丈夫かつ!？」

「はっ！ 失礼いたしましたモモンガ様っ!？」

大きな声で言われて、びくつと、正気に戻る。

「まったく……お前の頭脳がなければ、こうした事態は処置できないのだ。しっかりしてくれ」

「も、申し訳ありません」

アルベドとしては恐縮するしかないが。

一方で、頼られているとの自負が、身を熱くする。

そんなアルベドに、モモンガが身を寄せ、囁くように話しかける。

周りを囲む村人に、聞かせたくない話なのだろうか。

「お前が何か喜んでいるとはわかるのだが。ひよつとして私を……お前自身の体を、ああいう風にしたいのか？」

「えっ?？」

同じ体で転移してきたため、二人の精神はつながっている。

アルベドが大きな歓喜に襲われているとは、わかったが。

何にそんなに喜んでいいのか、モモンガにはわからなかった。

「どうしてもというなら考えるが……私としては、お前にはやさしくしてほしいぞ……」

「ぷひー」

近隣都市の都市長がよく出すような声と共に、アルベドは鼻血を出していた。

兜の中なので、誰も気づいていない。

（さささ最高やあ、うちのモモンガ様は最高やでえ……ずっと唯一絶対最高の御方と思ってたけどつ。さんざんソロプレイで妄想シミュレーションしてましたけどおっ！ さすがモモンガ様ツ！ 私の妄想なんて、井の中の蛙でしたあ……高みっ！ 圧倒的高みっ！ やっぱ妄想はクソだぜリアルが一番、電話は二番！ 三時のおやつにリアルモモンガ様最高……お！）

ふらりと倒れそうになってしまう。

「おいっ、本当に大丈夫かアルベド」

「だだ大丈夫ですう〜♡」

ぜんぜん大丈夫じゃなさそうである。

「と、とりあえず、この女について、どう思う？」

「は。村を探っていたそうですし、近隣国の斥候かもしれません」

目の前の問題について、意見を求められれば元守護者統括として、冷静な頭脳が戻る。

アルベドは己を切り替え、主に答える。

「近隣国……つまりは王国、帝国、それに法国か……おい、お前——何と言ったか。こつちに來い」

「は、ニグンと申します！」

モモンガは、城塞の門前でひたすら立っていたニグンを呼んだ。

彼はアルベドに瞬殺され、高位アンデッドたる地下聖堂クリプトロードの主として蘇らされたため、生前の記憶と自我を保持している。

「この女だが、知らないか？」

「……さすがにこの状態では判別できません。偉大なる主のご期待に沿えぬ、この身の不足を——」

かしこまって言葉を述べるニグンを留める。

モモンガとて、よく考えればこんな状態の知り合いを見て判別できない。

「うーん……それはそうだな。アルベド、回復してやれ。それにエン

リと言ったな、お前もこれの顔を拭いてやるがよい」

己を呼びに来た娘にも言いつける。

アルベドは少し不服そうに。

エンリはおっかなびっくりで。

生臭い粘液まみれの女を回復させ、粘液を拭<sup>ぬぐ</sup>う。

確かに、女性としてあまり触れたい状態ではあるまい。

体はまだまだドロドロとしており、口の端からも白濁が溢れているが。

女の顔が、ある程度は見られるものになった。

「どうだ、ニグン。知っているか？ 持ち物についても見てもらうべきかな」

「これは……！ 我が主よ、漆黒聖典です！ 漆黒聖典第九席次『疾風走破』ですぞ」

と言われても、モモンガもアルベドも、何なのかわからない。

（なんだその厨二っぽい名前は……真面目な顔で呼んで、恥ずかしくないのか）

その程度の感想しか出てこない。

説明させたところ、法国にある六色聖典なる特殊部隊の中で最強の部隊らしい……が。

「で、ニグンは六色聖典の中の、陽光聖典の隊長なのか」

「は、その通りであります！」

胸を張ってドヤ顔で言うニグンは、アンデッド化で隷属させていてもうつとうしく感じる。

「で、神や世界に匹敵する装備を彼らは与えられていると」

「はい！ 私もガゼフ暗殺において、これを持たされておりました！」

ニグンが、魔封じの水晶を取り出し見せる。

「む……これはユグドラシルの……〈道具上位鑑定〉<sup>オール・アブレイサル・マジックアイテム</sup>」

「他にもプレイヤーかNPCがいるのでしょうか？」

アルベドも困惑した顔だ。

「……込められているのは〈第七位天使召喚〉だと？ 第十位階まで封じ込められるはずだろうに」

「い、いえ、確かに最高位天使です。我々が儀式によって用いれる最高位の魔法です。第八位階以上は、神の領域とされており、確認すらされておられません！」

「第七位階が？」

ニグンの説明に、二人の言葉が重なった。

「そ、そうか……確か先日のアレが、王国最強の戦士だったな」

「こそこそしなくても、問題ない気がしてきましたね」

モモンガは第十位階の使い手、さらに上の超位魔法も使える。

アルベドとて聖騎士系クラスの副次として、第六位階までなら信仰系呪文が使える。

クロマルすら高位呪文同様の効果を生む能力をいくつか、取得しているはずだ。

今後をある程度は用心もすべきかと思わぬではなかっただけに。

二人は徒労感を感じていた。

まあ、実際には十分派手に行動しており、まだ何の用心もしていないのだが。

「世界に匹敵するアイテムとやらが、<sup>ワールド</sup>世界級アイテムだった場合のみ、用心すべきか」

「モモンガ様には通用せずとも、私やクロマルはやられるでしょうか……」

アルベドをじつと見る。

クロマルは別に見ない。

「お前は魔法で造ったクローンの肉体だ……本来なら、破壊されても、この私が使っている体に精神は戻ってくる。だが、<sup>ワールド</sup>世界級アイテムの効果を受けた場合、どうなるかわからん。お前を失うなど、私には耐えられん……だから、いいか。ここからは、少し慎重に動く。情報収集手段を増やすぞ」

ぴくんとアルベドが震えた。

「……はい。では、先日の陽光聖典の死体を利用しますか？」

（失うなど耐えられん……失うなど耐えられん……あゝ……）

しゅーい！ マジ玉音。モモンガ様と会話してたら毎秒が涅槃。

録音しときてえ！ つうか録音しとかなアカンやろ！ なんで録音録画用のクリスタルとか持ち物に入れとかないわけえ!? あークソっ！ はータバブラほんまつつかえ！)

何とか冷静に返答するアルベドだが。

アルベドの内心は、高まる喜びと苛立ちとして伝わり。

何か不満を抱えさせているのだろうか……と、モモンガを不安にさせた。

もちろん、陽光聖典の死体は、三日間忘れていたため、少々まずいことになっている。

「ああ、もちろんだ。だが、その前にアルベドよ」

モモンガが、ちらりと「疾風走破」——クレマンティーヌを見る。

ちやうど彼女は身じろぎし、起きようとしつつあった。

「この女の首をはねよ」

「承知いたしました」

何の迷いもなく、アルベドはバルディッシュを一閃し。

クレマンティーヌの首をはねる。

村人が悲鳴をあげる——よりも早く。

血が激しく噴き出す——よりも早く。

「へ上位アンデッド作成」

血は流れず。

村人は啞然とし。

クレマンティーヌは、血色すらもそのままに。

高レベルの首無し騎士——首無しの劍聖として起き上がった。

体内に残っていた黄ばみ白濁を大量に垂れ流しながら……。

## 9…その痛みを反逆する

「は……れ？ えっ？」

クレマンティーヌは目を白黒させた。

己の体が見える。

視線を上に向ける。

首が……ない。

つまり今の視点は……。

「ええええええええ!!」

仰天した声をあげる。

体が暴れるように動いた。

「死にたくねええええええええええ!!」

無様に絶叫すると。

何かに引っ張られるように、視界がぐるりと変わる。

「んなっ!？」

そして。

「へ？ えっ？」

手が見える。

手が動かせる。

手で顔に触れる。

手で顔を押してみる。

ぐらり。

「はっ」

首が落ち——クレマンティーヌが焦ると、引っ張られるように戻る。

「えっ？ えっ？」

おそるおそる、完全にずらし。

もどし。

ずらし。

もどし。

ずらし。

もどし。

はずし。

もどす。

はずす？

首を？

「な、なんじゃこりやああああああああああ！」

己の異様な状況に、クレマンティーヌは目の前の者たちに気を払う余裕すらなかった。

「ほう。これは思わぬ事態だな」

モモンガは興味深く、どこか嬉し気に、騒ぐクレマンティーヌを眺めている。

アンデッドが混乱に陥るなど、普通はありえぬことだ。

「完全に死んでいない者をアンデッド化した結果でしょうか」

モモンガの意を汲み、アルベドが言葉をつなぐ。

クレマンティーヌは首こそ切断されたが。

あまりに素早くアンデッド化されたため、完全に死に切っていない。

それゆえ、通常のアンデッドとは心身に違いが起きているようだった。

「ああ。そうだな……面白い。ニグンよ、お前は己が新たな生を得た時、混乱したか？」

「いえ、御身に与えられた役目も力も、全て把握いたしました。斯様に取り乱すなどありえませんが」

そう。

造られたアンデッドが己の能力を把握せぬなど、ありえない。

己の在り様に混乱することも。

「では……これはどうかレイ・オブ・ネガティブエナジーな負の光線」

様子見に、下位の負属性呪文をクレマンティーヌへに使う。

放たれた黒い光線は、彼女の体に当たり……その身に吸い込まれ。穢された体を、いくばくか癒した。

モモンガは頷き、アルベドを見る。

アルベドも頷き返し、主が望むであろう呪文を使う。

「ライト・ヒーリング  
〈軽傷治癒〉」

「いたっ！」

下級の回復呪文で、ダメージを受けたのだ。

70レベル級のアンデッドとなった彼女には、痛手でもない。

ただ、弱点でもある聖属性ダメージという、己の知らぬ痛みに、驚いたのだ。

クレマンティーヌはびくりと跳ね。

ようやく我に返ったか、アルベドを睨み。

続いて、モモンガとエンリ、ニグン。

最後に角のある山羊のような黒馬——クロマルの姿を確認すると。

怯えたように、距離を取ろうとしたが。

「ひっ——な、なんだ、脚がっ……あ、ああああああああ！」

股関節が外れたままなのだ。

しかも下半身は……他者の体でなら、よく見た惨状。

昨夜の記憶が蘇る。

アンデッドでありながら、混乱と恐怖の悲鳴をあげる。

「しかもアンデッド化前の損傷を引きずっている、か。〈フィンガー・オブ・デス死の指〉」

第8位階呪文の、圧倒的な負のエネルギーがクレマンティーヌに放たれる。

50レベル程度までなら即死するであろう負属性ダメージ。

さらに死した者はアンデッドとして蘇らせる効果だが。

「ああああっ……あっ……え……？」

クレマンティーヌの体はたちまち回復し。

引き裂かれていた下着、下半身の惨状、全身の痣も消えた。

精神すら安定する。

「種別がアンデッドとなったこと、間違いなさそうだが。記憶はどうだ？」

「あ、あんたは何？ あたしはどうなってるワケ？ ていうか、ニグンがいるってことは……ここは法国の勢力下？」



ニグンをちらつと見つ、立ち上がり。

目の前の、明らかな異形種の美女に問い返す。

何もかも、わからないのだ。

「先に御身の問いに答えなさい！」

「不敬だぞクレマンティーン！」

「女神様に失礼ですよ！」

全身甲冑の女戦士、ニグン、村娘が、口々にクレマンティーンを責め立てる。

魔獣が我関せずな顔で、未練がましく肢体を視姦してくるのが、実におぞましくも腹立たしい。

理解できない状況もあって、彼女の機嫌は最悪だ。

一方で、白いドレスの美女——モモンガは、興味深そうに首をかしたが。

「お前は私に隷属していないのか？」

「はあ？　なーんでこのクレマンティーン様が、回復させてくれたからって、あんたに隷属するんだよ。体も妙なことになるしい！」  
クレマンティーンは、せめていつもの調子を取り戻そうとしたのだったが。

その声はよく通った。

遠巻きにした村人らも含め全員が静まり返り、彼女をじつと見る。

クレマンティーンもまた、状況を素早く把握する。

武装は解除されているが、肉体に傷は残っていない。

もともと、体術中心の身。鎧はなくとも問題なく。

人間ならば、彼女は素手でも殺せる。

（あの忌々しい魔獣は、特殊能力を警戒すれば何とかなる……実際、殺されてないし）

別の手段で、既に殺されたとは知らない。

（妙な衣装になってるけど、ニグンの実力は知っている。一人でいて天使も連れてなけりや、問題ない）

同程度のアンデッドになっているとは知らない。

（女戦士は強そうだけど……全身甲冑じゃ動きも遅いでしょ。簡単に

逃げ切れるし)

村娘は戦力外。離れてる村人も戦力外。つまり。

(あの悪魔っぽい女を始末すればいいってわけじゃん)

そう考えた時、クレマンティーヌの胸に鈍痛が起きた。

(なにこれ?)

彼女がよく知る肉体的苦痛ではない。

心、いや魂が疼き痛むような、奇妙な感覚。

罪悪感に近いか。

白いドレスの女に、敵意と殺意を掻き立てるごと、強くなる。

「ほう、そのような感情は新鮮だ。警戒、反感、それに敵意か?」

(思えばアルベドは、私を常に立て、私に服従していた。村を襲っていた連中はさっさと殺したし、村人は神様扱い。作ったアンデッドからはご主人様扱いだ。うん、本来の人間関係はこういうものだよ)

この世界に来て、初めて味わう対応に、モモンガはくすりと、笑ったが。

一方で。

二人以外の全員。

遠巻きにした村人さえも、息を呑み。

先の斬首以上の惨劇を予感していた。

クロマルは返り血を避けるように距離を取り。

近くにいた三人が、しばし遅れて言葉を放つ。

「モモンガ様、せっかく自らお造りになられたシモベですが。この不敬な女は不良品かと。始末してもよろしいでしょうか」

「御方に不快を味わわせるとは、かつて同じ国に属した者として遺憾の極み。御心の晴れない場合は、このニグンも命を以て詫びさせていただきます!」

「女神様、私たちで処分しておくべきものを目にさせ、申し訳ありません! 女神様を呼んだのは私の独断です! 他の村人に罪はありません!」

アルベドが明確な殺意を。

ニグンとエンリは、なぜか謝罪を。

「えっ?」

モモンガとしては、周りの扱いが重すぎて困る。

目の前の相手と普通に話したいのに話せないのは、息も詰まるのだ。

「ま、待て。この者をみだりに害してはならん」

慌てて、三人を止める。

三人を離れさせ、クレマンティーヌに近づく。

アルベドとニグンは、いつでも割って入れるようにと身構えた。

「私はモモンガ。お前は……クレマンティーヌでいいか?」

「そーだよー。で、何? お姉さんが、その魔獣の飼い主ってことでもいいわけ?」

猫背になり、推し量るような上目遣いを向けるクレマンティーヌ。  
ずきんずきん、と胸の痛みが強まる。

「間接的にはあるが……そうなるな」

「ふーん。そっかー。そうなんだー……それじゃー……死ねッ」

殺意に応じて、胸の痛みは強まるが。

クレマンティーヌにとつて、殺意は日常の感覚だ。

心身の苦痛だって……切り離せる。

痛みも疼きも切り捨て、己の身を機械のように、脱力した姿勢から、  
一気に踏み込み。

手刀で、モモンガの喉を潰し殺さんとする。

痛く、疼く。

己が間違っているのではと、まだ結果も出ていないのに後悔の念が  
起きる。

(クソ、こんな痛みで止まるか! 殺すことを愛してるのが、あたしだ  
ろうが!)

手刀は、クレマンティーヌ自身驚くほどの速度と威力で、モモンガ  
へと迫る。

思考速度も、反射神経も、全身の筋力も、段違いだ。

喉を潰す程度ではない。

素手で人間の首を切り落とせると、確信する。

確信、していた。

「悪いな。お前のレベルでは、この体の反応速度に届かん」

「なッ！」

上位アンデッドの肉体を得ても、クレマンティーンは70レベル。100レベル戦士職——アルベドの肉体を得たモモンガならば、己に向かう一撃も容易に捕らえ、掴める。

しかも、アルベドが、横からバルディッシュを繰り出そうとするを制し。

さらに蹴ろうとするクレマンティーンを敢えて引き寄せ、抱きしめて動きを封じる。

「あ……」

なぜか、クレマンティーンの中の殺意と敵意が、揺らぐ。心からの安心感を、覚えてしまう。

「モモンガ様！ やはりそいつ殺しましょう！」

さんざん抱擁以上のことをしたアルベドが、叫ぶように言うが。

モモンガは笑って制し、クレマンティーンの髪を撫でた。

「そう暴れるな、クレマンティーン。お前には、この世界でも最高峰の力を与えたが……ふふ、お前が私に隷属せず、己を保つとは……面白」

「な、なんだ……なんで、今のを……！」

クレマンティーンとしては、理解できない現象である。

今までにない、溢れんばかりの力を振るい。

目の前の女を殺すはずが、受け止められ、抱きしめられ……子供扱いで、撫であやされているのだ。

物理法則が崩壊したような衝撃である。

それ以上に、己がこの状況を “嬉しいがっている” のが理解できない。

「はは！ この娘は、私に屈するだけの存在ではないと自ら証だてたのだ。女神とて間違いはする。彼女は、私の良き助言役となるだろう」

「は？ ちょ、何を言ってる……ええええええ！」

クレマンティーヌを抱きしめたまま、くると振り回すようにし。円を描いて、踊るような姿を見せるモモンガ。

そのまま、黒い翼で宙に浮かぶ。

速い回転に、クレマンティーヌは脚が浮き、首が飛ばされそうになるのを、抑える。目を白黒させ、何が起きているか、相手の実力は何なのかと必死で考えるが。柔らかい肢体に抱擁されると、蕩かされそうになってしまう。

白いスカートが弧を描き、広がる幻想的な様子は、ニグンや村人らに崇拜の念を高めさせた。モモンガにしてみれば、周囲をけむに巻くためのごまかしに過ぎない。

いろいろと、うやむやにすべく派手に動いて見せただけ。

なお、その芝居がかった行動は、彼の黒歴史たる宝物殿守護者と酷似していた……とは、当人もアルベドも気づかぬ事実である。

(まったく、せっかくの興味深いアンデッド化なのに。この異世界の検証にも、コレクターとしても、実に気になるじゃないか！ それにまあ、女の子をあんな目に遭わせたのは申し訳ないしな……)

普通は、そんな相手をアンデッドにしたりしないが。

モモンガの淫魔脳は、いいことをしたつもりになっていた。

(と、まだ偵察や本隊も来るかもだし、指示を出しとくか……)

信者になった村人の前では、本音で話したりできない。

「とはいえ、この者には教えるべき点も多い。アルベドよ城塞に帰るぞ」

「は、ははっー！」

歯がみしていたアルベドが、慌てて返答する。

「クロマルは、次に同様の者を見ても、斯様な不埒は働くな」

——Muggennnnnn……

不服そうないなきであった。

「ニグンは、村の守りを固めるよう指揮をとれ」

「はっー！ 御身が命、この身に代えても！」

酷く嬉しそうに命令を聞く。

門の前でひたすら立ち続けるより、己の能力と知識を活かせるには

違いない。

「……と、エンリよ。大儀であった。お前にはいずれ、然るべき礼をしよう」

（というか、他の村人の名前知らないんだよな……この娘も最初に人質に取られてたから覚えてただけだし……）

特に何を、とも考えず。

クレマンティーンを抱えたまま、黒い城塞へと飛び去るモモンガ。

アルベドもまた、甲冑状態でも翼を出し、主の後を追った。

「ちよつと、離せよっ！」

二人とも、クレマンティーンの声は無視したままに。

「エンリ、お前モモンガ様に名を……」

「選ばれたのだ！ エンリが、モモンガ様の巫女……いや神官！」

モモンガが去った後、一介の村娘であったエンリは、村人たちに囲まれていた。

「わ、わたしが……!?」

視線で助けを求めるが。

クロマルは無関心で。

ニグンと死者の大魔法使い<sup>エルリッチ</sup>らは、会釈して見せるばかり。

頼りの両親は他の村人たちにデイフェンスされ、近づけず。

妹のネムは、すごいすごい！と無邪気に喜んでいた。

「エンリ、これからも女神様への伝令役をよろしく頼むよ！」

「何せ女神様が、名を呼んでくださったんだからね！」

彼らの打算に気づかぬほど、エンリは子供ではなかった。

「は、はは……ありがとうございます」

（うう、大人って汚い……）

そう。

いつ命を落とすともしれぬ、女神との交渉。

女神の怒りを買った際の責任。

エンリは全て押し付け——任される身となったのだ。

もちろん、便宜のために優遇もされるのだろうか……普通の日々は

おそらく、戻ってくるまい。

(名前で呼んでいただけただけなのは光栄だけど……)

村人たちに笑って見せつつも。

エンリの口元は強張り、眉はひそめられていた。

(生まれついでタの異能トを持つて、魔法レを使えること、いつもずるいつて思ってたし。口に出しても言ってたけど。特別になるのって、大変なんだね……ンフィー)

エ・ラントルで祖母と薬師をしている幼馴染を、思い出すのだった。

## 10：残酷な神が支配する

城塞の中。

玄関ホールソファに座るモモンガ。

その膝に乗せられたクレマンティヌ。

アルベドは後ろに控え、歯がみしていた。

(くううう、私とモモンガ様のスウィートホームに下等生物があゝ！)

兜のために気づかれていないし。

二人の会話はきちんと聞いている。

情報収集と事情聴取とも、わかる。

重要な情報は確かに多い。

武技とか異能とか、初耳だ。

100年ごとの転移とか。

NPCを従属神と呼ぶとか。

拠点ごと転移した例とか。

それでも。

それでも。

二人睦み合った場所に、第三者がいて、気分がよいはずもなく。

……まあ、玄関口で延々としていた点については、さておいて。

愛する人の膝上に、侍って撫でられているとあつてはなおさら。

「そんじゃ、あんた——いや、貴方はぶれいやー様なのですか?」

「口調は元のままですかまわん。確かに私はプレイヤーだ」

子ども扱い——いや、猫扱い。

連れ込まれた最初こそ、歯向かったクレマンティヌだが。

何度も無駄と思ひ知らされ、また抱擁されていると、なぜか満たさ

れる。

「……じゃ、じゃあ、本当に神様なんだ」

「わかったなら離れなさい! この泥棒猫っ!」

激昂するアルベドを、モモンガはなだめる。

「そう言うな。彼女の情報は重要だ」

「で、ですが……はう」



仕方ないなあと言いたげに、後ろ手で兜を撫でられて。  
アルベドも黙ってしまふ。

「クレマンティーヌよ。私の周囲は今、崇める者、仕える者、怯える者しかおらん。このような中では、私はいずれ歪み、致命的な間違いを犯してしまうだろう」

「神様が間違える……？」

「モモンガ様が間違えるなど！」

二人の言葉に、モモンガは苦笑する。

「お前たち二人にとってプレイヤーが何であろうと。私の中身はお前たちと何も変わらん。いや、アルベドより明らかに愚かで……クレマンティーヌより、この世界を知らんのだ」

「モモンガ様……」

同じ体に居た頃、アルベドはモモンガの多くを知った。

過去の記憶や感情、在り様も。

転移の間際、己にしたことも。

けれど、モモンガへの愛と忠誠は揺らがない。

むしろ強まったと言ってもいい。

「クレマンティーヌよ。お前は私の力でアンデッドとなった。その上でお前が、自我を失わずいてくれて、私は嬉しいのだ。遠慮せず、助言と苦言をくれ。敬う必要もない。働きには、相応の褒美も与える」  
「え、えーつと……本当にいいのかにやー？」

おそろおそろ、と言った様子で口調を軽くする。

モモンガよりも、アルベドに警戒しながら。

「ああ、それでいいぞ」

「それじゃ、モモンガちゃんはどうしたいワケ？　世界征服とかするのー？」

撫でられ目を細めつつ、聞いてみる。

モモンガは、呆気にとられた顔になった。

「はあ？」

「あれ？　ちがうのー？」

クレマンティーヌにしてみれば、強大過ぎるモモンガなら、そのく

らい考えるかと思ったのだ。

「ふむ……アルベドよ。お前は世界征服をしたいのか？」

「モモンガ様が望まれるならば」

溜息をつく。

「アルベドよ、私はお前を巻き込んでしまった身だ。結果、お前の肉体……いや、心まで欲望のままに奪ってしまった。望みは遠慮なく言葉」

「ああ……モモンガ様！ では、鎧を脱ぎ、側に侍らせてください！」

感極まったアルベドに、モモンガは微笑む。

「欲がないな。来るがいい……本当に、お前は心も美しい。私にはもったいない、完璧な存在だ」

「ああ……ありがとうございます！」

鈴木悟の人を見る目は、かなり節穴だった。

あまり美しくない表情で兜を解除し、鎧を素早く脱ぐ彼女を、見てもいない。

(モモンガ様マジやつべ……幸せ過ぎて死にそう……)

アルベドは裸体となってモモンガの横に侍り、密着する。クレマンティーヌへの対抗意識を隠しもしない。

だが、ペット同然の彼女を驚かせたのは、その裸体でも嫉妬でもなく。

モモンガとまったく同じ肉体、同じ顔。

「同じ……顔……？」

「ああ、そうだ。私とアルベドは、二人で一つの体となりこの世界に来た。これは本来はアルベドの体……アルベドに与えたのは、かりそめの肉体にすぎん」

「この身をモモンガ様に捧げることに、何の不满がありません……！」

モモンガは目を閉じた。

「……ありがとう。聞いての通りだ、クレマンティーヌ。私はアルベドさえいればいい。世界征服などという面倒は願い下げだ。この村を救ったのは、弱者を踏みこむ連中が気に入らなかつたのでな。気

に入らん奴らと同格に、墮する気などない」

「けど、法国は……それに、王国も、この村に接触してくるよー？ 帝  
国だって気づいたら接触してくるんじゃないかなー？ 何より、評議  
国の竜王が気づくと厄介だよー？」

二人で一つの体とか、かりそめの体とか。

まるでわからないが、神だからいろいろあるのだと、クレマン  
ティーヌは己を納得させ。

現状の懸念を投げる。

彼女自身が法国へのトラブルの種だ。ニグンの存在がある以上、己  
が放り出されるとも思わないが。主の方針は知っておきたい。

「はは、親切だなクレマンティーヌ」

ただ、モモンガは笑い。二人を撫でる。

「己を強者と考える愚か者には罰を。真の強者には敬意を。すがりく  
つ弱者には慈悲を——私の方針はそれだけだ。己の分を知り接して  
くるならばよし。わかっておらねば、相応の報いを与える。他のプレ  
イヤーは過去に訪れたか、あるいは未来に訪れるか……だろうしな」  
彼らは、自ら動きはしない。

だが。

世界は。

都市エ・ランテル。

都市長パナソレイ・グルーゼ・デイ・レットンマイアの邸宅。

「ミスリル級冒険者パーティー、クラルグラによれば、村には巨大な城  
塞が建ち、強力なアンデッドが多数警備していたとのこと。大き  
な黒山羊のような魔獣もいたと。内部の調査は断念し、戻ってきてお  
ります」

「ぶひー、城塞？ 戦士長殿の報告にはなかったが……隠れて建造し  
ていた報告も聞いておらんぞ」

冒険者組合長プルトン・アインザックの報告を、パナソレイは信じ  
られない。

農民が反乱に、急ごしらえの砦を建てたと言うのか。

だが、続く報告は、予想を完全に打ち砕く。

「城塞は黒い石造り、複数の高い塔あり。本城は三階建て。全体に高度な意匠が施され、城門は強固。鉄柵もあつたそうです」

「待ちたまえ！あの草原と森のどこから石材を持つてくる！近隣の村を含めても、鍛冶屋だつてなかつたはずだ！」

パナソレイは暗愚ぶるのも忘れ、叫ぶ。

あんな場所に突如、巨大な城塞が生まれるなら。

都市はインフラ整備や建造物補修に苦労していない。

「幻術じゃないのか？ 気づかれて、一時的にそんな幻を出して見せられたとか」

魔術師組合長テオ・ラケシルが疑問を挟む。

「クラルグラは、監視できる距離で一泊している。忍び寄つて砦壁に触れたり、石を投げてみたりもしたそうだ。感触と音は間違いなく石。少なくとも見張っている間に消えた様子はない」

「高レベルの魔法なら実体を錯覚させ……いや」

「そんな魔法を一昼夜持続させる魔法詠唱者がいたら、城塞以上の脅威だよラケシルくん！」

帝国の『逸脱者』フールーダ・パラダインとて、できるか疑問だ。

「城塞は、街道側のおよそ半分を覆うのみだそうです。ただ、裏側も丸太柵を築いており、見張り台も建造中だったとか」

「戦士長殿の言っていた女神とやらは確認できたのかね？」

アインザックは左右に首を振る。

「いえ……ただ、裏側の柵は、村人とアンデッドが協力して行つていたと。確認できたのみで骸骨<sup>スケルトン・ウオリアー</sup>戦士が数十以上、死者<sup>エドゥル</sup>の大魔法<sup>リッチ</sup>使いが最低四体、見たこともない巨漢の戦士型アンデッドが一体。それに先刻も言つた黒山羊型の魔獣」

「アンデッドを使った武装蜂起……ズーラーノーンか？」

ラケシルの呟いた悪名高い秘密結社の名に、他の二人も沈痛な面持ちとなる。

それが最も可能性高く思えた。

「代官や兵士に見に行かせては、争いにしかなるまい。カルネ村方面

への依頼を伝手で出す。適当な冒険者を村人に接触させ、調査してもらえるか」

「それなのですが……私の方で、カルネ村へ向かう依頼を今一つ止めております」

「おお、ならちようどいいじゃないか」

アインザックは溜息をついた。

「その……バレアレ商会からです。近隣での薬草採取について、護衛が欲しいとのこと。どうやら当人はカルネ村に知人がいるらしく、先日帝国騎士による襲撃被害を気にしておりました」

「彼には悪いが、事情も合致するな。信用のできる……ただし、あまり上級でない冒険者を紹介してやってくれるか」

本来は抗議すべき立場だが……この事情では仕方ない。

アインザックは苦悩しつつも頷いた。

古くからの友の胸中を思い、ラケシルの表情も暗くなる。

今回向かう冒険者は、カナリア役だ。

村の状況、危険度を測る物差しに過ぎない。

生きて帰って来れば、儲けものだろう。

同都市、共同墓地地下。

「クク……まったく王国は魔法への対処を知らんでやりやすいわい」

この都市を拠点とするズーラーノーン十二高弟が一人カジット・バダンテールは、にやにやと笑っていた。

都市長の屋敷に潜ませていた死霊レイスを通し、会議内容を知ったのだ。

「カルネ村とやらに高位アンデッドがおるなら、挨拶に向かわねばなるまい。弱者ならば協力させ、強者ならば乗り換えてもよからうて……我が目的のためにもな」

死の宝珠により、骨スケリトル・ドラゴンの竜を支配下に置いたカジットは、この世界において間違いなく強者の一人。弟子らも、初歩的な呪文なら使える。

「ふふ、とはいえ相手次第か。そのカナリア共を、儼も利用させてもらうとしよう」

自ら接触する危険性を避けられるなら、好都合。  
墓場の地下に、邪悪な哄笑が響いた。

リ・エステイーズ王国、同名王都、ロ・レンテ城。  
第三王女ラナー・ティエール・シャルドロン・ライル・ヴァイセル  
フの部屋。

「……クライム。もう夜に悪いけど、明日の朝一番で、この書状をラ  
キユースに渡して来てくれる？」

珍しい命令だった。

アダマントイト級冒険者パーティー蒼の薔薇への依頼はいつもの  
ことだが。

呼び出しではなく書状とは。

怪訝そうな従者に気づいたか、ラナーが言葉を重ねる。

「明日はまだいるはず……呼んで話し合う暇はないの。可能なら即座  
に行ってもらわないと」

「何か八本指について、緊急の案件が？」

ラナーは首を左右に振る。

「戦士長の話は聞いたでしょう？ カルネ村を至急、調査してもらわ  
ないといけないの」

「えっ……しかしあの話は」

確かに今日の夕方、戦士長が早馬で戻り、緊急の報告をした。

だが、女神の降臨などありえないと、貴族らの失笑を買う。

戦士団と戦士長の正気が疑われ。

流れの魔法詠唱者に惑わされたともつばらの噂だ。

重要な秘密の報告とされたはずなのに、今や王城内の誰もが知って  
いる。

戦士長の失脚も近いとされるほどに。

「私は戦士長を信じているの。お願い……ラキユース達なら見極めら  
れるはず」

「わ、わかりました！ 明日の朝に一番で！」

ラナーが距離を詰め、悲しそうに願えば。

クライムは慌ててそう言い、書状を預かって退出する。

(クライムもわかってないのね……今回、戦士長は殺されにいったのよ。生きて帰って来ただけで、大事件じゃない。法国は戦士長を二回……いえ、三回は殺せる戦力を用意してはいたはず。村に現れた女神とやらが、それを退けたなら……女神は法国と対等あるいはそれ以上の力を持っている。そして、女神が属する勢力もわからない以上、敵対しなかったとも聞かぬ。村を救い、戦士長を殺してもいけない以上、敵対的ではないはずだけど。村の襲撃を見て、村を守ったのだとしたら。王国貴族を皆殺しにだってしかねない……王族の私だつて危ないわ。状況によつては、さつさとこの王都を落ちのびた方がいいかも……) ラナーは昏い瞳で窓の外を眺めつつ。

思案を続ける。

スレイン 法国、最奥。

連絡の途切れた陽光聖典に対し遠見の魔法儀式を行い。

法国首脳部は、カルネ村の状況を知っていた。

「我が神殿の巫女姫に発動させた次元の目ブレイン・アイによれば、カルネ村には黒い城塞が出現。陽光聖典隊長ニグンは強力なアンデッドに変えられ、城塞の門番となつていた。魔法的防御があるらしく、城塞内部の確認は断念。村人は無事。ただし死の騎士デスナイトが1体エルに死者の大魔法使いダーリッチが複数に——」

読み上げられる報告に、大神官らの顔が歪む。

「ぶれいやーの来訪に間違いない……」

「しかし、アンデッドを使役とは」

「城塞がギルド拠点か？」

口々に飛び交うのは推測と感想の域を出ない。

「村人を保護している以上、邪悪な神とも思えんが……ニグンの境遇から見て、我らへの心証は最悪であろうな」

「ただ現れただけなら、平和裏に接触できたであろうに」

後悔の色は強い。

今回は法国としては、例外的な作戦だった。

そんな作戦の実行中を「ぷれいやー」……神に見られ。

神は犠牲となるはずの民を助けた。

おそらく、作戦実行に出ていた者らは神を妨害者と見なし、無礼な態度で接しただろう。

「やはり、平民を犠牲とする作戦を執行した天罰ではないか？」

「貴様とて賛同しておったろうが！」

「私は反対だったぞ！」

言い争いが起きるもやむなし。

「ともあれ、現状では様子見をし、王国を通して情報収集すべきでしょう」

「確かに……王国のバカどもで、今回のぷれいやーについて測るべきか」

カタストロフ・ドラゴンロード  
「災厄の竜王とは、あれのことかもしれない……」

「そういえば漆黒聖典第九席次……あのクインティアの片割れも、あの方面に逃げていたのではないか？」

問題は山積みである。

いずれにせよ、うかつに手出しできる状況ではない。

スレイン法国は、王国とその近隣の作戦の大半を、ひとまず凍結させた。

これは少なくとも短期的に見れば……とても賢明な判断だったと言えるだろう。



## 11：オイオイオイ 死ぬわアイツ

(なんでこんな場所に私、いるの……?)

エンリは身を固くして座っていた。

己の過酷な運命について、思う所は多い。

恩人たる女神を呪えなければ、人のせいにするしかない。

(神様……は目の前にいるし。あの時、ベリユースとか言う騎士に人質に取られなければ、モモンガ様が私の名前を覚えたりも……うう、ベリユースとか言う騎士が悪い……あと、私の名前を叫んだお父さんも……)

エンリは今、選ばれた者しか入れぬ聖域。

黒い城塞の中にいた。

玄関ホールだが、エンリにとって初めて見る豪奢さ。

ありえないほど柔らかく座り心地のいい、黒いソファ。

正面にはモモンガと、その隣に座るアルベドとクレマンティヌ。

エンリの隣には、ニグンがいる。

なお、絨毯は敷かれていない。

「——と、法国ではこの二つが世界に匹敵する品と言われております」  
「名前が少し違うが……傾城傾国と聖者殺しの槍か？ 騙りの可能性も高いが、本物ならまずいな。正面からの敵対は避けたい」

「——で、番外席次つてめっちゃ強い子が一人だけいてねー」

「個の力はさほど考えずともよかろう。人数がいて、特殊な能力を持っていれば脅威だったが……強いだけの戦士系なら、いくらでも打つ手はある」

ニグンとクレマンティヌが、スレイン法国の機密事項を語っているのだ。

エンリとしては、何を話しているのかよくわからないし。

二人がチラチラと、エンリに聞かせてよいのか気にしているのもわかる。

聞いてもわからないのだから、正直帰りはかった。

「他の漆黒聖典も、世界級アイテムがなければ、アルベド一人で……い

や、お前たちでも今なら勝てるだろう」

「ははっ！ 今ならば、漆黒聖典とて破って見せましょう！」

「あたしも、隊長をかるーくひねっちゃえそうなんだよねー。番外ちゃんとも渡り合えるかも？」

「はいっ！ モモンガ様の聖地を荒らすならば、何者であろうと許しません！」

よくわからないまま、ニグンたちに合わせてエンリは答える。

モモンガに救われ、信仰を捧げる身としての模範解答。

許さないだけで勝てるとは言つてない。

ニグンとクレマンティーナが、えっこいつそんなに強いのか？ って顔をしているが。

エンリは気づかない。

「ふっ、頼もしいな。お前たちならば愚か者を誅するに不足ないと、私は確信したぞ！」

モモンガも気にせず、そのまま流した。

「「ありがたきお言葉！」」葉！」

堂に入った二人に遅れて、エンリも慌てて頭を下げる。

「では、エンリよ。私が作ったアンデッドの指揮権を、お前に預ける。

特に死の騎士は、個人的護衛として使え。村では、エンリが私の代行だ」

「ははっ、ありがとうございます！」

(い、いらないよっ！)

女神の言葉である。

心の声は口に出せない。

「ニグンは十分な装備があり、クレマンティーナにも相応のものを与える予定だが……エンリ、お前も相応の装備が必要だろう

〈上位道具創造〉

「え……わっ」

エンリを黒い法衣が包む。

深いスリットと胸を強調するデザインが恥ずかしいが。

素晴らしい生地であり……全身から力が湧きあがる。

さらに、手には異形の頭蓋骨を模した、黒いメイス。

禍々しい瘴気を立ち昇らせるそれを手にした姿は、まさに邪教の女神官だ。

「よし、あとはアンデッドと模擬戦で修業を積むがいい。馴れば、森のモンスター等と戦えば、力を高められよう。クロマルを連れて、パワレベリングしてきてもいいな」

「身に余る品を、ありがとうございます！」

（え？ 戦うの？ 私が？ ばわーれべりんぐって何？）

誠心誠意の礼を言う姿は、悪の女幹部と言った様子。

周りもこれに、エンリへの認識を改めたのだった。

（なんと……御主の祝福を得て、既に私程度の力を得ていたということか！）

（へー、ぜんぜん強そーに見えないのに、隊長よりすごい装備じゃん……それだけの實力はあるってことかー）

（あれはルプスレギナの衣装……モモンガ様のお心にまだ、ナザリツクの女どもの記憶が……！）

その後、モモンガは改めて城塞を出ると、様々な奇跡を為した。

狼やカラスに漁られ、ほぼ骨になっていた陽光聖典の死体から、かろうじて一体の集眼アイボール・コープスの屍を作る。これはニグンの支配下に置かれ、近隣情報収集に使う形となった。モモンガが報告を逐一聞くのが面倒と感じたがゆえである。

残った骨は12体の死者エールの大魔法使いダーリツチ、20体の骸骨戦士スケルトン・ウォリアーとして神官エンリの指揮下に入る。緊急時の指揮権はニグンに渡されるが……日常生活、土木作業や農耕、狩猟警備などはエンリの差配だ。

クレマンティーンは城塞内に詰め、モモンガの近衛……というかペットになった。得た力を振るいたい彼女には不満もあるが、王国や法国の出入を知らねば、安易に動けぬ状況である。

農耕活用、襲われた村からの移民勧誘など、いくつかの指示を出した後。

女神モモンガは最大の奇跡を為す。

村人は広場に集められ、中央に広い直線を開くよう二列に並ばされる。

ちょうど、村の中心たる井戸で二分する形だ。

「さて、超位魔法の実験もしておきたかった……私なりの防衛支援でもある」

「発動前後の護衛はお任せを！」

黒翼を広げ、上空に舞い上がったモモンガを、甲冑のアルベドが追う。

白昼ゆえに白いドレスは透けて。

下からはいろいろと丸見えである。

村人たちは跪きつつ、女神様の女神様を見上げ祈る。

かつてなく真剣に崇拜の念を込めて。

「では、ゆくぞ」

浮かぶモモンガを、球形の巨大な魔法陣が包み込む。

魔法陣が輝き、目まぐるしく形を変えながら回転する。

(く……見えない！)

村人(主に男)の心が一つとなり、強固な信仰が捧げられた。

「我が神官エンリよ！ 彼らの信仰を束ね、我に捧げよ！」

スカートのガードは忘れても、エンリへの気遣いは忘れない。

「は、はい！ 今こそモモンガ様が奇跡を為されます！」

ごくぐりと、村人たちの喉がいろんな理由で鳴る。

「いざ——〈<sup>ザ・クリエーション</sup>天地改変〉!!」

瞬間。

井戸は消え。

村は両断される。

村人たちは女神様の女神様を拝むことすら忘れ。

口を開けたまま、その神話を超える奇跡を見ていた。

余談ながら、この時から神に倣い、カルネ村では男女とも下着を身に着けなくなったという。

「おいおい……なんだよあれ」

ルクルット・ボルブは銀<sup>シルバー</sup>級冒険者パーティー、漆黒の剣のレンジャーである。彼の役目は斥候であり……それゆえ、仲間先んじて襲撃を受けたカルネ村を目にしたのだ。

そこにあつた光景は。

「堀……いや、湖？ それにあの城みたいのは何だ……村じゃなかったのか？」

聞いた場所は、巨大な湖に浮かぶ島のようになっており。うっすらと霧に包まれていた。

細い道のように、島へと道は続くが。

その先に見え隠れするは、黒い城。

明らかに村ではない。

はつきり言つてゲームが——いや、世界が違う。

牧歌的な平原に突如、悪魔城が現れたようなものだ。

「ま、周りも見とくか……」

ミスリル級先輩冒険者であるイグヴアルジから、あの村は普通ではないとは聞いていた。

女神を名乗る存在が現れたという噂も、事前調査で聞いている。

せいぜい、妙な宗教団体がはびこっているのかと思つていたのだが。

村ですらない。

「こんな所に湖なかっただろ……城もだけだよ」

見る限り、左右どちらにも湖は続いている。

城壁は途中でなくなつていようだが……うっすらと覆う霧が、村の細部を見せない。

「バレアレさんの好きな子つて、この中にいるのか？ 生贄になつたりしてないだろな……」

横に回り込んでいった時、さらに恐ろしい光景を見て、慌てて隠れた。

「なっ……」

多数の骸骨<sup>スケルトン・ウォリアー</sup>戦士が、木製の簡易道具で穴を掘っていたのだ。

それは溝であり……湖からの水路だとわかる。

先を見れば、小さな開拓村とは思えぬ広大な農地が広がり。そこかしこで骸骨が耕していた。

「なんだよ……これ——」

呆然としているしかない。

そこには人間らしき影もいたが。

アンデッドと行動を共にするような輩が普通とは思えない。

早く戻り、仲間たちが近づかないように言いつて撤退……そして組合に報告しなければ。

と、ルクルットはそつと離れようとするが。

「ニグンさんの言った通りですね。冒険者の方ですか？」

煽情的な黒い法衣をまとい、邪悪なメイスを手にした。

絵にかいたような悪の女神官が、彼の背後にいたのだ。

レンジャーである、ルクルットがまるで気づかぬ間に。

「ひっ！ な、なんだあんた！ どうして俺が気づかない！」

「さあ……どうしてでしょう？ 事情を聞かせてもらえますか？ 仲間

間の方にも迎えを送りましたので」

首をかしげて言う姿は、愛らしくすらあるのに。

口調はどこか空虚で、台本を読んでいるよう。

底知れない恐怖を感じる。

強者には、まるで見えない。

ただの仮装した村娘とも見える。

それが、酷く不気味で恐ろしいのだ。

いつもの彼らしく、口説こうと言う気すら起こさない。

逃げ出そうとするルクルットだが……仲間にも、という言葉で踏みとどまる。

「く……！」

「武器を抜かないでください。みんな、あなたを霧の中から狙ってますから……」

彼女を倒すか人質とし、仲間を助けられないかと考えたが。

その背後、霧の中を見て、脚から力が抜けた。

「え、死者の魔法使いだと……」

揺らいだ霧の中、見えただけでも三体の死者の大魔法使いが魔法を構えていたのだ。

一体でも、漆黒の剣では勝てない相手である。

「わかりました？　じゃあ、ついて来てください」

「な、なあ……教えてくれ……あんたが、この村に現れた女神ってやつなのか？」

その時、初めて女神官が感情を見せた。

明らかな怒り、だ。

「不敬な言葉は止めてください。このエンリ・エモットは、あの御方に仕える神官の身にすぎません」

まさしく狂信者の目、絶対忠義者の顔。

そして何より……。

道中で護衛対象から聞いた、思いを寄せているという村娘の名前。

「そんな……」

ルクルットはこの日、真の絶望を知り……目の前が暗転した。

「あれ？　ちよ、ちよつとなんで倒れてるんですか冒険者さん！　モルガーさん、魔法使っちゃったんですか？」

普通の村娘らしく慌てるエンリの声は、ルクルットにはもう届かない……。

## 12：この方の心には闇がございます

黒い城塞の中には。

元が日本製ゲームのせいだろうか。

温泉旅館を思わせる大浴場が、用意されていた。

その洗い場で、クレマンティーヌは身を清めていた。

「いかがですか？　ここも悪くないでしょうっ？」

「っ♡ あっ♡　こ、こんな……っ♡」

常時、湯が沸き出てシャワーも使える。

高級宿でも、こんな設備はないだろうし。

おそらく、王族だつてまず持つていないだろう。

けれど。

「しつかり、清めさせていただきます、ねっ♡」

「あああああっ♡　奥まで洗い過ぎだっ、このっ♡」

「ひやっ♡　じゃ、じゃあ私もこっちだつて洗っちゃいますからっ♡」

「んにゃあああああっ♡♡♡」

横から聞こえる喘ぎ声でまっつたく、くつろげない。

体を洗うと称し、二人で泡にまみれて、くんづほぐれっしているのだ。

というか、昨夜から絡み合っており、まるで離れようとしない。

別室にいた間も、胸がざわついたクレマンティーヌだが。

同じ空間で傍にいと、ざわつくどころでない。

（く……人が見てる前で女同士盛るなよ！　ていうか同じ顔の同じ体で、何してんだこいつら……裸だと、どっちがどっちかわかんねーだろ！）

嘘である。

クレマンティーヌには、モモンガがどちらか、はつきりとわかっている。

彼女の潤んだ目と喘ぎ声を、無視できない。

クレマンティーヌは、性経験もそれなりにあり、割り切った性的価



値観を持っている。魔獣に犯されたが、異様な快感を恐れこそすれ、行為自体にさほどの忌避感はない。

他人の情事なんて、任務中にはいくらでも見た。

喘ぎ声が響く場所で、寝たことだつてある。

だが。

だからといって、親の行為を見た経験はないし。

知り合いのよがり狂う顔を間近で見た経験もない。

(ていうか、見たくねえよ、こんなもん……)

いらいらするのだ。

なぜそんな気分になるのかわからない。

わかるうともしていない。

同じ体で絡み合う二人にいらつく理由が、己を愛して欲しいからだと、気づけない。

(クソが、クソが、クソがあ……♡)

横の喘ぎ声を聴きながら、やたら一部を重点的に洗っている己にも気づいていなかった。

体が軽く痺れ、頭の中が蕩けつつあることにも。

そのせいか。

「はあはあ……ん？」

モモンガに、クレマンティーヌは気づかなかつた。

「っ、うっ、く、う♡」

ただ、眉間にしわを寄せ、夢中で一部を洗い続ける。

「おい、クレマンティーヌ」

「ぬえっ!？」

突然、腕を掴まれ、凄まじい力で引き寄せられた。

見た目に反した、ゴリラ並み……いや、ゴリラ以上の腕力。

「モモンガ様、一人で洗わせておけばよろしいかと存じますが」

アルベドが冷たい視線を向けても、主は気に留めない。

「我々と同じく、あの魔獣に汚されたのだ。こいつも竿姉妹と言えるし……実験にも協力してくれたからな」

モモンガは笑い、アルベドを傍らに抱きつつ。

指で、クレマンティーンを洗ってやる。

「ひにやつ♡ ちよ、おま、いいいいいいこと、言ってる、つもりかつ、知らないけどつ、どこに指入れええええ♡♡♡」

「羨ましそうに見ていただろう」

汚された場所を念入りに洗う。

「誰がうらやまひつ!? う、動かすにやああああああ♡♡♡」

「うーん、猫っぽい。猫は風呂が嫌いだと言うからな。我慢するのだぞ」

「モモンガ様……次は私も、しっかり洗ってくださいっ♡」

たっぷり時間をかけて体を磨く三人であった。

城塞内がそんな状況とは知らぬ、カルネ村では。

「女神モモンガ様の降臨なされたカルネ村へようこそ……あれ？ 今年は随分早く来たんだね、ンフィー。ああ、他の村が襲われたから、薬たくさん出ちやった？」

禍々しいメイスから、おぞましい瘴気を立ち昇らせる神官エンリが、幼馴染にいつもの様子で話しかけていた。

「……………」

話しかけられたンフィーレアは、ぽかんと口を開けたままである。

こぼれそうな胸元や、スリットから見える白い脚に注目しているわけではない。

エンリの周囲は、彼女を護衛するアンデッドで囲まれ。

村も、恐ろしい魔獣やアンデッドが徘徊している。

そんな中、悠然と立つエンリは、話聞くズーラーノーンの女幹部の如き姿。いや、実際の彼らとて、ここまでの悪のオーラは発していない。

「あ、あの、エンリさんですか？」

護衛冒険者の魔法詠唱者、マジックキャスターニニヤが恐る恐るといった様子で話しかける。

恐怖で膝が笑っていた。

「はい。モモンガ様の神官を務めております、エンリ・エモットです」

照れくさそうに言う様子は、年相応の少女だが、恭しくメイスを預かるのは、死者の大魔法使い。

背後には見たこともない巨漢の戦士型アンデッドが立つ。

彼女の機嫌を損ねれば、銀<sup>シルバー</sup>級の漆黒の剣など、文字通りの瞬殺だろう。

「え、エンリさん、この城や、外の湖はいつたい……」

村の中は明るく、太陽の光で照らされていた。

周囲を覆っていた霧も、村の中にはない。

魔法的な結界のように、霧は村の外側のみ守っているのだ。

「全ては女神モモンガ様の為された奇跡です」

「こそ、そうですか……」

誇らしげに言う彼女は……とても怖かった。

漆黒の剣の面々は、ただ頷くしかない。

「ところで、ンフィーはどのくらい村にいるの？ 薬草採取なら、数日はいるんでしょ？ 私はいいけど、モモンガ様やアルベド様に失礼のないよう、気をつけてもらわないと……」

考え込む仕草は、ごく普通の少女なのに。

合わせるように、目配せするアンデッドたちが恐ろしい。

一行を生贄にする算段としか、見えない。

だが、ンフィーレアだけは、幼馴染が衣装以外は変わっていない（はずだ）と思った。なけなしの勇気を振り絞って言う。

「い、いや、あのね。村が襲われたって聞いて、その、エンリが大丈夫かなって見に来たんだ」

別の意味でぜんぜん大丈夫じゃなかったけど、とは口に出さない。思っていた勇氣と、まったく違う勇氣が必要だった。

「あ……そう、だったね……ありがとう。うん、そうだね……突然、あの騎士たちが襲って来て……もしモモンガ様が降臨なさらなかったら、私もみんなも……あの日に……」

エンリが悲し気に俯く。

目には涙がにじみつつあった。

今こそ夢であり、己は実際はあの日死んだのか……死につつあるの

では。ここは死後の世界では、と。折に触れてエンリは考えてしまうのだ。

村人全員が、少なからずエンリと同じだった。そんな、半ば夢のよ  
うな精神状態だからこそ、彼らはアンデッドと肩を並べ、平気で生活  
できるとも言えよう。死後の世界なら、隣人がアンデッドでも何の不  
思議もないのだから。

「エンリ……」

衣装や周りのアンデッドを一時忘れ、慰めようと近づくンファイレ  
アだが。

「あ、ありがとう、モルガーさん」

エンリの肩をぽんと叩き、ハンカチを差し出したのは、横にいた  
死者の大魔法使いだった。

ハンカチで目元を拭くエンリの背後、にやりと笑って手を振り、舌  
を出してンファイレアを煽る。

そんな彼を他の死者の大魔法使いが小突いて止めている。

モルガーと呼ばれた死者の大魔法使いは足も蹴られながら、おどけ  
ていた。

エンリに気づかれぬよう、言葉は発さずに。

「くっ……！」

相手の力量も忘れ、ンファイレアは囚われの女騎士が如き声を漏ら  
した。それは恐怖でも絶望でもない、単なる男としての悔しさであっ  
た。

「なあ……」

「うん……」

「死者の魔法使って強いんだろ？」

「ミスリル級のイグヴアルジさんが倒せたって自慢してたぜ」

「見たら逃げろと言われているのである」

「アンデッドってあんな、人間臭いモンなのか？」

「正直、顔以外は普通の村人って感じだね……」

漆黒の剣の緊張がゆるむ。

というか、緊張するのも馬鹿馬鹿しくなる。

暗黒神官エンリも、衣装以外は普通の少女のように思え始めた。ちやうど彼女が涙をぬぐい、顔を上げ、どこか無理のある笑みを見せる。

もう、健気な村娘にしか見えない。

「……うん、大丈夫。モモンガ様があの騎士を皆殺しにして、アンデツドの奴隷に変えてくれたんだもん！ もう二度とあんな連中、村に近寄らせないんだから！」

やっぱり、エンリは怖かった。

一行はエンリから様々な注意を聞き、そのままカルネ村で一泊することにした。精神面で疲れ果てて、そのまま薬草採取になど、向かえなかつたのだ。

ある程度の自由行動も許された中、ニニヤは一人で村の様子を見て回る。

ここでなら望んでいた力を……思わぬ形で得られるかもしれない、と。

それに、エンリと話す合間、村人らから聞き捨てならない言葉を、いくつか耳にしていた。

（もし、あれが真実だとしたら。いや、実際この村はもう既に……）

考え込みつつ、午後の村を散策する。

柵の外には畑が広がり、その外を湖が囲んでいる。

湖と霧で、矢もろくに届かない。

黒い城塞への道と、裏側の道が……湖の中、橋のように細くある。

閉鎖は容易。

大兵力での攻城も無理。

相当期間の籠城が可能だろう。

それに、湖の向こうでは、今もアンデツドによって休みなく水路が掘られ、畑は掘げられているという。

やがてこの湖のさらなる外堀と、畑の区域が築かれるに違いない。

森の木々は切り倒され、湖に浮かべられ綱で引かれ……次々と村に運ばれている。

柵だけでなく、物見やぐらや新たな倉庫、家が築かれつつあるのだ。  
（王国からの独立……確かに、この村に兵を差し向けても、あのアンデッドには勝てない）

大兵力で攻めても、この村は落とせない。

戦士長やアダマンタイト級冒険者のような精鋭とて、狭い道の先に待ち構える死者の大魔法使いに集中砲火を受ければ、終わりだ。しかも、より強力なアンデッドや、彼の女神すら待ち構えている。

（この力があれば……貴族どもも……）

暗い笑みを浮かべてしまうニニヤ。

己の姉を奪った連中を地獄に落とせるなら……と考えるしまうのだ。

気づけば、あの黒い城塞の前。

来るときは迂回させられ、城塞側からは村に入れないと知った。

監視の死者の大魔法使いもいつの間にかいない。

女神の御許では、監視も不要と考えたのだろうか。

（この城塞もアンデッドに作らせたのかな）

触れてみれば、まるで黒い水晶のように滑らか。

ニニヤたちのパーティーの名の如く、漆黒に輝いている。

エ・ランテルの城壁より遥かに堅固で、建造物としても美しい。

王都にあるという王城とて、ここまで見事ではなからう。

今まで見て来た建物とは、まさに格が違うのだ。

「本当にすごい……こんな力がわたしにもあったら……」

城塞の壁を撫でつつ、ニニヤは口に出して呟いていた。

「神の御力を求めるなど不敬だぞ、少女よ」

背後から話しかけられる。

慌てて振り返れば。

酷く顔色の悪い、ボロボロの法衣と王冠を着けた男がいた。

明らかにアンデッド、それもおそろしく高位の。

「あ、あの、ニグン將軍閣下、ですか？」

彼の存在は、既に教えられていた。

少女と呼ばれたが、否定して機嫌を損ねる方が問題だ。

「おや、エンリ殿から聞いたのかな」

エンリと違い、ニグンの態度には人の上に立つことに馴れた様子がある。冷酷な気配はあっても、傲慢の色はなく。それは、ニニヤにとつてすがりつくに足る要素だった。

誇らしげに胸を張るニグンへ、ニニヤはひれ伏す。

「お願いです、教えてください!」

「何をかな? 我が神に背く真似はできないのだが」

面倒がる様子もなく、彼はニニヤを受け入れた。

やはり、王国貴族のような下衆ではない。

「どうすれば……力を得られるのでしょうか。エンリ様もニグン様も、凄まじい力をお持ちと見えます。その……も、モモンガ様はこの村を救われたのですよね? どうしてわたしは……姉さんは救われなかったのでしょうか?」

敢えて、己の最も暗い秘密を漏らし、挑発とも聞こえる言葉を吐く。

この村が王国から独立せんとするなら。

貴族に対して決してよい心象は持っていないし。

たとえ彼らを刺激してでも、己の目的のために、と。

「察するに、貴族にやられたのかね? それとも盗賊団かね?」

「……貴族、です」

隠せぬ憎悪、怨嗟が声ににじむ。

「この王国は腐りきっている。特に貴族は最低だ。だがな、貴族をつけあがらせたのは平民だ」

「わたし達が悪いって言うんですか!」

「少なくとも自業自得だとは思うね」

「何をしたのが悪いって言うんですか!」

「何もしなかったから悪いのだよ。君たちは、あれほど虐げられてなお、唯々諾々と貴族に搾取され続けた。知っているかね、普通の国では、あのような圧政があれば平民は立ち上がり、反乱を起こすのだ」

そう、反乱を起こす。

スレイン法国は反乱を待ち、その支援準備もしていた。

腐った貴族を清める、自浄作用に期待していたのだ。

民に貴族への反感を高まらせ、蜂起させるべく風花聖典も動いた。だが、王国の平民は悪い意味で辛抱強く。

また、王国の国土は悪い意味で実り豊か。

彼らは、延々と搾取された。

奪われても奪われても、民は受け入れた。

愚かな貴族に、愚かな家畜として貪られ続けたのだ。

その結果が、どうしようもない暴君と化した貴族。

そして、ニグンたち陽光聖典による先日の作戦。

モモンガは傲慢と言い、理不尽は許さぬと言ったが。一方で、王国貴族に間違いなく、悪感情を持っていた。それはニグンもエンリも感じた、確かなものだ。

「君たちが一割の犠牲を受け入れ、抗っていれば……奴らは今ほど愚かな暴君にはならなかつたろう。搾取した民がいつか齒向かうとわかっていれば、愚かな治世はできん。結果、君たちは今、九割の犠牲を払い続けている」

「だから……姉さんを奪われても仕方ない？ 取り戻す権利もないと？」

「違う」

「じゃあどうしろって言うんですか！」

「取り戻せと言っているのだ。君が不満や恨みを溜めこみ抱えていれば、貴族が死ぬのか？ 姉が帰って来るのか？」

「力もないのに齒向かつたって、犬死にじゃないですか！」

「だから諦めるのか？ 犬だつて噛んで傷くらい与えられる。傷を負えば、少しは懲りる。何度も噛まれれば、愚かな屑も学習する。たとえ君の姉が戻らずとも、次にさらわれる娘はいなくなるかもしれない。抱え込んで、あんな顔で生きて、いつか死ぬ方が無駄な生き方、そして無駄な死に方ではないかね？」

「あなたには力があるから、そんな！」

ニグンの言葉は冷たい。

そしてどこまでも現実的で。

慰めがない。



ニニヤは涙を流していたが。

少女に現実を教え、道を選ばせるこそ元聖職者の務めと、ニグンは冷酷に答えていた。

「私に訴えれば力を得られると——」

「ちよーつとニグンちゃん、女の子いじめて、いい趣味してんじやーん♪」

ふわりと、軽やかに。

二人の頭上から、女が舞い降りた。

丸腰で鎧もなく、下着同然の姿。

金髪がしつとりと濡れ、肌も艶めき美しいが。

ニニヤの目には、ニグンより遥かに危険な存在に見える。

ニグンが露骨に舌打ちした。同胞になろうとも、生前からあまりいい感情を抱いていない相手なのだ。

「腐りきった王国貴族を皆殺しにしたいんでしょー？ いーじゃん、おねーさんそゆ生き方大好きだよー。皆殺しも、だーい好きだなー♪」

ニニヤの肩を抱き、耳元に囁くように言う。

「え、えつと、この方は……」

話に聞くモモンガやアルベドの特徴ではない。

「エンリ殿からは……伝えようがないか。そいつはクレマンティーン……まともに相手はしない方がいい」

「ちえー、ニグンちゃんひどーい。王国貴族大嫌いなのはいつしよのクセにー」

「うるさい、若人に間違った道を説くな！ それにお前は御方の側仕えという大任があっただろうー！」

「あーんな桃色空間にいたら、頭おかしくなっちゃうよー？」

二人の様子は対照的だ。

同情すべき人生経験の豊富なニニヤは、人を見る目をそれなりに持っている。

ニグンが決して悪人でなく、常識人で、ニニヤを思いやっていると確信できた。

一方のクレマンティーヌは、およそ信じられる類でない。明らかに悪人の類。

それでも。

しかし。

ニニヤは、己の内に燃える業火を鎮められない。

「クレマンティーヌ様。どうすれば……あいつらを皆殺しにできるんですか？」

「うーん、いいねー。その気持ちを連中にぶつける時、お嬢ちゃんほどんなことしちゃうかなー♪」

ニニヤの問いに、クレマンティーヌは邪悪な笑みを浮かべた。

ニグンは深々と溜息をついて肩をすくめる。

独立と言う形をとる以上、王国との衝突は想定済だ。

女神が望めば、王国を焦土にもできるだろうが……外部に敵を作りすぎる。

ニグンとしては、適度なバカを適度に見せしめて、頭の働く帝国と同盟を組みたかったが。

クレマンティーヌが動くなら、想定以上に血生臭くなるだろう。

（主が決断なされたなら、従うは道理だが……この女に、主の決断を歪まされてよいものか……）

だが、モモンガは城塞の中にこもり、出てこない。

村の誰も、無闇に女神を呼べる立場ではない。

ニグンはもう一度、深々と溜息をついた。

# 13：親方！

夜。

モモンガとアルベドは転移門で城塞の屋根に出て、翼を広げて、夜空を高く高く飛ぶ。

うつすらとかかる雲さえ足下に。

煌めく星々の中に浮かんで。

輝く世界、輝く空を眺めた。

「星と月だけで、こんなに明るいなんて……キラキラと輝いて、宝石箱みたいだ。いや夜空だけじゃない、この世界そのものが……あんな世界とは比べ物にならない、美しさだ」

初めて見る星空に、うっとりと手を伸ばす。

星は遥か遠く、触れられはしないけれど。

光を通す、この空気すら美しく輝いて。

白い指の隙間からこぼれゆくように。

「全てはモモンガ様を飾る宝石を宿すがゆえでしょう」

体を共有した折、主の記憶——リアルの、常に厚い覆われた空を

知っていたから。

美しい光景への感動を邪魔すまいと、アルベドは背後に控える。

「それは違うぞ、アルベド」

振り向き、モモンガはアルベドを見つめた。

彼女の背後、広がった黒い翼の向こうに煌めく星明かり。

月光で照らされた肢体。

今のアルベドは甲冑でなく、上位道具創造クリエイト・グレート・アイテムによる黒いドレスを

まとう。

輝く夜空の中に浮かぶ彼女は、まさに夜の女神と見えた。

「星々も世界も、この肉体——アルベドを飾る宝石だ」

星空を見ると同じ、うっとりとした目でアルベドを見る。

モモンガの目に彼女は、確かにこの世界にも比肩する美しさ。

骨じゃなくてアルベドの体でよかったと、心から思えるほど。

「そんなアルベドに愛される以上の幸福があるものか」

心からの、感謝と愛情を込めた言葉。

魂のつながりが、言葉が真実と伝えてくる。

たとえ嘘でも感激しただろう。

でも、心からこんなことを言われては。

魂に愛を刻まれたアルベドは。

「モモンガ様……！」

(ヤバイヤバイヤバーイ！)

歡喜のあまり脳内語彙力も崩壊していた。

己の肉体に宿った主——モモンガに、ひしとしがみつく。

本来のモモンガの体なら、骨の一部が折れかねない抱擁だが。

同スペックのアルベドの体ゆえ、情熱的に思うのみだ。

「~~~~~♡♡♡」

星空の中、与えられた言葉を何度も咀嚼しながら……最愛の主にしがみつき、身をすり寄せるだけで。アルベドはとめどない快樂に押し流され、達する。

黒い翼がピンと伸びて、身が震えた。

飛行能力が途切れ、モモンガの腕にのしかかってしまう。

そんな彼女がなお愛おしくて。

モモンガは心から……愛情を吐き出す。

「在り方を書き換えてしまうほどに……アルベド、愛している」

それは、情事の合間ではない。

冷静な中、真剣に紡がれた告白。

「も、モモンガ様っ♡ 私も、私も愛してまひゅっ！」

口から出た言葉は実際には「みよみよんがしやま」で。

思考回路はショート済、子宮経路は準備済。

びくんびくんと身を跳ねさせながら、アルベドはすがりつく。

モモンガもまた、きつく抱きしめ返し。

間に入れば、全身甲冑もプレスされる抱擁のままに。

二人はくちづけ合い。

そして。

指を互いの背面に這わせ、互いのドレスの中をまさぐり始めた。

その頃、地上。

警備責任者たるニグンは、夜間外出者に気づいた。

だが、その人物が先刻の少女と知れば、軽く舌打ちし。

夜間も止まらぬ、アンデッドらによる要塞化指揮を続ける。

歓迎できぬ事態ながら、主の判断を仰ぐと言われたのだ。

自由行動を許された同僚の指針である以上……ニグンに、妨げる権限はない。

もつとも、後を追って来た、少女の仲間らはしつかりと帰らせた。

黒い城塞の門前に、小柄な影がそつと駆け寄る。

門の前では、クレマンティーヌが棒を振るい、己の力を確認していた。

「ふんふんつと♪ ホントに来たんだー?」

にんまりと笑って、上機嫌で来客を迎える。

来客——ニニヤは必死の形相。

いつものおとなしそうな魔法詠唱者マジックキャスターではない。

力に飢えた、一人の復讐者。

「ほ、本当に、わたしに力を与えてくれるんですかっ!」

夜、他の村人の目がない時に叶える……と言われ、抜け出してきたのだ。

「んー、本当かどうか、あたしにはわかんないな。そこはモモンガ様次第だしー? けーどー、ニニヤちゃんの祈りが届けば、優しいモモンガ様は、きーつと力を貸してくれるんじゃないかなー♪」

「……………」

ニニヤは、覚悟を決める。

夜に抜け出すだけがリスクではあるまい。

最初から理解していた。

クレマンティーヌは、城塞へ入るよう、そそのかしているのだ。

神官エンリが、決して入ってはいけないと言った場所。

最大の禁忌だと言った場所に。

(女神の怒りを買えば、わたしは死ぬか……死ぬより酷い末路を迎えるんだよね……ひよつとしたら、みんなも巻き込まれるかも。でも、それでも。この、力があれば……姉さんを……あいつらを……)

目に見えぬ憎炎が、小さな体から噴き出していた。

震えながら、真剣に祈り。

憎悪の実行を神に頼もうとしているニニヤ。

その姿に、クレマンティーヌは舌なめずりする。

生前も好きだったが、首無し騎士デユラハンになった今はもつと、好きになった。見ているだけでも、ぞくぞくと愉悦を感じてしまう。ドス黒い、死んだらいいアンデッドになりそうな……歪んだ強い憎悪。

(いいねー、いいねー♪ モモンガちゃんの邪魔したら、アルベドが怖いけどさー。この子が勝手に行く分にはいいよねー？ 邪魔じゃないかって、助けてーっってお願いなら、モモンガちゃんは無下にできないでしょー♪)

ニニヤの願いが叶えられれば、楽しい殺戮の始まり。

断られれば、絶望するニニヤが見れる。

アンデッドにされて、同僚になるかもしれない。

ついでに、城塞内で絡み合ってる二人の邪魔もできる。

どう転んでも、クレマンティーヌは得しかないのだ。

(そーれーにー♪ モモンガちゃん、王国貴族は好きじゃないよねー♪ この村が税金断るなら、アイツら絶対身の程知らずに噛み付いて来るよー。こっちから踏み潰す名分ができたほーが、嬉しいよねー♪ つーまーり、ニニヤちゃんはともかく、あたしが怒られる可能性は、ほーぼゼロ。完璧なけーかくだよねー！ アンデッドになって、頭まよくなっちゃったかなー？ 取れちゃったけどさー……おつと、肝心の二人は城塞のどこでネチョってるのかなー♪)

城塞の門に向かつて歩き始めたニニヤを見て。

とりあえず向かうべき場所くらい、ニニヤにも教えてやろうと。

クレマンティーヌは主の居場所を探る。

アンデッドになってから、モモンガの居場所だけは、何となく感じ取れるのだ……が。

(あれ?)

モモンガは頭上から今まさに、ここに降りて……。

「え?」

ニニヤとクレマンティーンが、ほぼ同時に間の抜けた声をあげた。夜空から、黒い翼を持つ女が二人、共に舞い降りたのだ。

ふわりと空気を孕んだドレスが押さええられ、優雅に降りたつ。

この世ならぬ色香を漂わせ、月光に照らされる姿は、まさに女神。

白いドレスの女神と、黒いドレスの女神が、互いを抱きしめ合う。

周囲には甘い芳香が漂い、世界すら変わったように思えるほど。

その様子は、どんな神殿や神話よりも神聖で。

神すら呪うしかなかったニニヤに、信仰の念を目覚めさせた。

「……つと、危ないところだったな。空中でするなら意識を要しないアイテムが必要か」

感動するニニヤに、女神の眩きは聞き取れなかった。

だが、感覚も鋭くなったクレマンティーンは、しっかり聞いており。

かつ、この甘い香りが二人の淫臭だと……知りたくもないのに知っていた。

(こ、こいつら空中でしたのかよ……で、二人してイツたからって落ちて来た? バカだ……真面目に計画たてるのもアホらしくなるバカだ……)

馬車でいたしている最中、急に馬車が止まり、噛み千切られて死んだ不名誉すぎる貴族の逸話を、クレマンティーンは思い出す。持っている力を考えなければ、モモンガたちは大差あるまい。もつとも、落したって平気なのかもしれないが。

他に、力の使い方がないのだろうか、呆れるばかり。

とはいえ、タイミングがタイミングだ。

「ああ……女神様……わたしの祈りに応えてくれたのですね……」  
女神のアホらしい実態を知らないニニヤは、感涙しながらひれ伏している。

「……ああ。お前の真摯なる祈りが、私に届いたのだ」  
モモンガが重々しく言いつつ。

(おい、なんだこいつは)

チラチラとクレマンティーヌに視線を送ってくる。

祈りなど知らない。

というか、漆黒の剣やンファイレアの存在自体知らない。

アルベドはと言えば、ニニヤが女性と見て、警戒の視線を向けている。

(あ、これ、あたしが説明しないといけないのかなー?)

クレマンティーヌは計画の崩壊を感じた。

実質、己が直訴するとなれば……アルベドの怒りを買ってしまう。

その場に、微妙な空気が流れるが。

「ど、どうか！ お願いです！ 王国貴族どもに鉄槌を！ そして、わたしの姉を救ってください！」

ニニヤが己の願いを叫んだ。

クレマンティーヌはほつとしつつも、モモンガの背後に控える。当人から聞いてください、自分も詳しくは知りませんとの意思表示だ。二人が互いしか眼中にないバカツプルと知るがゆえの機微。

そう。城塞の中での、いちやつきつぷりを知るがゆえ、クレマンティーヌは最も二人を理解していた。

実際、着陸してから未だに二人はまったく離れておらず。アルベドに至っては、モモンガの脚に己の股間を擦り付けている。

そしてモモンガは、アルベドに恰好つけるためだけに。

女神らしく振舞うのだ。

「お前の物語を私に語るがいい。興を覚えれば、助けよう。くだらぬ話ならば、罰しよう……ああ、待て」

冷たく言い。

何か思い出したように、ニニヤの言葉を止める。

「サイレントマジック〈魔法無詠唱化〉メッセージ〈伝言〉 我が忠実なる僕、ニグンよ。来い。お前も立ち合うのだ」

ぼそりと、ニグンにはとうてい届かぬ声で言う。

(こ、こいつ恰好つけるためだけに無詠唱化した……!? そっかー、空でやってたのも、いいムードっていうよりも、そうした方がかつこ



よさそうだから、かー。で、さつき着地でちよつと焦ったのも、コケたり叩きつけられるとかっこ悪いから……はー……なるほどねー

呆れつつも、モモンガを分析するクレマンティヌ。

行動原理を知っておけば、生存率は高まる。特にアルベドの怒りを避けるためには、モモンガに守ってもらえるよう立ち回らなければならぬ。

そんな風を考えている間に、ニグンも来て。

エンリを除く首脳部(?)が、ニニヤの事情を聞くのだった。

14：さつすがく ○○様は話がわかるッ

「……お前の物語はそれで終わりか」

「そう、です」

貴族に見初められた姉が連れ去られたこと。

すぐに飽きられた姉が、売り払われたこと。

今も奴隷以下の扱いを受けているだろうこと。

ニニヤは私情を抑え、可能な限り客観的に、全て語った。

「ニグン、クレマンティヌ。どう考える」

モモンガには、話の客観性がわからない。

誇張した騙りかもしれないし。

貴族と対立させたいだけかもしれない。

「真偽はともかく、王国ではよくある話ですな」

「売られた先の扱いもだいたいわかるけど、聞かない方がいいよー」

二人とも、頭ごなしの否定はしない。

十分にありえる事情と言うことだ。

「お前たちも王国貴族は腐りきっていると、言っていたな。エンリヤ村長も肯定していた」

曖昧な情報について再定義すべく、二人に尋ねる。

「ここは王の直轄領だから、まだマシだよー。酷いトコじゃ、平民は貴族の家畜以下だからねー。気に入らないから殺すとか、気に入ったから手籠めにするとか、小遣いほしいから奴隷として売り飛ばすとかー。そんなのフツーだよー？ 税も八割くらい？ 酷いトコは九割いってるんじゃないかなー。若い男は兵士に連れてかれるし。食うに困って盗賊団してたりで、地域一帯が治安最悪だよー？」

「私としては、そこまでされて反乱を起こさぬ民にも、問題があると思えますが」

二人の補足は、モモンガには衝撃的だった。

リアルにおける、支配層以上の酷さである。

過労死、事故死はありふれていたし。

セクハラもパワハラも当然で。

治安だつて悪かったが。  
ここまで酷くなかった。

餓死する人間はごく一部だし、少なくとも表向き露骨な性暴力はなく。男女雇用機会は均等で。ローンや保障支払いはあれど、せいぜい六割。なんだかんだで、ゲームだつて遊べた。

しかし、カルネ村には娯楽もなく、エンリも生きるためずっと働き続けているという。

「アルベド。お前はどうか考える」

「虫にも劣る愚かな生物かと。ただ……」

アルベドが珍しく口ごもった。

「どうした。言ってみよ」

「……我々は、連中が己の所有物と考える村を接收しました。おそろく、身の程知らずにモモンガ様に兵を向けるでしょう」

「何の問題がある?」

「姿を見せれば、奴らはモモンガ様に不快を味わわせるかと」

「ん?」

よくわからず、モモンガは首をかしげた。

「……その者の姉は、容姿を見初められて連れ去られたのです。連中はおそらく、見染めた者はすべて己の自由にできるとでも考えているのでしょう」

「はあ?」

呆氣にとられる。

「何か? 私に——アルベドの体に欲情して、我がものにせんとしてくるってことか?」

「間違いなく」

「はあああ?」

ぶわっ、とモモンガの全身から黒いオーラがあふれ出た。

周囲の草が一瞬で塵と化す。

ニグンが慌てて、ニニヤを下がらせる。

即死耐性を持つアルベドや、アンデッドの二人でなければ。

全ての命をかき消すへ絶望のオーラV。

「ひ……！」

ニニヤは震えて齒も噛み合わず、ニグンに押しつけ転がされたまま失禁してしまう。

「……ああ、すまないな。怒りを抑えきれなかった」

そんなニニヤに、慌ててオーラを消すモモンガ。

それでも、肩で息をするしかない。

ニグンとクレマンティーヌも、アンデッドなのに冷や汗をかいていた。

「御身に不快な進言をし、申し訳ありません……私は常に、モモンガ様のものです」

アルベドが甘えるように身をすり寄せ、詫びる。

「いや。突然、面と向かって言われれば、罪なき者も殺戮していただろう。先に言ってくれたお前の行いは正しい」

アルベドの髪を、モモンガが撫で。抱き寄せる。

二人が周囲を忘れつつあるなど気づき、クレマンティーヌが注意を向けさせた。

いちやつき始めて最後までいたされると、状況説明が面倒くさい。

朝になって、村人が起き始めても続けていそうでもある。

「ま、まあ、アイツら頭おかしいからねー！ 二人を見たら、ぜったいろくでもないこと言いますよー。あたしも、内通してるクソ貴族に伝言役で来ただけで、当たり前前みたいにやられたからさ」

「は？ そいつ殺さなかったのか？」

モモンガは素で聞いてしまう。

一応程度についた、彼女のキャラクター的に……いや、彼女じゃなくてもそんな奴は普通殺すか訴えるかするのじゃないかと考えたのだが。

「まー、任務だったし。内通者を消しちゃうわけにもねー。法国の使いで来たあたしを平気で犯して、高貴な血を受け入れて光栄に思えとか言うしー。最中に平気で殴ってくるしー。王国貴族の大半は、ほんど、そんな連中ばっかだよー」

「お、お前も苦労してるんだな……」

モモンガは、少し優しくしようと思った。  
同時に、怒りも忘れる。

アルベドの舌打ちは、他の全員が聞かなかったことにした。  
「連中の大半が、横柄と愚昧が服を着たような輩ですから……」

ニグンも溜息混じりに言う。

「そいつらは、何かすごい戦闘力や特殊能力、アイテムなどを持っているのか？」

「財力と権力が少しある程度ですな。いつでも暗殺で始末できますし」

「……………バカなのか？」

リアル管理職でも、そんなのがいたら即、社会的抹殺される。

「……………アルベド。思った以上にこの世界は汚いな」

「あくまで住人の問題と考えます。モモンガ様に帰依したこの地に、斯様な穢れはもはやありえぬかと」

「無論です！ これほど愚かな貴族が揃った国は、他にありません！」  
失望したように呟くモモンガを、アルベドが慰め。

ニグンは他の国についてフォローする。

失望のあまり、世界を滅ぼすとなつては大ごと過ぎる。王国貴族を基準に、この世界を判断されたくもない。

「はあ……………掃除が、必要か。ニニヤと言ったな。お前の望み、全てではないが……………叶えてやろう」

「ありがとうございます！」

未だ残る恐怖に震えていたニニヤだが……………名前を呼ばれ、慌ててひれ伏した。

「とはいえ、移動は面倒。人員を割くにもな……………クレマンティヌよ」  
先の逸話を思い、命じる。

「お前を犯した貴族をとりあえず、好きに始末しろ。ニニヤの姉をさらった貴族もな。死では慈悲深いと思つたなら、好きに地獄に落とせ。そいつらから同類や奴隷販売先を探り、王国内を適当に掃除してこい」

「えー♪ いーの？ 王国貴族殺戮祭りスタートしちゃうよー？」

「下衆なら、貴族に限らず、好きに始末しろ。邪魔する輩も、私に不快を与えそうなら好きにしてこい——〈魔法二重化〉  
クリエイト・グレートター・アイテム

〈上位道具創造〉」  
クレマンティーンを、黒い軽装鎧が包み。

濃紺のマントが羽織られる。

「武器は使い慣れた品がいいだろう。朝に、エンリから返してもらえ」  
「お？ おおお？ これ、めっちゃすごい鎧じゃない？」

「たいした鎧ではない。精神耐性、神聖耐性、敏捷上昇、幸運上昇を与える程度だ。マントは一日に3回、〈透明化〉と〈静寂〉  
インサイジビリティを発動できる」

「……普通に国宝級じゃん」

漆黒聖典にいた頃でも、装備したことがない水準の装備だ。

というか、王国貴族を殺すには過剰武装ではないかとも思える。

70レベル級アンデッドを刺客に使う時点で、何をいわんやであるが。

「あまり遊ばず、迅速にやってこい。始末はともかく、関係ない者は殺すな。私の名は出してもかまわん」

「へー？ じゃあ、『女神モモンガの名のもとに天罰を下す』とかメッセージ残して来ちゃったりして？」

「ほう……いいな。血文字で大きく書いてやれ。無実の者は一切殺すなよ」

「子供とかに、逆恨みされちゃうんじゃないのー？」

「その時は、お前の仕事が増えるだけだ」

「いひひひ……さっすが、モモンガ様は話がわかるツ！」

歪んだ笑みを浮かべ、クレマンティーンはくるりと踊るように回る。

彼女自身が慣れつつあったより速く、鋭く。

精神を集中すれば音が消え、姿が消える。

「すっごー！ これなら、魔法への備えもろくにない王国貴族なんて、らっくしょー♪」

「魔法への備えもないのか……」

呆れ切って、怒りを覚えたことすら馬鹿馬鹿しくなる。

「……ああ、さらわれた女子供がいたら助けてやれ。死者の大魔法使いたちから〈伝言〉で定時連絡させる。保護すべき者が多ければ、私が迎えに行つてやろう」

「りよーかい♪」

クレマンティーンが即座にまた姿を現し、満面の笑みで答えた。

そして、モモンガは再び、ニニヤを見る。

「さて……ニニヤよ。私ができるのは、この程度だな。礼に思うならば、都市に戻つた後、この村について包み隠さず話すがいい。移民も歓迎だ。望むなら、貴族どもを始末する件も、好きに喧伝してかまわんぞ」

「え……帰れるんですか?」

ニニヤとしては、モモンガへの信仰に一生を捧げる覚悟だった。

「お前たちが戻らねば、ここがどのような場所か誰もわかるまい。ここに移り住みたい者がいれば、歓迎しよう。我が力の一端を知つてなお、身の程知らずにも挑むというなら……相応の見せしめをせねばならんが」

いかなる権力も気にかげず。

淡々と述べる様子に、ニニヤはこれこそ神だと確信した。

「それとニグン。王国が軍を向けて来るなら、堂々と相手してやるつもりだったが……気が変わった。お前の方で監視し、愚かな指揮官ならば先手を打って、夜襲なりで追い散らせ。兵士はなるべく傷つけるな」

「承知いたしました!」

奇襲夜襲殲滅は、元陽光聖典隊長として得意中の得意。

己の能力を買ってくれたのだと、ニグンは忠誠を新たにした。

実際は、王国と交渉するのが嫌になっただけだが……。

翌朝。

クロマルを使つていいという、ありがたい言葉を断り。

武器のみ受け取つて、クレマンティーンはカルネ村を出る。

中途半端なアンデッド化とはいえ、寝食不要、肉体疲労無効を持つ。通常の馬より遙かに早く移動できるのだ。

(そーいや、カジツちゃん忘れてたなー。勝手に来そうだけど、軽く挨拶だけしとこっか。後で知り合いつてバレるほーが、めんどくさそーだもんねー)

一時間程度で見えて来たエ・ランテル。

今のクレマンティヌは、跳躍で城壁を簡単に登れる。

マントの効果も発動すれば……白昼堂々と入り込む彼女に気づく者はいない。

夕刻、彼女がエ・ランテルを発つまでに。

評判の悪かった徴税吏と衛兵が、無惨な死体と化した。

限界まで痛めつけられ、残虐に為された殺人。

その犯行現場には――

『女神モモンガの名のもとに天罰を下す』

という血文字が、壁一面に書き残されていたという。



15：べつ別にあんたのことなんて好きじゃないんだからね!!

エ・ランテルでは「親切的な」情報屋から近隣の悪人情報をさらっと聞き出し。

都市内では数人を殺すに留めたクレマンティーヌ。彼女はそのまま、夜の間飛び出し。街道沿いに巢食っているという盗賊団だか傭兵団だかの拠点に、立ち寄ったのだが。

「はー……なるほどねー。これだけ戦闘力に差があると、刺突より斬撃の方がいいかもー?」

ステイレットで逐一突き殺すのがだんだん面倒くさくなり。

盗賊の粗雑な剣を奪い、振り回している。

「モモンガ様やアルベド様はこれのもう一段上かー。そりゃー、相手するのもめんどくさいよねー」

クレマンティーヌを囲む盗賊たちは、何かわめいているが。

虫の羽音か、鳴き声かといった風情。

むしろ体が大きい分、虫より簡単に殺せる。

なんといつても、ふざけ半分で剣を持ってぐるぐる回れば、全員真つ二つになっていくのだ。

敏捷性が格段どころでなく上がっており、返り血すら一滴も受けていない。

「はー。武技とか使う必要もないなー。あーの番外席次もこんな気分だったのかねー」

筋力と敏捷性と反射神経しか、使っていない。

最初の数人は、かつてのように「殺す」攻撃をし。

派手に悲鳴をあげさせたのだが。

拠点からわらわらと出て来た盗賊を見ると、逐一「殺す」のが面倒で。

身体能力任せの「伐採」に変えた。

ついでに武器も、盗賊から奪った剣に持ち替えている。

「オーガとかが、たいした武器使わないのもわかるなー」

圧倒的な筋力があれば、たいした武器は必要ないのだ。

盗賊が持っていた、数打ちで手入れもろくにされていない剣だが、それで十分だった。

やや薄めの金属の塊を高速でぶつければ、なまくらだろうが、斬れるのだ。

ついでに言えば、今のクレマンティーヌは、つまんで引っ張るだけで人間の肉をたやすくちぎれる。エ・ランテルで試してみたから間違いない。

「なーんかいろいろ変な能力も手に入れたっぽいけど……使う意味あるのかなー……っと、減ってきちゃったねー♪」

考え事をしつつ適当に剣を振り回して。

ふと我に返ると、敵が随分と減っていた。

残るは五人。

まだ十人近くいるつもりだったが。

「奥に逃げてるかー。はー、裏口も用意してるかなー？」

動死体ゾンビの基本スキル〈暗視〉、首無し騎士デューラハンのスキル〈生命感知〉と、ケンセイのスキル〈殺気感知〉〈気配察知〉により、盗賊たちの動きは面白いほど把握できる。

「とりあえず……後で遊んだげるねー♪ 〈疾風走破〉」

剣をもう一本拾い……両手に持って、加速疾走。

速度は以前の比ではない。

すれ違いざまに、残る連中全員を、脚のみ切断できてしまう。

「うーん、拷問も楽しめなくなってるないか、心配だなー♪ よーつく味わって確認しなきゃねー♪」

背後に脚を斬られた連中の悲鳴を聞きつつ。

にやにやと笑いながら、死を撒く剣団の拠点たる洞窟に飛び込もう……として。

「おっと、あぶな 〈疾風走破〉っと」

落とし穴に落ちかけて、慌てて加速。

蓋が落ちる前に渡り切る。

「そりや罨はわっかんないかー。油断しちやいけないねー」  
言いつつも、そのまま進んでいく

彼女のスキルに、罨対策はない……が、反射神経でたいてい何とか  
なるとわかった。

しかもケンセイのパッシヴスキル〈明鏡止水〉——集中力を高める  
効果により、武技の使用可能回数が爆発的に増えている。肉体負担も  
ほぼない。

（感覚もビンカンになってるもんねー。紐とかワイヤーに引つかかっ  
ても……発動前に回避はじゅーぶん♪）

上機嫌に鼻歌混じりで進んで行く。  
意外と深い。

入り込めば即座に囲んで来るかと思っただが。  
奥まで誘い込む気だろうか。

（めんどくさいな……ん？）

一人の、剣士らしき男が立っていた。  
用心棒と言ったところだろうか。

「おいおい、マジで女一人かよ」  
南方風の剣——刀を構えている。

以前のクレマンティーヌなら、わりと本気になったであろう相手  
だ。

それなりに武技も使えるだろう。  
王国でそんな人物は限られる……首をかしげて訊ねてみた。

「んー？　もしかして、ブレイン・アングラウス？」  
「そうだとしたら？」

にやりと挑発的に、男が返してくる。  
妙に恰好つけた態度。

その様子にクレマンティーヌは……なんとも言えない脱力感を味  
わう。

随所に、過去の己を重ねてしまうのだ。

（あー、格下相手によくやったなー、こういうの。こいつも、あたしよ  
り上とか思ってるんだろなー）

羞恥、後悔、憐憫、安堵。

いろんな感情が湧き出して、嗜虐的な気分が萎えてしまう。

「……はあ。これは恥ずかしい。あー……そう考えると、モモンガ様に直接挑んだりしなくてよかったー。これは恥ずかしいもんねー。やつちやつてたら黒歴史確定だよー……たぶん、直接だとやつちやつたろうし」

「なんだ？ 俺に剣で挑むのを恥じるほど、あんたが弱くは思えねえがな」

ブレインとしては何を言われているかわからず、断片的な言葉から適当に察したのみだが。

どこまでも己が上と信じるがゆえに出る言葉。

たまらず、クレマンティーヌは嘔き出した。

「ちよ、剣でとか言つといて、その殺し方は卑怯wwwwww」

「なんだお前……いかれてんのか？」

既に抜刀して構えている目の前で、無防備に笑い転げる相手が……ブレインには理解できない。

このまま斬ってやろうかとも思うが。武器を構えもしない、それなりの強敵たりうるであろう相手を、一方的に斬る気にはなれなかった。

「はー、いやー……元同格のよしみってことで見逃したげるからさー、このまま外に出てってくれない？ 見てていたたまれないっていうか、笑い死にしそー」

クレマンティーヌはけらけら笑いつつ、涙を拭って。

ろくに武器を構えず、馴れ馴れしく……ブレインの肩をぽんと叩いた。

そして、そのまま彼の横を歩き、通り過ぎて行こうとする。

「な！ 見逃すだどー！ どういう意味だ！」

ガゼフに敗れて以来、己の剣を磨き続けた天才剣士ブレイン。

彼は確かに剣について、天賦の才能があり。

敗北以来は努力も欠かさず、魔法やアイテムの力も借り、最高峰の力を得ていた。

だが、それでも。

一度の敗北につまづき続けてしまうように。

ブレインはプライドが高く、視野が狭かった。だから今も。

刀を構えた己の横を、あつさり通り過ぎた女。

ごく自然に肩を叩いた女に。

違和感を抱くより前に――。

「こーゆー意味だつてば」

振り向きざまに斬りつけた刀を、あつさり弾かれて。

懐に入られ。

そして。

気がつけば、洞窟の壁に背中をぶつけていた。

「は……あ？」

何が起きたかわからず、呆けた声しかでない。

「あたしみたいになりたかつたら、カルネ村に行くといいよー♪ 帰りにいたら、殺しちゃうからねー」

ひらひらと手を振って奥に向かう女の声と……後ろ姿が酷く遠い。

「10メートル以上あるだろう。」

さつさと奥に進んだのだろうか。

刀はまだブレインの手の中にある。

背中をしたたかに打ち付けたが、後頭部は無事。

背後から挟み撃ちにしてやれば、どれだけ腕の立つ剣士だろうと勝てるはずがない。

「待て、俺はま……だ……？？」

言いかけて、気がついた。

女が去り行く足元には、己が戦闘態勢前の強化に使ったポーションの壘が落ちていた。

つまり、女がいた場所が……ブレインが刀を構えていた場所。

「なんだと……」

明らかに体格で勝るブレインが、10メートル以上を吹き飛ばされ。

背中を壁にぶつけたのだ。

およそ人間技ではない。

剣で斬られた様子もない以上、素手だろう。

「剣を持ったのに……修道僧モンクだったのか？」

ふと首を横に向ければ、外が見える。

ここはもう、拠点の出口なのだ。

女——クレマンティーヌの姿はもう見えない。

出口の外は血の海で……一部は未だに呻き声をあげていた。

バラバラに切り刻まれて。

「……いや……違う……やはり剣士……単に手加減されたの、か……？」

呆然と呟く。

確かに鍛えられていて、隙もなかったが。

これほどの力量差がありえるのかと、自問自答する。

そしてようやく、クレマンティーヌに接近され、肩を叩かれても反応できなかったのだと……気づいた。

「は……はは……」

乾いた笑いしかでない。

格が違う。

なるほど。

(恰好つけて戦うつもりが、あの女には粹がったガキの戯言に見えたわけか……滑稽だったろうな)

ほどなく、奥から女の笑う声と。

見知った連中の悲鳴が聞こえ始めた。

圧倒的な強者。

殺しを楽しんでいる気配。

「弟子入りさせてくれるタイプじゃなさそうだし……お言葉に従う、か」

ブレインは、空ろな声で己に言い聞かせ。

ふらふらと立ち上がると。

そのまま、”死を撒く剣団”の拠点を離れた。

呻きながら助けを求める者たちにも、目を向けず。

「カルネ村……だったか……」

ただ、眩きだけを残して。

一方その頃、エ・ランテル郊外。

ちやうど共同墓地に面した外壁の外側には。

「よしよし、これで全てか！ 夜明け前に、スケリトル・ドラゴン骨の竜を飛び立たせておいて正解であつたわ！」

カジットとその弟子、そして二百近いアンデッド。

スケリトル・ドラゴン巨大な骨の竜がいた。

「夜明け前に街道を迂回し、カルネ村に向かう！ クレマンティーヌに力を与えたという女神に謁見するのだ！」

彼自身も、死の宝珠も。

ズーラーノーン盟主を上回るであろう存在に胸を高鳴らせ。

日の昇るより早く、カルネ村を目指し始めた。

カジットは骨スケリトル・ドラゴンの竜に騎乗して上空を。

弟子らがアンデッドの群れを率いて地上を。

エ・ランテルを滅ぼすに十分な数のアンデッドが、人知れず都市を去った。

そして、夜明け近く。

ちやうど「お楽しみ」も終わりつつある頃。

クレマンティーヌに、主の声が聞こえた。

「あ、連絡つて〈メッセージ伝言〉なんだね……いや、別に問題ないけど。今

は明らかに外道な盗賊団を皆殺しにしたトコだよー♪ 捕まってた

女の子がいるけど、ちよーつと社会復帰は厳しいかもねー？ え？

この子ら連れて近隣都市に戻ると、貴族ぶつころすのが遅れちゃうよー？」

そう伝えた瞬間。

クレマンティーヌの目の前に、〈ゲート転移門〉でモモンガとアルベドが姿を現す。

足元の惨状を見ると、翼をはためかせふわりと浮かんだ。血だまりを踏んで、足を汚したくないのだ。

「やれやれ、気軽に呼んでくれるな。先が思いやられるぞ」

「このような汚らわしい場所にモモンガ様を……」

盗賊らの性処理用に囚われていた女たち。

共有財産として、最低限の清潔さは保たれていたが。

いずれも心は砕け、体は雄の臭気をこびりつかせている。

「つつても、さすがにあたし一人でこの子らを助けてらんないでしよー」

「魔法の使える協力者が必要か……」

「一応、エ・ランテルにいた魔法の使えるのを、そつちに行くよう誘つていたし……そこそこ名のある剣士にも声はかけたんだけどねー」

「手駒が増えるなら悪くないか……アルベド、とりあえずこの娘らはカルネ村へ連れ帰るぞ」

「承知いたしました」

「では、クレマンティーヌ初仕事ご苦労だったな。また明日の深夜に連絡する」

モモンガがぼん、と金髪の頭に手を置き撫でながら、再び〈転移門〉を起動し。

怯える女らを、アルベドが放り込むと。

モモンガもまた、アルベドの肩を抱いて、仲睦まじく消えていった。

クレマンティーヌはそんな様子をなぜか呆けたように見送ってしまふ。

二人が消え、囚われていた女らも消えた後には。

さんざん玩具にした連中の死にきれないうめき声だけで。

「……クソ……ああ、クソッ」

ばしやつと、まだかろうじて生きていた頭目の頭を蹴り、破裂させた。

頭に残る、モモンガの手の感触が消えない。

（なんで、このクレマンティーヌ様があんなので喜んでんだよ！ クソ！ あの女、〈魅了〉<sup>チャーム</sup>かけたんじゃねーだろな……っ！）



苛々する。

また会いたい

また撫でられたい。

そう思ってしまうのが、悔しい。

「クソがあー！ とにかく任務をこなしやいーんだろ！ 貴族連中をむごつたらしく殺してやるよ、クソツ！」

何に苛立っているかもわからないまま。

じっとしているのが酷く苦痛で。

クレマンティーヌは駆けだした。

この盗賊どもの拠点の外へ。

街道へ。

標的たる貴族のいるところへ。

早朝の冷たい空気が、アンデッドとなったクレマンティーヌの体を冷やし。

感覚を冴えさせていくが。

(あああああ、チクシヨオオオオオオオオオオ!!)

髪に残った、モモンガの手の感触は、決して消えなかった。

16：なんとという冷静で的確な判断力なんだ!!

黒い城塞の最上階に、寝室はある。

外からは見えず、また破れない、特殊な大窓。

城主のために築かれた、天蓋付きの大型寝台。

その柔らかな布団の中、二人は多くの時間を過ごしていた。

一糸まとわず、互いを黒い翼で抱き寄せながら。

「あの女らはエンリに任せたが……アルベドよ、どう思う?」

「モモンガ様が自ら触れるには穢れた雌どもでした。あの薄汚れた娘に任せたこと、良き判断かと」

身をすり寄せ合い、時に唇を這わせながらの会話。

指も飽きずに、互いの髪や肌を撫で続ける。

彼女らとて、常に粘膜を擦り合わせているわけではない。

クレマンティーンを送り出した後は、肌の方が多かった。

密着距離に変わりはないのだが。

「そうではない。この世界は美しい……私のいたりアルとは違う。だが、住人はそうではない。私のいた世界以上に過酷で、理不尽に満ちている」

「それは……」

モモンガより知性に勝り、残虐なアルベドには。文明の進歩と関係のない、人間社会なら常につきまとう問題とわかっているのだが。

主の言葉に、義憤とも言える感情がにじんでいけば、返す言葉を見つけられない。主はかつて搾取される側だったのだ。この世界には……その自然と同様、人間社会にも美しくあつて欲しいと考えているのだろう。

「汚されたあの女ら。任務のため犯されたクレマンティーン。姉を連れ去られたニニヤ。略奪を受けたこの村——そして、ゲームでは異形種として狩られ、リアルでは弱者として搾取されてきた私。彼女らも私も、なぜかくも理不尽に奪われねばならんのだ? 弱者だからか?」

「……はい。しかし、御身は力を得たがゆえ、今は奪う側に立たれまし

た」

安い慰めは求めていないと、わかる。

だから、アルベドは敢えて真実で答えた。

「ならばアルベドよ、私が力を失っていれば……あの草原で、弱い私からお前も奪っていたのか？ 私が強いから、お前は私に従うのか？」

「そのような！ 力がどうであろうとも、私はモモンガ様のシモベです！」

忠義を疑われることは、NPCにとって死より恐ろしい。

アルベドは狼狽し、ひしとしがみついて訴える。

モモンガは布団の中、身を転がして……彼女を組み敷いた。

布団がめくれ。

今はモモンガ自身と同じ、黒い髪、白い肌、艶やかで均整の取れた肢体が露になる。

そんな彼女の体……鏡写しの肉体を、じつと、モモンガは見つめた。

「アルベドよ。お前は美しい。そして賢く、強い」

「御方にそのように造っていただけただけこそ、です」

主の言葉から、不安定な精神状態に気づき。

いたわるように、そつと囁くに留める。

傷つけてしまわぬよう、そつと。

「お前は、私の記憶から——かつての骸骨でない、リアルにおける私も見ただろう」

「……はい」

「お前の言う、この世界の脆弱で薄汚れた連中と……何も変わらなかつたろう？」

「……」

答えられない。

「そんな私が、お前から理不尽に体を奪い……お前の力まで、我がものとした。お前は理不尽を感じないのか？」

「モモンガ様に我が身を捧げる以上の幸福などありません！」

その返答ではいけないと、内心わかっているのに。NPCとして、そう答えるしかない。



ここまで言った以上、アルベドは本性を隠さない。  
そのまま、唇で返答を封じ。

めんどくさい状態に陥ったモモンガが、難しいことを考えなくなるよう、せねばならない。

これは主の精神衛生を思いやる、シモベとして当然の配慮であり。  
(ええー・私の欲望とはまったく関係ありませんし！ 罰を求めるモモンガ様が自虐に走らぬよう、私が増減した罰をしつかりと与えるまです！ ああ！ 心苦しい！ でもしなきゃ！)

己の愛情が、疑問の余地などありえぬほど深いのだと、身を以て思い知ってもらわねばならない。

至高の御方自らねだった以上、アルベドは全身全霊手加減抜きで応え、しゃぶり尽くさせてもらうのだ。

アルベドには、都合よく御方の言葉を解釈する知性がある。  
すべては有言実行。

不眠不休で主を貪るなど……褒美以外の何であろう！  
そして、そのまま幾日かが過ぎた。

王都のアダマント級冒険者パーティー、蒼の薔薇。

本来なら、王都を拠点とする彼女らが、エ・ランテルから帝国よりの開拓村——カルネ村に向かって街道を進んでいた。

カルネ村は事実上、街道の突き当り。トブの大森林沿いに築かれた開拓村の、最も奥まった場所だと言う。

辺境も辺境、ほとんど帝国領に近い。

ある意味では存在自体が、帝国への挑発とも言えなくはないが。  
帝国とて、大森林に面したこの村を獲得しようとはすまい。

「アンデッドが多数確認できたらしいけどよ……こんなのかな場所にいんのか？」

「カツツエ平野に近いとはいえ、白昼に地上をうろつくとは思えんな」  
ガガーランとイビルアイが、緊張感なく語り合う。

横に見える大森林には、多くの亜人や魔獣も暮らすだろうが。  
街道側に押し寄せてくる様子もない。

「けど、村人の安否を確認に行った銀級パーティーは戻って来ないんでしょ？ ミスリル級冒険者は軽く確認しただけらしいし……」

リーダーであるラクユースが、首をかしげる。

「数日程度だろう？ 普通に村にいてもおかしくあるまい」

「死者の大魔法使いが複数いたつてのは気になるけどねー」

突然、要塞が築かれていた……とは、さすがに信じられない。

「鬼ボス、この先に襲われた村の跡がある」

「アンデッドはヤバイかもしれない」

斥候に出ていたティアとティナの忍者姉妹が戻ってくる。

帝国兵がこの辺りの開拓村を襲って回ったと聞いている。

そして戦士長ガゼフ……いや、女神とやらが退けたとも。

「村の遺体は葬っていないと……戦士長も、都市長も言ってたわね」

ラクユースが痛ましく聞いた話を思い出す。

だから、遺体が残っているはずなのだ。

一行は姉妹の調べた開拓村の焼け跡へと、向かった。

相当の被害者が出たのだろう。

未だに血痕や肉片があちこちに残っている。

「崩れた家を、中から持ち上げた跡」

「足跡も多数。どれもよろめいてる」

ティアとティナがあちこちを指さして示す。

間違いなく、多数のアンデッドが生まれた痕跡だ。

「魔獣っぽい足跡もあるが……おそろく骨スケリトル・ドラゴンの 竜だな」

イビルアイが、周囲をさらに調べる。

「つ……襲撃で生まれた犠牲者をアンデッドにして連れてったわけね」

「こりゃ、すげー数のアンデッドがいるのは間違いねーな」

「女神とやらが、そいつらを使って急ごしらえのバリケード……いや、砦を築いている可能性はあるか」

襲撃された村に異常なしと、ミスリル級冒険者パーティーのクララグラが報告している。事実、彼らの調査時は遺体も転がっていて、異

常などなかったのだが。蒼の薔薇は、そこまで細かな報告書に目を通していない。

城塞というのが、まず眉唾だ。

常識的に考えて、そんな巨大建造物が突然に現れるはずがない。

「他にも複数の村が襲われたのよね……」

「襲撃者はその女神サマが倒したんだろ？」

「けど、最低でも数百のアンデッドがいる」

「なるべく手前で野営し、目的地は朝方に近づいた方がいいな。高位アンデッドが複数いるなら、夜は連中が有利すぎるぞ」

村の痕跡を調べつつ、アダマントタイト級に恥じない冷静で的確な判断力を示す蒼の薔薇であった。

翌朝、蒼の薔薇は出発する。

そして、そろそろかという頃……小さな丘の向こうに偵察に出たティアとティナが、真っ青になって帰って来た。

「帰ろう」

「帰るべき」

すわ状態異常かと、〈獅子の<sup>ライオンズ・ハート</sup>ごとき心〉をかけるラクユースだが。震えながら言う、二人の言葉は変わらない。

見ない方がいいと繰り返し言われながら、丘の上に向かった一行が見たのは。

「マジで城塞じゃねーか」

「な、何あの濠……それに、あの場所だけ霧？」

のどかな平原に突如現れる、霧に包まれた漆黒の城！  
そして霧の中を飛び回るのは、明らかに死霊<sup>レイズ</sup>。

十代前半の妄想にしかありえぬ如き威容であった。

「むう、あれはまさか……ぎると拠点！」

「知っているの、イビルアイ!？」

「うむ」

——ぎると拠点

「この世界に100年に一度現れる『ぶれいやー』」。

時に彼らは集団で、巨大な建造物と共に現れると言う。

これを彼らは「ぎると拠点」と呼び、自らの本拠地と扱う。これら「ぎると拠点」は、多数の従属神に守られる無敵の要塞であり、また世界に大きな影響をもたらす起点ともなる。彼の八欲王もまた、強力無比の要塞あらばこそ、絶大な力を振るつたのだ。

浮遊都市や海底神殿もまた、かつて「ぎると拠点」であつた事実あまりにも有名である。

アークランド評議国刊『ぷれいやー発見伝』より

「……なお、過去の『ぷれいやー』とは、六大神や八欲王。それに十三英雄のリーダーだ」

「マジで神じゃねーか」

「帰ろう」

「偵察はした。生きて報告するのが大事」

「その方がいいかもしれん。どうする、ラキユース……ラキユース？」

ラキユースは呆然と、その城を見ていた。

彼女が今まで何度も思い描いて来たと同じ、霧に包まれた黒い城を。

「これは……魔王城！」

彼女の中の中二回路が、熱く稼働を始めたのだ。

「なんだ魔王城ってのは。その魔剣キリネイラムと関係あるのか？」

「よくぞ聞いてくれたわ！ そう、魔王城とは——」

だが、説明が最後まで続くことはなく。

「もう少し泳がしておいてもよかつたが……我らが神を魔王呼ばわりは許せんな」

空間が揺らぎ、黒い穴が開く。

一人の男——いや、アンデッドを先頭に、一団が現れた。

戦闘態勢を取ろうとする蒼の薔薇だが。

すぐに絶望を知ることとなる。

男に続いて現れた、十体を超える死者の大魔法使いと。

見たこともない巨大な天使。

さらに。



「はい。偉大なるモモンガ様をそのように呼ばれては、黙っていられません」

見た目からして、邪悪の化身の如き女神官。

さらに彼女を守るかの如く立つ、巨体のアンデッド。

「な……死の騎士だと！」<sup>デス・ナイト</sup>

「あの男、前に戦った法国の隊長じゃねーか！」

イビルアイとガガーランが驚愕する中。

邪悪なる女神官エンリは、高々と宣言した。

「貴方たちが偉大なるモモンガ様を愚弄する、王国の走狗ならば。その耳目を穢す前に、ここで散っていただきます」

「逃げられるとは思わんでくれたまえ」

背後には、いつの間にか多数の眼球が集まった肉塊の如きアンデッドが浮かび。

上位死霊<sup>ハイレイブス</sup>が包囲している。

巨大な天使は上に浮かび、メイスを振り下ろさんばかりの姿勢だ。

「おとなしく縛りについていただければ、怪我はしませんよ？ 彼らは既にモモンガ様の祝福を得ています。ただのアンデッドとは思わぬことです」

メイスからおぞましいオーラを立ち昇らせつつ、女神官が微笑む。垢ぬけない村娘のような笑みは、人の命を雑草程度にしか見ていない。

「くっ……仲間には手を出さないでー」

取り囲む無数のアンデッドの前に抵抗は無意味、と。

ラキユースが魔剣を手放し、浮遊する剣群も地に落とす。

ティア、ティナ、ガガーラン……ついにイビルアイも悔しげに、従った。

かつての法国の聖典隊長が、恐るべき力を得ているとわかる。

巨漢のアンデッドや、肉塊のアンデッド、巨大天使も……イビルアイなら一対一で何とかというところ。

しかも、これらを率いる女神官の実力は、まったく底が知れない。「ふふ、皆さんが頭のいい方で助かりました。この丘は、モモンガ様の

城からも見えていますからね」

「偉大なるモモンガ様に、血生臭く汚れた風景を見せるわけにはいきませんからね！」

二人——エンリとニグンは上機嫌で笑いつつ。

アンデッドたちに、蒼の薔薇の武器を回収させる。

戦いの結果より、ただ「丘を汚す」ことを恐れていた二人に、蒼の薔薇は心底恐怖を覚えた。

「では、さっさと戻りましょう。ニグンさん、お願いします。皆さんも

——逃げようなどと考えず、ついて来てくださいいね？」

ニグンが見たこともない魔法——〈転移門<sup>ゲート</sup>〉を唱え。

エンリが快活に笑い、蒼の薔薇に話しかけるが。

いつも不敵な彼女らに返答はなく。

「だから帰ろうって言ったのに……」

誰にともなく呟く、ティアの声だけが響いたのだった。

## 17：殺して解して並べて揃えて晒してやんよ

国境に近い、ある貴族の屋敷。

法国と内通しており、またクレマンティーヌ他、スレイン法国の使者にも無体を働いて来た当主は……今、無惨な姿を晒していた。いや、彼だけではない。

夫が捕らえて来る娘らを虐待した夫人。

かつて現当主と変わらぬ行いを重ねた先代夫婦。

“おさがり”を弄んだ若き後継者ら。

さらに執事、使用人頭、庭師、兵士長。

ずらり並んだ無惨な肉塊。

克明に描写すれば、読者の気分も損なうであろう有様だ。

犠牲者複数から聞き出した情報をもとに拷問すると、芋づる式に処罰対象が膨れ上がったのだ。

「けつきよく、一族使用人ほぼ全員になっちゃったねー。人間って、権力に近づくとこーなっちゃうのかなー？」

クレマンティーヌは深々と溜息をついた。

ここは屋敷のロビーであり。

扉の外には、悲鳴と絶叫に駆け付けた衛兵たちが囲んでいる。

もつとも、踏み込む勇氣のある者は、既にいない。最初に踏み込んだ数人は、速やかに絶命した。

隣の領主に早馬は送られたが、来るのは早くとも明日の午後だろう。

「はー。拷問大好きなあたしでも、さすがに飽きちゃうねー。衛兵ちゃんたちは悪いことしてないかなー？」

ゆらりと振り向き、衛兵らをねめつける。

「へ、兵士長以外は、村から徴収された人たちですから……」

「そーなんだー？ よそ者を襲ったりしてないー？ だいじょうぶー？」

犠牲者だった女の一人が、おどおどと保証する。

傭兵を雇う金も惜しんだ貴族は、代々の兵士長以外は徴兵した兵は

かりだ。一年程度の任期持ち回りで使われる彼らは、じきに平民に戻る。『悪さ』をする気にもなれない。

屋敷には貴族の『お気に入り』——連れ込まれた平民の女が、五人ばかり囚われていた。

彼女らは今、貴族たちの無惨な姿に歪んだ笑みを浮かべている。

だが、傷つけられずこれを見ているのは、犠牲者たちだけでない。罪を犯していなかったまだ若い令嬢、そして幼い後継者らがいた。

「どーかなー？ 平民でもいじめると、いじめ返されちゃうんだよー」にまーつと、少女と子供の顔を覗き込む。

既に令嬢は何度か失神を繰り返した後で、絶望で目が濁り。

最初こそクレマンティーヌに抗った子供たちも、すっかり怯えきり。

クレマンティーヌの視線が向くと、びくりと身を震わせる。

彼らが齒向かう勇氣も残っていないと確認し、窓の方を眺めた。

外はそろそろ、明るくなり始めている。

「んー、そろそろ夜も明けちゃうねー」

（困ったなあ、モモンガちゃんから全然連絡こないんだけど。まーた、やってるのかなー）

クレマンティーヌは二人の生活を断片的にでも知る身。

他に連絡をよこさない理由もあるまい。

モモンガがアルベドに夢中だとはよくわかっている。

なぜか、モモンガの情事を想像すると、苛立ちと疼きを感じるが

……クレマンティーヌはそれを認めない。

気晴らしに、切り落としてあつた当主の生殖器を蹴り飛ばし、壁の汚れに変えた。

「さて、こいつらどうしようっかねー」

貴族たちは短時間で効果的に体を破壊され、かろうじて生きている状態。

絶命すれば、過度の破壊ゆえ生命力があらうとも蘇生は困難。

彼らが平民なら、このまま五体不満足で生き恥を晒させるのだが。腐っても貴族、しかも法国と関係がある。高位の回復魔法を受けたり

せぬとも言えまい。

老いた先代夫婦は残念ながら死んでいた。

心身共にシヨックを与え過ぎた以上、仕方ない。

「ただ殺すのもなー……あーそうだ、そうだ」

ぜんぜん使っていないスキルを思い出す。

クレマンティーヌは生前の記憶や能力把握が中心で、新たに得たスキルをあまり使っていない。

「服はほとんど脱がしてないもんねー。このままでいけるいける——  
〈不浄の刃〉」

ステイレットが、邪悪な光に包まれる。

これは死デス・ナイトの騎士が常時発動しているスキルと同じ効果を、一定時間発揮する。集中すれば常時発動もできるが、拷問に向かないし、アンデッドの取り巻きを置こうとも思わず、使っていなかった。

「ほいほいほいっと」

拷問に次ぐ拷問で、空ろな目となった貴族らが注意を向けるより早く。

眉間を貫いて全員を殺す。

気合も覚悟もなく、適当に、雑に、殺す。

苦痛に満ちた時間から、彼らはようやく解放され——

「はい、それじゃーみんな立ってせいれーっ！」

パンツ、とクレマンティーヌが手を叩けば。

拷問され尽くし、命まで失った彼らが、よろよると立ち上がった。

「ひっ——」

見ていた娘らか、子供らか、あるいは衛兵か……全員か。

悲鳴があがった。

「だいたいしょうぶだよー、人は襲わせないからねー」

スクワイア・ゾンビ従者の動死体に変えられたのだ。

高レベルアンデッドである、クレマンティーヌが作ったそれは、死デス・ナイトの騎士が生み出すものより、さらに強化されている。スペックだけなら、死デス・ナイトの騎士に近いレベルの強度。

そのまま周辺を襲わせれば、近隣を滅ぼしかねない戦力。

だが。

クレマンティーヌにしてみれば、恥をかかせ、蘇生を封じる手段に過ぎない。一度アンデッドになった死体は、もはや（この世界で知られる魔法では）復活不可能なのだ。

「じゃ、これでいっつか。お前が先頭ねー」

屋敷のロビーにあった紋章の盾を、当主の体に縛り付けて固定。

平民にはわからずとも、貴族関係者には身元が明確になる。

「おじいちゃんは、これねー」

腰の曲がった先代当主を無理やり立たせ、口から紋章旗をねじ込む。

太い柄が胴体を串刺しにし、ついには股間から柄が出る。

「あとはまー……適当にシーツとかテーブルクロス、持ってきてくれるー？」

あまりの状況に固まっていた女たちに声をかけるが。

咄嗟に返答できるはずもない。

「おーい、聞こえてるー？」

「ひっ!？」

己らが話しかけられていると気づいた女らが飛び上がる。

「シーツとかテーブルクロス、持って来てー。ついでにお金くすねていいからさー」

「ひやい! わかりましたあ!」

この場を逃れられるなら、と子供らや令嬢まで駆けだした。

ほどなく、大量のシーツやテーブルクロスが持ち込まれる。

勘違いしたのか、金品まで積み上げられる。

クレマンティーヌは無視して、シーツやテーブルクロスを広げさせた。

「そいじゃ……これに書いとくかー。血は消えにくいからねー♪」

そして、次々と白い布地に、貴族ら自身の血で書く。

筆に使うは、切り落とした当主夫人の髪。

『この者、外道なり。女神モモンガの名のもとに天罰を下す』

こう書かれた布が。

スックワイア・ゾンビ  
従者の動死体となった貴族たちに、マントの如く結びつけられる。  
全員に結びつけ。

最後に、屋敷ロビーの壁にも書いた。

「はい、準備かんりよー！ それじゃ王都の……王城前まで、しゅつぱーっ♪ 邪魔されたら押しつけるだけにして、攻撃は一切禁止だよー。盾と旗とマント○は、なるべく奪われないようにねー」

朝日が昇り始める中。

屋敷の主であったアンデッドが、そろそろと行進を始める。

残虐な拷問を受けたことが明らかかな姿……男らは下半身裸で局部を切り落とされた姿で。

紋章も明らかに、女神の罰を喧伝しながら。

衛兵らは呆然とし、かつての主でもあるこのアンデッドを止めようとしなかった。

「そんじゃ、あたしは次の貴族のトコ行くから。アンタたちは、地元にいづらかつたらエ・ランテル近くのカルネ村に行くといいよー。女神モモンガ様が守ってくれるからねー♪ このお金もアンタたちで仲良くわけよーに」

言うだけ言つて、クレマンティーヌはマントの力で透明化し、へ疾風走破で衛兵らの間を風のように駆け抜け。

金貨袋を一つだけ掴むと……屋敷から完全に離脱する。

本人の宣言通り次の貴族——ニニヤの仇の元へ向かうのだ。  
残された者たちは、しばらくぼんやりと顔を見合わせ。

よろよろと歩き去るゾンビと化した暴君どもの後姿を眺め。

脱力した様子で、それぞれが手に持てるだけ……金貨を掴み始めた。

そして、その後も。

クレマンティーヌは、複数の貴族に同様の始末をつけつつ。

王都へと近づいてゆく。

「はー、八本指で顧客リストを手に入れるのが手っ取り早いかなー？ 個別だと誰がどうなのか、めんどくさいんだよねー」

狙いは、貴族が手籠めにした娘を買い取っている人身売買組織であり。

彼女らの流れ着く先だ。

「大貴族連中も王都にいるし……王族自体も腐敗してるなら、ぱぱつと始末しちゃおっかー。情報も持ってそーだもんねー」  
なるべく地位の高い連中を始末し、宣伝に使った方がモモンガの名も売れる——そう考えてのこと。

効率的な彼女の選択は、ある王子の寿命を大幅に縮めようとしていた。

以来、王都へ向かう街道で、異様なアンデツドの集団が見かけられるようになった。

無惨に過ぎる姿で、その身を腐らせ朽ちさせながら押し寄せ。

これらは人を襲わず、ただよろよろと街道を歩くのみ。

石を投げようと、棒で殴ろうと、攻撃してこない。

ただし、恐ろしく頑丈。

神官らの魔法も歯が立たず。

立ち向かう兵士や冒険者は押しつけられ。

不眠不休で街道を歩く。

紋章、拷問跡、アンデツド化。

その家門から婚姻や養子で他家に移っていた貴族は、大いに恥をかいた。

これらは一体も欠けず王都に至り……王城への侵入を防ぐべく、戦士団が決死の攻撃を重ね、ようやく倒せたという。

この集団は次から次へと王都を訪れ、いくつもの家門を貶めた。

王都の戦力は疲弊し。

女神モモンガの名も王国全土に知れ渡ったのだ。

街道のアンデツドが騒ぎとなる中。

王国内に、もう一つひっそりとした動きがあった。

これに気づいたのは、エ・ランテルの都市幹部や門番たち。



確かな人の流れが、各地からエ・ランテルを通行点として、帝国方面……いや、あの「帰らずの村」ことカルネ村へ向かっていったのだ。その多くは女性であったが、明らかな貴族子女、武装した男、使用人などもいた。彼らは着の身着のままといった様子であり、汚れたままふらふらと、どこか空ろな目で街道を旅してきたのだ。

性別も階層も異なる彼らは、なぜか豊富な旅費を持っており。

エ・ランテルで宿と食事をとり、装備を整えたり、食料を買いこむと……そのままカルネ村に向かう。

護衛を雇おうとする者もいるが、行き先を聞けば冒険者すら拒む。エ・ランテルでは自ずと、同じような連中が集まり、一団となって、カルネ村を目指した。

そして彼らは誰一人、エ・ランテルに戻らない。

わずかに言葉を交わした者らは、女神モモンガに守っていただくのだと……聞いた。

時に、追いつめられて救済を求める貧民も、彼らについてカルネ村に向かった。

だが、やはり帰る者はなく。

カルネ村の伝説は、恐怖に彩られていくのだった。

クレマンティーンが出發して、一週間程度の間の出来事である。

## 時系列メモ

### ■ 転移0日目

- ・『ユグドラシル』サービス最終日
- ・モモンガ、アルベドのビッチ設定を見て、妄想をこじらせる
- ・モモンガ、アルベドの設定を原作通りに書き換える
- ・モモンガ、最後の瞬間にアルベドの胸を揉もうとする

### ■ 転移1日目：朝～昼

- ・モモンガ、アルベドの肉体に憑依して異世界に転移
- ・モモンガ&アルベド、自慰に夢中になる
- ・アルベド、モモンガの記憶や感情をほぼ把握
- （ユグドラシルがゲーム、自身がNPCとも自覚）
- ・アルベド、モモンガ以外のPLへの敵意を隠さず

### ■ 転移1日目：夜

- ・モモンガ、魔法やスキルの検証をようやく行う
- ・アルベド所有の世界級アイテム<sup>ギンズンガガブ</sup>真なる無を確認
- ・モモンガ、100レベル戦士職と100レベル魔法職を両方得て

いると確認

（装備はアルベドが持つ最低限のみ）

- ・モモンガ、〈複製体<sup>クローン</sup>作成〉によりアルベドに別の肉体を与える
- ・モモンガ、アルベドの騎獣である戦用双角獣王<sup>ウォーバイコーンロード</sup>を召喚してみる

### ■ 転移2～3日目

- ・アルベド、ひたすら暴走（二人で不純な身になる）
- ・戦用双角獣王<sup>ウォーバイコーンロード</sup>、目の前の行為に我慢できず、下半身の双角で二人にアンブツシユ

### ■ 転移4日目：朝

- ・戦用双角獣王<sup>ウォーバイコーンロード</sup>、クロマルと名付けられる
- ・カルネ村、スレイン法国の偽装兵に襲われる（犠牲者4人）
- ・モモンガ、法国兵を壊滅させる
- ・ベリユース、エンリを人質に取る（しかしすぐ死んだ）
- ・エンリ、名前を叫ばれ、モモンガに覚えられる

・ベリユース（死体）、デス・ナイト死の騎士として復活

・モモンガ一行、村人から女神として崇拜される

・死んだ村人ら、エール・ダールリッチ死者の大魔法使いとして復活（自我あり）

・死んだ偽装兵ら、スケルトン・ウォリアー骸骨戦士として復活

■ 転移 4 日目：昼

・モモンガ、村人や捕虜から情報収集する

■ 転移 4 日目：夕

・アルベド、己の人間嫌悪がタブラの設定と知り、人間受容

・モモンガ、戦士団と陽光聖典の存在を感知

・アルベド、陽光聖典を本気の無双で殲滅（ニグン死亡、水晶未使用）

・モモンガ、ガゼフと〈絶望のオーラ〉で威圧外交&情報聞き出し

・ニグン（死体）、クリプトロード地下聖堂の主として復活（自我あり）

■ 転移 4 日目：夜

・モモンガ、〈クリエイト・フォートレス要塞創造〉を使用、引きこもりックス突入

・放置されていたガゼフたち戦士団、カルネ村を去る

■ 転移 5 ～ 6 日目

・クラルグラ、カルネ村の斥候に訪れる

・スレイン法国、地の巫女姫が〈ブレイナー・アイ次元の目〉でカルネ村を見る

・スレイン法国、カルネ村にふれいやー降臨と判断、静観の姿勢

■ 転移 7 日目：夜

・クレマンティーン、エ・ランテルに向かう途中にカルネ村の城塞を発見

・クレマンティーン、クロマルに襲われる

・エ・ランテル都市長ら、カルネ村について緊急会議

・カジット、カルネ村の情報を得る

■ 転移 8 日目：朝

・エンリ、モモンガを呼びに行く

・クロマル、レイプ禁止令出される

・ニグン、魔封じの水晶を提示

・モモンガ、デュラハン・フエンサークレマンティーンを首無しの剣聖にする

(完全な死亡前だったため隷属せず、基本装備も得ず)

・エンリ、神官の地位を与え(押し付け)られる

・モモンガ、城塞内でクレマンティーンから情報収集

■ 転移 8 日目：昼

・黒い城塞にてカルネ村幹部会議、各種重要情報の共有

・エンリ、神官としてモモンガから装備を与えられる

・モモンガ、放置されていた陽光聖典の死体から各種アンデッド作

成

・モモンガ、ザ・クリエーション〈天地改変〉により村を囲む霧の湖を作成

・カルネ村にて、下着をつけない文化が広まる

・ガゼフ、王都に帰還し、カルネ村について報告したが失笑される

・ンファイレア、漆黒の剣を護衛に雇い、エ・ランテルを出発

■ 転移 8 日目：夕々夜

・クレマンティーン、城塞内で二人の本性を知る

・ラナー王女、蒼の薔薇をカルネ村調査に派遣を決定

■ 転移 9 日目：朝

・ンファイレアと漆黒の剣、カルネ村に確保される

■ 転移 9 日目：昼

・ニニヤ、ニグン&クレマンティーンと遭遇

・蒼の薔薇、王都を出発

■ 転移 9 日目：夜

・モモンガ&アルベド、夜の星空で空中プレイ中、墜落

・ニニヤ、モモンガに王国貴族粛清を嘆願

・クレマンティーン、腐敗した王国貴族粛清の任務を受ける

■ 転移 10 日目：昼々夕

・クレマンティーン、エ・ランテルでカジットをカルネ村に勧誘

・クレマンティーン、エ・ランテルで一部官吏や衛兵を殺害

■ 転移 10 日目：夜

・クレマンティーン、死を撒く剣団を殲滅

・ブレイン、カルネ村に向かう

・モモンガ、死を撒く剣団に囚われていた女たちをカルネ村に回収

・モモンガ、めんどくさいモードになり、アルベドに性的説得を受け始める

■ 転移11日目

- ・カジット、法国偽装兵に襲撃を受けた村でアンデッド量産
- ・クレマンティーン、かつて己を犯した貴族一家惨殺
- ・エンリとンファイ、肉体関係を持つ

■ 転移12日目

- ・粛清された貴族のゾンビら、王都を目指し始める
- ・カジットの一団、カルネ村に到着
- ・ブレイン、カルネ村に到着
- ・蒼の薔薇、エ・ランテルに到着し、情報収集
- ・クレマンティーン、ニニヤの仇の貴族一家惨殺

■ 転移13日目

- ・蒼の薔薇、カジットに死体回収された襲撃村を発見
- ・粛清された貴族の関係者、エ・ランテルに到着し始める

■ 転移14日目：午前

- ・粛清された貴族の関係者、カルネ村へ出発し始める
- ・蒼の薔薇、エンリ&ニグンにより捕縛される
- ・エンリ&ニグン、ラナーを女王にする計画を立てる
- ・ンファイ、蒼の薔薇からエ・ランテルに戻るよう言われる

■ 転移14日目：夕方

- ・モモンガ&アルベドが久しぶりに外へ姿を見せる
- ・カジット&ブレインが信者化
- ・イビルアイ、カルネ村で吸血鬼と知られる
- ・クレマンティーン、〈転移門<sup>ゲート</sup>〉で帰還
- ・モモンガ、初めての食事に感動

■ 転移14日目：夜

- ・王国第一王子バルブロ、王都裏娼館で愛馬にツアレをあてがう
- ・クレマンティーン、ニニヤ、カジット、ティア&ティナ、王都裏

娼館襲撃

- ・ニニヤ、暗黒面に覚醒

- ・ラナー、カルネ村に呼ばれてモモンガ&アルベドと対話
- ・ラナー、ラキユースと情報交換
- ・裏娼館の娼婦ら、カルネ村に保護される（ティア&ティナ同行）
- ・ニグン、王都の作戦指揮に現れる

■ 転移15日目：朝〜昼

- ・ 貴族のゾンビら、王都に現れ、戦士団と激突
- ・ 第一王子バルブロ他裏娼館のスタッフや客、ゾンビと化して王城に向かう

- ・ ニグン、〈死者の軍勢〉アンデス・アーミーで王城をアンデッドで満たす

- ・ ゾンビ王子バルブロの手により、国王ランポツサIII世死亡

- ・ ガゼフ絶望（ただし戦士団合わせ、相当のレベルアップ）

- ・ 八本指最強戦力の六腕、カルネ村に拉致される

■ 転移17日目

- ・ この頃から王都内に残る貴族が次々と惨殺され、ゾンビとなって王城門前に現れる事件が起きる

- ・ 王都のアンデッド災厄について、諸国に断片的情報が広がり始める

■ 転移18日目

- ・ 第二王子ザナック、緊急時ゆえ国王の喪が明ける前に王位継承（式典は後日予定）

■ 転移19日目：夕方

- ・ バハルス帝国隠密部隊、カルネ村到着と同時に捕縛され、皇帝の思惑を伝える

■ 転移20日目

- ・ ザナックの王位継承について、諸国に正確な書状が届き始める
- ・ 帝都アーウィンタールにて、王国のアンデッド異変について会議
- ・ バハルス帝国、例年の王国侵攻作戦を中止
- ・ 女神モモンガ&アルベド、供を連れて帝都に降臨

「ご苦労様です、ニグン様、エンリ様」

蒼の薔薇を捕らえ、<sup>ゲ</sup>転移門で戻って来た一団を、痩せこけ、禿げた、いかにも悪の魔法使いと言わんばかりの男——カジツトが迎える。

「おいおい、アダマンタイト級……それも蒼の薔薇の御一行じゃないか。あつさり捕まえちまったのかよ」

青髪の剣士が、捕縛された女冒険者たちを見る。

村の様子を少しでも探ろうと、見回していた蒼の薔薇だが。

女忍者の片方、ティナだけは剣士を凝視していた。

「ブレイン・アングラウス……」

「負けたのに妙に名前が売れてんなあ」

顔をしかめつつ、ブレインがぼやく。

「げっ、あの戦士長と接戦だったってヤツかよ！」

「この魔法使ったのは、陽光聖典の隊長だったわよね」

「どういう顔ぶれなんだ……」

もはや開き直ったと言わんばかりに、縛られたまま言葉をかわす。

ブレインは、正面からでもガガーラン以上の戦士。

武器を奪われ、これほどの精鋭に囲まれて、万に一つの勝ち目もないのだ。

すぐに殺されない様子なら、露骨にでも会話に持ち込んだ方がいい。

とはいえ、ブレインとの会話は、強者二人に止められる。

「さて、君たちとはまったく奇縁と言えるね」

「お話次第で、すぐに解放しますから。正直に答えてくださいね？」

ニグンとエンリが、蒼の薔薇に笑いかけた。

まったく心休まらない笑みである。

どちらも圧倒的強者の慇懃無礼さ——いわば、見下し、小馬鹿にしたような気配が見て取れるのだ。

ブレインは、二人に譲るように後ろに下がる。

その態度は明らかに、二人を上位者と認めていた。

「——はあ。第三王女が。国王じゃないんですね」

隠しても得はないと、全て問われるままに答えた蒼の薔薇だが。

エンリは、どうでもよさそうに首をかしげる。

「王は動きをとりますまい。戦士長殿が報告しても、本気にしてもおらんでしょう。逆に言えば、ラナー第三王女は相当に聡明な方と見てもよいでしょうな」

ニグンが、ラナーについて情報の補足をする。

「そうよ！ ラナーは奴隷制度を撤廃させたし、犯罪組織にも打撃を与え続けてるんだから！」

エンリの態度に、ラキユースは強弁する。誰もが讃える王女、自慢の親友を軽く扱われた苛立ちがあった。

単に辺境の村娘ゆえ、王女についてよく知らないだけなのだが。

「モモンガ様は貴族を既によからぬものと考えておられます。貴族を束ねる王についても、です。しかし、その王女が有能で、今の国の現状を改善できるなら……彼女を女王にした方がいいかもしれませんね」

「えっ」

さらりと、王国の継承の話をするエンリ。

単なる思いつきであり、王国の軍が来たりしないようにという程度の考えである。

だが、貴族のラキユースにとってみれば、国王と他の後継者を排除すると言い出したに等しい。しかも「女王になっていただく」や「女王になってもらう」ではなく、「女王にする」だ。どうにでもなるコマとしか考えていない。

一介の冒険者であるガガーランやイビルアイは何も気づいていないが。

元暗殺者ティアとティナの眉は、ぴくりと動いた。

「ほう！ さすがはエンリ殿。すばやい英断ですな。現国王ランポツサ三世は無能、第一王子バルブロは愚昧、第二王子ザナツクは凡人と



聞きます。モモンガ様にお仕えする我らが、王国民の統治に心を割いては本末転倒。民の管理は、本来の義務を持つ者にさせるに限りますな」

「えっ」

はっはっはっ、と快活に笑って応じるニグン。

ブレインとカジットも、後ろで頷いている。

ラクユースには、まったく笑えない。

少なくともこの二人は、王国を「いつでも排除できる面倒な障害」と考えているのだ。

「王女と仲がいいなら、この方たちを戦士長や他の地位を与えてもいいですね」

「見事ですな！ 大規模な改革にあたり、わかりやすい英雄は重要です。冒険者と言うものの立場が問題視されますが、引退後に貴族に仕える者も少なくありますまい。引退させて国の要職につけさせれば……近衛騎士、戦士長、宮廷魔術師、諜報員と、華々しく——」

「ちよ、ちよつと待て！」

この言葉に、イビルアイとガガーランも彼らの恐ろしさに気づいた。

確かに己らをあつさり捕らえた力を考えれば。

王国が軍を率いて来ても、容易に退けるだろうか。

「お、お前たちは、王国に内通者でも抱えているのか？ この辺境から王城内に手出しなどできまい！」

「は？」

イビルアイが、何とか口を挟み問いただす。

至極当然の疑問なのだ。

エンリとニグンは、苛立ちとも憐みともつかぬ顔を向けた。

ブレインとカジットは、不安げに顔を見合わせている。二人も、まだモモンガに会っていない。使徒たる二人や、魔獣クロマル、無数のアンデッドから実力を察するのみである。

「……私たちは、あなたたち王国のために、今の計画を立てているのです」

「まったくだ。モモンガ様の安寧のためならば、我らは王国民を全てアンデッドに変えてもかまわんのだぞ」

二人が冷たく威圧的な目を向けてくる。

蒼の薔薇を、何の脅威とも思っておらず。

王国が滅ぼうとも、気にかけてぬ顔。

「でも、モモンガ様は慈悲深い御方ですからね。民が困窮すれば心を痛められるでしょう」

「心安らかでおられるよう、民にはほどよい幸福を与えねなりません」

心配そうに祈るポーズをとるエンリ。

黒幕然とした笑みを浮かべるニグン。

異様な二人に、蒼の薔薇は呆然とするしかなかった。

数日差とはいえ慣れたカジットとブレインは、黙って目を閉じている。

そんな中、がらがらと音が響き始める。

裏門が開き始めたのだ。

骸骨<sup>スケルトン</sup>たちが綱を引き、木の落とし格子を上げる。

村の外に渦巻く霧で湿った丸太壁と落とし戸は、火矢でも容易には燃えない。

しかも二重に組まれている。

たとえ裏手を攻めようと、容易に落とせはすまい。

裏門を通じて現れたのは、一台の荷車と少年、そして銀級冒険者たちだ。

それを待つていたように、正午の鐘が鳴る。

「ああ、もうお昼なのね。ラナー王女とは仲良くする必要もありそうだし……モルガーさん、彼女らの拘束を解いてあげてください」

「人間には食事が必要ですからな。捕虜を虐待するような輩と思われるでは、モモンガ様の名に傷がつきませう」

エンリの指示を受け、死者<sup>エール</sup>の大魔法<sup>ダーリッ</sup>使いの一体が蒼の薔薇の拘束を解いていく。

ボデイチェックのつもりか、やたら体に触れてきたが。

無然としつつ、彼女らは立ちあがった。

「いいのかよ。武器がなけりや大丈夫だつて思われてんのか?」

捨て台詞同然に言うガガーランだが、二人は冷たく笑うのみ。

「親切で言つとくが、ここで暴れるのは止めた方がいいぞ」

代わつてブレインが言う。

心配とか憐みとか、そんな顔だ。

「ともあれ、食事にしましょう。今回の件は、私たちだけで判断はできません。今日中に、モモンガ様へ伺いを立ててみます」

凜とした様子で立ち、エンリが宣言する。

「おお、ついにお会いできるのですな!」

「やつとかよ。お前らが来たおかげで助かったぜ」

モモンガの降臨を待つていたカジツトとブレインが喜びを露にし。

「ご尊顔を拝せるとは、吉報ですな。村人らにも広く知らせ、畑の者らを帰つて来させましょう」

ニグンと、死者の大魔法使<sup>エ</sup>リ<sup>ル</sup>ダ<sup>ー</sup>リ<sup>ツ</sup>チ<sup>チ</sup>たちも嬉しそうにしている。

「神として扱われている……やはり、ふれいやーなのか」

モモンガの降臨に湧きたつ者らにイビルアイが小さく呟いたが。

聞く者はいなかった。

昼食後の軽い休憩時。

蒼の薔薇は、漆黒の剣に自己紹介し。

その流れでンファイレアも名乗ったのだが……。

「えっ、おばあちゃんか!?!」

「ああ、すげー心配してたぜ。一度くらい戻つた方がいいんじゃないかねえか?」

ンファイレアの祖母、リイジー・バレアレが酷い取り乱しようだったという。

「村の中がどうなっているのか、まったくの不明だったものね。というか、村がこうなつてからエ・ランテルに誰も行ってないし、帰つてもないんでしょう?」

ラキユースが真面目な顔で言う。

口には出さないが……蒼の薔薇が解放されるか不明な以上、馴染んでいる様子の彼らに、少しでもカルネ村の情報を持ちかえって欲しかった。現状では、カルネ村は正体不明かつ、恐ろしく危険な場所と考えられている。実際危険なのだが、断片的な情報であろうと持ち帰ってもらわねば、対策の立てようもない。

「で……でも、エンリを放って帰るわけにも……」

チラチラと、ンファイレアが窓の外のエンリを見る。

村人らを集め、モモンガに伺いを立てること、降臨するかもしれぬこと、宣言している。

装備も相まって、闇の聖女といわんばかりの姿だ。

「まさか彼女は闇の力に……」

適当なことを言いかけるラクキュースだが。

「はーん、顔に似合わず童貞じゃねーと思ったら、そういうことかよ」

ガガーランがにやにやと核心をついた。

そう、神官と言うよくわからない大任を負ったエンリに相談される中……ンファイレアは、彼女とそういう関係になっていたのだ。

真っ赤になって俯くンファイレア。

細い体もあって、儂げで愛らしさを感じさせる仕草だ。

「惜しい。もう少し幼ければ」

「女装したらいける……?」

「あとちよつと早く会ってたら、美味しくいただいてやったのになあ！」

ティナ、ティア、ガガーランはそれぞれに、少年を品評する。

「あのエンリさんに……すごいですね」

「夜も怖いのか気になるよな」

「愛の勝利であるな」

漆黒の剣の面々も、感心している。

なお、ニニヤは外でニグンを手伝っていた。

「バカ言っている場合か！ あの娘と関係があるならなおさら、お前自身も家族としつかり相談してこい！ 心配をかけ通している理由

にはなるまい！」

「そ、そうですねっ！」

強く言うイビルアイに、ンフィーレアは力強く頷いた。  
もつとも、全てはモモンガなる女神の意向次第。

「で、どうなんだ？ あの時黒神官娘は、激しいのか？」

「実際気になる」

「えええっ!？」

いつもの調子を取り戻し、過度の緊張をすまいと。

さっそく、ンフィーレアをいじり始める蒼の薔薇（の一部）。

イビルアイは顔を背けて窓の外を眺めている。

（まあ……変に緊張して震えながら待つより、いいわよね）

しつかり聞き耳を立てつつ、そんな仲間を心強く思うラキユース  
だった。

19：こりやホンマ勃起もんやで……

夕暮れ、城塞の前に全ての村人、客人が集まっていた。

「神官エンリは昼過ぎに城塞内に入り、事情を話して伺いを立てたのだが。」

慈悲深き女神モモンガは、奥から現れず、エンリをなだめた。

日中は仕事もあるだろう、日が暮れてから姿を現そう……と言ったのだ。

（下々の仕事を配慮してくれるなんて！）

直接に言葉を受けたエンリは無論、伝え聞いたニグンや村人も感激することしきりである。

真に超越者たる御方が、くだらぬ己らの仕事を思いやってくれた。

何も知らぬ王や貴族と違い、女神モモンガのなんと慈悲深きことか！

無論、最中だったモモンガが、時間を引き延ばしただけなのだが。

（思ってたより人間臭いんだな……）

（なるほど強大な術師ではなく、実際に神やもしれん）

ブレインとカジットも、クレマンティーン等から連想していたような存在と異なるものらしいと首をかしげ。

（信者は大事にしてるってことかしら）

（力はともかく、悪人ではない……のか？）

蒼の薔薇の面々も、少しだけ緊迫感をゆるめる。

夕暮れで空が紅く染まる中。

集まった者たちの前に、黒い円形の力場が現れた。

そしてその中から……白いドレスをまとった女神と。

黒い全身甲冑をまとった女戦士が現れる。

両者の共通点は、悪魔を思わす角と、黒い翼。

だが、初めて見る者らとて、二人を悪魔とは思えなかった。

モモンガの圧倒的な美貌と威圧感の前には、神か魔かなど……些細な差でしかない。

〈<sup>ゲー</sup>転移門〉で現れたモモンガは、最初から〈絶望のオーラII〉を発動

していたのだ。

この世界で最高位たる、アダマンタイト級冒険者が訪れたと聞いてのこと。

己の実力の一端を示すべく、村人に害のない範囲に留めた……つもりである。

「わずかな間に、随分と来客があつたようだな」

「は、ははっ！ 左様でございますー！」

エンリとニグンが震えながら、声をそろえてひれ伏す。

村人らも続いて、慌てひれ伏すが。

その姿は崩れ落ちたようにしか見えない。圧倒的な威圧感に、腰が抜けてしまったのだ。よく見れば、下半身に沁みを作っている者も多々。

それなりに戦えるンフィーレアや漆黒の剣も、震えが止まらない。神官と言う立場がなければ、エンリも下半身が悲惨な状態になっていただろう。

そして、モモンガを初めて見る者たちも、その威圧感に膝を振るわせていた。

「か……神だ、間違いねえ……」

「な、なんという圧倒的な威圧感！」

「まままさか、ほほほ本当に神様なの？」

「くそっ、やべえ……近づける気すらしねえ」

「こ、こんな威圧は、魔神どもすら……」

「くっ、心の勃起は屈しない……！」

彼らは、この世界でも相当の強者。

だが、こんな威圧感初めてである。

もし立ち向かわんとすれば、意識すら奪わんばかりの恐怖。

意識を手放したくなる、どうしようもない絶望。

まあ……約一名は、モモンガの肢体を凝視して、妙なことを口走ってはいたが。

「……ふむ。村人らに配慮して抑えたつもりだったが。すまないな、怯えさせたようだ」

（Ⅱでもこれかあ……アダマンタイトなんて柔らかい金属が最高級らしいし、あの戦士長と同じ程度つてことかな？ この世界の人らホントに弱すぎない？）

モモンガは周囲を見回し、肩をすくめて「絶望のオーラⅡ」を止める。

恐怖に震える者らが、呆けた顔を見せる。

「ニニヤ、ンファイーレア。神の御前である！ 粗相した者らを即刻清めよ！」

ニグンが慌て、〈清潔〉の呪文を使える二人に叫び、呼びかけた。神の前で不浄を垂らした者らを放置してはおけない。

悪臭が届けば、村ごと消滅させられても文句は言えぬのだ。

二人が慌てて、腰の抜けた村人らの間を回り呪文をかけ始める。

「我らも手伝わねばならん、偉大なる御方の御前で！」

同じ呪文が使えるカジットも弟子らに呼びかけ、自主的に動いた。

アンデッド——つまり死体を扱う彼らにとって、〈清潔〉は自身が病に侵されぬための必須呪文。

村人らも礼を言う。

腰を抜かして動けぬ村人らに、呪文をかけるカジットの姿は、手慣れたものがある。彼は元より農村出身。スレイン法国の神官時代には、民への奉仕活動もそれなりに経験しているのだ。実際、彼と弟子はこの数日はアンデッドを使った耕作や土木作業について、ニグンに師事し。ニニヤとも交流していた。来客の中では、最も村に打ち解けつつある。

そんな姿に、モモンガも感心し、声をかけた。

「おお、来客に働かせてすまないな。魔法を使える者は歓迎するぞ」

「モモンガ様にお褒めいただき、ありがたき幸せでございます！」

己の予想を遥かに上回る、ズーラーノーン盟主などより遥か高みの存在に。

カジットは感激と共に頭を下げた。

無論、その間も民への奉仕は止めない。

こうして不浄を清めるまで、神前報告はしばし中断された。



その間に、彼はエンリを呼び、来訪者たちの名を聞き。

特にカジットとその弟子がアンデッドを連れて来たと聞くと、満足げに頷いた。カジットの評価は既に相当高い。カルネ村を保護下に置いた彼にとつて、村人と打ち解け、己の知らぬ〈清潔〉<sup>クリーン</sup>なる呪文を使えるというだけで、十二分に価値がある。アンデッドを大量に連れて来たことも、モモンガにとっては人口増加同然だ。

「私のせいで、いらぬ手間をかけたな。ニニヤ、ンファイレア。それにカジット殿と……その弟子の者たちも」

モモンガが直接、呪文を使った者らを労う。

村人やニグン、エンリは、彼らにかすかな嫉妬を覚えた。

「さて、来客には順に話を聞こう。まずは、多数のアンデッドを提供してくれた上、今も村人のために働いたカジット殿からにしようか」

「ははっ、ありがたき幸せにございます！」

カジットが背筋を伸ばした。

軽く自己紹介し、クレマンティーナに紹介されたこと、ズーラーノーン十二高弟であること、己の目的、研究のためにアンデッド化を求めていること……包み隠さず言う。目の前の相手が、騙して利用などできる存在でないと見越してのことだ。

蒼の薔薇は、ズーラーノーンという言葉にどよめくが。

目の前にもっとヤバイ神がいるので、口は挟まなかった。

「どうか、挟もうとしたイビルアイは、ティアとティナに抑えられていた。」

「——なるほど。しかし、それは私ですら命を削らねばできぬ蘇生。不可能とは言わないが……たとえばアンデッドと化そうとも、難しいぞ。わかっているのか？」

「ぐ……わ、わかっております！ それゆえ、狂人と謗られつつ、これまでの人生を歩んでまいりました！」

「……お前を知性ある高位アンデッドに変えることはたやすい。お前の母も、亡骸があり、その靈魂が未だ地上に留まっていれば、知性あるアンデッドとして蘇らせられよう。それでは駄目なのか？」

「そ、それは……」

カジットは言葉に詰まる。

彼の目的はあくまで、母の完全なる蘇生。

この世界において知性あるアンデッドとは「自ら成る」ものであり、他者が「造る」という考えはなかった。

だが、目の前の女神は、知性あるアンデッドを「造る」。

あの多数の死者の大魔法使い、ニグンという最高位アンデッドを思えば、間違いない。

おそらく頼めば、カジットも高位アンデッドにしてもらえるだろう。

母の亡骸——遺骨の壺は、エ・ランテルの拠点を引き払う際に持ってきた。自身もアンデッドとなるなら、母もアンデッドでかまわないのでは……と思えてしまう。自慢だった母の容姿さえ損なわれなければ。

悩む様子を汲んだか。

慈悲深き女神は、いたわるように言う。

「急がずともよい。迷うなら、よく考えるのだ。今更、一日早かろうと遅かろうと、変わらん。それに、ぬか喜びさせてしまったが……お前の母の魂を呼び戻せる可能性は、かなり低い」

「あ、ありがとうございます……不敬は承知でございますが、しばし考えさせてください」

魔術師は俯いた。

今までを思えば、贅沢過ぎるほどの悩みだが。

それでも……すぐには決断できなかつたのだ。

「残酷な決断を迫ったようだな。しかし、お前の望みは……どのみち、いつか決断を迫られただろう」

「は……ありがとうございます……」

狂った目的のため、非道の行いを繰り返してきたブローラーノーン十二高弟が一人、カジット・バダンテール。

だが、今。

女神の慈悲に触れ。

彼の中で何かが大きく、変わろうとしていた。

一方で、その弟子たちは自らアンデッド化に即答する思いきりは持たず。師の決断か、他の者のアンデッド化を直接確認してから……と考えた。

彼らはしばらくは、カルネ村に逗留し続けることが決まる。

「さて、蒼の薔薇の案件は少し時間がかかる。そちらの剣士殿の話を先に聞こうか」

カジットに続き、話を振られたのはブレインである。

ブレインもまた、軽い自己紹介の後に……ガゼフに敗北したこと。研鑽し腕を磨いたこと。己がクレマンティーヌに完敗したこと、彼女に紹介されたこと、剣士としての己を高めたことを説明する。

女神相手でも態度を変えぬブレインに、周囲がざわめき怒りを向けていたが。

モモンガは特に気に掛ける様子もない。

蒼の薔薇の面々は、逆に好感を覚えもしたようだが。

（あの天才剣士でも、同じような悩みはあるんだな。それにしてもクレマンティーヌってのは、どんなやつなんだ？）

特に伸び悩みつつあるガガーランは、彼の言葉に少なからぬ共感を覚えていた。

一方で、モモンガはカジットほどには容易に答えを出せずいる。

少しばかり、彼は首をかしげた。

「まず言っておくが……クレマンティーヌは私の手で、高位のアンデッドに生まれ変わった。以前の彼女なら、お前も人間同士として納得のいく水準だったろう」

「種族の差だっけ言いたいのかよ」

無然とした様子で、ブレインが言う。

モモンガは、母が教え諭すように続ける。

「お前は剣士として、剣の腕を磨いてきたのだらう」

「そうだ」

「あらゆる存在は生まれ持った力がある。お前は人間としては、十分

に一流の剣士で、最高峰と呼べるのだろうか」

「そのつもりだった。だが——」

まるで足りなかったと、続ける前に。

モモンガが言葉を遮った。

「力とは、同じ群れの中で競うものだ。お前は……そうだな。何の訓練もしておらん村人と戦うことをどう思う」

「戦う意味なんてねえ。弱い奴をいたぶる趣味はないんだ」

モモンガが微笑む。

「そうか。なら、熊と一対一で戦って勝てるか？」

「当たり前だ、熊くらいなら勝てる」

「何の訓練もしておらん、戦いの素人の熊にだろう」

「ぐ……」

ブレインが、言葉に詰まる。

「ドラゴンでもいいぞ。巨大でブレスを吐くあれらは、強く見えるだろうな。だが大半のドラゴンは、村人と同じで戦いについてろくな訓練も研鑽もしておらん。ただ『食料を得る』技術を磨いているだけ。畑を耕す村人と、何も変わらない」

「……何が言いたい」

「仮にお前がドラゴンと一対一で戦って勝ったとしよう。お前は己の力を誇り、周囲はお前を英雄ともてはやすだろう」

「……そうだ、ろうな」

何が言いたいのか、察せてしまった。

「だが、それはお前の独り相撲だ。お前はただ、強い動物という『物差し』で、己の強さを示したにすぎん。それは、お前の言う『剣の道』とは違うのではないか？」

「……あれは、あの女は、ただの『物差し』なのか？」

「そうだ。クレマンティーンは私の使徒であり、人間ではない。同じ言葉を話し、人間に見えたがゆえ、惑わされたに過ぎん。お前を同じように高位アンデッドに変えることは容易だが……」

「……………」

ブレインの顔に懊悩が浮かんだ。

己自身の魂を深く切り込まれて、取り乱してしまおう。

（そうだ。アンデッドになりたいわけじゃない。しかし、魔法やアイテムに頼って、剣の高みを目指した……なら強さを求めてアンデッドにもなるべきじゃないのか？ 王国の秘宝を身に着けたあいつは、おそらく今の俺より強い。だったら俺も、強い刀を手に入れるように、己の肉体自体を強くして何が——）

ブレインの目に昏い光が灯る。  
だが。

「そうだ。奴に勝つために俺は、力を——」

「そうか。つまり、お前はそいつの『強敵』ではなく『物差し』になりたいのだな」

ぽつりと、女神が言った。

「あ——」

愕然とし、ブレインが膝をつく。

己のしようとしていたことの、あまりの情けなさ、恥ずかしさに、涙すら出た。

顔を露にしていることすらできず、自然と身をまるめ、地に顔をこすりつける。

「ああああああああ……」

大勢の前にも関わらず、慟哭が……涙と共に溢れた。

「己の目的を見誤るな。しばらくお前は己を見つめなかせ。ただ力を求めても、お前の望みは叶わん」

「……あ。あ……、ありがとうございます」

ブレイン・アングラウスは初めて心から……ひれ伏し。

涙のにじむ声で女神に礼を言った。

このやり取りを見る者たちは皆、女神の慈愛と偉大さに感動し。  
深くひれ伏す。

蒼の薔薇すら、自然と膝を屈してしまっていた。

女神もまた慈母の微笑みで、彼を見下ろす。

（ふふ、たち・みーさんや武神武御雷さんを思い出すな。実力が僅差のライバルなら、チートを使っちゃダメだろ。お互いに納得いく戦い

をしなきやね。たち・みーさんをメタ読みで完封したからって、素直に誇れないもんな)

過去に想いを馳せた微笑む。

背後に控えるアルベドが、ギリツと歯がみした。

(ファッキン！ あの連中、まだモモンガ様の心を浸食するというの！ くうううう、もう二度と思い出さず私のことだけ考えるように、城塞に戻ったらもつとぐつちやぐちやにしてさしあげなければ……！)

そんなアルベドの胸中に、モモンガは無論のこと。

その場も誰も気がつかない。

いや。

(ん？ 雌を狙う雌の視線……あの甲冑の女神はまさか同好の士……あの鎧の中はどんな姿か、妄想が捗る……)

ただ一人、当初から女神を性的な目で見ていた忍者姉妹の片方が。

アルベドの性的決意だけ、しっかり把握していた。

「さて、待たせたな。蒼の薔薇の者たちよ……王国について話をしたいのだったか？」

ブレインを優しい笑みで、しばし見守ってから。

モモンガが、蒼の薔薇へと視線を向ける。

「は、はい。その、この村と王国についてどのように考えてらっしゃるか、伺いたく……」

ラキユースは何とか、当初の予定していた言葉を紡ぐ。

もはや、目の前の存在が女神であることを疑えない。

少なくとも尊敬すべき人物にして、超越的存在であることに変わりはないのだ。

冒険者としても、貴族としても、王国民としても、人間としても。

決して敵対してはならない存在だと。

最初の威圧と、先の二人とのやりとりで思い知らされていた。

## 20：マスク・ジ・エンド!!

モモンガは蒼の薔薇の面々を見回し、イビルアイに目を止める。

「——話し合う前に、その者に仮面を取ってもらってかまわないか？」  
「っ！」

「ど、どうしてでしょうか。失礼に当たるのでしたら、彼女は下がらせますが……」

イビルアイが息を飲み、ラキユースが何とかとさりなそうとする。

「いや。まだ幼い身なのだろう？ 傷や呪いで容貌を損なっているなら、私が癒せるかもしれない」

「そそそんなわけないだろ！」

「っ、バカ……」

食って掛かるように言うイビルアイに、ラキユースが頭を抱えた。

「モモンガ様の慈悲深きお言葉に何という態度！」

「これ以上失礼なきよう、取り押さえしておきましょうか」

エンリとニグンが、怒りを露にする。

アルベドも二人に頷きかけた……が。

「やめよ」

モモンガが三人を抑えるように手を挙げた。

険しい視線を向けたままではあるが、三人が一步下がる。

「確か、イビルアイ殿だったな。名といい、仮面といい、お前は私に正体を明かせぬ身ということか？」

じっと見据えて言う。

その目は冷たく、今にもあの威圧感を放ちそうに見えた。

冒険者に過去の詮索は……などという言葉で言い逃れできる相手ではない。

「わ、私はっ」

言い淀むイビルアイは、いかにも年相応の少女、いや少女に見える。

「責めるつもりも、なぶるつもりもないのだがな。アルベドよ、兜を外せ」

「はっ、承知いたしました」

初めて発されたアルベドの声は、モモンガと酷似している。まずい、とラキユースは焦った。

彼女が顔を露にするなら……：礼儀上、イビルアイも見せぬわけにいかなくなる。機嫌を損ねていい相手ではないのだ。

「っ、それには——」

及びません、と言おうとしたが遅かった。

アルベドが兜を脱ぎ……：モモンガと同じ顔を露にする。

「モモンガ様と同じ顔……！」

「二柱は双子であらせられたのか！」

「双子でカップル……いける？」

「ごつち見んな」

元より、アルベドの素顔を知るのはニヤとニグンのみである。

エンリも含め村人らは、騒然となった。

「……さて、これでこちらは隠した顔を晒したぞ。お前の素顔を見せてもらえないのか？」

モモンガが小さく首をかしげた。

あたふたと慌てるイビルアイだが、ラキユースも首を横に振って見せるしかない。

ここで仮面をつけたままでは、信用など得られまい。元よりアンデッドを使役する神と、その信徒の村だ。イビルアイの正体をとやかくは……：たぶん、言うまい。

「わ、わかった……：素顔を、見せる……」

イビルアイが震える手で仮面を、はずして見せた。

紅い目と、八重歯めいた犬歯が明らかになる。

美しい、と言っていい容貌だ。

某階層守護者をふと思い出し、モモンガの顔がほころぶ。

（く……あのヤツメウナギ、まだモモンガ様の中に……！）

シャルティアと、その創造主を思い出しているのだと気づき、アルベドの表情は険しくなった。

「なんだ、吸血鬼か。隠すほどの秘密でもあるまいに……いや、人間社



会は吸血鬼を差別しているのか？」

モモンガが呟いた。

「まあ、吸血鬼は人類の敵とされておりますからな。隠しておるのでしょうか」

ニグンが素早く、吸血鬼について補足を入れた。

思った反応とは違うが、蒼の薔薇の面々は安堵の息をつく。

「そうだったか。では、人の名を捨て、異なる名を名乗るも道理だな。イビルアイよ、すまなかつた。この通りだ。少々誤解していたらしい」

モモンガが軽く頭を下げて見せる。

「モモンガ様、そのような者に頭を下げる必要は！」

「モモンガ様に間違いなどありません！」

「その者が紛らわしい姿をしていたせいですよ！」

アルベド、ニグン、エンリが、叫ぶように言う。

モモンガに頭を下げさせたイビルアイには、殺意とも言える視線が刺さった。

カジット、ブレイン、ニニヤ、村人、アンデッドらの視線も、剣呑極まらない。

背を向けているモモンガは気づいていないが、イビルアイとしては先刻の威圧に迫らんばかりの恐怖である。

「つききき、気にしてないぞっ！ 仮面を付けていた私が悪いのだからなっ！」

「そうです、モモンガ様に問題など！」

慌てて、イビルアイも震え声で言い。

ラキユースも、「様」を付けて敬意を示す。

「そうか。そう言ってもらえるとありがたい。良ければ、イビルアイ殿にはこの村では仮面を外して過ごしてくれたまえ。吸血鬼を差別する者などいない場所だ。私が保障しよう」

子供にするように、イビルアイの髪を撫でる。

サキュバスのスキル〈淫魔の愛撫〉を乗せたそれは、まさしくナデポ。

イビルアイの強張った心も蕩かす……はずだったが、アルベドらのドロドロとした視線が、それを許さない。

頭部に送られる快楽と慈愛。

五感に送られる憎悪と憤怒。

心弱き者ならば、その場でショック死してもおかしくない、相反する過剰感覚。

「ああああ、ありびやとうございまひゅっ！」

イビルアイは、吸血鬼になって初めて、失禁しそうになりながら屈し。

ひれ伏して礼を言った。

「ふふ……しかし、読みも外れてしまったな。てっきり、正体は件の王女殿かと予想していたのだが」

「えっ」

今度は、ラキユースが呆気にとられる。

一国の王女がこの辺境に来ると思っていたのだろうか、と。

「有能な人物なのだろう？ 直接現れて驚かせようとしているのかと思っただが。ふむ……名前は何と言ったか？」

「リ・エステイーゼ王国第三王女、ラナー・ティエール・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフですな」

チラと横を見て問えば、即座にニグンが答える。

「ああ。そのラナー殿は、私に友好的な関係を求めていると聞いたのでな」

「は、はい。もちろんです。しかし、王国にはまだ情報が少なく……戦士長の報告も、法螺話扱いされております。私たちはモモンガ様について見定めるよう、言われて参りました」

モモンガは首をかしげた。

「戦士長は王の信頼厚いと聞いた覚えがあるが……彼の言葉は思いのほか、軽いのだな」

「……申し訳ございません」

王ではなく貴族の問題である。

彼は平民出身というだけで、貴族から冷遇されている。

たとえ、重視されようとも、女神の常識外れに過ぎる実力を信じたりはできない。中途半端に信じて、愚かな貴族が暴走しなかったのは奇貨と言つていい。

ニグンが言葉を継いだ。

「仕方ありますまい。モモンガ様は人類の想像を遥かに絶した力を持つ御方。何より、彼女ら蒼の薔薇は、クレマンティーヌとは入れ違いになったのでございましょう」

「ん？ ああ……そういえば、そうなるか。確かに、アレを知っていれば、少しは反応も違うはずだからな」

不穏な会話に、蒼の薔薇……それにカジットやブレインも顔を見合わせる。

村人も含め、クレマンティーヌが姿を消した理由など知らないのだ。

「ニニヤの嘆願に、エンリ、ニグン、クレマンティーヌの意見を合わせた結果、王国貴族があまりに下劣かつ邪悪であると判断した。よつて、該当する貴族の粛清を始めている」

「はっ!? そ、それはどういう!?」

貴族のラキユースは思わず問いただした。

その場にいた大半も、驚愕し、唾然としている。

「民を不当に搾取する貴族、虐待する貴族、奴隷にする貴族が対象だ。他国との癒着、麻薬栽培などは……まあ、民の生活や、各貴族の立場もあるだろう。判断材料とはしておらん。要は人間として、あまりに道を外れた者を処罰させている。ああ、盗賊団の類も見かけたら、適当に潰すよう言っているぞ」

「す、すみません、それは王国がすべきことであつて、モモンガ様がなさることでは……」

明らかに内政干渉だ。

ラキユースは最大限、穏やかな言葉で咎めるに留めようとするが。

「王国が彼らを咎めるとでも言うのですか!」

魔法詠唱者の少年——ニニヤが怒りをにじませ、口を挟んだ。

「私も相当の年月にわたり、王国貴族の所業を見てきたつもりだ。民

への行いから処罰された貴族は皆無。少なくとも、一月ばかり前に見た法国の調書では、そうだったはずだが？ 何か貴族を処罰する新法でも、発令されつつあったのかね？」

ニグンも嘲りを隠さず、援護する。

エンリを始めとする村人らも領いた。

「失礼ながらモモンガ様、この者たちは御身を神ではなく、王国領土への侵略者と考えているのではないでしょうか」

冷たく見据えるアルベドが、さらに言葉を重ねる。

村人らの怒りが、さらに高まった。

怒号すら響く。

蒼の薔薇は、ここが完全な敵地だと思い知らされる。

名声に憧れる者も、親切心から味方になってくれる者も、いない。

「いや、仕方あるまい。何の庇護も与えずとも、この村は王国の所有物と考えられていたようだからな」

鷹揚に、モモンガが村人を諫めれば。

彼らは瞬時に静まった。

どれほど怒りがあろうとも。

女神の言葉を妨げる理由にはならない。

「そうだな。当人の報告を聞いてみるとしようか」

モモンガの慈悲だけが、頼りとなっていた。

「<sup>メッセージ</sup>伝言」——クレマンティーンよ。状況はどうなっている？」

「あの魔法、ホント便利だねー。王国中走り回った身としては、移動手段も欲しいなーって思ったりー」

「クロマルを貸そうか？」

「やめて」

「あの程度の連中相手なら、<sup>ソウルイーター</sup>魂喰らいで十分かと」

「それもそうか」

「ありがとー、アルベドちゃん！」

「誰がアルベドちゃんよ……」

探索魔法で居場所を探り、〈転移門〉で一瞬にして帰還したクレマンティーン。

彼女が神々と緊張感のない話をしている中。

他の面々は、中空に映るそれを見て、ぽかんと口を開けていた。やがて、じわじわと。

それぞれが、それぞれなりに。理解し始める。

ニニヤはドス黒い愉悅の笑みを浮かべ。

カジットは、主の力に喜悅を露にして。

村人らは多かれ少なかれ、留飲を下げた顔。

蒼の薔薇……貴族の生まれのラキユースには絶望しかない。

「なんだよ……あれ」

「どれも……貴族ばかり。全員丁寧に、紋章や旗までつけて……」

「ただの動死体じゃないぞ。頑丈すぎる」

モモンガの造り出した〈水晶の画面〉には。

遠く、王都を臨む街道を、そろそろと進む貴族たちの動死体の姿があった。

周囲を取り囲む松明で、それらは夜なお明るく照らされている。

松明の持ち主……巡視兵らが矢を射かけ、槍で突いているが。

まるで効いた様子もない。

燃え上がらせようと火を近づけても、それらは松明を払いのけ、器用に火を避けていく。

ただの動死体ではなく、70レベル代のクレマンティーンが生み出した従者の動死体。

特殊能力こそないが、死の騎士と同じかそれ以上のスペックである。

無抵抗でも、一般兵に傷をつけられる存在ではない。

いや、傷だけなら見るも痛々しい拷問の痕跡が残っている。

彼らは己の身分を喧伝するように紋章を掲げ。

マントのように羽織った布には、血文字で大きく。

『この者、外道なり。女神モモンガの名のもとに天罰を下す』

伝説級の強さを持つアンデッドが、紋章とマントだけを守りつつ、ひたすら前に進む。

明日の朝には、王都の門からも見えるだろう。

既に相当の騒ぎとなつていているだろうに、王都側に兵が配置された様子もない。

根拠のない自信に満ちた、王都の兵を思えば……たかが動死体<sup>ゾンビ</sup>と、ろくに調べもせず放置しているのだろう。

どれほどその頑強さを報告しても、巡視兵たちは無能だと罵られているに違いない。

きつと、あれらは王都の門に至るだろう。

もし、蒼の薔薇があのまま王都にいたら……あれの対処に駆り出されたかもしれない。

「こつちに来て……いろいろ教えてもらってよかつたな」

こと「冒険者」としての経験は最も高いガガーランが、しみじみと呟いた。

見た目に反して、一体でも相当の難敵だ。

それが百体近くいる。

王都に入り込もうとするそれを、城壁の外で押しとどめろと言われれば……正直、蒼の薔薇でも無理だろう。

兵と冒険者をかき集め、一丸となればあるいは……という程度。

倒しても動死体<sup>ゾンビ</sup>相手に苦戦したと罵られ。

倒せなければ全責任をかぶせられかねない。

貧乏くじどころではない……厄ネタそのものだ。

「叔父様……朱の雫も、今は王都にいないはず。すると対処は……」

「戦士長に同情」

「貴族から無能って言われるのに金貨一枚」

戦士団でも食い止められまい。

身元の証明までしつかりつけた、あの動死体<sup>ゾンビ</sup>が、王城までねり歩けば、貴族の権威失墜は免れない。

貴族間は血縁でしつかりと結びついている。

王都にも彼らの血縁者や、その配偶者がいるはずだ。

ラキユース自身が、鼻持ちならぬ求婚者を多数袖にしたのだし。見覚えのある求婚者も……動死体ソシビの中には混じっていた。そんな風に、ようやく冷静に、分析をすれば。

「——とまあ、こんな次第だ。王国における私の認識も変わるだろう」  
気取りすらなく、当たり前前のことのように。  
女神が言った。

## 21：モノを食べる時はね

モモンガの言葉を継ぎ、クレマンティーンが報告していた。

「——とーりあえず、使用人とか子供特に殺す必要ないな——って人には、カルネ村に行くよう言つといたよー。そっちもそろそろ来るんじゃないかなー?」

「よくやった。礼を言うぞ」

「えへへー♪」

モモンガに頭を撫でられ喜ぶクレマンティーンは、まるで子供のようだが。

ブレインは、彼女の恐るべき戦闘力を身にしみてしっている。

「さて……その上で、ニグン、エンリよ。蒼の薔薇の方々とした話を、教えてくれるか」

「ははっ!」

村人らの前で、王国の命運にも関わる話が……明かされた。

「……ふむ。どうなのだ? 王が変わってこの現状が変わるのか?」

一通りの話を聞き終えたモモンガが、蒼の薔薇に問いかける。

おかげで、ラキユースは思わぬ形で王国大使の立場になってしまっていた。

「王は現状を変えようと努力しておりますが、結果を出すには至っておらず……」

「毎年、戦争をしているそうだな。兵士は民を徴兵しているのだろうか?」

「……その通りです」

「なるほど。以前にニグンが言っていた通りの状況か。いずれにせよ、その王女と話がしてみたいな」

「で、では会見できるよう、私から具申して……」

だが、神がそんな手順に従う必用はない。

「ロケート・クリーチャー ブレインナー・アイへ生物発見へ次元の目——王宮だというのに、まったく対策をし



ていないな」

「も、モモンガ様!？」

「貴様まさか……!？」

魔法詠唱者のラキユースとイビルアイにはおおよそ、呪文の見当がついた。

モモンガは、ラナー王女を今すぐ呼び寄せるつもりなのだ。

動死体ゾンビを映していた〈水晶クリスタルの画面モニター〉のそれが切り替わり、王宮内で夕食を前にした王女を映す。

ラナー王女の美貌に感心する村人はいない。

ここには、もつと美しく強く優しい女神がいるのだから。

「さすがに、食事前に呼ぶのは悪いか。就眠前など人のいない時間に――」

王女の美貌には無関心な村人たちだが、王女が前にした王宮の料理に――

誰かの腹が鳴る音が聞こえた。

モモンガが目丸くし、きよとんとした顔を見せた。

「し、失礼いたしました!？」

村人の代表であるエンリが急ぎ詫びる。

女神の配慮により、村人は精一杯働いて来たばかり。

今こそここに集まっているが……本来はそろそろ、夕食の時間なのだ。

だが、それが女神に失礼を働く理由になるか？

なるわけがない。

エンリは必要とあらば、腹を鳴らした村人を処刑し、自らも罰を受ける覚悟。

だが、慈悲深い女神はただ、顔をほころばせて。

「ああ、食事――そうだ食事だ。お前に夢中ですっかり忘れていたが、食事だぞ、アルベド!？」

画面の映像が消え、画面自体も消失する。

変わってモモンガはいつになく、興奮した様子。

ぴよんぴよんと子供っぽく跳ねている。

無邪気な表情に反して、大きな乳房も跳ねる。

ティアの目は、獲物を狙う猛禽のそれになっていた。

「はい、ここに来た日に食べるはずが、随分と長くおあずけになってしまっておりましてね」

「ああ、楽しみにしていたのに、思えばお前とばかり——だったな」

人目に気づいて口ごもるモモンガが、酷く愛らしい。

そして、あの粗食とすら呼べぬ“りある”で枯れた舌を潤したのが己の体液なのだと思うと……アルベドの表情も蕩けてしまう。

モモンガを抱き留めたアルベドは、素早くエンリに指示する。

「エンリ、モモンガ様は地上の食事を楽しみにしてらしたの。今すぐ、食事の用意をなさい」

「私ですか！ も、モモンガ様のお口にあう料理ができるか——」

エンリに限らず、村人もぎわめく。

わずかな間とはいえ、王宮の御馳走を見たばかりだ。

モモンガのおかげで余裕が出たとはいえ、村の食事は粗食である。それも今すぐとなれば、作り置き料理を温める程度しか……。

だが、偉大なる女神の慈愛は、人の想像など軽く超える。

「いや、かまわん。お前たちの食べる料理を出せ。せっかくの機会だ、皆で食事をしようではないか。カジットやブレイン、蒼の薔薇の者たちへの歓迎も込めてな。お前たちと共にする夕餉は、今見た王宮の料理にも勝るだろう」

上機嫌でモモンガが言う。

かつての食事よりは絶対美味だろうし、オーガニツクな味を感じてみたい。

だから早くしろという意図だったが……。

「も、モモンガ様………ツ!!!」

村人らの忠誠心を天元突破させるに十分であった。

全員が感動の涙で視界をぼやけさせつつも、急ぎ駆けだす。

その場で鍋を温められるよう、石でかまどを作ったり、火を起こす者もいる。

レンジャーのラッチモンとルクルットは、そんな作業の陣頭指揮を

始めていた。

女神との晚餐だ。

どんな英雄も王も神官も——これ以上の贅沢を味わえるはずがない！

（モモンガ様は天運をお持ちね……人間に関しては、よほどのことがなければ口出しする必要もなさそうだわ）

頭のいいアルベドはもちろん、主と村人のすれ違いに気づいているが。

良い方に転ぶならば、誤解は放置する方針である。

「これが神……」

「やべえ……器が違う……」

「六大神や八欲王並みということか」

「しかも、村人の会話を信じるならパンツはいてない」

「別の意味で器が違う……!」

実際に村人らの様子は、蒼の薔薇が王国で……いや、他の国でも見たことがない。

イビルアイの長い人生の中ですら……ない。

真に生きる喜びに溢れ、活気に満ちた人間が、これほど輝けるのかと思うほどだ。

女神を見る前は、狂信者の類と見ていたが。

あの女神に仕え、守られて生きるなら。

きつと……すべてが輝き、己自身も輝けるだろうと、蒼の薔薇にも確信できた。

確信できてしまったのだ。

「神に比べれば英雄なんて……ほんとうに小さな存在なのね……」  
ラキユースの呟きに答える者は、いなかった。

「すごい……おいしい……」

持ち寄られた各家庭のスープやシチューを口に運び。

モモンガはぽろぽろと涙をこぼしていた。

かなりこぼしてもいるが、もちろん咎める者などいない。  
「う　う　……  
来てすぐに食べたらよかつた  
でもアルベドと離れたくないし……」  
……

「ゆっくり味わって食べてください、モモンガ様。食べながらしゃべらなくても大丈夫ですよ」

泣きながら言葉を紡ぎ続けるモモンガを、アルベドが抱き支え、髪を梳くように撫で続ける。

食事の準備中に、アルベドは黒いドレス姿になっている。

モモンガと寄り添う姿は……仲睦まじい双子のようだ。

「モモンガ様……」

至極一般的な……どちらかといえば粗食である。

ンファイレアが魔法で作った香辛料を多めに使っている分だけ、ほんの少し贅沢ではあるが。

本当に、日常的な食事と変わらない。

周りの者は無論、目の前に湯気を立てる鉢を置いたまま……女神の様子をじつと見ている。

「神様の世界って、ごはんがおいしくないのー？」

クレマンティーンが空気を読まず尋ねる。

「モモンガ様はこの世界に受肉され、今初めて『食事』し、『味』を知られたのです。私やクロマルは先に受肉していましたが……モモンガ様は、これが生まれて初めての食事なのですよ」

(まあ実際は私のいろんな汁が、最初の食事なんだけどねー！)

口に出さず、内心で勝利の雄叫びをあげつつ。

女神の従者にふさわしい口調で言う。

モモンガは夢中で味わい、食べている。

「これがモモンガ様の初めての食事ツ……」

「お、お姉ちゃんー！」

最初に料理を口に運んでもらう栄誉を得たエンリと、その母が光栄のあまり失神した。

まだ幼いネムが、父と共に何とか支える。

「さあ、皆さんも食べてください。モモンガ様は、皆さんと共に食事す

るとおっしゃったのです。モモンガ様一人に食べさせてはいけませんよ」

アルベドが落ち着いた様子で言う。

皆が歓声をあげ、女神との晚餐を味わい始めた。

その料理はいつもなにげなく食べているもので。

味は何も変わらなかったが。

それに女神を感じ入り、涙まで流してくれたのだ。

いつもと同じはずなど……なかった。

「なあ……正直、俺もうここで定住したいくらいなんだが」

「そうね……私もいろいろ忘れてここにいたいって思うくらい。これは信仰なのか忠誠なのか愛情なのか……いえ、きっと全てを抱いてしまってる」

ガガーランとラキユースはすっかり、その場の空気に吞まれていた。

いや、モモンガと言う神に惚れこまされたと言ってもいい。

同じく聡明で慈愛と徳に満ちた（と思っている）ラナーとは何かが根本的に違う、絶対的な安心感。そして相矛盾しながら同居する庇護欲。

彼女に守られ、彼女に奉仕し、彼女の姿を見て生きていけるなら。

何もかも捨ててここに在るべきでは……と思わされるのだ。

モモンガは英雄でも王でもない。

まさしく神だと、魂で理解させられた。

「お、おい、ラキユースー」

「わかってる。私は王国の貴族だし……ラナーの親友だもの」

慌てて口を挟むイビルアイに、ラキユースは己の頬を叩き、気合を入れる。

「ただ……ラナーも、飲まれてしまうかもしれないわ。その時は……」

思いつめた顔……すらできない。

目に移る女神は今も、粗末なスープを本気の涙を流して食べてい

る。

同じ顔の黒衣の従属神が、そんな彼女をあやすように食べさせる。どんな宗教画よりも、どんな空想よりも美しい情景。

貴族のラキユースがここにいれば、彼女にもっと美味しいものを味わわせられるのではと。

そんな風に考えるだけで……離れたくないと思えてしまうのだ。

「あのな、モモンガのヤツはあの動死<sup>ソッペンピ</sup>体を……」

イビルアイがラキユースに言おうとした時。

黙って食事していたティナが反応する。

明らかにわざと剣呑な気配をまき散らす人物が。

蒼の薔薇の傍……ラキユースのすぐ背後に立っていた。

「あーあー、すーっかりオチちやつてるねー。カジツちゃんにブレイン・アングラウス、続けて蒼の薔薇。モモンガちゃんてはホントーに人たらしー♪」

あの惨禍を起こした主……クレマンティーン。

他の面々も慌てて身構える。

なお、ティアはチラリと視線を向けただけで。

動かずじつと、モモンガとアルベドを見つめ続けていた。

22：喜べ少年。君の望みはようやく叶う。

ラキユースの背後に立つ、クレマンティーヌ。

貴族らを拷問し、動死体<sup>ゾンビ</sup>に変えた当人。

そしてイビルアイにはわかるが……高位のアンデッド。

「な、なんだ貴様。私たちに何の用だっ！」

精一杯の氣勢で言うが、子犬が吠えているようなものだろうなど、イビルアイ自身わかっていた。

仮面を外し、外見も幼女まるだしのため、なおさらである。

「んー……。んんー……？ うーん」

当のクレマンティーヌは、蒼の薔薇の面々をゆっくりと見まわし、唸る。

「俺たちの顔になんかついてるってかい」

親しげな軽口で、意図を探るガガーラン。

「なーんか思ってた以上に汚れてないねー。あのブレイン・アングラウスはけっこー濁りかけてたしー、蒼の薔薇にも期待してたんだけどなー。つまんなーい」

それに対し、クレマンティーヌは肩をすくめ、あからさまな失望の顔で溜息をついた。

強さの話ではない、とわかる。

汚れていないなら、けっこうなことじゃないのか？

「どういふこと？」

ラキユースは、素直に問い返した。

「んー……世間の評判とか、知ってる？ そっちの盗賊ちゃんたちが遮断したりしてる？」

ゆらゆらと不安を誘うように身を揺らしつつ。

ティア……は無関心な様子なので、ティナに顔を向ける。

ティナは、黙って小さく首を左右に振った。

「はー。そうなんだ。わかっててコレかー……んー。私はお前ら、すっげえ気に入らねーけど、モモンガちゃんは仲良くしてくれると思っうよー」

一瞬、凶悪な笑みを浮かべ、殺気すらにじませ。  
ゆらめくその体から、突如ふわりと、首が取れた。  
肩の上から離れ、宙を舞い。

長い舌でれろりと、ラキユースの鼻先を舐める。

「きゃっ!?!」

相当の修羅場をくぐったつもりの彼女も仰天し、小さな悲鳴をあげてしまう。

「あつはは! びっくりした? この間、後ろから切りかかって来た奴に、首斬られるふりして、コレやったらもー、すごい反応でさー♪

この体も悪くないねー、って思ったよー」

「デュラハン首無し騎士か……」

イビルアイが、忌々しげに言った。

数こそ少ないが、強力な個体も存在しうるアンデッドだ。

クレマンティーンの肩の上には負属性の黒い炎が揺らめき。

浮遊する首の付け根も、同様の炎が噴き出す。

不用意に触れれば、負のエネルギーでダメージを受けるだろう。

「モモンガちゃんはデュラハン・フェンサー首無しの剣聖って言ってたけどねー。まあ騎士っ

ていうには、おねーさん軽戦士タイプだからー」

「で、さっきのはどういう意味だ。吸血鬼の私を指して汚れていないだど?」

舌打ちしつつ、イビルアイが詰問するように言う。

「そーんなたいした意味じゃないよ? モモンガちゃんの使徒じゃなく、元漆黒聖典として言うんだけどさー。蒼の薔薇……いや、王国のアダマンタイト級冒険者って、どー思われてるか、わかってる?」  
「当然、冒険者の最高峰だろう」

イビルアイが、ない胸を張って言うが。

他の面々は沈痛な顔になっていた。

「……王国に囲われた、半ば国の私兵だつてんだろ?」

ガガーランが吐き捨てるように言った。

えっ、とわかっていなかったイビルアイが目を丸くする。

「そーそー。王国のアダマンタイト級と言えば蒼の薔薇、朱の雫。



きよーつー点は、貴族のアインドラ家だよねー？　それで蒼の薔薇は、よく王宮に出入りしててー、組合を通さない仕事をしてる……だっけ？」

「……そうね」

少なくとも間違った情報はない。

ラキユースは、眉を寄せたまま頷いた。

「つまりー、貴族がコネでアダマント級になったとかー。王国に都合のいい裏仕事をしてるとかー、周りは思っちゃうんだよねー。すくなくとも、法国の六色聖典はそー考えてたよ？　竜王国みたいな事情なら、冒険者に協力頼んでも仕方ないけど……王国は現状、そうじゃないもんねー？」

「……………」

実際、王国内の冒険者組合や、オリハルコン級冒険者、ミスリル級冒険者も……そう考えている風潮はあった。

陰口も聞いたし、己の私兵と勘違いして妙な命令をしてくる王族や貴族もいる。

実力と実績で、そんな評判を払いのけて来たつもりだが。

全てを払拭できたわけではない。

国外から見れば……仕方ないだろう。

蒼の薔薇から、険悪な視線がクレマンティーンに向けられる。

「あー。勘違いしないでねー。別にだから悪いとかー、蒼の薔薇は弱いとかー、そーんな話してないよー。私だつてアンデッドになる前だと一対一なら勝てても、二人相手したら確実に負けちゃう程度の腕だったからねー……たださあ」

ふわりと。

首が再び、肩の上に戻る。

「そーんな風評受けてた連中は、もつと荒んで、濁った目してると思ってたんだよねー。ほんとぎーんねん。そっちの盗賊ちゃんたちは、けっこう汚い方も知ってそーだけど……足洗ってる感じだしさー」

濁りきった目で、もう一度面々を見定める。

無様に捕まっても、あの女神を見ても、こんな挑発をされても。

なお、正道を歩む在り方が、クレマンティーヌには不快なのだ。

「……で、なんだ。私たちに喧嘩を売りに来たのか？」

「アンデッドになる前ならそーかもねー。でも今はちよつと違ってねー。私がしてるよーな、汚い仕事の片棒かっいでくれるか見に来たんだー」

「ふん、じゃあお眼鏡にかなわなくて残念だったな！」

「ホントだよー。だから、全員とは言わないんだけど、盗賊ちゃん二人……いや、片方でもいいから貸してくれないかなー？ 危ないコトはさせないって、モモンガちゃんに誓うよー？」

へらへらと笑い、ゆらゆらと揺れながら。

クレマンティーヌは、ティアとティナを見た。

「そつちの子とか、モモンガちゃん間近で見たくないー？」

モモンガをじつと見ているティアに言う。

いけない、と思ったティナが割り込もうとするが。

「見たい。触ったり舐めたりもしたい」

「あ、はい」

即答に、クレマンティーヌが初めてたじろいだ。

「おま、バカ！」

一斉にティアに怒鳴る蒼の薔薇であったが。

「そう。できればモモンガのおま○○を——」

ティアは発情し、濁った目で息を荒くして言いかけ。

他の面々に取り押さえられ、口を塞がれていた。

「……お前ら別の意味で濁ってるのな」

そう呟いて、距離を取るように後ずさりつつ。

じゃあ後でよろしくー、と手を振って去るクレマンティーヌ。

「私より遙か高位のアンデッドにドン引きされてたぞ」

「王国に囲われてる扱いの方がマシだったな」

「そうね……変な噂にならないかしら……」

「いくら理想の相手だからって暴走しすぎ」

「だが反省しない」

「しるし！」

蒼の薔薇には緊張感のない……ある意味、いつもの空気が戻っていた。

なお、別にティアが狙った効果ではない。

「はあ……おいしかったー。まだ食べたいけど、おなかいっぱいだー」  
子供みたいな表情と口調で、モモンガはアルベドにもたれかかっている。

「あまり食べ過ぎては、太ってしまいますよ」

「うー、だっておいしかったんだよお」

すりすり甘えるモモンガに、アルベドが仕方ないなあと微笑む。  
だらしなく、威厳に欠けるとも見えるが。

美しい女神を抱き留める、もう一柱の黒衣の女神ゆえ。

それは尊い、まさに一幅の絵画の如きもの。

「はあ……これからは食事にはきちんと出て来た方がいいな」

「私も、モモンガ様に手料理など振舞わせていただきたいですね」

「そうだな。アルベドは確か、家事全般も得意だったか」

「しばらくは、いろいろ学習すべきですけど」

アルベドが、主の食べ残しを時折つまみつつ。

モモンガの髪や肩、腹を撫でる。

本当はもつと際どい愛撫をしたかったが、できるアルベドは人目を意識していた。

事実、村人らは、神々しい二柱の姿を飽きもせず見つめていた。

女神モモンガは、それぞれの家の料理を少しずつ食べた。

それぞれを褒め、それぞれに涙すら流して感動していた。

今はいつもと違うゆるみきった顔で、己の腹を撫でている。

村人たちと糧を共にし、女神が満足してくれたのだ。

（モモンガ様が、うちのシチューを褒めてくださった……）

（白パンを焼いといよよかった……うう、残ったシチューを付けて食べたらした）

（うちの畑の……私が皮をむいた芋を……）

(私が摘んで来た果物を、あんなおいしいそうに……)

村人の信仰心はさらに上昇。

美女という外見にやっかみを感じてもいた主婦層も、無垢な子供のような彼女にむしろ庇護欲を刺激されていた。

子供や孫に向けるような感情。

ただ女神に守られる身ではなく、女神を喜ばせられるのだという誇り。

己の日常の在り方への、この上ない肯定。

なにげない料理、なにげない農作物、なにげない薬草や果実。

それらすべてに、女神は涙を流し、歓喜し、称賛してくれたのだ。遥か高みにある御方が褒め、認めてくれた。

これ以上の労働対価があるだろうか。

もつと喜んでもらうため精進しなければと。

何の戦闘力もないカルネ村の人々は、深く信仰を捧げた。

(ああ、お使いになられた腕を舐め回したい……)

(スプーンとフォークしゃぶりたい……)

(スープの椀や薬草茶のカップに直接、唇をつけてらしたな)

(かぶりついた串焼の串を足元に落としていたぞ！)

一方、悪い意味の信仰心も、村の男衆の中では高まっていた。

(あのアルベドって女神、モモンガの使ったスプーンを口の中で舐めまわしてる)

さらに、ティアはその鋭い観察力を無駄に使っていた。

クレマンティーンの話がなければ、彼女はその盗賊能力をフルに使って女神の使った食器その他を回収していただろう。

「モモンガちゃん、食後にごめんねー。ちよつといいかにはやー？」

ゆったりとくつろぐモモンガの元へ、唐突にクレマンティーンが近づく。

「ん。なんだ？ 追加の報告か？」

アルベドの体に頬ずりしつつ、ぼんやりと答えるモモンガ。

「王女様呼ぶ前にちよーつと軽い仕事に入つときたくてー。私みたいのが王女様が来るときにいてもねー」

「なんだ、もう戻るのか」

「例のゾンビが王都に行くと、いろいろ警戒とか面倒になるでしょ？ その前に派手に王都の中でもやつといた方がいいかなーって」

肩をすくめて言う。

「ああ……あれは従者スクワイア・ゾンビの動死体だったか。30レベル後半だから……確かに、かなりの混乱になるだろうな」

「まだ合流して増えるしねー。王都が混乱に入る前に仕事した方がいいでしょー?」

「なるほど。仕事が終わったら、お前には相応の褒美を与えねばならんな」

「んふふふー。期待しとくねー♪」

クレマンティーンの濁った目に、子猫のような煌めきが一瞬浮かぶ。

「それで、既にアテはあるのか?」

「いやー、ニニヤちゃんのとこの例の貴族を締め上げた時に聞いたんだけどねー。お姉さんは八本指って犯罪組織に売られて、王都に運ばれてるっぽいんだよー。たぶん、裏娼館とかにいるんじゃないかなー?」

「ほ、本当ですか!」

食後のモモンガをぼんやりと眺めていたニニヤが、慌てて立ち上がり——叫ぶように、祈るように言う。

モモンガは黙って、クレマンティーンに先を促した。

「いや保証はないけどさー。器量よしだったんでしょ? 体が弱かったら死んじゃってるかもだけどー……そうじゃなかったら、連中も簡単に使いつぶさないよー。場末に回されちゃうのは、最初から問題多い子ばつかみみたいだしねー」

「場末……か。まだ底があるわけか」

痛ましげに、モモンガが言う。

「まー、すぐ死んじゃうからそっちの方がラクかもだけどねー。てい

うか、ニニヤちゃんさー。お姉さんがまだ生きてたら……地獄も生ぬるい状態だよ？ それでも助ける？ ラクにしてあげた方がいいんじゃないーい？」

ニニヤに近づいたクレマンティーンが、その貌を覗き込み、どろりとした視線を向ける。

「っ……それでも、助けて、です」

振り絞るように言った言葉に。

モモンガは微笑む。

そんな我儘は、モモンガ自身にもよくわかった。

それぞれの都合で離れたギルドメンバーへの想いと同じだ。

そしてまた、もう一人の人物にとっても、ニニヤの想いは共感できるものだった。

「クレマンティーンよ。儂からも頼む。己のエゴと承知でも……道を外れても、会いたい家族はおるものだ」

「か、カジットさん……」

思わぬ援護に、ニニヤが感じ入った。

ニニヤも、カジットの目的を聞いて感じるものはあった。

何よりこの数日、二人は同じ魔力系魔法詠唱者として、それなりに行動を共にした仲間もある。

両者の外見格差は激しいが、それでも確かな共感と信頼が二人にはあった。

「ふふ、良き食事の後に……いいものを見れた。今宵は本当に良き夜だ……だが、裏娼館とやらの場所はわかつているのか？」

ふと疑問に思い、首をかしげる。

クレマンティーンはまだ王都に至っていないかったはず。

さすがに早朝までに探すのは、モモンガとしても面倒である。

あと、ろくな場所ではないだろうから、モモンガはあまり探りたくない。

汚い仕事は押し付ける気満々だ。

「そう！ それなんだけど、ちよーど王都に詳しい子らがいるでしょー？」

「王都の裏娼館、大きいのが一軒だけある」

モモンガのすぐそばに現れた蒼の薔薇の盗賊——ティアが言った。

「ほう。手伝ってくれるか」

猫を撫でるように、ティアの頭を撫でまわすモモンガ。

「ほわひゃはああああ」

腑抜けた顔でびくんびくんと全身を震わせるティアは、なんとか頷いて返す。

うれしよんもしていたが、イジャーニーヤの衣装は長期潜伏に備えて吸水性抜群であった。

「……さすがに心配。私も行く。鬼ボスはこつちに残す。王都にいるところを見られると厄介」

ティナが呆れた様子で続く。

「んふふふー。じゃあニニヤちゃんとカジツちゃん、それと蒼の薔薇の双子ちゃんもいっしょに行こっかー♪」

「はい、姉さんを見つけて……姉さんに酷いことした連中に……」

ドス黒い復讐心に染まるニニヤを、クレマンティーヌが傍らに抱き寄せる。

カジツトが心配そうに、ニニヤへと付き添い。

アへ顔を晒しているティアを、ティナが引きずって行った。

漆黒の剣や、イビルアイ、ブレインらも同行を申し出たが……クレマンティーヌが隠密行動を理由に断った。

この襲撃からほどなく、ラナー王女も呼ばれるのだ。

それなりの面々を、この場に残す必要はある。

あるいは、あの王都近隣の惨状を映したように——その仕事ぶりを、王女に映して見せるかもしれない。己のそれを見て、王女様がどんな反応を見せるかと。クレマンティーヌは嗜虐的な笑みを深めた。

「よし。ニグン、王都ならお前もわかるか？ 〈<sup>ゲ</sup>転移門を開いてやれ」  
「ははっ、クレマンティーヌ。モモンガ様の名に恥じぬ働きをするのだぞ」

「アンデッドになっても硬いねー、ニグンちゃん」

クレマンティーヌが肩をすくめる。

六大貴族を始めとした、権勢ある貴族の大半は領地ではなく王都にいる。

各貴族の代理として出向いている血縁者も多い。

そして、八本指……少なくとも奴隷部門は見逃せまい。

始末すべき相手の数は多く、また時間をかけすぎれば逃す獲物も出て来るだろう。

人手が必要だ。

ここでカジットと、蒼の薔薇の盗賊を使えるのは大きい。

娼館にある名簿を手に入れるだけで、狩るべき獲物を相当数確定できる。

王族の名前でも出て来れば……一気になさくなるだろう。

「そんじゃ、しゅっぱーっ♪」

陽気な声と共に。

クレマンティーヌは、ニグンが開いた〈<sup>ゲート</sup>転移門〉をくぐった。

ニニヤ、カジット、ティア、ティナを伴って。



## 23：ペロツ……これは

食後。

女神は長椅子に寝そべり、アルベドに膝枕され。質素かつ豪勢な晚餐も、かたづけられる。

二柱の女神の左右を使徒ニグンと神官エンリ。

背後に神獣クロマル。

また、ブレイン、漆黒の剣、蒼の薔薇、ンフィーレアといった面々を傍に置き、作業を終えた村人らも全て戻りつつあった。

「良き夕食だったな。私の（この世界に来て）初めての食事にふさわしいものだった。皆ありがとう」

膝枕から身を起こし、モモンガが村人らに礼を言う。

それだけで、村人が感激の涙を流さずいられない。

「はあ……このまま眠ってしまってもいい気がするが。王女には会っておかねばな」

「モモンガ様が心砕かれずとも、と思いますが」

起き上がったもなお、もぞもぞと身をすりつけながら、けだるげに

呟くモモンガを。

アルベドは飽きず撫で、さすり続けながら答える。

「そうも行くまい。蒼の薔薇は、私のために人手を貸してくれたのだ。私もまた、彼女らの働きに応えねばならん」

アルベドの髪を指に巻き付け、弄りながら言う。

「ん……よし、会うとするか。あちらも食事は終えただろう——  
〈ブレイナー・アイ次元の目〉」

身を起こし、既に場所はわかっているのだ。

再び占術系呪文で状況を見る。

モモンガの目が、王城の中へと入り込み——暗い部屋の中、一人鏡に向かう彼女を見つける。

彼女は何かを呟きながら、表情を変え。作り。変え。

「ん？ ふむ——ああ、そうか。王女殿もたいへんだな」

一人王女の姿を見て、モモンガは頷き、アルベドの髪を撫でた。

「アルベドよ。彼女との対話は、途中からお前が行え。私は……お前の膝で休ませてもらうおう」

「くふーっ、喜んでー」

歪んだ笑みを浮かべるアルベドを、モモンガがやさしく撫で、額にくちづける。

アルベドとしては久しぶりの直々の命令である。

奮起せずにいられない。

「さて……とりあえず王女のエスコート役を呼ぶか……  
〔第六位階死者召喚〕  
サモン・アンデッド・6th

ゆらりと、その場に艶めかしくも無表情な女性が現れる。

耳はエルフのように尖り、眼球は黒く、瞳は紅く輝いていた。

「吸血鬼の花嫁!? 呪文で呼び出せるのか!」

イビルアイが驚愕する。

確かにアンデッドだが、吸血鬼系を呪文で呼び出すなど聞いたことがない。

実際にはスキルや能力にもよるのだが……そこまで説明はしない。

「天使や精霊では、目立つ。醜悪な怪物や、見知らぬ男が現れては、彼女も気分がよくないだろう。隠れて連れ出すなら、彼女が適任と思つてな」

モモンガが召喚した吸血鬼の花嫁の髪を撫でる。

美しい吸血鬼が目を細め、悦びを見せた。

アルベドは小さく唇を尖らせる。

「〔転移門〕——行け。その先にいる娘を、丁重に連れて来い」  
〔転移門〕  
ゲート  
頷き、吸血鬼の花嫁が〔転移門〕に入った。

ほんの数瞬で、リ・エステイゼル王国第三王女ラナー・ティエール・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフは連れ出され、見知らぬ土地にいた。

微笑む吸血鬼の花嫁に抱き寄せられ、抵抗も無意味と悟り……覚悟

して、奇妙な黒い穴をくぐったのだ。

ラナーは目を見開き、息を飲む。

そして、素早く周囲を見回した。

心配そうに見るラクユースたち。

仮面をしていないが……おそらくイビルアイ。

そんなものは些事だ。

それよりも……。

漆黒の城塞。

双子の女神。

神話級魔獣。

法衣の死者。

女暗黒神官。

瞬時に観察し、判断し——跪いた。

「——ここはカルネ村、ですか。失礼ながら、そちらの白いドレスの御方が女神モモンガ様……でよろしいでしょうか？」

土に顔を擦り付ける。顔の汚れなど気にしてはいられない。

「そうだ。私がモモンガ……此の地に降りたる神。よくぞ来た、ラナーよ」

敢えて威圧はせず、アルベドに身をすり寄せたまま応じる。

「私如き小娘に何を求め、お呼びなされたのでしょうか」

まだ顔は上げない。

彼の女神も、その配下も……蒼の薔薇は無論、王国全軍も容易に滅ぼしうる存在だろう。

「ああ、それについてだが……そうだな。これからの対話は王国の密事に関わる。ラクユース殿ら蒼の薔薇は立ち合いこそすれど、内容は聞こえぬようさせてもらうとしよう」

ラナーではなく、ラクユースらの方を見て言う。

問いかけではない。

宣言だ。

圧倒的な実力差を、いやというほど見せつけられたのだ。

ラナーも、蒼の薔薇も、ただ頷くほかない。

「では——」

ラキユースらに、その続きは聞こえなかった。

無詠唱化か、アイテムか……いずれにせよ、音が遮断されたのだ。しかも、うつすらとした霧が渦巻き、中の詳細を隠す。

これでは読唇術も意味を為すまい——実際、蒼の薔薇で読唇術が使えるのはティアとティナ。ラキユース達では、会話の詳細など伺い知れない。

ただ、ラナーが暴れる様子があれば……飛び込まねばならないと覚悟した。

「ラナー殿、顔を上げるがいい。椅子も用意した、しつかり話し合おうではないか」

ラナーが顔を上げれば、今しがたまでなかった高級な椅子がある。

モモンガが〈道具作成クリエイティブアイテム〉で作った、特に効果もない椅子だが。

そんな魔法自体、ラナーにはほぼ未知の領域だ。

座れば目の前には、美しき双子の女神——モモンガとアルベド。

「私如きにこのような機会をくださったこと、感謝を申し上げます。偉大なる女神モモンガ様」

恐縮した様子で、いかにも無垢な魅力に溢れた姫君といった様子で言う。

「こちらこそ二対一ですまないな。だがアルベドは私の半身。離れるわけにはいかないのだ」

「なるほど。アルベド様、ですね。戦士長からはモモンガ様の名しか聞いておらず……まことに失礼をいたしました」

ぴつたりと密着したままの二柱に、ラナーはあどけなくも見える様子で詫びる。

そんな彼女を、モモンガは冷たい目で見ていた。

「……王都では仮面が流行っているのかな？」

「仮面、ですか？」

「愛らしい少女の仮面を外させたばかりだからな」

「ああ、イビルアイですか。彼女は魔法詠唱者マジックキャスターですからね。特殊な装備なのでしよう。彼女の素顔は、私も初めて見ました♪ あんな愛らしい顔をしてらしたのですね」

にこやかに笑うラナーは、無害な少女にしか見えない。

「ほう。ラナーはどんな魔法系統を使うのだ？」

「私が……？」

「仮面は特殊な装備なのだろうか？」

「……女神様は全てお見通しなのですか？」

ラナーの表情と声が「ずれた」。

「いいや。見通してこんな質問をしては、趣味が悪かろう」

「………覗いてらしたのですか？」

「ふふ、ラキユースの言った通り賢いな、ラナー」

どこまでもやわらかく、アルベドに頬ずりしながら、モモンガは答える。

「その上で私を呼ばれたと——何をお求めなのですか？」

「ラナー次第だろう。とりあえず、聞きたいが……お前は、私たちの利用方法を考えている。崇めるつもりなどない。間違っているか？」

「……隠す意味ありませんね。その通りです」

「ならば私もまた、お前を利用してかまわんな？」

「取引、とも言えませんね。利用で済ませてくださるなら、何なりと」

観念したようにラナーが肩をすくめる。

「では、もう一つ質問だ。ラナー、お前は退屈なのか？ 何かに夢中か？」

「……夢中なものがあります」

「そうか。ではアルベドよ、後は任せる」

モモンガは、アルベドにもたれ、身を寄せ滑らせるようにして……長椅子に横たわってしまった。

猫のように、アルベドの膝に顔を乗せ。

彼女の黒い翼や髪をいじり始める。

もう、ラナーを見てもいない。

そんなモモンガを、アルベドも心底愛おしそうに撫でる。

「では、続きは私が。頭はいいのでしょうか。仲良くしましょう、ラナー」

「……はい」

己の内を見透かすようなアルベドの目に。

底知れぬモモンガとは別の……己と同等かそれ以上の知性を、ラナーは感じた。

「——意義ある話し合いだったな。おかげでアルベドも久しぶりに楽しそうにしていた」

「いえ、こちらこそ。私もクライムと、お二方のように仲睦まじくになりたいものです」

「あまり搦め手にこだわらず、時には直球でもいいと思うのだけれど」  
おおよその予定が定まり、時間はすっかり真夜中。

三人は、和やかに会話する。

とはいえ、アルベドとラナーは今も腹を探り合う状態だ。

「そういえば、ラナーの睡眠時間を奪ってしまったな。戻って眠るか？」

「……いえ。お二人と話せる時間はそれ以上の価値がございます。お邪魔でなくば、可能な限りは」

ふと思いついたように言うモモンガに、少し緊張を込めてラナーが答える。

ラナーとしては、アルベドよりモモンガの真意がわからない。

二人の間の愛情、欲情、上下関係は見えるが。

何を考え、求めているか、よくわからないのだ。

「そう構えずとも、何もしないぞ」

鷹揚に笑うモモンガは、相変わらずラナーをろくに見ない。

アルベドを見つめ、陶然と触れるばかり。

会話中も、二人が互いを見る目には、ラナーがクライムに向けると同じ執着や依存や狂気の混じった愛情があった。

「モモンガ様、ラナーを帰す前にクレマンティーヌにも連絡を取られ

ては？」

「ん？ ああそうだったな。お前の膝が心地よくてすっかり忘れていた」

「くふーっ、それほどでもー！」

いや、ラナーよりアレかもしれない。

（クレマンティーン……貴族を殺戮してアンデッドに変え、王都に進軍させている存在、ね）

ラナーが対話から得た情報はその程度。

直接の映像も見ていない。

後で、帰してもらう前にラクユースと情報交換する必要がある。

「<sup>メッセージ</sup>伝言」——私だが、状況はどうだ？ ああ、第一王子を名乗る男がいた？ ん？ ああ……そうか。無論、王族だろうと平民だろうと区別する必要はない。今回は人数も多いのだろう？ 門で騒ぎが起きるまで、しっかり思い知らせろ。乱入者の対応もお前に任せろ。罰するべき者には罰を。苦しんできた者には救いを、だ」

モモンガが、耳に手を添えて合間を置きつつ、見えない誰かと会話するように言う。

助けてやる気などないが……女神はラナーの意向を、問いもしない。

「あなたの兄かしら？」

「たぶんそうですね。八本指——犯罪組織との関係は知っております」

アルベドとラナーがそんな話をする間にも、通話が終わる。

「バルブロというのはラナーの兄か？」

「はい。恥ずかしながら」

「……特に大事でもなさそうだな。ならばかまわんか」

「はい。如何様いかようにでも」

どうせ、既に取り返しのおつく状況でもなかろうに——とは口にしない。

「そういえば第一王子は先の話にも出てこなかったな」

「愚物です」

「ただ愚かなだけなら、私も気になけなかつたが。愚物かつ外道ならば仕方ない。ああ、己を知り賢く生きるならば、外道でも気にしないぞ」

「……ありがとうございます」

思いつきり失礼なことを言われているのだが、実力差と状況が反撃を許さない。

それに……事実でも、ある。

ラナーにはしつかり、身に覚えがあるのだ。

「明日は王都も王宮も忙しくなるだろう。当人の愚行ゆえとはいえ……ふふ、ラナーの思惑通りに進みやすそうだな」

「……ありがとうございます」

「では、戻るがいい」

「あのっ！」

「モモンガ様が戻るよう言っているのよ、ラナー。不敬ではないかしら」

「よい。私も意思確認をしなかつたからな」

冷たく言ったアルベドを、モモンガが抑える。

「あ、あの、すみません。ラキユース達と少しだけ、話をしてきてもよろしいでしょうか？ モモンガ様とこうしてお会いできた以上、彼女らと今後を話し合っておきたい……」

「そうだな。彼女らは王都に戻るため、また数日はかかるのだったか。かまわんぞ。遮蔽も解除しよう」

霧が消え、外部の音が戻る。

「ラナー！」

その途端、無事を問うようにラキユースが声をかけた。

ラナーは安堵の息を漏らす。

少なくとも、ラキユース達に妙なことは吹きこまれていない。

彼女は今も、ラナーの良き親友だ。

「だいじょうぶ、ラキユース。モモンガ様とはきちんとお話できたから。ただ、直接に説明いただくのも手間でしょうか？ ラキユースの見ただことも、教えて？」



いつもの表情、いつもの声で。

ラナーは席を立ち……ラキュースの方へ駆け寄った。

女神とこれ以上対峙するのはつらい。

愛らしい親友おもちゃに慰めてもらいたくもなる。

女神は語らう。

「随分と気に入った様子だな、アルベド」

「モモンガ様は気に入らない様子ですね」

「ふふ、私が人間と会話する時……お前が苛立つ理由を理解できた。

私も、己が思うより、独占欲が強かったようだ」

「あの娘は会話相手として面白かっただけで……そんなつもり、ありませんよ?」

本来は同じ体の二人だ。

互いの感情は相互に干渉し合う。

そんなつもりがないとも、感じ取れる。

感じ取れるのだが……。

「だが、この世界に来て見た中では、間違いなく美少女だからな」  
主が、己のために嫉妬し、やきもちを焼いているのだ。

光栄過ぎて、アルベドは芯から蕩かされてしまう。

「……私が愛するのはモモンガ様だけですよ」

「なあ、アルベド」

「なんですか?」

「……………ごめんなさい」

その言葉と表情だけで。

アルベドは絶頂してしまった。

嫉妬したこととか。

やきもちを焼いたこととか。

かつて他の者と親しく会話したこととか。

ヴァンパイア・ブライド  
吸血鬼の花嫁を撫でたこととか。

さっきの会話中に下半身を悪戯したこととか。

いろんな全てを、主たるモモンガが。

本来は下僕たるアルベドに。

謝ってくれているのだ。

下半身が、少しどころでなくまずい状況になったアルベドは、主が  
〈転移門〉でラナーを送る時も。

同じく裏娼館から保護した娘らを回収し、ティアとティナが帰還し  
た時も。

陶然とした顔で、席から立たなかつた。

結局、アルベドは主のグレイター・テレポーション上位転移で城塞内に帰るまで座つた  
ままだつた。

「ペロツ……これは発情雌臭！」

ただ一人、帰還した双子忍者の片方が、素早く女神転移後の長椅子  
を舐めて真実を知る。

もつとも、魔法で創られていた長椅子は、その数秒後に消滅したの  
だが。

## 24：滅日（ほろび）（前編）

その前日。

王都リ・エステイーゼ城壁門の一つに、街道巡回兵が何度も来た。街道に動死体<sup>ゾンビ</sup>の群れが現れ、対処できずいるのだという。

最初こそ動死体<sup>ゾンビ</sup>くらい何とかしると、門衛らもぞんざいに言っただけで追返したが。

何度も来る必死さに、異様な気配を感じた。

ゆえに、王都治安を預かる貴族へと報告に向かう。

だが、王都は長年——いや建国以来、外敵の脅威に晒された前例がない。

不死者や怪物で滅んだ都市などいくらでもあるというのに。

危険な異国の話、己らとは関係のない物語りと聞き流し。

ほんの数百年の前例を——絶対の法則と過信した。

何の根拠もない無意味な自信。

愚かしい安全神話。

今や王都の衛兵や巡回使は腐敗の温床であり、犯罪組織とずぶずぶに癒着しきった集団。彼らは武官でも文官でもないが……己らを以て貴族に準じる官僚なのだと思われている。王都内の随所で賄賂を受け取り、犯罪を助長し、都合よく制定された法を最大限利用する者たちだ。

当然ながら、彼らを取りまとめる貴族もまた……己の私腹を肥やす以外の能力を持たない。

面倒な報告は握りつぶす。

再三来れば、会いもせず追い返す。

王都は絶対に安全なのだから。

ありえない報告で、己を煩わせるような部下は無能である。

当然ながら王城にも報告しない。

無駄な報告で、王や大貴族を煩わせてはならないのだ。

彼に限らず、この日の王都貴族には、もっと大事な仕事があった。

次期国王たる第一王子バルブロに、貴族的な、優雅で、愉しく、支

配者にふさわしい「遊び」を教授するのだ。

無能な現国王と違い、バルブロ王子は貴族の誇りをよくわかってい  
る。

その血の権利と義務を、よく知っていたのだ。

王国貴族にとって、これ以上重要なことなどあるまい。

夜、少なからぬ王都貴族と……王国第一王子が、「特別な遊び場」  
に向かう。

己の運命を知らぬまま。

王都の外に迫る死者を知らぬまま。

その夜。

王国に深く根を張る犯罪組織、八本指は大忙しだった。

奴隷売買部門の運営する娼館に、第一王子バルブロがお忍びでやっ  
て来るのだ。

第三王女の飼い犬でもあるアダマント級冒険者——蒼の薔薇  
も今は王都に不在。

気に入って常連になってくれれば、傀儡化はなお容易になる。奴隷  
制度の復活も夢でない。

この流れに他の部門もこぞって乗る。

金融部門は少なからぬ資金を提供し。また、借金から身を売った娘  
らを、前日から裏娼館へと回した。普段は配置されない、陥れられた  
貴族や商人の娘らも飾られる。

賭博部門は元より第一王子と十分な縁がある。顔見知りらを裏娼  
館にさりげなく配置する。他の客や店員に見知った顔がいれば、警戒  
もすまいという配慮だ。

警備部門は最大戦力である六腕を配置。王子の私兵のように錯覚  
させ、王城内に根を張るつもりだ。うまくやれば、戦士長ガゼフのよ  
うに、表の地位を獲得できるだろう。

暗殺部門も、多数の人員を警備用に配置した。直接に手を下さずと  
も、この区画に近づく者を全て調べ、無用な騒ぎを一切起こさせぬよ

う、最大級の警戒態勢を敷く。

常ならば水面下で争う八本指が、一枚岩となったと言えたらう。

とはいえ、妙に昔気質<sup>むかしかたぎ</sup>で職人肌な窃盗部門は、関連性の低さもあって距離を取り。

密輸部門はなぜか、人員を割けないと言い出した。

さらに、麻薬部門からは一定量の麻薬が融通されていたが……当日になって、来るべき人員を寄こさない。いつもなら、麻薬部門の長ヒルマは自ら顔を見せ。場合によっては王子に抱かれる役すら買って出たろうに。

八本指はその夜、忙しかった。

密輸部門と麻薬部門を糾弾するのは、明日以後でいい。

奴隷禁止によって斜陽となった奴隷売買部門は、焦っていた。

他の部門もそれぞれに焦る理由があった。

目の前の餌が大事で。

いつもの慎重さを……忘れていた。

ひらたく言えば浮かれていたのだ。

だから、王都の外をよく知る二つの部門が現れぬ理由に思い至らなかった。

あるいは彼らも、王都の安全を根拠なく信じ込んでいたのか。

戦闘力自慢の六腕も、平和ボケしていたのか。

密輸部門と麻薬部門は、ただ「耳が早かった」。

彼らは貴族の連続死、王都に迫る死者の脅威を、正しく知り。

また、殺戮の実行者が今夜にも王都に来かねないと予見し。

ろくに対応できぬであろう衛兵。

王都の市場を捨てられぬ他部門。

情報共有したがゆえの混乱。

自身の脱出が遅れる危険性。

冷静に。

冷酷に。

彼らは分析し、判断した。

両部門で協力し、仲間の八本指にも気づかれぬまま。

この夜、素早く王都を脱出したのだ。  
しつかりと、死者の迫り来る方角には背を向けて。

バルブロ王子は機嫌がよかった。

王宮のメイドは貴族の子女である。

乱暴にすると面倒なのだ。

義父からもうるさく言われている。

王国の頂点たる己に、好きにできる玩具がないなど、おかしいではないか。

だが、今日は好きにできる場所に行く。

とても機嫌がいい。

「そういえば、貴殿からもらい受けたこの我が愛馬は、私に直接仕える特別な存在。言わば神の使徒に等しい！」

馬上で横に並ぶ貴族らにも、機嫌よく話しかける。

彼が人から受け取った品を覚えているなど、稀有なことだ。

「だから、今夜はこいつにも女の味を教えてやろうではないか。もつとも、下等な平民女などに、我が愛馬の相手はもつたないだろうがな！」

とんでもないことを大声で言いながら笑う。

これがバルブロという人物。

常識も現実も知らぬまま、己を神の如く勘違いして育ってきた男である。

取り巻きの貴族らも、追従の笑顔がひきつっていた。

八本指の暗殺部門が周辺警戒を密にしている、別の意味で助かったというべきか。

やがて彼は、本来は裏娼館手前で止めるべき馬を、直接乗り付け。しかも、娼婦に馬の相手をさせろと言いついで出ず。

厩舎ではなく館内で。

彼なりの、気の利いた見世物のつもりで。

夜の路地を、三つの影が歩む。

よく見れば、左右の屋根を素早く駆ける二人の女盗賊もいる。

彼女らは周囲に散る暗殺部門の兵隊を始末し、また沈黙させていた。

「ねー、ニニヤちゃん。これから私たち、裏娼館に乗り込むんだけどさー」

「はい……」

強張った顔で頷くニニヤを、クレマンティーヌは一瞥する。

「お姉ちゃんに、ひっどいことした連中がうじゃうじゃいると思うんだー。実際、してる最中に出会っちゃうかも。いや、お姉ちゃんももう生きてなかったら……ぜーんぶ、仇かもしれないねー？」

「……………」

言葉はないが。

殺意と憎悪が膨れ上がるのは手に取るようにわかる。

「おい、クレマンティーヌ」

「黙っててねー、カジツちゃん。共感してるみたいだーけーどー、この子とカジツちゃんは大きく違う点があるんだよー？ 復讐<sup>これ</sup>については、私が先輩なんだからー。教えるのが義務、でしょー？」

カジツトが口を挟むが、クレマンティーヌは耳を貸さない。

「あのさー、ニニヤちゃん。わりとマジなアドバイスなんだけどさー。熱くなって勢いで行動しちやダメだよー」

「…………復讐しちや、ダメって言うんですか？」

ニニヤの殺意が、クレマンティーヌに向く。

己の復讐を妨げる存在と、見ているのだ。

心地よい、子犬の威嚇のようなものだ。

ひらひらと手を振り、軽く払うそぶりを見せた。

「ちがうちがーう。勢いでやっちゃうとさー。あっさり殺して、死体を延々と刺したり切ったりしちやうんだー。とつくに死んだ奴を延々とねー」

「……………」

ニニヤ自身、容易に想像がつく。

「でさー。あとになって、すつごい後悔するんだよー。なんでアイツをあんな、あつさり殺しちゃったんだろーって」

「っ、やめろクレマンティーン」

嗜虐趣味のないカジットには聞くに堪えない言葉だ。

だが、クレマンティーンは止めない。

「そーするとねー？ おねーさんみたいに、復讐した後で壊れちゃうかもよー？ どうでもいい相手でも、後悔しないよーに痛めつけて殺さないと気がすまない、こんな殺人狂になっちゃうかもー」

「……………そう、ですな」

素直に頷いた。

「そうだよー。だからね。落ち着いて冷静に…………憎つたらしい奴は念入りに。ニニヤちゃんが満足するまで、痛めつけて痛めつけて痛めつけて、しつかり後悔させて…………殺そうねえ？」

「はい！ クレマンティーンさん、ありがとうございます！」

ニニヤは元氣よく頷き。

光の消えた、濁った目で礼を言った。

「これまで、あんなに念入りにやってきたんだよー？ サクツと殺しておしまいじゃ……………ここで酷い目に遭ってるカワイソーな人たちに申し訳ないし……………死んじやった人たちも浮かばれないからね」

「はい、しつかり思い知らせましょう！」

ニニヤは既に暗黒面へ堕ちていた。

(アカン)

カジットは一人、頭を抱える。

自分がいかに常識人で、善人だったか。

女神のおかげでもあるが…………改めて思い知ったのだ。

早朝。

王都リ・エステイーズ正門を守る門衛たちは、いまだまどろみから覚めきらぬ中。



突然の轟音に飛び上がった。

王都の門は日暮れと共に閉ざされる。

当然ながら、今はまだ門の開かれる時間ではない。

外を見張るべく配置された兵もいるが、ろくに見張りなどしていない。王都が攻め込まれることなど「ありえない」のだから。

暴れ馬車でもぶつかったのかと、門衛たちは不平をこぼしつつ衛兵用の小門に向かう。

王都を守る大門も長年の平和に形骸化し、今や強度より装飾重視。門に大きな傷がつけば、その者は多額の賠償を請求されるだろう。

裕福な相手なら門衛がおこぼれにありつくのも容易だ。

この時間帯なら脅して、奪ってでもいい。

外壁上に出てきた兵士が何か叫んでいる。

思った以上に大ごとなのかと。

それでも緊張感なく外に出た門衛たちは。

それを見た。

そこにいたのは貴族たちだ。

側近や執事や子女も混じっている。

数は数十といったところ。

過去に門を通った者、門衛に袖の下を渡した者もいる。

だが、今日現れた彼らは……死んでいた。

濁った目、こぼれた眼球、あるいは抉られた眼窩。

口からはだらしなく舌が伸びて垂れさがり。

舌を口に戻せぬよう針で貫かれ。

また顔の皮膚を剥がされたり。

手足の肉を細かく切り刻まれたり。

内臓をこぼし引きずっていたり。

筆舌尽くしがたい拷問を受けた姿で。

なおも、誇らしげに己の紋章を下げ、掲げて。

『この者、外道なり。女神モモンガの名のもとに天罰を下す』

血文字でそう書かれたマントを身に着けて。

門に押し寄せ。

みしみしと、門を軋ませていた。

それは——墓場などに時折現れるものとはまるで違う。

あまりにも悪意にまみれた姿の、動死体<sup>ゾンビ</sup>ども。

門衛たちが剣を抜き、槍で突き、矢を射かけても。

動死体<sup>ゾンビ</sup>は意にも介さない。

王都の門は、杵こそ鉄だが、大半が木材。

火攻めにすれば門自体が燃え上がる。

彼ら王都付きの門衛は、官僚に近い立ち位置。

平民や暴漢を痛めつけた経験こそあれ、従軍経験などないのだ。

街道では既に騒ぎが起き始めていた。

動死体<sup>ゾンビ</sup>はまだまだ街道を歩み迫っており。

王都に来る民が、その姿を目にしている。

騒ぎは悲鳴や怒号となり、混乱を起こす。

だが、平民の騒ぎなど門衛の知ったことではない。

装飾重視とはいえ、門は門。

動死体<sup>ゾンビ</sup>程度が破れるものではないと。

ひとまず門衛らは王都内に退き、伝令を出す。

まずは門を閉じたまま、待てばいい。

怪物相手に戦うのは、己らの仕事ではないのだ。

巡回兵らが怠慢なせいで——と、彼らがぼやく中。

40レベル近い……難度100を超える従者<sup>スクワイア・ゾンビ</sup>の動死体<sup>ゾンビ</sup>らの筋力で。

門はひたすらに押され、鉄の門がひん曲がる。

重厚な蝶番が弾け、外れる。

門が押し破られたのだ。

ぼやいていた門衛が数人、門の下敷きとなり圧死した上を。

従者<sup>スクワイア・ゾンビ</sup>の動死体<sup>ゾンビ</sup>らは踏みしめ、進む。

わずかな時間とはいえ、門で足止められた彼らは合流し始めていた。

街道から100体近い列を為して。

生前を蔑む姿の彼らは、王都の大通りを練り歩き始めたのだ。

## 25：滅日（ほろび）（後編）

王国戦士団の朝は早い。

貴族どもと顔を合わせぬためにも、早くからロ・レンテ城に出仕し、訓練場に入っておかねばならない。

平民出の彼らは、王城内での寝泊まりは許されていないのだ。

彼らは普通に王都内で家を持つか、宿で滞在している。商人の家に下宿している者もいる。

だが、王の剣として日中は王城に在らねばならない。

貴族や官僚は顔を合わせれば嘲るが、いなければいいで罵るし。役に立たないからと予算を切り詰めてくる。

装備も城内にはない。

全員が武装しての出仕だ。

平民出身者に対する、貴族どもの嫌がらせらしいが……こればかりは、戦士団としてはありがたかった。

戦士団には礼服など買う財貨などない。

王宮にふさわしい衣装で揃えろなどと言われたなら、汚い仕事に手出しせざるをえなかったろう。

使い馴れた武器と防具で身を固め、早朝に出仕する戦士団員らは、王都の治安維持にも貢献していた。

そしてこの日も。

彼らの早朝出仕は、王都の危機を——少し、変えた。

王都の大通りは、早朝にも関わらず悲鳴が溢れていた。

大通りを進む動死体の集団。

通常のそれよりもおぞましい、痛めつけられた姿。

元は明らかに、貴族の老若男女。

子供が混じっていないのは、せめてもの救いだろう。

そんな異常な状況に、戦士長ガゼフ・ストロノーフは素早く対応し。

戦士団をまとめあげ、動死体どもの前に立ちふさがる。

敵の歩みは遅い。

駆け足で十分に追い越せるため、十分な防衛線を築く時間があつた。

ただ。

戦士団も戦士長も、けして博学な人間ではない。

この動死体ゾンビの異様な頑強さ——そして筋力には気づけなかった。

もつとも、カルネ村で聞いた女神の名が血文字で書かれた布に。

村に行つた戦士団の面々は、一筋縄ではいくまいと感じていた。

戦士団と、従者スクワイアの動死体ゾンビ。

最初の激突は……戦士団は無論。

集まりつつあつた野次馬——王都の民にも、女神モモンガの名を強烈に刻み付けたのだ。

「つ……戦うな！ 防壁を築け！ 何を使つてもかまわん！ 責任は俺がとる！」

ガゼフは叫び、無事な戦士らを下がらせる。

剣で立ち向かう無意味を悟つたのだ。

最初の前列にいた戦士らは、動死体ゾンビらの腕の一振りで弾き飛ばされ。

建物の壁や石畳にぶつかっていた。

動死体ゾンビは、たいしたダメージを受けていない。

ガゼフ自身も、複数の腕で突き飛ばされ、何とか着地できた状態。攻撃ではない。

ただ、〃邪魔だから〃振り払われた。

(この動死体ゾンビは戦うつもりなどなく……ただ王城に向かっているのか?)

呻き声をあげながら前へ、前へと進んでくる。

歩みは遅い。

だが確実だ。

素早い部下が張つたロープに、先頭がつまづく。

後ろの動死体<sup>ゾンビ</sup>が、つんのめった先頭の動死体<sup>ゾンビ</sup>の肩を掴み……無理矢理に立たせた。

同じような行動が何度も、集団のあちこちで行われている。だが、進む足は止まらず。

前へ前へと、進み続けている。

「前方は妨害に専念しろ！ さつき傷を負った者も合流だ！ 動けるものは……左右からこいつらを挟む！ 進行の邪魔をせず、横から殴りつけて『壊せ』!!」

短時間で最適解にたどりつけたのは、ガゼフが騎士ではなく戦士だったからだろう。

傭兵や冒険者の戦い方である。

一部のモンスターには『戦う』意味がない。

だが『退ける』『散らす』『壊す』意味はあるかもしれない。

そんな時は、正面から戦わず……横から撃ち倒すべきなのだ。

相手は知性ある敵ではない。

牛の群れ……いや、暴走した馬車の如きもの。

前方は障害物設置に専念し、左右からひたすら槌を振り下ろすが如く剣を振るい死者を解体する。

消耗を避けて武技は使わない。

(くそ……これでは素振りも同然……ぐ！)

時折振り払う腕をかわしながら、ひたすら剣を打ち込む。

頑強なアンデッドの肉体は容易には崩れない。

攻撃してこないため、ダメージこそ受けないが……腕は悲鳴をあげる。

(鍛え続けたはずが……武技に頼っていたか！)

己も、部下も、腕が重くなる。

素振りと違い、頑強なアンデッドの肉体をひたすら剣で撃つのだ。中には剣が曲がり折れる者すらいる。

しかも時折、勘違いした貴族(生者)が戦士団を嘲笑いながら突っ込んで来て……動死体<sup>ゾンビ</sup>に吹き飛ばされる。

これもまた邪魔で、戦士団の戦意を萎えさせた。

腕が震え、意気は消沈し、何の意義も見いだせない。  
剣を振るい。

剣を振るい。

戦う意味がどこにあるのか。

いや。

(これは戦でも何でもない)

戦闘ではないのだ。

ただの作業である。

巨大な丸太を、剣でおがくずに変えるが如き作業。

まさにRPG的な作業プレイである。

次第にガゼフも戦士たちも、振るう剣は無心となり。

人体を切りつけている感覚も、相手が貴族の骸と言う意識もなくな  
り。

ただ、作業として。

最低限の力で。

最適の効率で。

(斬る)

この動死体<sup>ゾンビ</sup>討伐は、日が高く昇り、傾き沈む頃まで続いた。

最初は幾人もの戦士が一体をようやく倒していたのが。

次第に彼らは人体の弱点を自然と見抜き。

関節の間を切り落とすようになる。

肉の斬るべき線が見え。

脱力した振り下ろしが……強靱なアンデッドの肉体を両断する。

法国の秘中の秘でもある『ばわーれべりんぐ』により、ガゼフと戦

士団のレベルは大きく上昇し。

いくつもの武技を開眼し。

また剣の極意を会得しつつあったが。

今の彼らはただ無心に、動死体<sup>ゾンビ</sup>を切り刻み続ける。

訪れる動死体<sup>ゾンビ</sup>は100近い。

全てを斬るまで、戦士団の戦いは終わらないのだ。

この日、ガゼフ・ストロノーフとその戦士団は、剣の修羅となった。

40レベル近いアンデッドを100体近く討伐し、経験値を得たのだ。

集団として彼らほどの領域に至った戦士集団は——この世界にあるまい。

彼らは時間をかけて見事に動死体ゾンビの群れを処理した。

だが、これがただの陽動とは気づかず。

高みに至る犠牲として……守るべきものは失われた。

「それじゃみんな、いってらっしやーい♪」

クレマンティーンは上機嫌で彼らを送り出す。

第一王子バルブロ。

奴隷売買部門の長コツコドール。

巡回使スタッファンなんか。

その他、貴族やら犯罪者やら商人やら、いろいろ。

裏娼館にいた、女神が目障りに思うであろう人間もろもろ。

クレマンティーンとニニヤが昼近くまで念入りに地獄を見せた連中である。

「攻撃してくる奴がいたら、ゆつくりぐーで殴ってあげよーねー。玉座の前までいってらー♪」

ぶんぶんと手を振って呼びかける、クレマンティーン。

今の彼らは等しく従者スクワイア・ゾンビの動死体。

生前とは比べ物にならぬ力を得た、40レベル近いアンデッド。

「無闇に攻撃させすぎるなよ。作戦通り、合図があつたら全てアンデッド化を解除することを忘れるな」

「わーかってるよ、もー。法国じゃないんだからさー、同格のクセにあんまり偉そうに言うなら……」

注意するニグンに、クレマンティーンが殺気を飛ばす。

「ふん。モモンガ様の恥となることはするなと言っているのだ」

「へーへー。こんな国がどうなろうと、モモンガ様は気にしないとおもうけどねー」

お互い、元の所属もあって相性はよくない。

「まあまあ、あれで貴族がめちやくちやになるならいいじゃないですか！」

徹夜明けと悪堕ちで、隈ができた上に瞳のハイライトも消えたニヤが嬉しそうに言う。

「いやー、範囲攻撃とアンデッド化攻撃ってすっごいねー♪ あれだけで王国滅んじやうんじやない?」

ぷぷーと笑いを我慢しきれず噴き出すクレマンティヌ。

「さすが先輩すごいです! 滅ぼしちやいましようよ!」

そう囁し立てるニヤに、朴訥で素直で真面目な魔法詠唱者<sup>マジックキャスター</sup>の面影はない。

「少し眠るか、早くカルネ村に送ってもらおう方がよいぞ、ニヤ」

カジットが心配げに言うが。

「で、次はあの六人ですか? 一体はアンデッドでしたが、どうやって痛めつけましょう?」

ふらつきながらも、ニヤは気づかず、血生臭い会話を続ける。

「そのへんはモモンガちゃん次第だねー。あの死者<sup>エルダー</sup>の大魔法使<sup>リッチ</sup>は使えるかもしれないし」

「そうだな……王国の裏事情に詳しく、また一定の戦力を持つ者は、モモンガ様も価値を見出されるだろう」

ニグンも口を挟んだ。

縛られ、転がされた八本指の警備部門最強——六腕を見下ろす。

己らを遥かに超えた実力の戦闘集団。

いや、その中の一人に完全にいいようにされ。

今も好き勝手に言われても、六腕に抵抗する気力はなかった。

「まー、私を重用してくれるくらいだから、人品についてうるさくは言わなさそーだもんねー」

「そういうことだ」

「そうなんですか……運が良かったですねえ」

残念そうに言いつつ、ニヤが笑う。

その、ぞわりと怖気立つような笑みに、アンデッドであるデイバー



ノックすら鳥肌が立った。精神効果とか恐怖とかそんなチャチなものではない。

靈魂そのものを、ヤスリで擦るような……そんな何かを、ニニヤの笑みは持っていた。

「ふふ、あの連中で王国が……滅んじやうといいなあ」

「滅べば滅んだで、モモンガ様にいらぬ苦勞をかける。あのラナーと言う娘に、うまく運ばせるべきだぞ」

危うい笑みのままぶつぶつと言うニニヤを、ニグンが窘めた。

(アカン)

ヤバみを増した少年に、カジットはまたも頭を抱え。

倫理と常識の儂さを痛感するのだった。

彼が言えることではないのだが。

「ともあれ、私は別方面から少し追加の陽動を行う。あれらは玉座に至ってもらった方がいいからな」

ニグンが〈転移門〉を起動する。

「りよーかい。とりあえず、この連中が聞き分けよくなるように、少しだけ躑よっかなー♪」

「はい！ やりましょうー！」

クレマンティーンの目が六腕を見る。

ニニヤが目を輝かせ、力強く頷いた。

六人の目が、救いを求めるようにカジットを見る。

……もちろん、カジットは黙って首を横に振るしかなかった。

「……天使では法国がモモンガ様に影響を持つように誤解されかねん」

己に言い訳するように呟き。

上空に浮遊するニグンは、肩をすくめた。

ニグンの第七位階魔法〈不死の軍勢〉によって呼び出された無数の

アンデッドが、ロ・レンテ城の城壁内を跋扈している。陽動ゆえ、ただ適当に動き回るようにしか命令していない。

だが、ニグンの生まれつきの異能により強化されたアンデッドだ。

最下級の骸骨すら、実戦経験のない城内衛兵の手には余る。

「明らかな陽動なのだが……あれらの轟音に気づきませんか」

城壁を叩き壊し、裏娼館から放たれたバルブロ王子らの従者の動死体が雪崩れ込んでくる。

それらは大量の下級アンデッドに紛れ、未だ王宮兵士らに気づかれていない。

ニグンがいる上空からならば、強靱な従者の動死体の一団が、下級アンデッドの群れをかき分け進む様子が、目にも明らかなのだが……。

「戦士長はがんばっているようだが……くく、己が守るものを忘れてはいかな」

戦士団に戻ってこられては厄介になる。

城内から戦士団へと送られる伝令を、殺さない程度に潰す。

元陽光聖典隊長としては、たやすい仕事だ。

ニグンとしては無軌道なクレマンティーヌより有能な己を証明でき、誇らしい。そして、生前の最期に縁のあった戦士長ガゼフを、策で見事に打ち負かしたという充実感。

ほんの少し浸る間にも、従者の動死体は王宮の壁を壊し、玉座を指す。

「フン、あの女のシモベに実行役を任せるのは不安だが」

しかし、見た目がただの動死体という点は実に便利だ。

王都に至るまで、ろくに備えをさせなかったのもその特性につきる。

正直、羨ましい能力だった。

「……まあ、今の私の任務は陽動だ」

集合する死体の巨人に王宮を壊させ、さらなるアンデッドを内部へ雪崩れ込ませながら。

ニグンは再び肩をすくめた。

「……帝国に磨り潰され滅ぶと覚悟していたが。アンデッドに滅ぼされるとはな」

諦観した目で、リ・エステイーズ国王ランポツサⅢ世は外を眺めていた。

どこから現れたともしれぬアンデッドの数は膨大。

手入れされていた庭園は無数の死者で覆い尽くされ、城内の兵士らは逃げ惑うばかり。

有事ゆえに武装こそしているが、ろくに戦えるはずもない。

ズーラーノーン、帝国の逸脱者、法国の陰謀——様々な可能性は浮かぶが。

己の無能で滅ぶよりは良いかとも思えた。

「早く戦士団を呼び戻すべきです、父上！ 追加の伝令を！」

第二王子ザナツクが叫ぶ。

ガゼフ率いる戦士団が、大通りで異様に頑強な動死体ゾンビと戦っている  
と聞いたのは、朝も早くのこと。

おそらく、彼らはまだ戦っているのだろう。

それらしき動きが、窓からもいくらか見える。

送った伝令は帰らず、ガゼフが来る様子もない。

既に王宮内は大量のアンデッドが入り込んでいる。

伝令を送っても、数少ない忠義の兵を失うばかりだ。

第三王女ラナーは、入り込んだアンデッドによって分断され、玉座前には来れそうにない。

第一王子バルブロは、昨夜市井にお忍びで出かけたまま帰ってきていない。

(最後にラナーの顔を見れぬのは、無念だな)

もはや、玉座の間に残る兵士もわずか。

多くは既に逃げるなり、隠れるなりしているのだろう。

王はただ、深々と溜息をついた。

「へへへ、陛下！ バルブロ殿下が！ バルブロ殿下が！」

数少ない忠義の兵が、玉座の間に飛び込んでくる。

「バルブロが帰ったのか？」

彼の方を向いて問いかけるが。

答えはすぐわかった。

よろよると歩きながら現れた動死体ゾンビの群れ。

その先頭にいるのは……おぞましいまでの拷問を加えられ、死体を冒流ソウリウされていたが。

間違いなく第一王子バルブロだった。

「ツ！」

ランポツサⅢ世は無能な王である。

バルブロ王子は愚昧な王子である。

重々自覚している。

だが。

それでも。

王は我が子を、国以上に愛していた。

我が子の肉体をこれほど冒流ソウリウされて。

許せるはずがない。

認められるはずがない。

ランポツサⅢ世の視界は真つ赤に染まった。

反射的に剣を抜き放ち、我が子に駆け寄り。

理屈も何もなく、ただ己の子を冒流ソウリウした者への怒りと共に。

剣を振り下ろした。

そして国王ランポツサⅢ世の意識は消え。

肉片の華が、壁に咲いた。

動死体ゾンビとなったバルブロ王子の拳に殴られ、吹き飛ばされ。

形も残さず潰れ消えたのだ。

第二王子ザナツクは震え、失禁しながらへたり込んだ。

「ほう。見事にことが運んだものだ。これもモモンガ様の加護か。偉大なる女神に仕える我らには天運も味方すると見える」

アンデッドの目を通し、様子を探っていたニグンは感動すら覚えつ

つ領いた。

犠牲を他に出さず、見事に王だけを殺した。

〈伝言〉<sup>メッセージ</sup>を使い、クレマンティーヌに命令変更させつつ。

さらなる作戦を進める。

せつかく王を討ち取ったのだ。

情報は新鮮なうちに、印象深く告知せねばならない。

「――では、行くがよい。我らが女神の偉大さを宣言せよ」

ニグンは先触れを次々と召喚し。

王都リ・エステイーズ全域に告知させる。

揺らめく黒い靄のようなそれは、無数の顔を絶えず浮かばせながら。

聞く者の精神をかき乱す声で宣言した。

『偉大なる女神モモンガ様の意により、リ・エステイーズ王国への誅罰は降されり』

『戦う者は剣を納めよ。誅罰は今終わった』

『なれど、変わらず悪を為す者にはまた、新たな誅罰が行われるであろう』

『民を虐げる貴族には、永遠なる苦しみと消えぬ恥が降りかかるであろう』

蒼の薔薇もない今、王都で上空を飛ぶあれらを討ち取れる者はいまい。

一体をどうこうしても、もはやどうにもならぬ。

ニグンは〈不死の軍勢〉<sup>アンデス・アーミー</sup>を解除し。

魔法で召喚されたアンデッドを消滅させる。

見れば、クレマンティーヌの造った従者の動死体<sup>スクワイア・ゾンビ</sup>もまた。

予定通り死体に戻り、転がっていた。

「よし。では帰還するとするか」

満足げに頷き、ニグンは裏娼館へと転移する。

そして彼らは……誰にも悟られぬまま、王都からの凱旋を果たした。

そして、先触れの言葉に……王国戦士長ガゼフ・ストロノーフは。  
硬直しきった腕から、剣を取り落とし。  
絶望に膝を屈した。

## 26：まだ慌てるような時間じゃない

リ・エステイーゼ王国王城を襲ったアンデツドの群れ。拷問され惨殺され動死体と化した貴族ら。

そんな動死体の我が子に、殴り殺された国王。

王都上空を飛び回った、おぞましき悪霊の群れ。動死体が血文字で。

悪霊がおぞましい声で。

唱え続けた名——女神モモンガ。

この異常な災厄と、女神の名は。

王国内は無論。

諸国に響き渡ったのだった。

王国内では、貴族の在り様も変わる。

否、変わらざるをえない。

国王ランポツサⅢ世が没した後も。

新たな王として第二王子ザナツクが即位した後も。

王都内で、各領地で。

横暴な貴族は拷問の後に惨殺され、動死体に変えられる事件が起きた。

この動死体は常に女神の名と神罰を血文字で書いた布や旗を背負い。

王都まで、報告するが如く行進し。

王都の門前にて、死体に戻るのだ。

王都内で誅罰された者は、王城前で同様の運命をたどる。

アンデツド化すれば、蘇生呪文でも蘇りはしない。

その誅罰を行うは、骨の馬に乗った女剣士だという。

女剣士は時に、少年とも少女ともつかぬ小柄な影を伴うとも。

疲れ果てやつれ果てた様子の禿げた老人を伴うとも。

貴族に苦しめられる民は、この女神の使いを歓迎し。

己らを苦しめる貴族が動死体と化して王都を目指す様を、喝采した。

その強力さを知った以上、巡回兵らもこれの相手はしない。今や、ただ彼女の名しか知らぬ者らが、女神モモンガを崇め始めてすらいる。

聖地としてカルネ村に向かわんとする民も、増えていた。女神の使いは、訪れぬ場所には訪れず。

来たとしても、評判の悪い末端の者のみ誅罰し、立ち去った。六大貴族ではレエブン侯、ペスピア侯など未だ罰される気配はな

く。  
女神の地に近いエ・ランテルの都市長パナソレイも健在。

貴族や都市長が無差別で罰されるわけではないのだ。

相当の犠牲者が積み上がれば、罰される貴族と罰されぬ貴族の違いも見えてくる。

拷問され惨殺され動死体ソンビに変えられるとは。

破滅願望者として、ごめんこうむる最期。

しかも、素行が悪ければ一族郎党が……子供を残し罰される。

貴族らは、領主を失った隣接地へと次男三男を派遣した。

隣を放置したために罰されるやもしれぬと恐れたのだ。

かつてなら領地篡奪に血道をあげたろうが……今は女神の怒りが恐ろしい。

彼らは可能な限り最大限、真面目に仕事に励んだ。

領主を失った者を助けるように、派閥や血を越えて助け合った。

それでも、過去の所業から時折粛清を受ける者が現れる。

保身に長けた彼らは、保身に長けるからこそ。

必死で“善き貴族”たらんとする。

税を軽くし、蓄えた財を吐き、民に尽くして……命乞いするのだ。

“善き貴族”の証とは。

未だ女神に粛清されていないこと。

それ以外にはない。

王都の災厄から5日後。



通信手段の限られる、この世界において、他国が状況を把握するにはそれだけの時間が必要となっていた。

バハルス帝国、帝都アーウィンタール。

その皇城にある会議室では、鮮血帝ことジルクニフ・ルーン・ファールード・エルニクス。

そして逸脱者フルーダ・パラダイン。

さらに帝国四騎士。

皇帝の信頼する秘書官ら。

帝国の首脳陣がそろい踏みであった。

今、会議室では地図が開かれ。

印をつけられた場所を、全員が目撃している。

エ・ランテルの南、トブの大森林に接する場所。

少し東へ進めば、帝国の開拓村がある。

「カルネ村はこの場所だ……僻地とはいえ、ほぼ帝国領だな」

皇帝ジルクニフがため息をついた。

女神モモンガ、カルネ村……これらの情報は、王都のアンデッド災厄からいくらか遅れて入ってきた情報だ。詳細を知れば知るほど、なぜもっと早く報告されなかったのかと怒りを感じる。己の慢心や部下の無能ゆえではなく、王国貴族どもの愚かさゆえ——しかも今回の事件で死んでいる——ならば、なおさらだ。

ジルクニフは深呼吸し、情報共有と自己確認を兼ねて言葉にする。

これは彼がよく用いる思考法でもあった。

周囲としても慣れたものである。

「もう一度事態を整理する。まず、スレイン王国が王国貴族と共謀し、戦士長を暗殺すべく我が国の兵に扮して王国領を荒らした」

「ええ。亡命を訴えてきた者によれば、ですが」

秘書官ロウネが補う。

ほぼ確定情報ながら、断定しては法国との関係上問題があるのだ。

また、亡命者は女神の怒りを買うかもしれないとし、既に始末されている。

「法国の狙いは、王国が我が国に早期併合されること。これを我が帝

国の利、ひいては己の利と考えたブルムラシユ―侯ら王国貴族が迎合。協力して王国戦士長にはろくな装備を与えず、通常の兵士装備にて略奪者の討伐に向かわせた――我ら帝国側に一切の報告も相談もなく」

ジルクニフの声に、再び怒りがにじむ。

「自主的に仕事を見つけ動くことは美德。だが、それは有能な者に限ること。勝手に動く無能な味方は、敵より憎むべき手合い――ですね」

四騎士の一人ニンブルが呟いた。

ジルクニフの粛清の中、生き残った帝国貴族として、常々心がける点だ。

「まったく。あの連中の愚かさは重々承知していたつもりだったが。連中はいつも予想の下に行く」

憤懣やるかたないといった様子で、皇帝がため息をついた。

帝国軍による略奪の既成事実、併合後の統治では害にしかならぬい。

王国貴族による略奪以下の統治があらばこそ、ジルクニフは侵略の利益を見込んでいたのだ。

己の民となる者らから、いらぬ恨みを買いたくない。

事実無根の偽装部隊による工作など、なおさらだ。

「法国も法国だな。順当にやっていたら、あと数年で王国は破綻する。戦士長がいよいよといまいと変わらん。なぜ我々にいらぬ風評被害を与えてくるのだ」

本来ならば、ジルクニフもここまで気にかける事件ではない。

戦士長が死んでいけば、法国の望み通りに踊ってやってもよかった。

僻地ゆえ情報封鎖も容易だからだ。

だが、今や状況は大きく変わった。

「ともあれ、その帝国兵もどきは女神とやらに全滅させられ。王国戦士長と戦士団は女神に怯えて、王都に帰ってきた」

「戦士長の報告を、貴族らは法螺と笑ったそうです。無理もありません

んが……そのまま話は市井にも流れ、笑い話の類になっております。戦士長の名を下げたのみに留まっております」

だから、帝国には何の情報も来なかった。

王都の密偵にも法螺話として流れ、王城内ではまるで重要情報と扱われておらず。戦士長暗殺計画があつたが失敗したとだけ、報告されたのだ。

「はあ……」

疲れた顔で、ジルクニフは顔に手を当て、天を仰いだ。

密偵を無能と切つて捨てたいが。

王国がおかしいのだ。

指示通り動いているという意味で、密偵はそこそこ有能だ。

「法国側は王国戦士長を暗殺すべく来たのだ。戦士長と戦士団を始末して、十分おつりがくる戦力を用意したはずだ。法国からの兵站と隠密性を考えれば1000人程度、それも相当の精鋭だろう」

その場にいる者らを、ジルクニフは見回す。

「じい……いや四騎士の誰か——複数か全員でもいい。そんな戦力を全滅させ、かつ直後にガゼフ・ストロノーフと戦士団を無傷で、それも一方的に脅して逃げ帰らせることができるか？ 最初の戦力と戦う様子を見せて、でもかまわんが。戦つて疲弊していれば、ガゼフとも戦わねばならん状況だぞ」

つまり、ガゼフと戦士団を2回相手にするようなものだ。

「無理ですな。有利をとつて退却させるならば可能ですが。相当の犠牲を払わねばなりませんまい」

フルーダはあつさりと認めた。

「そんな状況なら、私は帝国軍から脱走します」

レイナスも言い切る。

「俺も家庭持ちとしては、遠慮してえなあ」

バジウッドも頷いた。他の二人も変わらない意見だ。

要するに帝国の最精鋭でも不可能ということ。

「戦闘力か、魔法か、策略かは知らんが。女神は、それが可能だったわけだ」

夢物語か、と言いたくなる。

「王都のあの事件を見れば明らかですな。アンデッドが召喚されたものならば伝説の第七位階魔法〈不死の軍勢〉アンデス・アーミーを使ったのでしょう。貴族から作られた頑丈な動死体<sup>ゾンビ</sup>というのも、実際はまったく別種のアンデッドやもしれませんぞ。単純に魔法詠唱者<sup>マジックキャスター</sup>として、この身を上回る者が複数おるやもしれませぬ」

そう言ったフルーダの目は爛々と光っている。

彼は王都の事件を聞いてから、独自に調査を進めていた。

今回の事件を起こした者が、己の扱えぬ強大な死霊系魔法を使ったこと間違いない。

ゆえに、ジルクニフに言われるまでもなく、王都の事件、現れたアンデッドの詳細を調べていた。

「第七位階——それにアンデッドか。女神とやらが、ズーラーノーン関係者の可能性は？」

「ありますまい。あれほどの術で呼び出したアンデッドをあつさり消しております。当時はアダマンタイト級冒険者も不在。そのまま王都を死者の都にもできた戦力ですぞ？ 民を味方につける？ 彼の秘密結社がそのような手段をとる理由がわかりませんなあ」

フルーダの口調が狂熱を帯びている。

「確かに……まさに立つ鳥跡を濁さず。鮮やかな粛清だった。王国貴族の意識をわずかな時間で大きく変えてみせたのだからな」

「命惜しさについてやつですがねえ」

「王国領土の併合は、困難になったと見るべきでしょう」

バジウツドとロウネがそれぞれ、頷いた。

王都での事件はすさまじく派手だったが。

犠牲者は、驚くほど少ない。

動死体<sup>ゾンビ</sup>に払いのけられ打ち打ち所の悪かった巡回兵一人。

打ち破られた門で押しつぶされた門衛数人。

パニックの中で死んだ市民数人。

王城が破壊される中、瓦礫に潰され死んだ兵士や使用人が十人に満たず。

アンデッドと化した我が子に殴り殺された国王。

そして、動死体ゾンビに変えられた貴族や犯罪者。

合計で数百人といったところ。

しかも、貴族子女や夫人などには、許され領地から逃された者も多い。彼らは女神の土地カルネ村へと流れているのだとか。

王国人口は約900万。

たった数百の犠牲で、支配者層の意識を変えたのだ。

「……悔しいが、一族郎党を粛清した私より、遥かに犠牲も少ない。しかも、今や連中は命惜しさに必死で『良き貴族』たらんとしている。確かにあの死にざまは、処刑などより遥かに恐ろしいからな」

鮮血帝の汚名をかぶったジルクニフとしては忸怩たる思いだ。

遥かに末期の国で、遥かに鮮やかな粛清を遂げられたのだから。

「本当の女神かもしれませぬな。あるいは強大な組織か」

フルーダの目が、もの欲しそうに地図上のカルネ村を見ている。

直接行きたくて仕方がないのだろう。

女神などという胡乱な言葉でなく、魔法詠唱者や冒険者を名乗つていけば、ここに来ず直行していたかもしれない。

「こうしておっても埒は明かんか。どのみち、これでは今年の王国との会戦は取りやめだ。女神殿の天罰が恐ろしいからな。それに帝国軍に偽装した兵に襲われたのだ。我ら帝国を敵視しているかもしれない」

肩をすくめ、冗談めかして言う。

王国貴族の粛清を優先した以上、可能性は低い。

とはいえ、相手はあれほどの粛清を成し遂げた存在だ。水面下で思わぬ動きをされているかもしれない。

「ともあれ、隠密部隊をカルネ村に向かわせた。遠巻きに監視する程度なら、敵対ではなからう。捕まれば情報は全て吐いてよいとも言いつけてある。まずは彼らの報告を——」

その時、会議室が慌ただしくノックされた。

返事を待たず扉が開かれる。

緊急の伝令だ。

その場の全員が身構えるようにした。

「報告いたします！ 帝都正門——内側に、魔法の産物らしき異様な黒い穴が発生！ その中から、巨大な山羊のような魔獣、邪悪な装いの女神官、軽装の女剣士、そして……その、あの」

明瞭な報告を義務付けられた伝令が、珍しく口ごもる。

うまく言葉にできない——というより、報告を届けてよいか迷っている様子である。

「なんでもかまわん。言え」

「……その、一言で申し上げて女神が！ 女神がお二人、いえ二柱、現れました！」

叫ぶように報告した。

会議室全員の時間が止まった。



にはいかない。

相互干渉による無限発情を抑制すべく、知性に優れたアルベドは思考を複数に分割し、モモンガに伝わるそれを都合よく選択していた。謀略のための演技力を応用したのだ。用心深いモモンガが知れば、アルベドにあらぬ疑いを抱きかねぬ技巧である。

ゆえに、アルベドはこれについてモモンガに何も教えていない。

あくまで彼女個人の幸せに用いている。

そう、これを用いれば。アルベドは主に常時欲情し絶頂までしつつも、クールに振舞って見せられる。並列思考の分割処理数を増やせば、そんな背徳的状況を楽しむ思考すらできる。つまり、いくらでも幸福のルートを増やせるのだ。

「先日覗いた王都より人が多いのに、治安もよさそうだな。私たちの初デートを飾るにふさわしいな！」

「ええ♡ どこからいきましようか♡」

もつとも、それだけ並列処理しても、アルベドの声はクールと言うには……かなり粘っているし。モモンガの肩を（本人としては）さりげなく抱き寄せた手も、卑猥な動きをしている。

「ふふ、人前でこうして歩くのもカップルらしくていいな♪」

そしてモモンガはいえ、そんなアルベドに思いつきり甘えていた。

「二人とも、すごく目立ってるけど、いいのー？」

糸を引きそうなくらい、人前でいちやつく二人に、クレマンティーヌが声をかける。

「今更だろう。我が人が人のふりをする必要などない」

「はい♡ 邪魔する者の処分はお任せを♡」

「偉大なる二柱の手を煩わすまでもありません。どうぞ、雑音は私たちに任せて、〴〵でお楽しみください」

「MUGEN！」

ひらひらと手を振るモモンガに、アルベドが頷く。

それ以上に、エンリとクロマルが力強く宣言した。

「ちよつ、エンリちゃん一応、私の休暇も兼ねてるんだからさー。勝手に



に働かせる頭数に入れないですよー」

不平たらしく言うクレマンティーンだが、エンリには近づかない。

クロマルは未だ深刻なトラウマだし。

それを手懐けたエンリも恐ろしいのだ。

「ふむ……エンリにある程度金額を渡してくれば、別行動してかまわんぞ？ お前も、休暇中に上司と行動など嫌だろう」

今回のデート予算は、クレマンティーンが王国貴族から没収した財貨。

物々交換中心の農村で暮らして来たエンリは、経済感覚に疎いし、金銭も持っていない。

「えー。久しぶりに会えたのに、そんなこというわけー？ モモンガちゃんのいけずー」

隷属はしていないが、帰属意識はある。

単独行動を続けていたクレマンティーンとしては、モモンガの傍を……ありていに言って離れたくない。

「お前がいいならかまわんが……」

モモンガは首をかしげつつ、チラと上を見る。

(過剰戦力じゃないかなあ)

上には不可視化した集眼の屍数体に、青褪めた乗り手が六体。

モモンガとしては、多少のハプニングも楽しみたかったのだが。

アルベドからも万全の護衛をと言われ、不可視化できる上位アンデッドを率いてきた。

モモンガたち当人を含めれば、帝都市民全員が蒼の薔薇級でも塵殺できる戦力だ。

(世界級アイテムの真なる無もあるし、側にいればアルベドの複製体解除もできるんだから問題ないと思うが……)

未だ、脅威と呼べるものを見ていない(外にも出ていない)モモンガの危機意識は低かった。

ペロロンチーノと違い、タブラ・スマラグディナは衣装にこだわり

が少なかったか……衣装もキャラの一部と割り切っていたのだろう。アルベドの装備パターンはドレスと鎧の二択しかない。

デザインセンスに自信のないモモンガも、色違いのドレスくらいしか用意できない。

戦士職のアルベドの肉体に、己が知る後衛用ローブを着せるのも抵抗があった。

だから、まずは婦人用の服飾店に入る。

下調べはしておらず、前評判も知らない。

モモンガは、看板の文字も読めない。

店頭にいくつかのドレスが飾られている大きな店が目についたので、選んだままで。

間違いなくその店は幸運だったろう。

女神は大勢の野次馬を引き連れるようにして、ごく普通の客のように店に入った。

そして、普通に衣服を選び始めたのだ。

「ふむ、手触り重視だところらだが……この粗い感じも悪くないと思うな」

「ですが、やはり薄手の方が魅力を引き立てると……」

「落ち着いて思案するアルベドに対し、モモンガは子供のようにはしやぎ続けている。」

困惑する店の者に様々なドレス、衣装を持ち出させては、アルベドと相談し。

時にクレマンティーヌやエンリの意見も聞き。

店員にもあれこれと意見を問う。

試着もし、生地を撫でて肌触りも試す。

「ふふ……このようにいろいろと衣装があれば、着て楽しめるのだな」「はい。己の身ながら、モモンガ様に喜んでいただけて光栄です♡」

アルベドは、モモンガの記憶を垣間見た。

彼はファッションに無関心だったわけではない。

ただ、そんな時間も余裕もなかったのだ。だから今は。

精一杯楽しんでほしかった。

アルベド自身の体を褒めるのではない。

モモンガに喜び、楽しんでもらうのだ。

同じ体だから、互いに互いを飾りあえるし。

交換して見せ合いもできる。

二人の衣装選びは長いが——幸い、アルベドが何もせずとも、店の者も、エンリも、邪魔はしてこない。

むしろ、店には多数の野次馬が入り、二人を囲むように見ている。

二人の絶世の美女が様々に着替えて現れ、時に大胆な姿を晒すのだ。

角と翼が、人ならざる種族だと示しても。

なぜか二人がわずかに宙に浮かんでいても。

男女を問わず、帝都市民は彼女らに魅了された。

とはいえ。

「あんまり上等な服、買ってたら、ごはん食べるお金なくなっちゃうよー」

積み上げられていく衣装に、クレマンティーヌが至極現実的な声をかける。

アルベドは第二以後の分割思考で、同時に舌打ちした。

ある程度の余裕はあれど、一行はさして大金を持っているわけではない。

豪遊……というには、心もとない金額だ。

「む……そうだったな。目の前に気をとられすぎたか」

モモンガの手が止まり。

今まで試した衣装を見つめる。

いつも二人が着るのは最上級を超える、実際に伝説級レジェンドのドレス。同格と言わずとも、それなりの品となれば、相当に値が張るのも道理だろう。

モモンガは一枚ずつ衣服を検分し、あるいはまだ着ていない衣装

も、きよろきよろと眺めまわす。

どれを購入しようかと、真剣に悩んでいるのだ。

アルベドはそんな主の姿を、微笑んで眺める。

「女神たる御方の衣装や飲食です。やはり遠慮なく財貨を持って来るべきだったのでは」

エンリが申し訳なさそうに訴えるが。

「何を言う。どれを買うか迷うのが楽しみだろう……無論、他の店を見て回ってもよいが。これだけ楽しませてくれたのだ。この店で一着は買わねばな」

真面目に迷い、悩むモモンガの顔はどこか嬉しそうに見える。

ユグドラシルの初期、些細なアイテムを真剣に悩んで購入した時を思い出しているのだ。

アルベドも、そんな主の気持ちを知るからこそ。

ただ微笑み、待つ。

どんな時もモモンガは美しく愛らしく偉大なのだから。

アルベドはいくらでも眺めて、幸福を味わっていられるのだ。

服選びは楽しく、費やす時間は長い。

モモンガの目はどこまでも真剣だ。

と、ふと、一行とは別の声がかけられた。

「あ、あの……よろしければお好みのドレスを一着ずつ、さしあげますが。お時間をいただければサイズ直しも——」

見惚れていた女店主が、我に返り申し出たのだ。

大きな店を構えるだけあって、彼女には先見の明があった。

「む？　しかし代価なくして、斯様な施しを受けては申し訳ないのだが」

「美しきお二方が、当店の品を身に着けてくださるだけで十分な価値がございます。御身を飾る一助となれば、当店の大きな宣伝となりましょう」

女店主は考える。

この絶世の美女らは、何処かの大貴族か、異国の王族だろう。豪遊するでもなく限られた金額で購入を迷う様子は、真に人品卑しからぬ

人物と見える。

会話からして、彼女らは「まだ」帝都内を散策するつもりだ。既に店にまで入り込む野次馬たちがいる。彼らがついて回れば、より多くの耳目を惹きつけるだろう。彼女らがこの店について会話する——いや、この店で買ったと噂になるだけでいい。店の評判、宣伝効果は計り知れない。

皇帝ジルクニフは定まった皇后がおらず。肅清により、名高き貴族夫人もいない。王国の蒼の薔薇のような、華々しき女傑も帝国にはいない。目の前の二人は間違いなく、これから一週間か、数か月は、帝都の話題を独占するだろう。

女店主はそんな皮算用をしていた。

美女……モモンガは、じいっと彼女を見て。

そして頷いた。

「なるほど。お前は素晴らしき商人だ。この店は必ず繁盛し、良き客を得るだろう。女神モモンガの名の元に保証しよう……そうだな、この一組をいただけるか。これらは、サイズも問題なかったぞ」

女神と言う言葉に違和感を感じた者は、野次馬にすらいなかった。

そんな女神が手にしたのは実質上、一着。

質素とも言える純白のサマードレスと、それに合わせた白い帽子だ。

「は……はい。ありがとうございます」

けして高価な品ではない。

下級貴族の娘が、郊外を散策する時や馬車の旅で着るような衣装。それもモモンガのような妙齡の夫人より、幼さの残る少女が純潔や清貧を示すべくまとう衣装である。

帽子も、素材は木材を薄く削った繊維を麦わら帽子同様に編んだ質素なもの。簡素な黒いリボン巻いただけで、飾りすらない。

都会の娘が敢えて「田舎風」をてらう服装と言える。

店に着てきた高級すぎるほどのドレスに比べれば。

田舎娘の野良着に等しい。

女店主は、服飾店として言うべきでない言葉——客のセンスを貶め

る言葉を発しかけた。モモンガがそのまま試着室に入った時も、口が何度か開きかけた。

従者たちの視線で、即座に黙らされたが——あからさまにモモンガの陰口を言う野次馬もいた。けれど。

この日、帝都は真の美を知る。

「ああ……お似合いです、モモンガ様♡」

アルベド以外、誰も口をきけなかった。

帝都市民は店長もふくめ、ぽかんと口を開いていた。

さつきもせわしなく着ては脱いでとじていた衣装。

既に着た姿を見たはずなのに。

「ふふっ、どうだ？ やはり、白く清らかな衣装こそ、この体には似合うだろう」

得意そうにくるりと回るモモンガ。

ひらりと、白いスカートが翻り、膝上まで露になる。

煽情的な姿に反して、純白のドレスは涼やかで。

何より清廉かつ純潔であった。

「頭にかぶるものも欲しかったのだ。今日はよく晴れていたからな」  
無邪気に、ただの帽子を恩人の如く褒めかぶる。

嬉しそうに、本心から己の新たな衣装を誇り喜び、女神が微笑む。

それだけで、店内はかつてない輝きに満たされた。

彼女が美しいなど、誰もがすでに理解したつもりだった。

だが、わかつていなかった。

美しさとは魂と表情によって、息吹を込められるもので。

女神モモンガは妙齡の肢体を持ちながら、思春期すらまだの少女のように。

どこまでも清らかで愛くるしかった。

本来未発達な胸を包むべき布が大きく持ち上げられ、深い谷間が見えても。

まるで下品には見えず。

天使や妖精のような、真なる純潔がその乳房には宿っていた。

「あ……あ……」

店主はただ、涙をこぼすしかない。

女神は己が美しいと心から信じていて。

実際に美しい——なのに、高慢さはかけらもない。

誰も妬まず、見下さず、己すら愛さず、ただ事実として。

空が青いように。

ただ彼女は美しい。

その言葉と表情が、己の店の衣装を褒め讃えてくれている。

女店主は己が——そしてかつて店を訪れた貴婦人らが、いかに醜く穢れた魂なのか。思い知らされ。羞恥は恐怖に近いほどだった。

そんな、輝く女神が。

穢れた己に歩み寄れば、魂どころか体すら焼き尽くされるのではと思える。

「店主よ礼を言うぞ。そして他にもいくつか必要な服がある。今度はきちんと代価を受け取ってほしい」

「ありがとうございます！」

正面から向かい合うにはあまりに眩しくて。

店主は頭を深く下げ。

きっと皇帝その人にもしないだろう、心からの礼を言った。

己をひとかどの商人と自認しながら、魂を腐らせ膿ませ始めていたと自覚した。

女神が来店し、言葉をかかわせたことは——商人よりも人間としての己に、望外の幸運だったのだろう。

「私にとつては……そうだな、これは初めての買い物だ。お前はこの記念すべき時を、本当に喜びで満たしてくれた。私こそ礼を言わねばならん」

そつと、子供にするように。

女店主の髪に、女神の手が乗せられ。

撫でられた。

「ありがとうございます……」

店主はもう、それしか言えなかった。

それすら、涙でにじんで、歪んだ声だった。

申し訳なく、恥ずかしく、でも誇らしかった。

女神の手が、己の頭を撫でているのだ。

魂が清められるのがわかる。

ずっと昔に戻るようだ。

彼女は、子供の頃の己を思い出していた。

(そう……次の休みの日は、父さんと母さんのお墓に行こう……もう  
ずつと行つてないもの……)

神殿の、寄進目当ての祝福ではない。

本当の神の祝福を、受けているのだ。

店主は、心の底から確信した。

その様子を最前列で見っていた野次馬たちもまた。

彼女が、本当に女神なのだと信じた。

その後、女神はナイトガウンやエプロンドレス、また従者らの衣服  
を購入し。

全てをまるで虚空にしまい込むように、消してしまった。

そして彼女は店主や店員に微笑みを向けて会釈し。

礼を言つて、去つて行つた。

野次馬たちもぞろぞろと引き連れたままに。

この日、帝都にある多くの店が女神の祝福を得たが……。

この服飾店は、最大の幸運を掴んだと言えよう。

女神が最も長く滞在し、また店主自身と多く語らい。

自ら触れて褒め称えた。

そして、女神は帝都にいる間、彼の店で受け取った白いサマードレ  
スに身を包んでいたのだ。

女神の来店、女神への気遣いは、この商店を大いに榮えさせ。

その名を諸国に響かせ、歴史に刻む名店となった。



28：あ ひよつとして犬語じゃないと駄目かな？

「よい買い物をしたな！」

店を出てからも上機嫌でくるりと回り、モモンガが背後に顔を向ける。

(うおっ、まぶしっ)

闇属性(○)のクレマンティーヌは思わず顔を背け。

背後にぞろぞろとついて来ていた野次馬らは、またも見惚れる。

白いサマードレスに身を包んだモモンガは、逆光に映えた。

背後から溢れる太陽の光はまさに後光。

白いドレスが透け、魅惑的な脚線が見える。

クレマンティーヌに限らず、周りの誰もがモモンガ自身の放つ輝きと幻視した。

「次はどうしましょう？ 食事処を探しますか？」

(くふーっ、モモンガ様っ♡ 脚が透けてっ♡ 舐めまわしてさしあげたいっ♡)

(これほどの人目に視姦されながら無防備……本当にモモンガ様ってば小悪魔っ♡)

(うっ……ふう……また達してしまったわ)

(御方の姿に不埒な目を……この人間どもを皆殺しにできれば、どれほどに)

(おおっぴらに歩いてても、探る気配は特になし。皇帝が干渉してこないなら何よりだけど)

にこやかに次の予定を訊ねるアルベドだが、そのニューロンは焼ききれんばかりに加速。常時、複数の分割思考によってモモンガを余すところなく愛で味わい、内なる悪意を封じ込め、また危険はないかと索敵も怠らない。

「確かに帝都の味は気に……うん？ 美味そうな匂いがしているが、

あれは露店か？」

「そーだよー。仕事場に出てる人は、露店で昼食を済ませる場合が多いからねー」

クレマンティーヌが説明する。

帝都各所にある広場には、多数の露店。

いずれも大衆的な料理を売る店だ。

ユグドラシルでも生産系クラスや商人系クラスによる露店は多々あったが。料理ばかりがこれほど売られているなど、ユグドラシルでは見ない光景である。もちろん、合成食品ばかりのリアルには、食料を売る露店など存在しない。

「ほう……夜は料理店が中心なのか？」

「それと酒場だねー。夜でもやってる露店は限られるかなー。お昼はみんな仕事があるから、職場から露店に出て食べてー、そのまま働くだよー」

「なるほど。露店はこの時間帯の醍醐味と言うことだ。ならば昼食は露店でいろいろと食べてみよう」

「えー？ 豪勢にいかなくていいのー？」

「もっと高級な料理店もあるはずですが」

エンリも口をだす。

露店の料理はその場での立ち食いや、広場のベンチで食べるもの。

女神たるモモンガの食事として、大いに疑問である。

「高級料理が美味なのは当然だろう。再現には、相当の手間や食材を使わねばなるまい。カルネ村の食糧事情をより良くするならば、こういった店の味こそ知るべきではないか？」

「それはそうですが……モモンガ様自ら食さずとも」

食い下がるエンリだが。

「何より私はこの露店らに食欲を刺激された。私が食したいと言っているのだ」

女神に拗ねたような上目遣いをされて、抗えるはずもない。

「ははっ！ 失礼をいたしましたっ！」

急ぎ周辺の露店のものを買って回らねばと、クロマルから降りる。「待って待って。手づから買うのも楽しみだろ。それに列為す店なら、並ぶのも醍醐味だ」

「えっ、並ぶつもりー？」

クレマンティーヌがちらつと周りを見てから。

アルベドに目を合わせる。

多数の野次馬を引き連れてそんなことをするのかという、護衛としての言葉だ。

アルベドが何らかの折衷案を出してくれると期待したのだが。

「はい♡ ここならば我々の懐事情にも問題ないはず。モモンガ様の望むままに買って食べましょう♡」

アルベドは1ミリも役に立たなかった。

「ほう、これが焼トウモロコシ……本当に黄色いのだな」

「焼きたてだったから、熱いよー。ドレスにタレが落ちないようにねー」

「はふ……はふ……ん？　ぐむ……甘くて美味だが、思った以上に硬いぞ」

「芯は食べられないんだよー」

「むむ。値段の割に量が多くて、お得だと思ったのだが」

「芯は歯で削り取るみたいに食べるといいよー」

「なるほどな……（うまうま）」

「ちよーつと卑猥な食べ方だねー（はむはむ）」

「くつ、タブラめえ……なぜ撮影系アイテムを持たせなかったのか（ぶおりぶおり）」

「トウモロコシは収穫も簡単らしいですし、カルネ村でも作るようにしましょう」

「コロツケ？　変わった名前だな」

「あー、コロツケ。法国じゃよく食べるねー」

「パンには喜んで食べるという聞いたので、パンも買って参りました」

「ほう……中身は芋と肉か！（うまうま）」

「そういえば、カルネ村で揚げ物は見かけなかったわね（もぐもぐ）」  
「油が貴重なので……」

「揚げ物は衛生面でも、料理のバリエーションでも重要。油の量産も命題ね」

「うん、美味だぞ。クロマルも食え」

「MUGMUG……EN」

「おお、狩場で調理している様はさんざん見たが、本物の串焼肉は心躍るなー」

「さすがにポリユーマーすぎない？ だいじょぶー？」

「(まぐまぐ) ……んむ。確かにこれを一人で食べるにはな……エンリ、お前も見ればかりおらずもつと食ってよいのだぞ」

「えっ、モモンガ様の食べかけを……！ (チラツ)」

「ふふ、どうしたの？ 貴方は十分に働いてくれるのだもの。その程度は受け取ってかまわないのよ？」

(今日も来る前、直接に口を味わわせていただいでるのだし！)

(はー、舌で直接食後のモモンガ様の歯磨きしてさしあげたい♡)  
(クレマンや周りの野次馬なら殺してたけど、エンリは安牌よね)

「ん？ アルベドちゃんも私の残りでよかつたら食べるー？」

「はいはい。いただいとくわよ」

「粥にしても、帝都の屋台のものは違うな」

「あはは……カルネ村だと、ほとんどスープですから」

「納税がなくなっても、蓄えは急に増えないものね」

「ううむ。保護した子女も増えているからな。食料事情改善は急ぐべきか」

「ダインさん以外にも森司祭ドリドがいれば違うのでしょうか……」

「森に人材を探してみるべきやもしれんな」

「(ずぞぞ) それにしても糊のように濃い粥だ。具も多く味付けもよい」

「濃厚ですよね」

「…………… (クロマルをチラ見)」

「…………… (クロマルをチラ見)」

「どうしたんですか、お二人とも」

「いや、なんでもないよー」

「そうそう、なんでもないわ」

この間、モモンガの買った露店に客が殺到したり。

露店の主が、感激のあまり調理中に火傷をしたり。

そんな露店主にエンリが回復呪文を使ったり。

エンリの無料回復を咎めた神官がクロマルに蹴られたり。

女神を囲む一部の者らが、食事姿から卑猥な想像をしたり。

いろいろとあったわけだが。

女神の昼食は満足の内に終わりつつあった。

帝都市民はこの大いなる目の保養で、当分は幸福に包まれるだろう。

語り草となるかもしれない。

とはいえ、そんな時こそ問題が起きる。

問題が起きた……いや。

とても、非常に、間の悪いタイミングで彼が現れたのは。

きつとその日頃の行いゆえだったろう。

そして、誰もが女神に目を奪われていたからこそ。

彼が現れても、その宣言まで、気づく者はほとんどいなかった。

彼の声は朗々とし、堂々とし。

食後の女神たちには——見惚れる市民たちにも——よく響いた。

「さあ、今日はいつもと違うメニューにしてあげましたよ。汚らわしい巫人らしく、漁ってきなさい」

「あ、あの、食事を買う代金を……」

弱々しく怯えた、複数の女の声。

その直後に打擲音。

「はあ？ 森妖精<sup>エルフ</sup>如きの餌を、なぜ私が支払わねばならないのです！

巫人らしく残飯を漁って来る間、待ってやると言っているのです！」

涼やかな美しい声だが。

言葉は汚く、籠った心はなお汚い。

鞭うつような、嗜虐心と優越感をにじませ。

相手の全てを踏みにじらんとする本性が透けて見える。

市民らが不快げに顔をしかめた。

声の方を見て、露骨に舌打ちする者もいる。

輝くようだった女神の微笑も消え、無表情となった。

「……どこにも悪しき点はあるか。クレマンティーヌよ。帝国において森妖精<sup>エルフ</sup>は差別されているのか？」

「うーん、差別はあるつていえばある、程度かなー。たぶんスレイン法  
国から売られた奴隷だと思っただよねー。あんな露骨に差別されて  
るの、私は初めて見るし聞かかなー……あ、法国だと、けっこうある  
よ?。」

「そうだな。確かに誰もが不快がつている」

「あーゆーのは、禁止はされてないけど、普通はしないこと、つて考え  
ていいと思うよー」

「法の抜け穴と言うわけか。それにしても随分と堂々としたものだ  
な」

女神が、明らかに機嫌を損ねた様子でいれば。

野次馬らの中から進み出て、声をかけてきた女がいた。

「ね、ねえ……えつと女神様、でいいのかな」

珍しい紫の髪の毛、冒険者らしき女性である。

森妖精<sup>エルフ</sup>の血が混じっているのか、その耳は尖っている。

「何を勝手に——」

「よい。私はモモンガだ。何か言いたいことがあるのか？」

慌てて立ちふさがるエンリを、モモンガが抑えた。

少しきつい目をした女は、なぜか申し訳なそうに言ってくる。

「えつと、モモンガさん。私はイミーナ。知らない種族だけどきつと、  
モモンガさんも……亜人なのよね? アイツに見つかる前に、離れた  
方がいいわ。きつとその、嫌な目に遭うとおもうし」

それは、周囲の市民らの代弁でもあったのだろう。

近くの露店の主や、女神を下劣な目で見ていた連中も含め。

ほとんど全員が申し訳なきように頷いていた。

「……ふふ。いや、すまぬイミーナ。私は嫌な顔を見せていたようだな」

「えっ」

ぽん、とイミーナの髪に、女神の手が乗っていた。

「あつ、ちよつと」

そのまま子供にするように撫でられる。

なぜか、ひどく心地いい。

気の強そうなイミーナの目が、蕩けてしまう。

親に抱きしめられているような……生まれる前に戻るような心地。

「あれは王族や貴族なのか？」

「えっ、違うけど……」

「では豪商か？」

「ち、違うわ。あの男エルヤー・ウズルスは闘技場でも最強格の——」

「そうか。ただの腕自慢か。なら何も問題はない」

黒い翼をはためかせ、モモンガは軽く浮遊する。

安心させるように、イミーナを軽く抱きしめ、その額に唇を当てた。

「あ——」

同性のくちづけに、イミーナは全身が火照り、呆然としてしまう。

「確かに私は怒っている。良き時間、良き縁に泥を塗られたのだからな」

ふわりと、囲んだ者らの頭一つ上に浮かぶ。

「だが、これは私のみの怒りではない。私に良き時間をくれた、ここに  
いる全ての者の怒りだ——アルベドよ、今回は譲ってもらおうぞ」

「御身の望まれるままに」

さらに高く、モモンガは飛翔。

アルベドもこれに従う。

二人は野次馬らの頭の上を超え、空を滑る。

白いサマードレスは、白い大輪の華となり。

その花卉の内まで透かしていた。

「見え……た」「はだいろ？」

「はいてない」「下乳まで……」

野次馬らの啞然とした声を後に。

よたよたと残飯を漁らんとする三人の森妖精らの前へと、舞い降りた。

「おやあ？ 帝都にこのような——」

それを見たエルヤーが言い終えるより早く。

「魔法抵抗難度強化」〈支配〉口を閉じて、這いつくばれ

「んがっ!? ぐっ!」

唸り、もがくようにしながら彼は広場の石畳に這いつくばる。

「お前は弱者にのみ噛みつき、汚物を公道にまき散らす、下劣な野良犬だ」

「ぎっ! ぐぎぎぎ!」

必死に言葉を発しようとするが、女神の命令には逆らえない。

「ああ。野良犬らしくなら口を開いてよいぞ。ほれ」

「わうっ! わんっ! わんっ!」

「まさに野良犬だな。不快を感じさせられたが、時間をかけては、なお不快だ」

「左様でございます。モモンガ様」

アルベドが主をなだめるように、ぴったりと寄り添い侍る。

「さて、犬が奴隸を持つなどおかしな話。そうだな?」

モモンガがエルヤーに問いかけつつ、距離を詰める。

その身から黒い炎の如く〈絶望のオーラ〉が溢れだす。

「ぐるぐる——ぎゃんっ! きゃいんっ! きゃいんっ!」

近づかれたエルヤーが、びくんと身を跳ねさせ怯える。

「犬なのだから、奴隸など持たないよな?」

「ぎゃいんっ! わんっ! わんっ!」

〈絶望のオーラ〉。

「そうか。いらないか。ああ、私は野良犬の言葉がわかるのだ。安心するがいい。お前が奴隸を手放したこと、私が保証する」

「ぎぎぎぎ——きゅーん」

抗議するように唸っても。



モモンガは冷たく見据え、微笑み。

一方的に断言する。

「さあ。お前は自由だぞ、野良犬。犬らしく走って寢床に帰るがいい。ここは人が飲み、食い、楽しむ場所だ。野良犬の来る場所では、ない！」

〈絶望のオーラⅢ〉。

「ぎゃいんっ!!!」

怯え切った犬の声で鳴きながら。

犬のような四つん這いで。

汚物で下半身を汚しながら。

帝都に知らぬ者なき天才剣士エルヤー・ウズルスは逃げ去った。

〈支配〉の効果時間が切れるまで、彼は犬の如きまま帝都を走り回るしかない。実力に裏付けされた彼の名誉は、大きく損なわれた。

「……〈魔法三重化〉〈上位道具破壊〉」

森妖精<sup>エルフ</sup>らを縛る奴隷の首輪が、消滅する。

「どうぞ、こちらへ」

「はいはい、もう大丈夫だからねー」

エンリとクロマルが素早く森妖精<sup>エルフ</sup>らを保護する。

念のため、回復魔法も使う。

さらに、手際よく追加の露店料理を買って来たクレマンティーナが、森妖精<sup>エルフ</sup>にそれを与えた。

その様子に、ようやくモモンガの顔に微笑が戻る。

彼女の表情だけで、冷え固まったような広場の空気が、再びあたたかな空気で包まれた。

「はあ……まったく、デートに悪漢が現れるのもお約束ということか」

「ふふ、ハプニングも楽しみの内、でしよう?」

モモンガはアルベドの髪に顔を埋め、溜息をつき。

アルベドはモモンガをしっかりと抱きしめ。

互いにぴったりと身を寄せ合わせる。

(尊い……!)

帝都市民らはそんな二柱にその場で跪き……拝んでしまう。

話しかけた半森妖精ハーフェルフのワーカー、イミーナもまた。  
女神のスカートの中を真剣に覗いていた相方ヘツケランへの抗議も忘れ。

二人ともただ、跪いていた。

一方、広場の端ではこの光景と——広場の上の異様な存在を見た一人の少女が嘔吐し。

ふらつきながら逃げるように、仲間の拠点たる酒場に向かった。

広場に訪れつつあった、ある馬車の中では……一人の老人が失禁しながら、すごい表情で絶叫していた。

皇帝ジルクニフは、老人を落ち着かせて事情を聴くべく、皇城に戻り始める。

この時、四騎士の一人が何も言わず離脱したが……仲間らも含め敢えてこれを放置した。

## 29：人類は滅亡する！

アルシエ・イーブ・リイル・フルトは没落貴族の令嬢であり。

帝国魔法学院中退者であり。

幸いにも仲間にも恵まれ、何とかワーカーとして生計を立てている。実家について悩みは尽きないが。

魔力を視認する生まれながらの異能によって、多くの危機や強敵を見破ってきた。

きつと明日は、今日よりいい。

そう信じていた。

信じていたが。

「……帝都はもうダメかもしれない」

「はっ？」

神官のロバーデイクは、仲間の突拍子もない言葉を聞いた。だした。

「帝国が……世界がもう……ダメかも」

「えっ？」

さらに広がってしまった。

「いや待ってくださいアルシエさん。何を言ってるんですか。何かあつたんですか？」

酷く憔悴——いや、衰弱したとさえいえる状態で、歌う林檎亭へ逃げ込むようにやって来たアルシエを、ロバーデイクは介抱し、いくつかの回復魔法さえかけた。実家で何か深刻な事態が……と、心配していたのだが。

ようやく発した彼女の言葉が、先のものである。

「神……魔王……？　どちらにしても、あれは世界自体を滅ぼすほどの……」

思春期特有の病気かと思える言葉だが。

ガクガクと今も震える彼女の様子は、真剣そのものだ。

「怖い夢とか……ではありませんよね。アルシエさんの生まれながらの異能によるものでしょうか」

「は、早く帝都から逃げないと……ヘツケランとイミーナが来たら、

い、妹たちを……」

しがみついて恐怖に顔を歪め、震え続ける彼女は、尋常ではない。そんな時、ちょうど店の扉が開き。聞き覚えのある、仲間の声がした。

「ここが、私たちの拠点の酒場だけど……こんな店でいいの？」

「言っちゃなんだが、あんたみたいな御方が来るようなトコじゃないと思うが……」

イミーナとヘツケラン。

ロバーデイク、アルシエにとって誰より信頼できる仲間だ。

仲間、だが。

「年期は入っているが、よく磨かれているではないか。雰囲気も悪くない。そのように卑下するものではないぞ」

「ええ。モモンガ様が認められているのだから、気にする必要はないわ」

「そーだねー。冒険者向けでも汚い店が大半なんだから、たいしたもんだよー」

「露店とはまた別の、食欲をそそる香りがします」

親し気に連れてきた二人。

いや、二柱。

さらにその従者らの存在に、アルシエは恐怖に固まったまま気を失った。

「ヘツケラン、イミーナさん、そちらの方々は……アルシエさん!」

「アルシエどうした!」

「家で何かあったの？」

ヘツケランとイミーナも慌てて駆け寄る。

「むむ、取り込み中だったか?」

「あー、いやあの子、さつき広場の隅っこで吐いてた子じゃないかなー?」

クレマンティーヌがチラと店の虚空に目を向け頷き合うようにし

つつ、言う。

モモンガを煩わせないようにと、護衛に配置された高位アンデッドらの報告はクレマンティーンに与えられるのだ。今も今とて、店内には不可視化した青褪めた乗<sup>ペイル</sup>手<sup>ライダー</sup>が1体、店の周囲はしっかりとその他のアンデッドで上空から護衛されている。

「昼間から呑み過ぎか？」

「いやー、どっちかという<sup>と</sup>モモンガちゃんを見てびっくりしたみたいだったけど？」

「私を？ イミーナの様子を見る限り、あの下劣な男の関係者とも思えんが……アルベド、それにエンリよ、とりあえず精神回復系の呪文をかけてやれ」

慌ただしく囲まれ、仲間の神官からさらに呪文を受けている様子に。

とりあえず回復を助けるよう指示を出すのだった。

「ふむ……イミーナに一杯奢ってもらっただけのはずが、思わぬイベント発生となつたな」

エルヤーに恥をかかせ、奴隷を解放させたモモンガを。

イミーナは喝采し、食後の一杯を奢らせて欲しいと言ったのだ。

それに対し、モモンガはイミーナの普段の酒場にと頼み。ワーカーチーム、フォーサイトの拠点たる歌う林檎亭へと来た次第である。

「あ、あの……私たちも来て、よかった、ですか？」

おずおずと、後について来ていた森<sup>エル</sup>妖精<sup>フ</sup>たちが言う。

エルヤーから解放された彼女らも、そのまま連れて来られていた。「腹が減っているのだろうか？ 露店でも少しは買ったが、せっかくだ。私たちの代わりにこの料理を味わうがいい……ああ、一口ずつくらいは私ももらうぞ？ カルネ村に帰る前に、様々な味を体験しておきたいからな」

そう言つて、取り込み中のイミーナたちを他所眼に。

モモンガは彼女たちの食事を亭主に頼んでいた。

なお、店の入り口にはウォーパイコンロード戦用双角獣王クロマルが立って威圧を放ち、野次馬らの入店を止めていた。

「私は中に用があるの！ 中に入れなさい！」

「MUUGEN」

とある帝国四騎士の一人が何とか入ろうとしていたが、100レベル魔獣の威圧には敵わず。また頭上からも異様なほどの威圧を受け、抗議に留め続けるのだった。

「はーっ……はーっ……すっ、すごすぎて……目に入れるのが、こわい……」

ようやく目を覚まして、アルシエはモモンガを直視できなかつた。

「そう怖がられても困るのだが……」

「そうよ。モモンガ様に失礼でしょう！」

モモンガとしては初対面の少女に卒倒されても、困惑するしかない。

人間への態度が軟化していたアルベドも、不快感を生じている。

「とりあえず、アルシエの目にはどう見えてるの？」

イミーナが心配げに聞いた。

「も、モモンガ様は、たぶん……神。帝都というか帝国を消し飛ばせる。私と同じ魔力系で第10位階とか余裕で使えろ……思うもつと上も」

「えっ」

「ほう」

アルシエの言葉に、他の三人が固まった。

モモンガは興味深げにアルシエを見ている。

「アルベドさんは……まだ普通。信仰系でロバーのだいたい倍……第6位階か第7位階」

「普通じゃないですよー！」

「あら。そんなことまでわかるの」

驚愕するロバーデイクに対し。

アルベドはきよとんとした顔になる。

「剣士の人は魔法、使わない。僧侶の人はたぶん第2位階。けど、表にいる魔獣は信仰系でアルベドさんと同じくらい……つ、使える。それに広場でその……魔力系を第9位階まで使える何か、いた。他にも信仰系をロバーより使えるのがいっぱい……今もここに、1体いる」  
「えっ」

アルシエが虚空に目を向けた。

慌てて他の三人が周りを見回すが、わからない。

「素晴らしい！ アルベドやクレマンティヌの実力がわからないなら、魔法能力のみ。だが不可視化していても看破可能だと？ アイテム……ではないな。パッシヴということは、それも生まれながらの異能か？ すごいぞ！ 第0位階から見当をつけ、マジックキヤスター魔法詠唱者の才能ある者を見つけたりもできるのか？」

「びいいいいー！」

興奮して肩を掴み問い詰めるモモンガに、アルシエが言語崩壊した悲鳴をあげる。

「も、モモンガさん、こわがってる、アルシエこわがってるからー！」  
「つと、すまないなイミーナ……しかし、これは本当に思わぬ縁だ。不可視化された我がシモベも見破ったのだぞ。相手が相当の脅威でも、斥候系としてすばらしい意味を持つ。帝都には半ば思い付きで来たのだが……ふふ、私の運も捨てたものではないな！ 素晴らしい出会いだー！」

嬉しそうに興奮し、無邪気に喜ぶモモンガ。

「ええ、本当によかったですね」

「さすがです、モモンガ様！」

「確かにすごいよねー。そうそういないよー」

「お、おめでとうございます」

他の面々とエルフたちも祝福の言葉を送る。

不可視化した青褪めた乗り手も盛んに祝うように踊っているのが、アルシエにだけは見えていた。

「クーデ……ウレイ……どうなつても私たちはいっしょ……」

既に死を覚悟した顔でハイライトも消えている。

「え、えつと……何。雇いたいってこと？」

「帝都とか吹っ飛ばせるってことは脅されてるんじゃないのか？」

「神とのことですが、本当なのでしょう……」

イミーナ、ヘッケラン、ロバーらは今一つ状況がわからず、戸惑うばかりだ。

「重ね重ねすまないな、イミーナ。ああ、亭主殿、彼女らに四人にまずは一杯を。予定と異なるが、彼女と会わせてくれただけで感謝せねばならん。私にも奢らせてくれ！」

「あ、私からも」

この騒がしく華々しすぎる新参に、不審な目を向けていた亭主が、黙って四つの杯を出す。

続けてイミーナの注文に追加で七つ（森妖精らを含め）。

全員に一つずつ、杯が配られた。

「良き出会いに乾杯だ！」

モモンガはテンション高く杯を持ち上げ、全員と打ち合わす。

白いドレスがめくれ、膝上まで露になるが当人は気にしない。

視線を引き寄せられるヘッケランの足を、イミーナがきつく踏みつけた。

（……なるほど。彼女は安心できる人材ね）

二人の様子に、アルベドが内心の警戒度をゆるめる。

杯に口をつけ。

運ばれてきた料理を森妖精らに食べさせながら。

モモンガたちと、四人のワーカーチーム——フォーサイトは自己紹介をした。

さらにイミーナが、アルシエとロバーデイクに、エルヤーとの経緯を説明し。

共に食事する三人の森妖精の境遇にも触れる。

そんな話題に対し、おずおずと。

母国に帰りたくない、行き場所がないと、森妖精らが言い出せば。



「彼女らについてはお任せください。王国でも、虐待されていた方々を多く保護しています。私はモモンガ様の神官としてまだまだ至らぬ身ですが、これでも多くの方の面倒を見ているので」

エンリが胸を張って、彼女らの保護を保証し。

「そうだな。エンリはよく村をまとめてくれている。王国では、彼女らより酷い状態の者も多かったが……今はようやく、わずかながら笑顔を見せてくれるようになってきた」

「そ、そんなー！ 全てはモモンガ様の加護あつてのことです！」

女神の言葉に恐縮するエンリは。

その邪神官風の衣装を除けば、実に微笑ましく。

崇める対象と心から信じ合える様子は、ロバーデイクには眩しくすらあつた。

「さて、村の話が出たところで……お前たち、フォーサイトについてののだが。どうか我が村に来てはくれまいか？ イミーナは我が友であり、アルシエはカルネ村にとって大きな希望だ。ヘツケランとロバーデイクにも頼みたいことはいくらでもある」

「ちよ、ちよつと待ってくれ。手下になれつてことか？」

馴れ馴れしいとも言える態度で、微笑む女神。

窓から差し込む光に照らされる姿は、幻想的な美しさだが。

さすがに、リーダーとして、ヘツケランも鼻の下を伸ばしてばかりいられない。

アルシエは未だにモモンガを正視できずいるのだ。

「モモンガ様の配下となれることに不満でも？」

黒衣の女神——アルベドがじろりと睨みつける。

クレマンティーンとエンリからも、冷たい視線が浴びせられた。

以前戦った、どんな怪物より遥かに恐ろしい眼光だ。

「いやいや、配下ではないぞアルベド。お前たちはワーカーと言う、組合に所属せぬ冒険者なのだろう？ 私に雇われて欲しいのだ。ちよつと……その、長期の仕事になるが。最低でも数年くらい、か」

最後の方は小声で。

申し訳なさそうに言うモモンガに、威圧する気配はない。

「いくらもらえる話なんだ？」

「それが申し訳ないが、我々は金銭についてあまり余裕がなくてな……。今回とてさほど豪遊できる金額は持っていない」

ビジネスライクに問うヘッケランに、モモンガがチラリと財布役のクレマンティーンを見た。

「うん、持って来たのは金貨で30枚だねー。さつきから服とか買つて残り20枚ちよつとかなー。たいした額って言えば額だけど、村に戻ったらお金は使わないし。他のお金は特にないねー」

「さすがにその額で数年はないだろ……」

ヘッケラン達のワーカーチーム、フォーサイトはそれなりの腕利きである。

一週間程度の仕事ならともかく……という金額だ。

「いや、わかってる。だからだな、その……私なりに可能な範囲でとなるが。お前たちの望みを叶えよう。それを以て、支払いとさせてもらえないか？ イミーナには友達料金にしてくれると嬉しいが……凶々しいかな？」

再度申し訳なさそうに、チラチラと顔色を伺ってくるモモンガは、もの知らずな貴族令嬢のようだが。

「お、お待ちくださいモモンガ様、それは！」

邪教めいた神官エンリが慌てた。

「いやいや、要はニニヤちゃんと同じ扱ってことでしょー。四人全員はサービスしすぎーって思うけどー、あの漆黒の剣つてチームより格上だもんねー。ワーカーだけに世慣れしてるし、神官さんはエンリちゃんより格上だよー？ 保護した人たちだつてー、ンフィーちゃんに頼るのは、限界あるんじゃないかなー？」

クレマンティーンがゆらゆらと、椅子を斜めにしたまま絶妙なバランスを保ちながら説く。

アルベドは冷たく見定めるに留め、無礼な願い事をしなければ見過ごすつもりらしい。

女神の力を最も実感しているアルシエが、目を伏せたまま発言し

た。

「……願い事って何でもいい?」

「私の土地に来てもらうのだから、立場や財産を築く類は少し困るな。たとえば、お前を皇帝にしてやってもいいが、それでは我が元に来てもらうため、すぐに退位してもらわねばならん」

その例えに、ぶほつ、とアルシエを除くフォーサイトの面々が酒を嘔き出した。

女神にかからなかったのは僥倖と言えるだろう。

「あの……家のこと、助けて。あなたなら、解決できる、はず」  
青い顔で、顔を上げ。

女神を正面から凝視し、アルシエが最初に願いを言った。

悪魔に生贄を捧げんばかりの覚悟をにじませ。

目の前の圧倒的魔力の持ち主に、説明する。

アルシエの家庭事情、妹たちの立場。

没落を認められぬ親。

人相の悪い借金取りたち。

ほのめかされる奴隷への身売り。

「……………」

モモンガは、帝都に来て初めて。

冷たく無然とした顔になった。

エルヤーを懲らしめた時などより、もっと恐ろしい何かを感じる。

自分たちに向けられたものではないとは、わかる。

わかる、が。

機嫌を損ねたかと、イミーナが横から言葉を発した。

「モモンガさん、私からもお願い。アルシエを——」

手をかざし、アルベドが言葉を封じた。

「……アルベド。どう考える」

「皇帝は非常に有能な人物かと」

モモンガの意図を読み、そう答えた。

「クレマンティーヌ。お前の見てきた王国貴族に比べてどうだ」

「王国じゃよくいる——いや、よくいたタイプだねー。権力と領地が

あれば、私が始末した連中と同じコトしてたんじやないかなー。どつちも奪われたから、現状つてことだねー。今、カルネ村に来てる子たちにもー、アルシエちゃんや妹ちゃんたちと同じ立場の子、けっこーいると思うよー」

モモンガが、アルベドの顔を見る。

「私も同意見です」

敢えて己の感情は出さず、アルベドが頷く。

「アルシエ。率直に言おう。お前の妹たちを連れ出し、生涯にわたって面倒を見ること、我らにとつて何ら負担ではない。同じ境遇の子らもいる。友人も作れるだろう」

「……そう」

その後に続く言葉を予感し、アルシエの返事は少し遅れた。

「だが、お前の両親は駄目だ。彼らは、もはや己の在り方を変えられまい。没落は、彼らが正しき道を歩む好機だったろうが、彼らは何も学ばなかった。お前の苦労や危険も理解せず、当然の権利の如く金を受け取っていたのだろう?」

「……………」

頷くしかない。

「私は帝都を楽しんだ。ここは良き街だ。人々の多くは良き人だった。彼らは希望を持ち、明日が今日より良き日だと信じている。この点だけでも、私はこの国を高く評価しよう」

王都の様子を一度見ておこうかと言った時は、ニグンとクレマンティーヌはもちろん、アルベドまで止めてきたのだ。

「少なくとも王国とは比べ物にならないねー」

「ええ、良き隣人たりうるかと」

そんな意図を感じてか、クレマンティーヌとアルベドが言葉を補う。

目を閉じ、少し考え。

モモンガは口を開いた。

「アルシエは両親の愚かさを理解してはいても、彼らを憎んではないのだろう」

「……」

アルシエが小さく、頷いた。

「その情は決して間違っていない。だが、皇帝が彼らを切り捨てたように、私もまた……彼らを迎えるはきんだ。同様に、彼らを貴族に戻すのも断る。我々にも、お前たちにも、悪い結果しかもたらさんだろうからな」

アルシエは目を伏せた。

彼女の仲間らも、反論はできない。アルシエは仲間だが……その両親の素行を受け入れられるとは、思っていないのだ。

女神は言葉を続ける。

「お前の両親を殺せと言えば殺そう。精神支配もできるだろう。お前と妹を、記憶から取り除きもできるだろうな。だが、それらを望まぬのなら……私個人としては、妹たちと共に全てを放り出し避難して欲しい。両親がいらぬ手出しをせねば、私から彼らに害も与えはしない。彼らは己の行いの報いを、今のままに受けるだろう」

「……そう。少し、考えさせて」

沈痛な面持ちで、アルシエは俯いた。

モモンガもまた、痛ましげに視線を伏せ。

他の三人を見た。

「イミーナ。それに他の二人も。お前たちの願いを言うがいい。ただ……具体的に、な。詳細まで都合よく私が解釈すると思わないでくれ。わかってもらえたらうが、私は心配りができるわけでも、機転が利くわけでもないのだ」

悲しげに笑うモモンガに、アルベドがそつと身を寄せ。

その髪をやさしく撫でていた。

30：神か……最初に罪を考え出したつまらん男さ

「決して己の力に溺れず……それが神の在り方ですか」

ロバーデイクは、目の前の光景に、確かな聖性を感じていた。

一連のやりとり。

演技と思えぬ、アルシエへの態度。

どこまでも冷静な、皇帝への賛辞。

アルシエが言うだけの力ならば、自らの思うまま解決してもよかったです。

いや、それ以前に無理矢理連れ去るのも簡単だろう。

だが、彼女は、アルシエの意志を尊重してくれた。

目の前にいるのが本当に女神ならば。

本当に、神ならば。

「すみません。少し質問を。この問いに答えていただくことが、私の願いです」

「かまわんが……それでいいのか？」

アルベドに撫でられ、目を細めていたモモンガが首をかしげる。

その様子はどこまでも無邪気で穢れなく。

妖艶な美貌ながら、下劣な欲望を抱く者に罪悪感を抱かせる。

「はい。どうしても、女神たる貴方に聞きたいのです。神殿の在り方を是となされるか。私の在り方を否となされるか」

「ふむ？」

事情のわからぬ様子の女神に、ロバーデイクは説いた。

神殿による回復魔法の独占と有料化。

救うべき人を救えぬ現状。

そんな状態を悔やみ、神殿を辞してワーカーとなった己。

とはいえ、一人の言葉からでは判断しづらい。

モモンガとアルベドが、クレマンティーヌを同時に見る。

「はいはい。補足ねー。あー、ニグンちゃんがいれば任せるのに、もー」

面倒そうに、クレマンティーヌが補足説明する。

モモンガがかいつまんで理解した限りでは。

リアルで言えば富裕層ばかり厚遇する医療施設で勤めていたが、貧困層の在り様を見て自らボランティアに身を落とした、ということだ。

(……………いい人じゃん)

モモンガとしては、ロバーデイクの姿勢は良いことだ。

ただ、神殿を一概に罵るのもどうかと思う。

問題とすべきは、神殿が僻地でないこと、緊急時でも同様の報酬を得ようとするかどうかだろう。

(このあたり、冒険者の回復魔法も仲間以外に使うべきじゃなくて、仲間以外だったら割り増しでお金とるのが普通って話だっけ？ 神殿を罵るのは簡単だけど、社会に根付いた組織なんだし、術者の数とかの問題があるんだろな)

アルベドに任せると冷たい言葉で終わらせてしまいそうだ。

何より、彼女にいいところを見せたい。

己の全てを既に見られたからこそ、彼女には見捨てられたくない。ありていに言えばモモンガは、アルベドを独占したいのだ。

(ん？ 独占？)

そうだ。

独占だ。

かつて、アインズ・ウール・ゴウンも稀少鉱物の独占による相場操作を行った。何をしているかよくわからなかったが、確か…………。

「ロバーデイクよ。お前の行いは素晴らしい。称賛されてしかるべきだろう」

目を閉じて考え込んでいたモモンガが、目を開き言った。

「だが、私は神殿を非と言うつもりもない。お前は、お前の選んだ在り方に誇りを持ってばよい」

「ですが、今の神殿の在り方では、救うべき人が——」

曖昧な返答に納得いかず、ロバーデイクが言葉を続けんとするが。

モモンガは手を前に出し、封じた。

「救うべき人とは何だ？ 傷を負った者すべて、病に苦しむ者すべてか？」

「すべてとは言いません。しかし、目についた人を救えぬなら、何の意味があるのです」

「なるほど。誰かが困っていたら、助けるのは当たり前、ということだな」

モモンガは、懐かしむように微笑を浮かべる。

アルベドが少し、表情を曇らせた。

「そうです！ だから——」

「だから、お前は今の生き方に決めたのだろうか？ それでいいではないか。私に神殿を責めさせても意味はないぞ」

「しかし、神たる御身ならば、神殿の在り様を変えることもできるのでは？」

「神殿を作ったのは神ではない、お前たち人間の社会だ」

「そ、それは、そうかもしれませんが……それでも、神の言葉なら——」

「お前は正しい行いをしているが……神について、誤解していないか？」

「は？」

「私は私について、細かく説明もできるが……そのためには、前提となる知識がお前たちに足りん。ゆえに、便宜上のわかりやすい存在として、神を名乗った」

「「えええっ!?!」」

モモンガのみならず、アルベド以外の全員が呆けた声を出した。

エンリヤクレマンティーンも、である。

「え？ では、モモンガ様は神ではないのですか？」

エンリが眩暈すら感じながら呟く。

「いや。神だぞ。お前たちが私を神と認めるならば、な」

「そ、それでは神でもなんでもないではありませんか！」

ロバーデイクが少し激昂して言う。

「そこが誤解なのだがな……とりあえず、私が人間でないこと、見てわかるだろうか？ 一方で、お前たちの中で人間について説明できる者は



いるか？ お前たちは何を以て人間を名乗っている？」

「それは……」

そういうものしか、わからない。

使う言葉は、巫人として同じ。

能力面の細かな差異はあるが、能力が人間の証明なのか。

「私の目から見れば、人間も森妖精エルフも小鬼ゴブリンも大差ない。お前たちにとって私は神と大差ないであろうし、神と称した方がわかりやすかろうと思っただけだ。言っておくが、私はこの場にいる者が信頼できると考えて、この話をしている。他言はするなよ。音は外に聞こえんようしている」

「モモンガ様……っ！ 私にそんな重大な秘密を！」

エンリが感動の涙を流すが。

「俺たちが聞いて大丈夫な話なのか？」

「わ、私まだ何も返事してないんだけど……」

「……………」

ヘツケランとイミーナは困惑し。

ロバーデイクは考え込んでいた。

「さて、意地悪な質問をしたな。ロバーデイクよ、お前にとって神とは何だ？ 信仰系魔法とはどのように唱えられていると思う？」

「神とは、我らに加護を与え、救いをくださるものです」

「正しくないな」

「では何だとおっしゃられるのです」

ロバーデイクは元神官であり、神学もそれなりに修めている。

このような議論はある意味で親しんだものだが。

目の前の「女神」の言葉は、よく知る形式的な議論ではない。

「加護を得ているのはお前だ。そして、神ではなくお前が、人々や仲間に救いを与えるのだ」

「そ、そのような傲慢な！」

「元神官だと言ったな。神殿に入ることを選んだのは誰だ？ 神官の道を選んだのは？ その道を捨て、今の在り方を選んだのは？ もつと言ってしまうなら、魔法を使う対象を決めるのは誰だ？」

「……………私、です」

「お前は天にいる神を信じる前に、己自身をまず信じたのだ。それが信仰であり、お前に魔法と言う力を与えている」

「信仰系魔法とは、私の祈りに対し神が与えてくれるものではないのですか？」

「ない。同じ神を信仰する神官がどれだけいる。彼らの祈りを個別に聞き、適切な術を与えらることも言うのか？」

「無論です。神の御力は無限であり、我らはその力を得ているはず」

「神の力は有限だ。お前たちから見て、あまりに大きすぎるから、無限と思っっているに過ぎん」

「な、な……………」

目を見開き、言葉に詰まってしまう。

「私はお前を罵っていない。お前はお前の力で人を救い、お前の意志で善行を為しているのだ。だから、胸を張れと言っている。ただ、都合よく神を言い訳にしないでほしいが」

そうだ。

女神はどこまでも彼を誉めている。

神を貶めるのでなく、ロバーデイクを持ち上げている。

「言い訳、ですか」

「そうだ。小鬼ゴブリンや人食オー大鬼ガを倒したことはあるか？」

「あります」

「彼らに、回復魔法をかけたことは？」

「ありません」

「かけた場合、回復魔法は発動しないと思うか？」

「いえ、私が望めば……………発動するでしょう。相手がアンデッドでもなければ」

「つまり、お前は傷ついた者といっても、かける相手を選んでいるのだろう？」

「そうですね……………」

「それを、神の教えだとか、神の判断などと言うな。お前が、お前の意志で決めているのだ。その責任を持って」

「そういう、ことですか」

ロバーデイクは顔を上げた。

「さて、私は騙りの神かもしれん。私の誘いを受けるかどうかは、お前がお前自身の意志で決めるのだぞ、ロバーデイクよ」

女神が微笑んでいた。

### 31：俺は暴力が嫌いだ そいつは嘘じやねえ

イミーナとヘツケランは、願い事について事後報酬にしたいと言った。

当のカルネ村がどんな場所か、女神に何ができて何ができないか、知らねば良い願いもできなかったし。

二人にとつて重要な願いになるかもしれない。

心の整理だつて必要なのだ。

「ワーカーの仕事は金目当てと聞いたが。案外、現金を要求したりはしないのだな」

「だつて、お金持つてないんでしょ？」

「お前たちが望むなら、王国なり帝国の国庫から拝借してもよかつたが……」

「いや、そんな明確な盗品はちよつと……」

「そう答えられるなら、お前たちは立派だぞ。心貧しい者なら、奪つた金でもかまわず欲しがるだろうからな」

「さすがに……ね」

「ああ」

「ふふ、そんなお前たちだから、私も認めたのだ」

イミーナとヘツケランが頷き合う。

そんな様子をモモンガはにこやかに眺め。

アルシエとロバーデイクも、誇らしげな顔となった。

「では、一応願いは聞いたのだから、カルネ村に来てもらうぞ。それなりに引き払うつもりで準備しておいてくれ」

四人がそれぞれに頷く。

こうしたフットワークの軽さは、モモンガとしてもありがたい。

「あ、モモンガちゃん、話終わったなら、そろそろ外で騒いでる子の対処をした方がいいんじゃないかなーって」

周囲を固めるアンデッドたちの報告は、クレマンティーヌに届けられている。

クロマルに阻まれた野次馬たちの先頭。

騒ぐ女騎士の存在も、彼女はしっかりと認識していた。

「外で？ 例の皇帝が来たのか？」

首をかしげるモモンガ。

皇帝という言葉にざわめくフォーサイト。

「いや、なーんか四騎士の一人つて名乗ってるよー」

「ふむ。メツセンジャーということか。いいだろう。イミーナ達との話も終わったところだ、入れてやれ」

「ええつと……バハルス帝国四騎士が一人『重爆』ことレイナース・ロックブルズと申します」

「私が女神モモンガ——そして我が伴侶たる……」

「アルベドです」

（くふーっ！ 伴侶！）

レイナースが通された店内で、女神は普通の客と同様に席で座っていた。

古びた酒場である。

貴族は無論、明らかに超常的な美貌を持つこの女神らがいるにふさわしい場所ではない。

（それにしても……ここまで違っていると、嫉妬すら感じませんわね）

美貌の持ち主には、いつも嫉妬を覚えるのが常のレイナースだが、目の前の二柱は次元が違う。

たとえ呪いを受ける前であろうと、彼女らとは比べ物になるまい。

（それにしても……）

素早く店内を探るレイナースだが、状況がわからない。

奥のテーブルには、ワーカーらしき男女四人組。

また傍のテーブルには奴隷らしき森妖精<sup>エルフ</sup>が三人。

白と黒の女神はぴったりと身を寄せ合うように座り。

傍にはただものでない女剣士と暗黒神官が控えている。

（どういう状況で、私はどういう立場として迎えられたのかしら）  
彼女は貴族である。

女神に対しても相応の礼儀を示さねばと、考えていた。

「レイナースよ、ここは酒場だ。料理なり酒なり頼むがよい。もつとも、我らはさして懐<sup>ふとこ</sup>豊かではないのでな。料金は自前で頼むぞ」

「っ……承知いたしました」

可能な限り冷静に。

レイナースは店に注文し、軽い食事と、それなりに高級な酒をボトルで頼む。

自然と女神のいるテーブルに向かい、杯を交わすためだ。

（料金は私の自前……つまり、あくまで公的な関係はなく、酒場で出会った行きずりと言うことですね）

緊張を隠し、カウンターで出された料理と酒を手に、女神の元へ。

料理は洗練こそされていないが、十二分に食欲をそそる香り。

宮廷や貴族の家なら、こんな作法は軽蔑の的だろうが。

場所によって「作法」は違う。

庶民の場で貴族の礼儀作法を取り出すのは三流以下。

こうした店なら、それに合わせた作法を示さねばならない。

そのまま席につかず、モモンガとアルベドのグラスを受け取り、持って来る。

「おや……よいのか？」

「私はモモンガ様に、個人的な願い事があつてうかがった身。どうか耳を貸す代価と思ってくださいませ」

「ん？ 皇帝から言われて来たのではないのか？」

「モモンガ様のお答え次第では、皇帝に次第を伝えさせていただきます」

モモンガは首を傾げた。

「私としては、お前たちの隠密部隊とやらを捕らえ、彼らの言葉を受けて来たのだが。直接、皇城なりに現れるべきであったか？」

「いえ、そのようなことは。元は私も皇帝陛下の護衛として訪れたのですが——」

（隠しても仕方ありませんわ。陛下には悪いですけど、勝手に手札として使わせていただきましょう）

レイナースは、皇帝が広場に来ようとしていたこと。

共にいた主席宮廷魔術師フルーダ・パラダインの異変。

それによる皇帝一行の一時帰還。

レイナースが自身の個人的事情から、単独行動していることなど。少なくとも、広場で女神を見て、ここに至るまでの事情は隠さず明らかにした。

「ふむ。高齢だったならいろいろあるのだろうか」

「年齢を感じさせぬ方でしたが……」

などと言っていると。

「いや、違う。パラダイン師は私と同じ目を持っている」

会話内容に耐えかねたアルシエが、テーブルから立ち、口を挟む。

さすがに女神と四騎士相手にツツコム度胸はないが。

それなりに尊敬し、感謝している師への渾身のフオローである。

「ほう？ アルシエと同じ生まれながらの異能を？ なるほど、彼女と同様の衝撃を与えてしまったか。悪いことをしたな……いや、あの場で皇帝に会っていたら、アルシエやロバーデイクと顔を合わせず、イミーナともあの場限りになっていたやもしれん。これも巡り合わせの妙というものか」

「あ、あの、ではフルーダ様に衝撃を与えるほどの御力を、モモンガ様はお持ちなのですか!?!」

一人呟くモモンガに、レイナースは食いつき気味で問う。

「その老人よりは上だ。それでお前は、私に何を望む、レイナースよ」  
「私の、この身にかけられた呪いをどうか、解いていただきたく……!」

ずっと顔の片方を隠し続けていた髪を上げ。

醜く膿み爛れた半面を示す。

エンリヤフオーサイトの面々は息を飲んだが。

モモンガとアルベドはむしろ、興味深そうに「そこ」を覗き込む。

「呪い？ それはお前の容貌以外に何らかの害を与えているか？」

「容貌を損なって、私はかつての全てを失いましたわ」

「ああ、お前の呪いを軽んじるわけではない。視力障害や継続ダメー

ジ等はないのだな?」

「え? ええ……そういった類は確かにありませんが」

「どういった状況で、かけられた呪いだ?」

「モンスターを討伐した時に、死に際の呪いとして……」

「そのモンスターはどんなものだ?」

「それは——」

モモンガは矢継ぎ早に質問し。

レイナースは可能な限り正直に答えた。

納得した様子で頷き、指示を出した。

「少し調べてみよう。アルベドも頼む。クレマンティーン、アイボール・コープス集眼の屍を一体店内に入れて調べさせろ」

「はっ」

「りょーかいー」

入って来た何かに、アルシェが小さく息を飲んだが。

かまわず、二柱の女神と……見えない何かが、多数の呪文を矢継ぎ早に使い、レイナースを精査する。

かけられるのは、聞いたことのない呪文ばかり。

占術系なのだろう。肉体異常を感じるものはない。

この精査だけでも、二柱がフルーダ以上と十分にわかった。

「あ、あの、よろしいのですか?」

明らかな期待のこもった声で問う。

彼女としては相応の取引を——たとえ解呪など不可能でも、持ちかけられると思っていたのだ。

その取引の内容や態度によって、女神を見極めんとしていた。

だが、女神は勝手にレイナースを調べ始めている。

「どーせ、モモンガちゃんが決めたらやつちゃうし、逃がさないからねー。それにまだ解除するって話じゃないと思うよー」

ただ一人、レイナースの不安を察したクレマンティーンが、軽い口調で慰めた。

女神らはレイナースの言葉などろくに聞きもせず、よくわからない言葉の混じった会話をしている。



とりあえず、黙って待つ他なかった。

「結論から言うが、レイナース。お前の望む意味での解呪は、私には不可能だ」

「不可能……その、私が望む、と言いますと？」

「かつての容貌に戻り、今の実力を維持し、以前の生活に戻る解呪は不可能だ」

「そ、そこまでは望みませんわ。容貌さえ戻れば……」

「それだけならば、手段は二つある」

「あるのですか！」

レイナースは立ち上がり、すがり付かんばかりである。

「お前のそれは、既に呪いであって呪いでない。お前は呪いを力として利用している」

「それは……」

レイナースも薄々感じてはいたことだった。

呪いを受けて以来、異様な力が宿っており。

それが彼女の血生臭い復讐を達成させたし。

帝国四騎士の地位獲得もまた、可能にした。

モモンガとアルベドは、はつきりと認識しているが。

それはレイナースが得た「カースドナイト」のクラスによる。

呪いはクラス取得条件となり、彼女がそのクラスである限り決して解除のできない……いわば習得済スキルに等しい。

「今や呪いは、お前の本質の一つ。ゆえに『正常に戻す』類の術では、決して除去できん。つまり、お前の本質自体を書き換えねばならん」

「ほ、本質を……？　つまり、私が私でなくなるのですか？」

「それはお前次第だな……确实だがお前が好まぬであろう方法と、不确实だがうまくいけば理想になりうる方法がある」

「ぜ、前者からお聞きしても……？」

ごくりと、レイナースの喉が鳴った。

手は震え、グラスを持つこともできない。

祈るように両手を握り合わせ、女神の言葉を待つ。

「お前をアンデッドにする。知性も自我も与えるが、本質は大きく変わるだろう。私への帰属意識も生まれる。今より遥かに高い戦闘力を得ること保証するが、戦い方等も大きく変えねばなるまい」

「アンデッド!? そ、それは呪いを解いても醜悪な外見となるのでは?」

「ほう、まずそこを懸念するか。クレマンティーヌ、彼女は呪いを晒した。どうせフオーサイトにも紹介すべきだったのだ。外して見せろ」  
「えー……見世物じゃないんだけどー」

不満そうに言いつつも。

クレマンティーヌは不意に横を向く。

いや。

体はそのままに。

首だけが真横に……。

そしてずるりと首が滑り落ちるかと思えば。浮かび。

「——つとまあ、私はこのとーリアンデッドなんだよねー。めちゃくちゃ強くなったし、特に不自由もないのは保証するよー」  
「ひっ!?!」

浮かんだ首は、レイナースの目の前に来る。

その顔は、活き活きとした表情を見せ。

頭の下には黒い靄。

体の……肩の上もまた黒い靄があるのみ。

さすがのレイナースも息を飲み、悲鳴を漏らす。

というか、フオーサイトや影の薄い店の亭主も悲鳴をあげていた。

「彼女のような、自我と知性と外見を保ったアンデッドとなる。呪いを残さぬよう、戦士型から外れた……魔法詠唱者型か、特殊能力型のアンデッドになつてもらわねばならんがな」

騎士系の高位アンデッドは、たいていカースドナイトのクラスを持っている。

クレマンティーヌは剣士系特化ゆえに持っていないが……レイナースは信仰系も兼ね備えた聖騎士タイプ。騎士系アンデッドでは、

カースドナイトを持たないモンスターがモモンガには思い当たらないのだ。

中位アンデッドならば話は別だが……戦力的にもつたいないし、モモンガの基準ではなんだか申し訳ない。帰属してくれるならば、ニグンやクレマンティーン程度の戦力にしたいのだ。

実にユグドラシル脳である。

「そ、そうですよの……」

いろいろと常識が違う。

レイナースはとりあえず、そういうものと流すことにした。

目の前ではモモンガが、宙に浮かぶクレマンティーンの髪を撫で。首だけで器用に空中で転がりじやれついている。

「ええつと、では不確実な手段と言うのは……」

「これは私にはできません。私の下僕か……人間の方が信頼できるなら、蒼の薔薇のラキユースあたりを頼れ。一度死んで、蘇生魔法を受けるのだ。お前が呪いを真に退けたいと願うなら、呪いを失った体で復活できるだろう」

「死ぬ!？」

「苦痛はないぞ。私はいわば死の神。苦痛なき死については、相当の自信がある」

胸を張って言われても、レイナースはまるで嬉しくない。

しかも、その膝上にはクレマンティーンの首が収まり、マフィアのボスに撫でられる猫よろしく、ごごろごとと転がっている。異常そのものの光景だ。

「あの、どちらにしても私は死ななければならぬのですか……?」

「そうだな」

「死なずに呪いを解く方法は……ないのでしょうか?」

「ない。幻術で容姿をごまかす程度だろうな」

「……………」

会話を続けること自体が、レイナースにとっては己の正気を保つ手段だったが。

どう答えればいいのかわからない。

ぱくぱくと、空気を求める魚のように、無様に口を動かすばかり。「急かす理由もない。そのままにいることを選んでもいいだろう。相談料をとるつもりもない。お前自身の意志で決めるがいい。たとえば今決めずとも、私はカルネ村にいる」

「問答無用でアンデッドに変えたりはなさらないのですか？」

「それに何の意味があるのだ？」

「えっ……いえ、人材とか……私、それなりに戦えるつもりですが……」

「アルベドより強い戦士はいないし、遊撃はクレマンティーンで十分だろう。森の警戒はクロマルが行っている。他にも戦力にこと欠いてはいない。お前が希望せねば、私はお前に何もせん」

嘘である。

戦力が本当に足りていたら、そもそもフォーサイトを勧誘したりしない。

あくまで、レイナースを強く誘うと帝国との関係が面倒くさそう……という何となくの判断に従った結果であった。

「そう、ですか」

「私は気に入らん存在には残酷だが、どうでもいい存在を追うほど暇でもない」

「……………」

どこか呆氣にとられたように。

脱力して、レイナースはただ、頷いた。

この女神にとって己はどうでもいいのだと。

ただ願って来るから、気まぐれに付き合ったと。

そう言われたのだ。

(私は……私は内心で望んでいましたのね。この女神に問答無用で殺され、アンデッドと化し……仕方ないと己に言い訳させてくだること(を))

そんなレイナースの様子に。

神を言い訳に使うとは、こういうことか——と、ロバーデイクは己を戒めた。

そんな時。

「ん？ んんー？」

「どうした、クレマンティーヌよ」

モモンガの膝上で、猫のように撫でられていたクレマンティーヌの首が唸り、転がり、目を細めた。

店外で警護するアンデッドらの報告が入ったのだ。

「皇帝さんが、来たっぽいかなー？」

「ほう。ようやくか」

モモンガが酒杯で唇を湿らす。

アルベドが、主の膝上で転がる首を小突いた。

「クレマンティーヌ、戻っておきなさい」

「はいはい、アルベドちゃん。わーかってるってー」

アルベドがぴしやりと言えば、クレマンティーヌの首は名残惜し気に頬ずりをしてから……ふわりと浮いて、己の肩の上に戻る。

すぐにモモンガたちの耳にも、豪華な馬車の車輪音が聞こえ始めた。

「レイナース、聞いたか？ 皇帝が来るらしいが……席を譲ってやるか？ それとも、そこにいるか？」

「わ、私は……ッー」

逡巡は一瞬。

レイナースは席を立った。

彼女は……どこまでも己がかわいくて。

ここで焦って、己の命を差し出す勇気もなく。

先に己を差し出すであろう者……皇帝に席を譲ることにした。

そんな姿に、アルベド、エンリ、クレマンティーヌは眉をひそめたが。

「よい。存分に迷え、レイナース。人の運命を決めるのは神ではない。常に己自身だ。私とて知らぬ解呪方法があるやもしれんからな」

モモンガは上機嫌で笑う。

店の前で馬車が止まり。

誰かが降りる足音。

騎士たちも馬から下りているようだ。

アルベドは店内から指示し、クロマルを入り口脇に控えさせた。  
そんな音を聞きながら。

モモンガは、皇帝が入る前にアルベドを抱擁し。

これが己の決めた運命だと示すように。

最愛の伴侶の唇を味わった。

### 32：ハイクを詠め

「……恐ろしいほどの魔力の持ち主らが、姿を消して店を囲んでおり  
ますぞ」

「俺としちゃ目の前のあの魔獣から、早く逃げたいんですけどね」  
フルルードとバジウッドが声をひそめて言う。

無駄とはわかつているが。  
それでも、あまりに恐ろしい。

むしろ店の前でたむろしている野次馬どもはどうして平気でいら  
れるのだろう。

ここは未踏のダンジョンの前でも。

敵城の中でもない。

帝都の、ごくありふれた酒場の前なのだ。

それでも、彼らがこれほどの緊張を感じたことはなかったろう。

「どれも女神ほどではなかろう。女神の放置はできぬ。愚かな市民が  
機嫌を損ねるだけで、何が起きるかわからん」

戦闘力において信頼する二人の言葉に、皇帝ジルクニフは身震いを  
封じ。

軽く肩をすくめて、どうにか己を無理やりリラックスさせる。

歌う林檎亭。

聞いたことのない酒場だが、レイナスもここに入ったと聞いてい  
る。

四騎士のニンブルが、皇帝の先に立った。

中には既に知られているのか、強大な魔獣は横に退いてくれる。

（ありがたい……魔獣に正面から対峙せず済んだだけでも、第一関門  
突破と言える）

ジルクニフは内心で大きく息をついた。

日頃は冷静なニンブルも、明らかに安堵の息をついている。

今回ばかりは、その無作法を咎める気にもなれない。

損な役目をさせて、申し訳ないほどだ。

(女神とは……本当に何なのだろう)

フルーダとバジウツドが左右を。

ロウネが続き、背後をナザミが固める。

(じいから聞いた通りの実力なら、守りに意味などない気もするが)  
皇帝という地位を女神に示す必要は……まあ、あるだろう。

他の部下が殺されにくくなりそうだと、ジルクニフは自嘲した。

(悪い夢なら、よかったのだが)

周囲はいつもと同じ帝都の喧騒。

ただ、誰もが女神の美しさを讃えている。

そして今日一日で女神がしてきたことも、否応なしに耳に入ってくる。

服飾店での一幕。

白い清楚なドレス。

露店を巡っていたこと。

エルヤーを一方的に退けた一件。

女神と共に入ったワーカー。

さんざん揉めて入って行ったレイナス。

今来た皇帝一行への勝手な憶測。

野次馬らは随分な数だ。

己の態度次第では、殺されはせずとも……エルヤーと同様の恥をかかされるだろう。

それは彼のようなカリスマと権威で地位を保つ支配者にとって、事実上の死刑宣告に等しい。

踏み入るには覚悟が、必要だった。

扉を開いた時。

女神はどこか艶っぽく、微笑んでいた。

同じ顔で白と黒の衣装、身を寄せ合い、互いを見ていた視線が。

ジルクニフらに向く。

敵意も侮蔑もない。



緊張していたニンブルから、安堵の気配を感じる。  
バジウツドとジルクニフも、女神の微笑みに安心し。  
自然な様子で接しようと思つてもりする――  
が。

「おおおおおおおおおおおおおー！」

異様な雄叫びともむせび泣きとも言えない声が響いた。

彼の魔獣が横から襲つて来たかと思えたほどだ。

四騎士も、それぞれ武器に手をかける。

店内では、女神やレイナース、その他の者らも目を丸くしていた。

「おおおおおおおー！ やはり御身こそ神！ わわわ私の求める、全てを持つ御方!!」

声の主は、先刻以上の凄まじい顔になったフルーダ・パラダインであつた。

彼は絶叫しながら跪き。

「ひっ」

思わず飛びのいたニンブルの足元を、異様な姿勢と、驚異的なスピードで這い抜け。

奇怪なモンスタージミタ様相で、女神の方へ進む。

誰もが、呆然とするしかない。

女神たる二柱さえも、予想を超えた異常な存在に固まっていた。

「かかかか神よっ！ どうか私に！ その深淵なる英知の一端を!!!」

その姿は既に人間でない……と言えれば、気楽だろうが。 !!!!!!

狂人特有のグロテスクな表情と姿勢。

わめきながら這いより、女神のテーブルの下に這い込み、その足を舐めまわさんとする奇怪な生物。

フルーダのそれは肉欲にあらず、狂気、狂信、妄執、固執。

生きた怨霊そのもの。

人間よりも、アンデッドに近い性質のそれが。人間の肉をまとい。奇怪な歪んだ老人の姿で迫ってくるのだ。つい今しがたまで、女神は

二人で絡み合つてキスしてたのに。

このアトモスフィアの落差に、アルベドすら硬直した。

「神！ かか神よ！ おおおおおお、神の御脚に——」

老人の口から触手クリーチャーめいた長い舌が伸び、蠢く！  
実際コワイ！

「神よ！ どうか！ どうか！」

枯れた手が女神の白い足に伸び、不浄なる舌が肌に迫る！  
しかし。

狂人を退けるは、常に狂人！

「イヤーツ！」

「グワーツ！」

背後から狂信者エンリによるアンブツシユ！

そのメイスに敬老精神は皆無！

凶悪な形状のメイスが、オバケめいた老人の背に食い込みテーブル  
下から引きずりだす！

「グググ——死ぬ！ コムスメ、死ぬ！ <龍雨——」  
ドラゴンライ

！  
老人が振り返り、おぞましい生命力で目を剥きながら、魔力を集中

第5位階JJヅツを放たんとする！

正気でない！ エンリの背後には皇帝たちもいるのだ！ 放たれ  
れば、帝国首脳部はすみやかに消滅！

同じく狂人の域に足を踏み入れたはずのクレマンティーヌも反応  
が遅れた！

女神も硬直中！

ナムサン！

「イヤーツ！」

「グワーツ！」

エンリの目にセンコめいた光が宿った！

ヅツを放つより早く、老人の顔面にメイス！

ほとんど致命傷！

「イヤーツ！」

「グワーツ！」

狂人の闘争にアイサツはない！

「イヤーツ！」

「グワーツ！」

後頭部！ 常人なら死亡不可避！

「イヤーツ！」

「グワーツ！」

床に倒れ伏した老人を容赦なく踏みつけながら、地獄めいたメイスが幾度も振り下ろされる！

トドメの確認もない！

ただひたすら無慈悲！

「イイイイイイヤーツ！」

「ググググググワーツ！」

老人はネギトロ口となり沈黙昏倒！

だが、これほどの激闘の中ですら、エンリの女神リスペクトは完全

！

飛び散った不浄の変質者的返り血は、全てエンリが受け止めていた

！

ワザマエ！

「——はっ。エンリ、よくやりました」

「そ、そーだよ。エンリちゃんマジすごい。さすがモモンガ様が唯一自ら認めただけあるねー！」

知性に優れたアルベドと、荒事と狂気を親しむクレマンティーヌが最初に正気を取り戻した。

キリングフィールドのアトモスフィアも霧散する！

「変質者を近づけずに済んでよかったです！ 広場では、あの愚かな輩のためにモモンガ様の手をわずらわせてしまいましたから」

血まみれでにこやかに照れるエンリの表情は、いつも通りだが。

その即応性と無慈悲さは常人の域を大きく超えている。

ただ一人彼女だけが、冷静に躊躇なく変質者を迎え撃つたのだ。

エンリが動かねば、モモンガの美脚が、おぞましい唾液で汚されて

いただろう。

さらに上まで進まれ、アルベドが日常的に舐めている箇所まで至られていたかもしれない。

そうなれば、貞操を奪われたも同然。

あの老人とアルベドは間接キスである。

いや足先だってしよつちゆう舐めているのだ。

舐められて許せるものでない。

「思い知らされたわ……エンリ。貴方は本当に素晴らしい護衛よ。モング様になくってはならない存在だわ」

「あ、ありがとうございます、アルベド様！」

アルベドも心から彼女に一目置く一件だった。

いや、人間を高く評価した瞬間とすら言えよう。

そしてさらに幾呼吸が過ぎ。

同じタイミングで。

どこか似た二人が正気を取り戻した。

「二な、なんだ？ 何が起きた？」

二つの声が重なる。

声の主は鏡を見るように、互いを見た。

女神モモンガと、皇帝ジルクニフ。

後世にはいろいろと美化されもするが、二人の出会いはおよそのこのようなものであった。

なお、アルシエは度重なる心労とショッキング過ぎる光景に耐えきれず、意識を手放していた。

### 333：少し泣く

皇帝らが今の老人を知らない人扱いしても。

見て見ぬふりをする優しさが、女神たちにもあった。

モモンガも……アルベドも、なんとなくジルクニフの気持ちを察したのだ。

ある意味、この一幕ゆえに皇帝と女神は、同じ人物による被害者として奇妙な親しみを共有したと言えるだろう。

だからといって二人が、あの老人に感謝したりはしないのだが。

二柱の女神は席を立っていた。

あの老人が這い込んだテーブルで座っていたくなかったのだ。

「……あれも一応、帝都市民には違いあるまい。思わず過剰に攻撃してしまったが、かまわなかったらどうか？」

「か、かまわないとも。むしろ変質者を退治してくれて、そちらの神官殿にはお礼の言葉もない」

そう言われて、エンリが胸を張る。

村娘なら微笑ましい姿だが、血まみれ暗黒装備では威圧しているようにしか見えない。

「よかつたら、供の方に言つて、神殿なりに運び込んでくれるか。回復魔法の使い手はここにもそれなりにいるのだが……回復させると何をするかわからんし、私自身その、気持ち悪い」

「そうだな……私も、さっきのような狂態は見たくない」

「そうしてもらえるか」

「そうしよう」

そういうことになった。

四騎士の一人であり、寡黙なナザミが、逸脱者とかいう二つ名を持つ変質者を抱え、退出する。

「苦労しているようだな」

「いや……ああ、ありがとう」

察した上で気を遣ったと明言されて。

ジルクニフは肩の力を抜き、素直に接することにした。

自身の部下の酷すぎる醜態をみたばかりである。

目の前の女神は、あの狂人より遙かに常識的で善人に見えた。

「その……座るのはどうも、落ち着かなくなつたので……立つたまま  
でいいか？ 疲れているなら、軽めに酒や食事をとってはどうか？

皇帝の口に合うかは知らんが、私は気に入った」

座るとあの老人に迫られた状況がフラッシュバックするのだろう。

無理もない。

その意味でも、女神の精神性はごくごく健全に思えた。

「そ、そうですね。では我々も立つたまままで失礼を」

「酒や料理は俺が頼んどくぜ。立食パーティーと思えば優雅なもん  
ぢや」

ニンブルとバジウッドが動く。

ロウネはジルクニフの後ろに控えた。

女神の美しさは想像以上だったが。

別の意味で想像以上(以下)のものを見てしまった直後ゆえだろう。

誰も、鼻の下をのばす気持にはなれなかった。

「彼らが皇帝殿の信頼する部下か。なかなか尖つた人材もいるようだ  
が……ふふ、良い関係を築けているようだな。まるで冒険者やワー  
カーのチームだ」

「はは、自慢の部下だが……そんな風に表現されるのは初めてだよ。  
よければどうか、皇帝ではなくジルと呼んで欲しい」

「そうか。私はモモンガ。こっちはアルベドだ」

そうして互いに部下や仲間を紹介しあう。

砕けた空気ができ、気楽な談笑が始まる。

フォーサイトはさすがに皇帝との会話に混ざるのは……と固辞し  
て解散し。森妖精らは二階の部屋を休憩に借り。レイナスは少し  
きまり悪げに、皇帝の後ろに控えた。

料理を出すと、店の亭主も奥に引つ込む。皇帝の会話を聞いても、  
面倒になる予感しかしなかった。というか、さつき主席宮廷魔術師に  
よく似た変質者を見たことも、彼としてはかなり後悔している。

「しかしジルは、随分とすぐ私の前に現れたな」

「名高く美しい女神が来た以上、一人の男として会わぬわけにもいかないよ」

「おや、皇帝とはそのように暇な身なのか？」

これは供の者ら……主にロウネとバジウッドを見て言う。

「いえ、陛下は仕事に溺れ死にかねない状態ですよ」

「まったく寝食を惜しんで仕事仕事ですからねえ」

モモンガがレイナースをちらりと見ると。

彼女もこくりと頷いて見せる。

ロウネとバジウッドの言葉は、皇帝と対談する時間の価値を高めるためだが。実際にジルクニフが寝食を削って書類仕事や各種政治活動に専念しているのは確かなのだ。

「すまなかったな。私のせいで面倒をかけたか？ きちんと休むのだぞ？」

女神がこう素直に謝って来ると、ジルクニフも調子が狂う。

なんというか、捉え方が母親だ。

「いや、来なければ日をかけてカルネ村に向かわねばならないかと思っていたんだ。こうして来てくれてむしろ助かったよ」

帝都に突然現れるとは思っていなかったし。

フルーダがおかしくなるほどの実力者とも思っていなかったが。

「ふむ……だが、入国もその後も。私は随分とジルの定めた法を破っただろう？ 捕らえるなり罰するなり、しなくてよいのか？」

悪戯っぽく笑って問う。

成熟し、色香をまとう肢体なのに。

その表情は無防備な少女のそれで。ジルクニフらに警戒も危機感も抱いていないとわかる。おそらくフルーダにも嫌悪感を抱いただけで、危機感などなからう。

「しかし、貴方のしたことは、いずれも民の支持を得るものだ。エルヤー・ウズルスの件など最たるものだ。あれは実力を鼻にかけた問題人物だった。恐ろしいほどの実力を持つ一方で、人格的に大きな問

題があった。あれがなければ、帝国四騎士は五騎士だったかもしれない。恥をかかせ、鼻っ柱を折ってくれたこと、私も痛快に感じたよ」  
相手が妙齢の女性であること。

女神を名乗るにふさわしい実力を持つことから。

ジルクニフは、気安くモモンガの名を呼ぶ気にはなれなかった。

「……ありがとう。ジルがそう言ってくれれば、私も己の在り方に自信を持てる」

意外な言葉に、ジルクニフは無論、エンリヤクレマンティーヌも驚いた。

これほどの力を持つモモンガが、なぜ他人の目など気にするのか。

王国ではあれほど暴威を振るったというのに。

「貴方は女神なのだろうか？ 力のままに思うように振舞えばよいのではないのか？」

ジルクニフは敢えて踏み込んで、聞いてみる。

「そのつもりなら、私は女神などと名乗るまい。魔王なり魔神なりと名乗っていたぞ」

「それらと女神は、何か違うものなのか？」

超越的な力を持つなら、どちらも同じではないのか、と。

それに王国での所業は実際、魔王に近いのでは……とは顔色にも出さない。

「女神とは崇められ、見られ、語られるものだろうか？」

「……恥ずべき行いはできないということかな」

「少し違うな。私を信じる者、愛する者を裏切らないということだ」  
アルベド。

それにエンリヤニニヤ、クレマンティーヌたちに恥じない己でありたいということ。

「なるほど。正しく、貴方は女神なのだな」

世辞半分に、ジルクニフが返す。

モモンガは不思議そうに首をかしげた。

「何を言う。責任と力があれば、誰だってそうだろう。ジルは違うのか？」



「……私が？」

意外な形で己に言及され、ジルクニフは首をかしげた。

親族や貴族をさんざん処刑し、追放した身。

法国以外の他国から罵られ、信用されづらい所以である。

国内でも地域によつては怨まれ続けているだろう。

特に交戦状態の王国は、彼の所業を鬼畜の如く喧伝していた。

「こうしている間も、ジルは皇帝として強く振舞っているのだろうか？

それは人として歪な生き方だろうか。選ぶには相応の覚悟や決意

があつたはずだ」

「それは……」

認めてよいものかと。

ジルクニフは珍しく、口ごもる。

「この国が強い敵に攻められたら、ジルは安全な外国に逃げるか？

思われぬ災害で国が貧しくなったら、ジルは国を見捨てるか？」

「逃げも見捨てません。私はジルクニフである前に、バハルス帝国皇

帝だ。たとえ民が一人になろうとも、私一人になろうとも。帝国が帝

国である限り、私は皇帝として国を富ませ、発展させる義務がある」

己の国をよりよくする。

その点だけは、譲らずやってきたのだ。

優等生ぶつた返答だろうと、それはジルクニフの根源。

でなければ、そもそも皇帝になど、ならない。

「ふふ。ふふふふ」

女神が笑った。

今までの微笑ではなく。

本当に、嬉しそうに。

魂の底から嬉しそうな笑顔を見せた。

「そうだ！ そうだよな！ 逃げも捨ててもするものか！ たとえ誰も

いなくなつたつて、最後の一人になつたつて………守る、よな」

そして、嬉しそうな笑顔のまま。

かつての己を思い、ナザリックを想い。

女神は涙を、こぼした。

対面にいたジルクニフにとって。

いや、ロウネ、バジウツド、ニンプル、レイナース。

全員が、彼女が本当に女神なのだと確信させる笑顔だった。

政治的駆け引きをしていたジルクニフの仮面を、砕いてしまう笑顔だった。

アルベドだけが、痛ましげに眉を寄せたが。誰も気づかない。

「王国は酷いものだった。聞けば、かつてはこの国も大差なかったそうだな」

「それは……しかし過去のことで……」

ジルクニフの声は小さく、自信がなかった。

過去の恥を暴かれたようで、恥ずかしかったのだ。

「ああ。今の帝都を見たぞ。人々は活気に溢れ、明日への希望に満ちている。もちろん、細かな問題は人それぞれにあるのだろうが……それでも、国で解決できることは、見事に成し遂げている」

「あ、ありがとう。そう言ってもらえれば、改革を成し遂げた甲斐もあった」

女神は正面からジルを見つめて言う。

本当に、本当に正面から褒められていた。

ありふれた追従や世辞ではない。

己の感情がこんなに容易に変わるのかと、後になれば呆れるほど。

ジルクニフはただ照れくさかった。

「そうだ。お前が全て成し遂げた」

「部下たちがいたからだよ」

まるで子供のように答える。

ジルクニフは、己の母も親族も全て排除した。

彼自身が命じて処分した。

だが、彼はそれゆえ、母を強く求めていた。

愛妾に据えたロクシーも、母性ゆえ重視した。

「お前が彼らを幸せにしたんだ」

「そうすれば国が富むから、だよ」

言い訳じみていた。

よくあるお世辞だし。

素直に礼を言えればいいだけなのに。

ひどく、面映ゆかった。

「それでも、だ。よくやったな、ジル。お前が決め、成し遂げたことは本当に素晴らしいんだ」

「あ——」

ありがとう、と言おうとしたが。

目から溢れる何かが、喉からこみあげる何かが、声を邪魔した。

ジルクニフは、母が欲しかったのだ。

相手に彼の権力を求める気配がわずかでもあれば、違ったろう。

だが、今。

（私の前にいるのは女神ではないか。女神に甘えて……何が悪い？）

フルーダのあれこれで、彼は既にかなり疲れてもいた。

「容易ではなかったろう。私は一度はあきらめてしまった。だが、ジルは、私には計り知れないほど、がんばって……みんなを幸せにしたのだ。すごいことだぞ」

女神の手が伸びる。

護衛の騎士らも、誰も反応しない。

その手は、皇帝の金の髪を撫でた。

皇帝の目から溢れるそれは、止まらない。

顎まで伝い、雫が床に落ちていたが。

止まらなかった。

「よくやった、ジル。お前という男が生まれ、皇帝になってよかった」  
目の前にある女神の顔が、なぜか見えなかった。

上から目線にすぎない言葉ではないかとは。

欠片も、思わなかった。

「ばた、ひば——」

私は、と言おうとしたのに。

声が濁る。

声が途切れる。

体がふらふらと揺れる。

しっかりと、立っていないなければいけないのに。

褒められた札くらい、言わなければいけないのに。

「声を出しづらいか？ ふらつくか？ 気にするな。生きていけば、そんな日もあるものだ」

女神の声はどこまでも、やさしい。

ぱた、と翼の羽ばたく音がした。

ぼやけて見えていた女神の顔が消え。

白いものが間近に迫り。

次の瞬間——皇帝の顔が、柔らかいものに包まれる。

「ずっと、がんばってきたんだ。ジルは少しくらい休め」

皇帝の側近は、何も言わず。

止めもしなかった。

ただ皇帝の嗚咽だけが響き。

〈魔法無詠唱化〉サイレントマジック 〈魔法抵抗難度強化〉ペネトレイトマジック 〈深き眠り〉ディープスリープ

それもやがて、寝息に変わった。

女神の胸の中、黒い翼に包まれて。

皇帝は幼い子供の用に眠りに落ちた。

それは、まさに一幅の宗教画の如き荘厳な光景であった。

### 34：ああつ女神さまつ

「……んん？」

古ぼけた見知らぬ天井の下、皇帝ジルクニフは目覚めた。今までにないすつきりとした——いや、晴れ晴れとした目覚めだった。

「起きやしたか。色気のない顔ですみませんね」

傍の椅子に座っていたバジウツドが声をかける。

「どこだ？　ここは？」

首を振り、見回す。

古ぼけた粗末な部屋だ。

寝ていた寝台も、かろうじて清潔ではあるという程度。

皇帝になる前も後も、彼はこんな部屋で寝起きた経験がない。

窓の外は既に日が暮れている。

「覚えちゃいませんか？　歌う林檎亭つて酒場の二階ですよ。下で女神様と会ったでしょう」

「女神——そうだ！　女神！　女神はどう……した!？」

どうなされた、と言いかけ。

慌てて皇帝として言葉を改めた。

言いながら記憶が一気に戻り。

羞恥に顔が赤く染まり、身悶えしたくなる。

(酷い醜態を見せてしまった。それに最後には……あああああ！)

子供でもあるまいし、あんな無様を晒すなど、と。

実際に身悶えしてしまう。

「はは、俺たちや気にしてませんぜ。それに、誰だつてあんな風に言われりや、ああなりまさあ。いい年こいた大人ほど、冷静じゃいられませんかよ」

「バジウツド、他には漏らしてしまいな!？」

「ははは、わかってますつて！　けど、見てた俺たちは全員、陛下が羨ましかったんですよ」

「ぐ……う……それはまあ、な。というか女神殿はどうしたんだ？」

羞恥で顔を赤くしたまま、ぐまかすように問う。

「……陛下、あの女神様に抱かれながら寝ちまったでしょう？ そしたら、女神様が馬車だとすぐ起きるからって言いやしてね。この部屋を借りて、陛下を寝かせなすつたんで」

「ん？ 待て、二階だろう。女神殿が私を運んできたのか？」

「ええ、女神様ってのは筋力もたいしたもんなんでしようや。陛下をお姫様扱いで抱きかかえて、この部屋まで運んできたんですよ。本当に母親みたく、陛下を寝かしつけてやしたぜ」

「お、お前たちは、それを黙って見ていたのか」

ジルクニフが恨みがましそうに言う。

恥ずかしい。

想像すると死にたい。

「止めて、俺たちに抱きかかえられたかったんですかい？」

「いや起こすだろう、普通」

泣き寝入って、寝かしつけられたなど、恥ではすまない。

子供ではないか。

「いや、それが女神様のご命令というか……要求がありました」

「何？ 私が寝ている間に、女神殿が帝国に要求をしたのか」

「要求っていうか何ていうか……」

「ロウネが勝手にそれを受諾したのか？」

「いや、そこは俺たち全員でまあ……」

「なんだと？ 何を要求されたのだ」

バジウツドラしからぬ、はつきりしないもの言いにジルクニフの眉間にしわが寄る。

己の無様のせいで、帝国によからぬ要求を押し通されたのではなからうか、と。

まさかそのために女神は己を弱らせ、眠らせたのかと、嫌な考えが沸き上がる。

「いや、陛下が考えてるようなのじゃありませんぜ」

「いいから言え」

苛ついた口調になってしまう。

女神を名乗る存在に、いいように手玉に取られたではないかと。そんな存在に気を許して、無防備を晒した己自身が恥ずかしい。

「その……可能な範囲で今日の仕事を止めて、陛下をしつかり休ませろと。あと、今後も食事と休憩と睡眠をしつかりとらせるように、との要求でさ」

「は？」

何を言われたかよくわからない。

国への要求はどうした。

「他には？」

「いや、それだけでさ。その後も、しばらくはこの部屋で陛下に付き添ってやしたぜ」

「そ、そうか。で、今はどうなされている？」

かあつとまた顔が赤くなった。

女神に会ってから、感情の歯止めが効いていない。

そして、ついさつきまでの己が恥ずかしかった。

女神を、世間の愚かな王族や貴族のように考えてしまった己が、疑ってしまった己が、恥ずかしい。

「目を覚ました時に顔を合わせると恥ずかしいだろうから、つて。そのまま、例のワーカーと森妖精<sup>エルフ</sup>らを連れて魔法で消えちまいました。またそのうち、来るそうですが」

「そう、か」

落胆とも安堵とも言えない口調だった。

女神がいないのは寂しく、悲しい。

だが、もしいれば……女神が俗な要求をしてくるのではと、疑ってしまうだろう。

「俺が思うに、ありやマジモンの女神ですよ。女とか、王とか、マジックキャスター魔法詠唱者とか、そんな凄さじゃねえ。いろいろ超越しちまってま。金だの地位だの、欲しがりもしませんぜ」

「そうだ……な」

あれだけ美しく、また己に優しくしてくれたのに。

まるで劣情も慕情もわかない。

ただ圧倒的な感謝、あるいは愛情だけがある。

崇拜……ではないと、思うのだが。

「さんざんいろんな女に手出した俺でも、あの女神様にや手をだそうって気になれねえ。怖いとかおっかないとか、そんなんじやねえんですよ。なんつうか、俺みたいなものに触れちゃいけねえって、思っちゃまうんです」

「ああ……胸に抱きしめられたのに……そんな気持ちはまるで湧かなかった」

「魔術師殿が、あそこでぶちのめされてなきや、ああやって受け入れてもらえなかったかもしれないやせんね」

「ん？　そういえば、じいは無事なのか？」

初めて酷い状態になっていた、育ての親とも言える魔術師を思い出す。

「無事つつうか、あのじいさん回復したら空飛んですぐ戻って来やしてね」

「何？」

「あの窓から、寝てる陛下に付き添ってる女神様に突進しようとして」  
「ああ……」

「なんか空中にすげーアンデッドが出て来て阻まれやしたが、女神様は怖がるっていうか……気持ち悪がって、さっさと帰っちゃったんですよ」

「それで帰ったのか」

「ええ。陛下が目を覚ますまでいるか、女神様も迷ってたみたいだったんですがねえ」

「おのれ、じい……」

「ははっ！　調子が戻ってきやしたね」

バジウツドが、酒を勧める。

改めて気づけば、下は随分と騒がしい様子だ。

あまり階下の音が響かないだけ、これでも上等な部屋と言うことか。



「下はえらい騒ぎですよ。なんせ女神様がずっといらしたんだ。前にいた野次馬連中や、噂を聞いた連中がわんさか押し寄せて、同じ酒やら料理を頼んでるってわけで」

「……他の連中はどうした」

皇帝が来てるからじゃないのかよ、と思わなくもないが。

確かに女神の方が重要だろうなど、納得していた。

実際、この日を境に、歌う林檎亭はワーカー御用達の知る人ぞ知る酒場から、女神ゆかりの観光地として一般客で賑わう名店となるのだった。

「書記官殿とニンブルは、皇城で陛下の今夜の予定を全部キャンセルするそう。じいさんも連れて帰りましたよ。扉の外にはナザミが。レイナースは下で一応、野次馬らの相手をしてまよ」

「レイナースは、女神について行かなかったのか？」

「ついて行こうとしたそうですがね。来ると陛下の負担が増えるからダメだって、女神様が断ったんですよ。帝都からいなくなったのは、ワーカー4人と森妖精<sup>エルフ</sup>奴隷3人だけでさ」

「……………」

女神はどこまでも、己のために動いてくれたのだ。

「ま、盲信しちやいけないでしょうけどね。女神様が陛下を気に入って、鼻肩してくれてるのは確かだと思いますぜ。王国はあのザマですからね」

「そうだな。帝都でも同じようなことが起きるのではと、警戒していたが……………」

「やっぱ日頃の行いってのはバカにできやせんね」

「神は見ているというわけか」

己は間違っていなかった。

そう晴れ晴れと笑い。

酒を飲む。

杯も中身も。

いつもよりずっと安くて粗雑なものだったが。

(うまい……………今まで飲んだ、どんな酒よりも)

また少し、目頭が熱くなる。

「……もう少し、寝るか」

早朝、床に転がる酔漢らを避けながら、皇帝は朝帰りした。

時は少し戻る。

「よくぞ捕縛に留めた。礼を言うぞ」

窓の外、六騎の青褪めた乗り手が女神に槍を捧げ、敬礼し。

再び不可視化する。

「あんなのでも、ジルには必要な人材なのだろう。レイナース、お前も含めてな」

「……やはり、私を連れて行ってはいただけませんか」

「ああ。お前が突如姿を消しては、ジルの負担も増えるばかりだろう」  
寝台でまだ眠るジルクニフを、モモンガは慈しむように見る。

アルベドが軽く自己主張するように、モモンガに身をすり寄せた。  
ニンブルとロウネは、捕縛されたフルーダを連れ、皇城に向かった。

バジウツドとナザミは階下の野次馬らに対応中だ。

エンリとクレマンティーンも階下にいる（返り血は〈清潔〉の呪文で除去済）。

「ですが」

「そうむくれるな。ただ、お前に一つ頼みがある」

「私に？」

「お前の呪いを解けぬ神の言葉など聞くに値せんと思うなら、無視してもよい」

「……何をすればよろしいのでしょうか」

レイナースは、モモンガが女神だと確信し。それゆえに女神に従って帝国を離れ、アンデッドと化す覚悟を固めていた。女神の言葉はやわらかいが、聞かなければ助力せぬという脅しにもとれる。

この口ぶりで、帝国や皇帝への裏切りを唆すわけはあるまい。

「お前にとって、たいしたことでない。フルトという貴族の屋敷が、帝

都にあるはずだ」

元貴族として、知らぬ名ではない。

「……既に貴族ではありませんわ。確か陛下に貴族位を剥奪され、今は平民かと」

「なるほど。ならばなおさら、度し難いな」

「? どういうことですか?」

軽く、アルシエに聞いた話を、レイナースに伝える。

「珍しい話ではありませんが……世代差なのでしようね。娘はまとも  
に育っている点が、残酷な状況を生み出しています」

「初期に粛清された家は、子供らも親の思想に染まっていたか。そしてアルシエらは……はあ。ままならんな。この点は今度、ジルにも話をすべきか」

深々と溜息をつく女神の様子は、すぐ横で寝ている皇帝の日頃の姿と妙に似ていた。

互いに共感するものがあればこそ、ああも打ち解けたのかもかもしれない。

「そのフルト家がどうかなさりましたの?」

「屋敷に注意して欲しい。警戒と言ってもいいな。親がどうなろうとかまわんのだが……幼い娘が二人いるはずだ。これらが売られたり拉致されそうになったら、保護して欲しい」

「合法的にでしょうか。それとも多少違法でも?」

「帝国に都合のいい形で処理してくれ。私としては親には思い知らせてやって欲しいが、な。ああ……例の老人が正気に戻ったら手も借りてかまわん。私の名をだせば喜んで手を貸すだろう。少し気持ち悪いが」

「あれでも帝国の英雄なのですが……まあ、女として気持ちはわかりますわ」

「すまんな。よろしく頼む」

女神はそう言って、レイナースの髪を撫でた。

アンホール・コープス  
集眼の屍から情報は得ている。

フォーサイトの面々は裏口に集まっていた。

その近辺にアルシエの妹らしき少女はいない。

留守の間の利子なりを、いくらか先払いしたのかもしれないが。モモンガとて、元社会人である。

借金を繰り返し、破滅する様子など……あのリアルでも珍しくなかったのだ。奴隷制度があるなら、容易に奴隷へ墮とされるだろう。そして当人らが墮ちるより先に……娘らが親の所有品として墮とされるに違いない。

ジルクニフとの出会いは、モモンガにとっても幸運だった。

いろいろ大事なことを思い出せたし。

過去に戻って自分自身を救った気分にもなれた。

だから、この帝都を去る時に。

わずかでも、嫌な後味は残したくないのだ。

階段から足音がする。

バジウツドという騎士が戻って来たのだろう。

あれだけ泣いたのだ、ジルクニフとて目覚めて顔を合わせるのは気まずいだろうし。

打てる手は打った……はずだ。

「帰るとするか、アルベド」

「はい」

今のモモンガにとって最も大切な人は。

腕の中にいる。

そろそろ、二人の時間に戻りたかった。

夜、〈転移門〉でカルネ村へと帰れば。

二柱の女神は、全てニグンとエンリに丸投げして、夕食すら食べずに黒い城塞にこもった。

「アルベド。お前の好みから外れるかもしれないが、私にも……私がジルにしていたようなのを頼めるか？」

「もちろんです！」

このあとめちやくちや褒められたり泣かされたりして。

幼児退行ツクスに溺れるモモンガであった。

三人の森妖精<sup>エルフ</sup>たちは、王国で保護された娘らに合流した。彼女らは相互扶助の修道院じみた組織を作り、なるべく男を寄せ付けず、助け合って回復しようとしている。戦闘能力を持つ三人は快く迎えられた。

フォーサイトの面々は、漆黒の剣、ブレイン、カジットらと顔合わせをし、村について教えられた。村人の訓練、森での薬草採取における警護など、仕事は多い。今夜は休んだのち、明日からは村人らで協力して家を建て与えられる予定だ。

本来は村の警戒要員だった集眼<sup>アイボールド・コープス</sup>の屍はニグン指揮下に戻った。

女神警護を村以上に重視したため、情報収集の要たるこれらはカルネ村外部の警備網から外れていたのだ。

だからだろう。

ニグンは、相当距離まで接近していたそれに。女神が帰還し、集眼<sup>アイボールド・コープス</sup>の屍が指揮下に戻ってきて……初めて気づいた。

仮面の少女と、ふてぶてしい老女を連れた、白金の甲冑戦士。

「エンリ殿。クレマンティーン。帰って早々ですが……招かれざる客のようですな」

「えっ……もう！ 今日帝都でも戦って来たのに！」

「あはは、今回はエンリちゃん大活躍だったもんねー」

「一人は蒼の薔薇のイビルアイ。他二人は最低でも蒼の薔薇程度の実力者でしょう」

「モモンガ様も今日はお疲れでしょう。私たちが解決しないとー！」

「おっけーおっけー。相手は三人、こつちも三人……でもないかな？」

女神警護のため造られた六騎の青褪<sup>ペイル</sup>めた乗り手<sup>ライダー</sup>は、エンリ配下となっている。

またクロマルも、正式にエンリに乗騎として貸し与えられた。

ゆえにエンリは死の騎士<sup>デス・ナイト</sup>を近侍に呼び、幽体の騎士らを引き連れ、超級の魔獣を駆り……まさに暗黒の聖女の装いで、女神の平穩を乱す

不届きものを捕らえんと出陣準備をする。

帝都での闘争の昂ぶりをンファイで鎮めるつもりだった彼女は、理不尽な怒りに燃えていた。

### 35：『僕は悪くない』

前回——ラキュースらと訪れた時と同じだった。

ただ、前回よりかなり村に接近できたのは僥倖か。

あるいは不幸だろうか。

黒い城塞へ近づくとイビルアイたちの前に、闇より暗い異様な空間が現れる。

「来たぞ」

「手下だよな？」

「この転移魔法……魔神と同格の連中と思った方がいいね」

〈転移門〉から現れたのは。

朽ちた法衣の高位アンデッド。

恐るべき魔獣を駆る暗黒神官。

凶悪な笑みを浮かべた女剣士。

さらに、目には見えぬ恐るべき気配が周囲に散開している。

「王国からの使者……ではなさそうですね、イビルアイ殿」

「どのような用件か、聞いてもいいですか？」

交渉役、ということか。

アンデッドと神官が、呼びかける。

「手下に用はないよ。女神っていうのを呼んでほしいんだけど」

鎧が、緊張感のない口調で言う。

「あ？ 誰が手下だってえ！」

だが、その言葉が黙っていた女剣士の逆鱗に触れた。

「いかにも。私はモモンガ様に生まれ変わらせていただいた身。いわばモモンガ様の被造物！ 手下などと、いつ裏切るとも知れん存在のようには、言わないでもらいたい！」

「私は、厚かましくもモモンガ様に側仕えを許された身。モモンガ様に糧を与えられるだけの小動物以下。偉大なるモモンガ様が、私如き利用価値を見出すなど。不敬に過ぎます！」

他の二人も真面目な顔で言う。

「MUUGEEEN、MUGGEN！」

魔獣も何か訴えるように嘶くが、残念ながらこの場に獣の言葉がわかる者はいない。

「ちよ、ちよっと待つてよー。私はモモンガちゃんより下でもなんでもないって意味でさあ」

怒りの顔を見せていた女剣士が、毒気を抜かれた様子で二人をなだめる。

しかし、考え方の異なる二人相手では、言葉もすれ違えばかりだ。

「まあ、お前はペットだからな」

「モモンガ様に撫でていただけで、羨ましいです」

「誰がペットだお前ら！」

三人……というか、二人と一人で言い争っている。

「なんで漫才が始まつてるんだい」

老婆——リグリットは呆れた様子で眺めるしかない。

「前はかなり連携できてたんだけどな……あの貴族殺しの女がいるせいか？ 足並みがそろっていないなら攻撃のチャンスだな！」

「このバカ！」

とりあえず攻撃しようとするイビルアイを、リグリットは殴りつける。

「うん、まあ別の意味で同程度の人たちってことだね」

二人のやりとりと。

三人の言い争いを眺めて。

白金の甲冑は呟くのだった。

蒼の薔薇が来た時を思えば、随分と平和的に自己紹介がなされた。とはいえ、村の中には迎えられず、城塞の前にいるだけだ。

イビルアイと共に現れたのは、スレイン法国でも相当の地位にいた二人にとって、大いに問題ある存在だった。

十三英雄の一人たる「死者使い」リグリット・ベルスー・カウラウ。

アーグラント評議国永久評議員「ブラチナム・ドラゴンロード白金の竜王」ツアインドルク

スゥヴァイシオン。



「な、なるほど。アーグランド評議国の竜王殿でしたか」

「……やばくなーい？」

ニグンとクレマンティヌが緊張感を漂わせる。

アンデッドと化して得た戦闘感覚で探れば、竜王の危険性がひしひしとわかってしまうのだ。

ゆえに二柱の女神についても、おおよその情報を開示した。

竜王にこんな場で暴れられては、女神の邪魔をしてしまう。

だが、運命は常に無情。

「とりあえず、そのモモンガとアルベドっていうのに会わせてよ」

やわらかな、しかし有無を言わさぬ口調で、竜王が言った。

ニグンとクレマンティヌは、互いに目を合わせる。

今すぐとか無理である。一度籠れば、出てはこない。

しかし。

相手について何も知らないエンリは、強気である。

「逗留なら許可します。中の様子を見てもかまいません。ですが、モモンガ様、アルベド様との謁見は三日ばかり待ってもらいます。あなたがどれだけ偉い人でも、これは譲れません！」

「うーん、待つていいっていうのはありがたいけど。私だつてこれでも忙しいんだよ？」

ツアインドルクス——ツアーの口調はやわらかいが。

目の前の娘を鋭く観察している。

「転移で、また来たりできないんですか？」

「いや、そりやできなくはないけど。いったい、どうして会えないのさ」

「お二人が、大事な儀式の最中だからです！」

「……その儀式で、この世界に深刻な問題を起こされるかもしれない」  
静かに、しかし威圧を込めてツアーが言う。

「そんなこと、ありえませんか！」

「貴様、何を根拠にそんなことが言える！」

胸を張つて言うエンリに。

イビルアイが食つてかかるが。

「はー。そゆ儀式じゃないから、ホントに。ていうか、儀式ですらないから」

唯一、二人の生活の詳細を知るクレマンティーヌが、疲れた様子で言った。

「へえ。それは気になるね」

ツアーが、視線をクレマンティーヌに向けた。

「えーと……んー。竜王サマと十三英雄サマだけ、ちょーつとこつち来て。他の三人はいい子だから、黙って待っててねー。この二人に私が攻撃したりはしないし、私が攻撃も……されないよね？」

「あんたが何もしなきゃ、わしからは何もしないさ」

「私も同じくだよ」

リグリットとツアーが頷いた。

「ちよ、なんで私だけ外されてるんだ！」

「人質に決まっているだろうが。あいつに何も無いよう、互いの信用の担保だよ」

「クレマンティーヌさん、自らあんな役目を……」

薄々、女神が何をしているか気づいているエンリは、竜王らと共に離れる同胞（エンリ認定）を尊敬の念と共に見送るのだった。

「モモンガちゃんとアルベドちゃんが何してるかだけどー……竜王サマは察してくれたりしないかなー？」

「いや、さすがにわからないよ。確かに、あの城塞はたいした隠蔽もされてないし……中で強力な力を持った二体が、何か体力を消耗しながら激しい行為をしているのはわかるけど。具体的に何のための儀式かまでは、わからないな」

「そこまでわかれば、十分わかるでしょー」

「わしにもさっぱり、わからんよ。いったい、何の儀式をしてるって言うんだい」

クレマンティーヌは気まずげに、がしがしと頭をかく。

「まず、あれは儀式じゃない」

「儀式じゃなけりや何なのさ」

察しろよと口の中で毒づきながら。

彼女としては最大限愛想よく、説明する。

「……えーと、ドラゴンって人間の言い回しとかわかる？ 混乱する？ 止めた方がいい？」

「わしの経験から言えば、率直に言った方が間違いがないのう」

「酷いことを言うね。私だって、ここ百年でかなり、人間の本を読んだのに」

「え、えーと。あの二人は恋人同士でねー。だからさ、恋人がすることを今してるわけ」

「女神と女神じゃなかったのかい」

「最近は何士の恋愛の本も多いよ」

多いのかよ、と内心のツツコミを抑えるクレマンティーン。

「ふうむ。すると色に溺れておるといふのかい？ なんて三日も待つんだい？」

「あー、そうか。交尾か。女同士だからちよつと違うのかな？」

「あの二人はねー、飲食とか睡眠とかなくても大丈夫だからその……」

一回始めると終わらないんだよ……マジで」

「三日間？」

「そういう動物いるよね」

そうか、そういう動物って思えばよかったのか……と、竜王の英知に感心するクレマンティーンである。

「で、途中で割り込むと、めちやくちや機嫌悪いしー。最低限三日は待たないと、どうなるかわかんないんだよー。これはホントにホントだから」

「あー、うん。それでずっと二人でくつついて、時々なんか痙攣してるんだ……」

「そこまでわかるなら、最初から察してほしかったな……」

「真面目な話とおったのに……」

ようやく状況を理解し、改めて呆れる二人。

「できたら今、私がそういうこと言っただけのも、当人の前じゃ知らな

いふりしてくれた方が、交渉するにもいいんじゃないかなーって」

「あー……まあ、チクつたりはせんわい」

「うん、戦いにならなかつたら大丈夫だよ」

わー安心できなーい、と空を見上げ。

損な役目を買って出た己を、悔やむのであった。

「じゃあ、最低でも三日は村にいさせてよ」

「わしもアンデッドと共存しとる村には、興味があるわい」

戻って来た二人は、すんなりと謁見までの待機を認めた。

リグリットは脱力し。

ツアーはそういう生態なんだろうと納得したのだ。もつとも、城塞内への警戒は怠っていない。確かにさつきからそういう行為しかしていないが……途中で彼らも知らない、危険な儀式や行動をする可能性がある。二人が転移などすれば、一気に踏み込んでやるつもりだ。「……わかりました。しかし、アンデッドも含め、村人に危害を加えたりしないでくださいよ！」

そしてエンリは相変わらず、強気だった。

### 36：…えーマジ童貞!?! キモイ

舌と指が疲れ、粘膜が軽く痺れ始める頃。

淫魔の肉体が持つ基本スキル〈再生能力・弱〉で回復するまでの、わずかな間。

二人はびったりと肌を寄せ合い、吐息を絡め合うようなピロートクを楽しむ。

「はあ……やっぱリアルベドは最高だな♡」

「モモンガ様にそう言っていただけの以上の喜びはありません♡」

「私はお前と触れ合っている以上の喜びはないぞ♡」

「まあ、ずるい……でも、モモンガ様だって、触れているよりこちらの方が……♡」

「あつ♡こ、これだって、触れ合いだろうっ♡」

「ええ、触れ合いですっ♡」

「はは、淫魔の体は本当に際限がないな……きつと、魂も淫魔のお前なら、なおさらだろうな♡」

「はいっ！モモンガ様が欲しくて欲しくてたまりませんっ♡」

「では……お願いだ、好きなだけ貪って、お前が満足するまで私を……んんんっ♡♡♡」

まあ、次の行為への息継ぎ程度の、ほんの短い会話なのだが。

こうして、女神が城塞の中で延々といちやつく——というには過激な行為に及び続ける。

朝日が昇っても、二人の行為はまったく終わらない。

寝食不要の体なのだから。

一応警戒して一晩中、聴覚も鋭敏にしていたツアーは、ものすごく無駄なエネルギーを使った気がしていた。

女神とやらは、ツアーに気づいた様子すらなく、ひたすらお互いを褒め合い、求め合う会話しかしない。

あとはひたすら、喘ぎ声。

お互いの名前をやたら連呼する。

悪そうに計画を語ったり、不安を口にしたりもしない。本当にひたすら、してるだけである。

「……随分仲がいいんだね」

ツアーはぽつりと呟いた。

「まったくじゃ。人間とアンデッドがこのように共存しておるとはのう」

「しかしあれは、こここの人間を容易に皆殺しにできる戦力だぞ。どうして気を許しているのだ」

違う、そうじゃないと内心で思いつつも。

二人にわざわざ教えはしない。

ツアーは年長者なのだ。話題を二人に合わせる。

「そうだね。これほどの高位アンデッドがひしめく場所は珍しいよ。それに、人を襲う気配もない」

カルネ村で一泊した三人は、朝日と共に動き出した村の様子を眺めていたのだ。

イビルアイは以前にも言われたように、仮面を外している。

おかげで表情の変化が露になり、年相応にしか見えない。

「さすがのおぬしも、珍しく疲れた様子じゃのう」

「無理もない。強力なアンデッドどもに囲まれていたのだからな」

二人が、気遣ってくれる。

ありがたいが、見当違いな気遣いである。

「それにしても、朝に見ると本当にアンデッドだらけじゃな」

「家や人の数も前より増えているな。森妖精もいるぞ」

「亜人種を受け入れてるし、評議国として褒めるべきなのかなあ」

ちようど村の裏門が開き、死者の大魔法使いが多数の骸骨の戦士を率いて来る。それらは丸太を抱えており、村に運び込んで、ログハウスを組み立てていく。

「へえ、アンデッドが家を建てるのかい」

「そーだよー。王国貴族の子女や使用人、犠牲者が、ぞーろぞろ来るからねー。住むトコ作つたげないトー。ひ弱な人間には任せられないよー」

三人の背後にいた、クレマンティーンが口を挟む。

エンリとニグンは村で相当の仕事があり、忙しい。現状では暇で、最初に交渉もしたクレマンティーンが、そのまま竜王たちの世話役兼監視役にされてしまった。

「ところで王国には森妖精エルフの奴隷までいたのか？」

対八本指で活動していたイビルアイとしては、なぜか増えているエルフが気になる。

「んーにゃ、あの子らは昨日帝国で拾って来たんだー」

クレマンティーンとしても、面倒そうな説明は先に済ませておきたい。

モモンガたちに細かく聞かれる方が面倒だし。

正直に答えて問題ある行動でもない。帝都に行けばすぐわかる事実なのだ。

「昨日？　すると、彼女たちは昨日は帝国にいたのかい？」

「そだよー。一昨日、帝国の隠密部隊だかを捕まえてさー。皇帝ちゃんが女神について知れたがつって言うんだよねー。あ、拷問も尋問もしてないよー？　元から皇帝ちゃんから、捕まったらあつさり言えって命令受けてたみたいだからさー」

「なるほど、この村は王国と帝国の境界だからな」

立地を考えれば、ごく普通の対応である。

特に王都の事件を知れば、放置はしておけまい。

「それで、エンリちゃんが昨日の朝にお伺い立てたら、モモンガちゃんがさー。隠密部隊は解放して、帝都へ皇帝ちゃんに会いに行こーって言い出したんだー」

「女神というのに、行動が早いもう」

「ラナーを呼び出した時も、決めたらすぐだったな……」

そうしてクレマンティーンは、帝都での女神たちについて、特に隠しもせず説明するのだった。

三人は、帝都でスカウトされたというワーカーたちに話を聞く。

「あれは本当に、女神としか言いようのない振る舞いだつたぜ」

「最初は巫人と思っただけど、本当に規格外だったわね」

戦士と半森妖精ハーフエルフのレンジャーは、随分と仲睦まじく。女神に心酔しているように見える。

精神魔法をかけられた様子はない。

「規格外すぎて死ぬかと思った」

魔法詠唱者の少女は、げっそりとしている。  
マジックキャスター

とはいえ、女神への反感があるわけでもなさそうだ。

「アンデッドの神……いえ、死の女神でしたか。そうでなければ私もすぐ改宗したでしょうね」

神官は周囲で働く無数のアンデッドに居心地悪そうにしつつも、女神については認めているらしい。

おおよそ、彼らから聞いても、クレマンティーンの説明に齟齬はなかった。

「待つ間、帝都で好きに聞きこんで来ても——なんて言われたけど。それには及ばなさそうだね」

「振る舞いだけなら、まるで六大神じゃないかい？」

「まあ、王国でも死んだのは前の王と、最悪の貴族らだけだからな……」

村の中、様々に聞いて回っても。

およそ女神への悪評はない。

村人らは少し狂信的すぎるようにも思えるが。女神が多大な恩を与えるのみで、何も求めてこないのだ。粗末な食事で感激してくれてもいる。

そんな女神に対し、彼らは信仰しか捧げるものがないのだ。

何より、ツアーたちは村人に相当数の、信仰系第1位階呪文の使い手がいることに驚いた。たとえ第一位階でも、魔法の使える神官は貴重である。数十人規模でいいものではない。

信仰心の結果だとすれば、重大な影響とも言えるだろう。

後から村に来たという貴族関係者は、クレマンティーンに酷く怯えていた。もつとも、彼らの親が惨殺された経緯を聞けば、ごく当然の反応だろう。子供らまで殺していない点をむしろ、ツアーは甘いと思



うくらいだ。

日暮れまでアンデッドと人間が共同で仕事し。

アンデッドは夜通し活動を続ける。

夕陽の中、人間たちはアンデッドに、労いや感謝の言葉すらかけていた。

異常だが、平和な光景。

「うーん。アンデッドがこれだけいるせいか、昨日来たばかりの森妖精エルフに誰も隔意を持っていないね。村の外から来たを一括りに扱われてるし、排斥されるわけでもない」

「というか、レンジャーと森祭司ドルイドと神官クレリックだからと、随分頼られていたが」

「フォーサイトというのもそうじゃが、漆黒の剣というのも、随分な女神信徒になっておったな。精神魔法の痕跡はまったく見かけられんのじゃろう?」

「ないね。リーダーも言ってた『すべて『たす異常』ってのは、ぜんぜんないよ。むしろ元奴隷の子たちのそれを、信仰魔法を使える人たちが頑張つて治そうとしてる様子じゃないか」

「むう。認めたくないが、あれだけ派手な騒ぎは起こしたが、大義に則つて動いているのか?」

「正義や大義があればいいつてもものじゃないけどね。それにしても、以前に旅をした時は、鎧を盗もうとした輩もいたのに……誰も私の甲冑姿なんて気にしないね。確かに、あの死の騎士デス・ナイトに比べれば普通なんだろうけど」

「そうじゃのう。そういう意味では、他の亜人種や異形種でも、容易に馴染めそうに思えるわい」

「私が吸血鬼だともバレているしな」

諦めたような安堵したような顔で、イビルアイが犬歯を見せて笑つた。

リグリットが軽く頭を撫でてやる。

「子ども扱いするな!」

「どう見ても子供じゃろ!」

二人は村への警戒もゆるんでいた。

だが、ツアーは警戒は続ける。

よかれと思つて世界を侵害する輩ほど、やっかいなものはない。

まあ、当の女神らは日中もひたすら、同じことをしていたが……。  
(どんな種族か知らないけど、`インマ` っつのはずっと交尾してるんだなあ。八欲王もそっち方面に貪欲だったけど、あの二人は心配になるくらい延々と続けてるし……)

ドラゴンの超感覚は熱感知、空気振動感知、そして魔法的な精神感応を併用したものだ。

溜息混じりに、女神の会ヒロートーク話から得た数少ない情報を。

何とか己の記憶から掘り起こさんと、試してみるのだった。

そしてすっかり日は暮れ。

村人らは夕食を終える。

夜が来る。

「んっ♡ んんっ♡ アルベドっ♡ 好きっ♡ 好きいつ♡」

「んじゅっ♡ んじゅるるるっ♡ モモンガ様あっ♡」

女神には、まるで変化がない。

いや、細かい変化は無数にしているのだが、実質同じだ。

これで細かい変化や波長がなければ、影武者や幻影かと疑いたくなるほどである。むしろ、そうならよかつたのにと、ツアーはまた溜息をついた。

(はあ……会つたとして、女神つて本当にちゃんと会話できるのかな。ものすごく語彙力低そう)

呆れつつ。

ふと、この村には他の二人に危険なアンデッドも多数いたなと思ひ出す。

女神へ集中させていた感覚を切り。

村全体を改めて細かく、探った。

昨夜村に来た時、今日の朝と日中、それなりに調べてはいるが。

どうせしばらくは待つしかない。

アンデッドの作業音が柵の外でしているが……村の中はもう眠り始めているだろう。

念のための確認として、村を精査し始める。

これは大きなターニングポイントだったかもしれない。

ツアーは、決定的な異常に気づいてしまった。

最初は振動音。

それが、ぎしぎしと寝台が壊れそうなほど軋む音とわかると同時に。

ドラゴンの超感覚が、無数の声を探り当てていく。

「エンリっ、そ、そんな激しすぎるよおっ♡」

「っんっ♡ まだ回復魔法使えるからっ♡ もう一回っ♡ もう一回、ねっ♡」

……でも。

「あ、あなたっ、そんなに毎晩したらネムの妹か弟がっ♡」

「大丈夫だっ、今年は税もないっ、もう一人くらい……っ！」

……でも。

「イミーナっ！ きよ、今日はいいだろっ!？」

「バカっ、きよ、今日は危ないのにいっ♡」

……でも。

「嫌……痛い嫌、です……助けて……」

「姉さん、大丈夫……わたしがいるから。痛いコトなんてしないから

……」

……でも。

「毎晩わりいな、エドストレーム」

「はあ、なんであたしが……っ♡ んぶっ！」

「いやだって、村の女に手出すの恐いんすよ……」

「ぶはっ、だからって毎晩四人相手とかっ！ んぐう！」

……でも。

「昨日……あいつに胸掴まれてたけど大丈夫？」

「ん。痛いかも……っ♡ やさしくっ、ね♡」

「耳も……痛そう♡」

「……でも。」

「なあ、モルガーからも頼まれたんだ。俺たち、幼馴染だったろ」

「そうだけど……あの人が今も働いてるのに……いつ♡」

「……でも。」

その他、村人夫婦やら貴族子女やら元使用人やら元奴隷やら娼婦やら。

兄弟姉妹でしているらしいのやら、一人で処理しているのやら。

信仰系魔法を使える者は、回復魔法もフルに活用しているらしい。

「MUUUUGEEENNNNN!!!」

「アー……ツ！ クロマル殿！ そっちは違う穴でござる！」

柵の向こうでも……あの魔獣か。

「クレマンティーヌさん！ 惚れてます！ どうか一夜の思い出を！」

「まあた、お前かー。おねーさん仕事なんだけどー？」

「そこを何とか！」

「仕事中だつて言ってるだろうが」

「そこをなんとか！ お願いします！」

「はあああ……おら、このまま踏むだけ踏んでやるから、粗末なモノ出さな」

「ありがとうございますー！」

寝泊まりしてる家の前でも。

（……人間ってこんなに発情する生き物だったかなあ）

ツアーは首をかしげる。

（いや、リーダーと旅してる間はそんなことなかったよね。あの女神の影響なのかなあ）

リグリットやイビルアイ——キーノに影響はない。

表で、ルクルクットとかいう雄の相手をしているクレマンティーヌも、至極冷静かつ投げやりだ。

（意識的にやっているととは思えないけど……あのワーカーやエルフは昨日来たばかりだったよね。この辺りは聞いた方がいいのかなあ……）

どうにも勝手の違う異常性ばかり見せて来る女神に、深々と溜息をつく竜王であった。

ユグドラシルのフリーバーテキスト曰く。

『淫魔が盛んに活動する時、周辺一帯に淫らな影響が与えられる。淫魔が強大かつ、活動が盛んであるほど、発生する影響力も強い。精神耐性のない者は異様な劣情に駆り立てられるだろう』

活動とはもちろん、淫魔としてのアレである。

データ上では何の意味もないため、モモンガも覚えていない。アルベドは知っているが、教えて行為を控えられても困るため、聞かれるまで教えるつもりはない。

### 37：ひぐらしのなく頃に

二日目から、ツアーはほとんどを本体に意識を戻して過ごした。こんな発情期の牧場みたいな場所で、真面目に警戒し続けていられるものではない。罾の可能性もなくはないが、こんな酷い罾は本人の品位を下げるだけだろう。色に溺れた八欲王とて、こんな妙な状況は作っていないかった。

一方、素顔を晒していたキノ——イビルアイが村でやたらと告白されたりナンパされたりして、モテ期を味わったり。リグリットが同程度の外見年齢の老人に誘われたりもした。

村の異常性について一応教えたので、二人が流されたりはしなかったが。

もつとも、カジットなる人間と、デイベーノックなるアンデッドが、別の意味で熱心に二人に通って来た。至極真面目な魔法談義のためである。外見に反して邪悪な目的でもなかったらしく、実りあるものだったらしい。

そして、肝心の女神との会談は。

三日目の夕方、エンリが城塞に入ったものの、今日は無理と言われ。

四日目も明日にするようとの伝言。

結局、モモンガが城塞から出てきたのは五日目の夕暮れであった。

場所は城塞の前。

簡素な机や椅子が並べられ、料理や飲み物も用意されている。

鎧を遠方から操作しているという点に、モモンガは驚き感心していたが。

女神の反応はそれだけである。

とりあえず、さんざん待たされた文句くらい言いたい。

竜王じゃなくなつて、誰でも文句は言うだろう。

「……三日って聞いてたんだけど？」

「すまないな。どうにも長引いてしまった」

「昂ぶつてたの間違いじゃないかい？」

「昂ぶりだって長引くのだぞ。というかエンリが来なければ、しばらく出てこないつもりだったのだが」

「くふーっ！ 私は何日でもOKですー！」

嫌味はまったく通じない。

モモンガは嬉しそうに食事を口にしつつ、ツアーに受け答える。

横にいるもう一人の同じ顔をした女神——アルベドは、モモンガにぴったりとくつついたまま歓喜の笑みを浮かべている。

（本当にそういう種族なのかあ……他に何もしいなら、心配ないかもね）

正直、真面目に警戒していたのが馬鹿馬鹿しい。

それを狙ってる気配が欠片でもあれば違ったのだが。

二人とも、頭がおかしいのじゃないかというくらい、お互いのことしか考えていない。

まあ、モモンガという白いドレスの女神は、食事に夢中ではあるが。（人間基準じゃ美人だろうってわかるけど……洗練された作法じゃない。そういうえば、リーダーも随分とこの世界の食事に執着してたわけ。ぶれいやーの共通点なのかな？）

観察しつつ、とりあえず会話を続ける。

「じゃあ、単刀直入に聞きたいんだけど。キミたちは『ぶれいやー』なんだよね？ この世界を汚すつもりかい？」

「意味がわからんな。お前の言う世界とは何だ？」

食事する手も止めず、視線も料理に向けたまま言う。

「世界は世界だよ。強すぎる影響を与えたり、暴君になって振舞われちゃ困るんだ」

「だからお前の考える世界の定義を言え。私はお前ではないのだから。具体的に言え。お前の国か？ お前の共有する文化圏か？ ドラゴンという種族か？ この大陸か？ この惑星か？ この宇宙か？ この次元か？」

「えっ？ えええつと、その定義だと……一応この惑星？ かな？ 要するに、世界の法則そのものを乱さないでほしい」

「ニグン、お前の考えを言え」

背後に控えていたアンデッドの男に振る。

当人はそのまま食事を続けた。

「モモンガ様、頬についております♡」

「あ、すまないなアルベド……んっ♡」

というか、食事以前に二人で絡み合っている。

手足に限らず、舌とかも。

(一応会談中なんだから、その間くらい控えてくれないかなあ)

「失礼ながら、モモンガ様に代わりお話しさせていただきます。過去の『ぶれいやー』の事例から鑑みまして、モモンガ様が八欲王の如き振る舞いをされては困る……とお考えでしょうか？」

ニグンが双方に敬意を払いつつ話を継いだ。

ツアーとしてもほつとする。

五日間の調査によれば、この村ではアンデッドの方が『まとも』なのだ。

ある意味、衝撃的な真実だった。

「まあ、そうだね。六大神や十三英雄のリーダー、口だけの賢者なんかは、特に問題はなかったよ。けど、八欲王は世界の法則自体を大きく歪めた。それこそが『世界を汚す』ってことだね」

「なるほど。では現時点のモモンガ様は『世界を汚す』には至っていないと見ていいのでしょうか？ 我々のしてきたこと、可能な限りは既に説明させていただいたつもりです」

実際、ニグンとクレマンティヌ、ついでにエンリも、こと細かにモモンガのしてきたことを教えてくれた。

途中で教典として書き記しておこうとか言いだし、必要以上に詳細化されていたほどだ。

「そうだね。特に問題ないよ。王国の人間が皆殺しにされてたら考えるけど、動機や状況を見る限り、悪意を持ってしたわけじゃない。悪意があっても、相手を選んで世界を歪めなければ、私は気にしないかな」

その基準で言えば、他種族を執拗に滅ぼそうとしているスレイン法  
国の方が、よほど問題なのだ。



「では、モモンガ様が六大神に連なる立場になろうとも、特に問題はありませんか？」

「キミたち人間が崇める分には気にしないよ。六大神は、私も認めているしね」

言いくるめられている気もするが、現状で敵対する気にもなれない。

というか、いちやつきを邪魔したから殺し合いとか、体裁が悪いというレベルではない。

「ありがたきお言葉でございます。ただ……認識をすり合わせるためにも、質問させていただいてよろしいでしょうか？」

「かまわないよ。くだらないことで遺恨を残したくもない」

深々と礼をし、ニグンが切り出す。

なお、女神は一応程度に耳を傾けつつも、二人で食事を食べさせ合っている。

テーブル下では脚も絡めており、およそ真面目な態度でない。

（うーん、実際まだ昂ぶってるのかな。興奮状態なのも間違いない。帝国にも、向こうの部隊が来たから行ったみたいだし。放置しておけば、ずっとこもってた気もするなあ）

来ない方がよかったかなあ、とも思ってしまう竜王。

「私はかつてスレイン法国にて、六色聖典が一つ陽光聖典隊長を務めておりました。その身としての質問でもございます」

「……初耳なんだけど」

「あ、すまん。言うの忘れてた」

横にいたイビルアイが、軽く言う。

「……………」

「あだだだだ！ ちょっと忘れてただけじゃないか！」

ツアーは、イビルアイの頭をぐりぐりと白金鎧の拳で挟み、仕置きました。

重要な情報である。

わかっているれば滞在中、ニグンにいろいろ聞けたのだ。

「こほん、法国と評議国の不仲は亜人種や異形種への姿勢によるもの

と考えておりますが、間違いありませんか？」

「国としてはそうだね。私個人としては、スレイン王国には他にもいろいろあるけれど」

「そのいろいろについて……この場で教えていただくまでもありません。私以外にも、クレマンティーヌが元漆黒聖典の身。またアンデッドとなった者には元陽光聖典も多数おります」

「ああ、この村を帝国兵に偽装した法国兵が襲ったんだっけ？」

「はい。私はその指揮官でございました」

経緯自体は聞いている。

ニグンは村人らに詫びるように、周りを見回して一礼する。

村人らもすっかりニグンを受け入れているのだろう。文句を言ったりする者もない。

「こうした経緯ゆえ、法国がここに接触してくるのも時間の問題でしょう。正直、竜王殿がいらっしやる間に来てはくれまいかと期待もしてりましたが」

「……すると、キミたちは法国と対立するつもりかな？」

「我々は多数がアンデッド。また森妖精エルフに限らず、モモンガ様とアルベド様を崇めるならば種族を問わず受け入れるつもりでございます。人間種以外の排斥を掲げる法国とは、共存できません」

「ふうん……多民族国家がここにできてくれるのは、私としても歓迎するよ」

「その言葉、我らにとって何より心強き支援です」

法国と不仲なら、ツアーにとっても評議国にとっても、いいことだ。彼の国の現状は正直、受け入れがたい。

「ああ、私からもいいか？」

ぴったりと横のアルベドに抱き着くようにしながら、食事を終えたモモンガが口を挟む。

「何かな？ キミが世界を歪めない限り、私はキミたちの邪魔はしないつもりだけど……」

「八欲王は、具体的に何をしたから『世界を歪めた』と認定されたのだ？」

「ああ……それは簡単だよ。彼らはこの世界にあつた魔法を消し去り、『位階魔法』という法則を持ち込んだんだ」

モモンガとの会見後、三人はニグンの〈転移門〉で王都まで送られた。竜王が望むなら、ニグンの知る範囲でより遠方まで送ってやるように言つてある。

既に消えた一行を軽く見送り、二柱の女神は再び城塞内に戻つた。「モモンガ様、あれでよかつたのですか？」

「何がだ？」

浴室前の脱衣所で服を脱ぎつつ。

問いかけるアルベドに、モモンガが首をかしげる。

「いえ、世界を歪める力があると誤認させておけば、あれに対して今後の抑止力になつたかと……」

「あれは、我々と同程度かそれ以上の力を持つと考えた方がいい。私よりは下だと思うが……アルベドに、もしものことあらば、私は生きておれん」

「くふーっ！　そ、そうですかっ。いぎとなれば私は、モモンガ様と同じ体に戻つてもっ」

「いや、法国がいつ覗いておるとも限らん。あれはなるべく見せたくない……お前に触れることもできんしな」

この世界が初心者エリア同然とわかつてはいても……それなりの慎重さはある。

話からすれば生まれながらの異能とは、始原の魔法の残滓のようなものかもしれない。当たり前外れこそあれ、生まれながらの異能はモモンガやアルベドの知識ではありえない能力だ。警戒すべき能力もありうる。ならば……その本来の原型たる始原の魔法を使うドラゴンを、甘く見ていい道理はない。

最悪、モモンガの使う呪文やスキルを無効化されるかもしれない。防御系スキルを貫通される可能性も高い。

とはいえ、アルベドとて、モモンガの心配は理解している。

その上で。

「だからこそ、こちらも一定の手札を備えておくべきかと愚考しましたが……んっ♡」

真面目に問いかけるアルベドのドレスを、モモンガが脱がせる。

「敵を増やしても仕方あるまい。私はアルベドとこうして過ごすためにいるのだぞ?」

「あっ♡　そ、それはありがたい、ですが……っ♡」

裸体になった肌をすり合わせつつ、四肢を絡み合わせる。

外に出た後はまず身を清め。

互いの匂いしなくしてから、貪り合うのが常。

「我々は神を名乗った。神は謀らぬ。神は企まぬ。人々の願いを時折、聞いてやればよい。それ以外は……な?」

モモンガが、アルベドだけに見せる蕩けた笑みを浮かべる。

「……はい♡」

アルベドも、熱に浮かされた笑みを返し。

互いに唇を重ね、口の中を味わいながら。

浴室に向かった。

隅々まで、奥まで、清め合い、弄り合い、味わい合うために。

リグリットとイビルアイは王都に残り。

ツアーはニグンの〈転移門<sup>ゲート</sup>〉によって、彼の可能な範囲で評議国近くへと運ばれる。

はずだった。

「やあ、助かったよ。遠隔操作で延々と戻るのは面倒だし。転移させるにも、力を使うからね」

「いえ、竜王たる御身を案内できたこと、光栄に存じます」

ニグンは少しばかり慇懃無礼に、頭を下げた。

「……で、評議国にしては随分と僻地だけど。首都には行ったことがないのかい?」

口調は柔らかだが、いくらかの威圧が込める。

「少しばかり、竜王殿とお話させていただきたく」

「キミの主は知っているのかな？」

「いいえ。しかし、我が偉大なる主があのように判断を為された以上、私に可能な補佐を行なっておくべきと考えます」

「密約とかの類はやめてほしいんだけど」

手下の勝手な判断が間に入れば、モモンガとの関係が面倒になる。

「いえ。先ほど別れた彼女らには聞かせるべきでない判断した……ただの情報です」

「情報？」

予想外の言葉に、首を傾げた。

「陽光聖典隊長としての私が持つ、スレイン法国の機密についてです。無論、確認は随意になさってください」

「……聞こうじやないか」

答える竜王の声に、温和な色はなかった。

閑話：ないわー

その日、エ・ランテルの検問所はざわめきに満ちていた！

アダマンタイト級冒険者チーム「蒼の薔薇」が来たから……ではない！

生死不明だった銀級冒険者チーム「漆黒の剣」が帰還したから……でもない！

著名な生まれながらの異能持ち、ンファイレア・バレアレ……違う！

「ねえ、エンリ。本当に使役モンスター扱いで入るつもり？」

ンファイレアが恐る恐る、問いかけた。

「はい。ニグンさんから護衛はきちんと付けておくよう言われていますし」

「MUGEN！」

「オアアアア」

そこにいたのは、ズーラーノーンでもこれほどではないと確信できる暗黒神官！

エンリ・エモットその人である！

煽情的なスリットの入った漆黒の法衣！

不浄のエネルギーを立ち昇らせるメイス！

しかも強大無比の神獣（一般には魔獣）クロマルの背に騎乗！

従者としておぞましい死の騎士デス・ナイトが付き従う！

横にいるアダマンタイト級チーム「蒼の薔薇」もろとも、エ・ランテルを更地にしてお釣りのくる戦力！

そんな彼女が！

検問所の！

行列に！

並んでいるのだ！

周りの一般人も、冒険者も、生きた心地がしない。

彼女の戦力がわからずとも、人々は動物的本能により己の危機的状

況を察していた！

「それにしても今日はけっこう並んでるね、リイジーさんに早く挨拶に行きたいのにな」

「MUUGEN」

「オオオオアアアアア！」

彼女が少し不満の言葉を漏らしただけで、その前にいた者たちは委縮し。

我先に順番を譲ろうとする。

こんなものが背後にいる恐怖に比べれば、わずかの遅れなど何ほどのことか！

いや正直、今日は帰って明日出直したい。

エ・ランテルはもう滅ぶかもしれないのだ！

「そんな、悪いですよ。皆さんが先に並んでたんですから」

「MUGEEEN」

「オオオオオオオ」

ハイライトのない目で微笑みかけられて、直前に並んでいた男は失禁した。

早起きした己を呪った。

日暮れまで生きていたら、潰れるまで酒を呑みたい。

明日からは、もう少しものぐさに生きるべきじゃまいか。

そんな気持ちしかない。

「それにしても、エ・ランテルに来るのも久しぶり。ふふ、クロマルも楽しみ？ ベリユースは暴れたらダメよ？」

神獣（○）に語りかけ、死の騎士<sup>デス・ナイト</sup>を諫めるエンリ。

本人としては、心温まるハートフル交流！

だが周囲には、これから都市で殺戮しますとしか聞こえない！

（あの目は、幾万の人間を喰いながら殺せる狂人の目だ。都市に入ると同時に暴れ出し、目についた人間を皆殺しにするだろう！ そして、無礼にも前に並ぶ己たちこそ、最初に殺されるに違いない！ だが、逃げ出せば目をつけられる。その時は、死んだ方がマシな目に合わされるに違いない……ナムアミダブツ！）

もはや、彼らは死んだマグロめいた目で、屠殺場へと向かう行列に並び続けるしかない！

エ・ランテル門前はオツヤめいた空気に包まれていた。

「なあ、やっぱアレ止めた方がよかつたんじゃねえか？」

「止めて、あれらと敵対する方がまずいぞ……我々も攻撃はされていないし、都市内で暴れたりはしないだろう……たぶん」

「我々では止められない」

蒼の薔薇も諦めムードである。

「私も魔獣に乗って凱旋してみたい……」

ラキユースだけ羨ましそうな顔をしていたが。

とりあえず、どうしようもない事態だった。

揉め事にならないよう、自分たちの名前を出してエンリを通すべきかもしれない。

「それにしても道中はすごかつたな」

「エンリさんとあのアンデッドを見ただけで、ゴブリンもオーガも逃げ出していたのである！」

「夜間の見張りもアンデッドがいれば不要だったしな。あれに求婚するンファイアアさんを尊敬するぜ」

「わたしも早く、エンリさんみたいに強くなりたいと……」

いろいろと感覚の麻痺した漆黒の剣は、別の意味で感心していた。

物語の中の……英雄とは違うが、まあ英雄の敵役っぽくはあるエンリに、ある種の感銘を受けたのだ。

そして。

「ぼ、僕がエンリと結婚したいって、おばあちゃんに言うんだよね？」

なんだかエンリが挨拶して、僕が婿入りするみたいな雰囲気なんだけど……」

最大の当事者の一人は、己の決定的なすれ違いに、ようやく気付きつつあった。

カルネ村は今や、エ・ランテルにおいて恐怖の地。



多数の貴族子女や使用人、村娘や未亡人らしき人々が向かつては。誰も帰って来ない。

向かった冒険者チームも、ミスリル級のクラルグラ以外帰還者はいない（他は漆黒の剣しか行っていない）。

また王国各地で、女神モモンガの名を掲げた恐ろしい事件が起きている（王都の事件はまだ届いていない）。

そんな中、漆黒の剣や、バレアレの子が帰ってきたのだ。

また、カルネ村から使者がきたともいう。

愚物を装う敏腕都市長、パナソレイはカルネ村が反乱者という可能性を大いに感じつつも。その戦力を決して侮るべきでないとし、敢えて一国として扱うことにした。豪勢な対応で相手のペースを乱し、少しでも情報を引き出そうと考えたのだ。

ゆえに。

開拓村から訪れた人物を、都市で最も豪華な建物——貴賓館へと招いた。

パナソレイは、カルネ村から使者が来たと聞いた。

使者がただものではないとも聞いた。

街の名士でもある薬師レイジー・バレアレの知己であり、会談を望んでいるとも聞いた。

彼女の存在で、円滑な対話ができればと、彼女も招くよう手配した。だが。

（あんなアンデッドを連れてくるとは聞いてらんどー！）

パナソレイは、心の中で叫んだ。

同席させた冒険者組合長アインザック、魔術師組合長ラケシルも硬直している。

カルネ村の使者エンリの背後には、明らかにヤバイ級のアンデッド。

戦闘力の無いパナソレイだってわかる。

あれはエ・ランテルを単体で潰せるモンスターだ。

なぜ、こんなのが都市の中にいる。悪夢としか思えない。

「ほ、本当にエンリちゃんかい？ し、しばらく見ない内に立派になっ

たねえ」

(そうじゃないだろ、ばあさん！)

レイジーの言葉に、思わずツッコミをしてしまうパナソレイ。

「はい！ レイジーさんもお久しぶりです」

「それで、なんだってわしが呼び出されたんじゃない？ シンファイレアもじゃが……」

レイジーは生死すら不明だった孫の帰還を喜び迎え、叱っていたのだ。

「レイジーさんにとって、たった一人の身内と知っています。ですがどうか、シンファイ——お孫さんを私にください！ 女神モモンガ様にお仕えする神官として、決して不幸な結婚にはしません！」

「えっ、僕がもられるの!?!」

「入り婿にするって言うのかい？」

(すげえな、ばあさん。今、気にするのがそれか)

パナソレイは既に現実逃避気味である。

キャラも崩壊していた。

あの恐ろしいアンデッドを無視して、暗黒神官娘とそんな会話ができるなら、十分英雄級だ。感心するしかない。実際、パナソレイは政治的会話をすることを、もう諦めていた。下手なことを言えば、物理的に首が飛ぶ。

アインザックとラケシルも、役に立ちそうにない。

「ぶ、ぶひー。若い子は元気があっていいね」

相手の話に合わせて、一応は存在を示す。

「ふふっ、シンファイとっても元気なんです！」

エンリが漆黒の法衣に包まれた己の腹を撫でながら言う。

その目は蕩けつつも光がなく、恐ろしいものを感じさせた。

愛らしい仕草なのだが、まるで愛らしくない。

男なら誰もが、ヤバいと感じるだろう。

背後のアンデッドとはまた別の意味で。

だが、母……いや、祖母には通じるものがあったのだろうか。

「……シンファイレアや。手を出したのかい」

「……………」

レイジーの声は冷たい。

ンファイレアは怯えすくんでいる。

成人男子三人は、同情するように彼を見ていた。

「出したのかい」

きゅっ、と下半身が引き締まる口調である。

「……出し、たよ。でも後悔はしてない！ 僕はエンリのことを愛してるんだ！」

「ンファイー！」

「エンリ！」

レイジーが深々と溜息をついた。

処置なしと言う顔だ。

たいした女傑である。

あんな（いろんな意味で）恐ろしい女が、孫を連れ去ろうとしているのに。

（それにしても……ンファイレア君はあれに手を出したのか。なんと  
いうか……すごいな。私が一番愚かだった時期でも、あれに手を出す  
のは……ないわー）

こわいもん、と子供のように口の中で呟くパナソレイ。

アインザックとラケシルも、大差ない感想を抱いたのだろう。

男三人、目と目で通じあった。

結局、政治的な話は一切なく、レイジーによるンファイレアへの叱責が中心で。

エンリは、カルネ村で女神の庇護下、暮らす素晴らしさを説くばかりであった。

その夜、エンリは一泊すらせず。

後に村人が金属製品など買い付けに訪れるとだけ宣言し。

まさしく「さらう」ように。

ンファイレアを魔獣の背に乗せ、アンデッドを従えてエ・ランテルを嵐のように去った。

「ふふ、まるでわしの若い頃のようにじゃないかい。あの娘は大物にな

るよ」

そう呟くりイジーに対し。

(いや、もうあれ以上になったら魔王だろ)

三人の男らは、己が女性不信に陥らないか心配だった。

もし、エンリが一泊していれば、市民にもパニックが起きていただろう。

エンリの素早い帰還に、エ・ランテル市民すべてが実際助かったのだ。

そして、数時間後。

弾丸のようにカルネ村に帰還したエンリが、ただの婚前交渉でなくなった喜びに猛り。

いつも以上にハッスルするのも、ごくごく自然ななりゆきであろう。

魔獣の背に乗せられ、悲鳴をあげながら連れ去られたンファイレア。

その後は嫁(未婚)に、意識を失っても乗られ続けたンファイレア。彼の生き様は、エ・ランテルでも語り草になったという。

一方、翌日。

久しぶりに都市での一夜を過ごした漆黒の剣は、冒険者組合組合長プルトン・アインザックに呼び出されていた。

組合長は徹夜でもしたのか、目の下には隈があり。疲れ切った表情である。

「……現状、お前たち『漆黒の剣』こそ、カルネ村とエ・ランテルを結ぶ重大な鍵だ。その意味を込めて、これを受け取ってほしい」

「へ、これは……!」

白金級プラチナ——冒険者として相当の地位を示すプレートである。少なくとも第3位階の魔法が使える、相当の実績を重ねた冒険者が得られるものだ。銀級シルバーだった漆黒の剣には、金級ゴールドを飛び越えた、異例の昇格と言えるだろう。

確かに、ニニヤとダインはカルネ村での修練で第3位階魔法を習得

しているし。ペテルとルクルットも、相当に腕を上げた自覚がある。だが、冒険者組合には報告していない。

カルネ村はアンデッド（と一応、森の賢王）の存在ゆえ、モンスターに襲われる事態もほぼなく。森での警護も形だけ。モンスターの部位を納めてもいない。

「組合長、どうして我々にこれを……?」

リーダーでもあるペテルが、少し警戒した様子で問う。

「昨日、検問を越えた後にも、いろいろ事情徴収させてもらったろう。お前たちに自覚はないかもしれんが、カルネ村は現状、エ・ランテル……いや、王国全体にとって、最大級の警戒地域となっている」  
「め——カルネ村が!」

女神と言いかけ、慌てて言い直すニニヤ。

「お前たちは断片的にししか知るまいが、多数の貴族が惨殺された上、アンデッドに変えられたという。動死体らしいから、じきに掃討はできるだろうが……貴族が惨殺され、そこに女神モモンガの名が残されるそうだ」

「そ、そうだったのであるか!」

ダインが、ぐいと前に出てニニヤの顔を隠した。

今のニニヤの表情を、組合長に見せるのはまずい。

(まだだ……まだ笑うな……!)

ニニヤは狂喜と愉悦で歪んでいた。

漆黒の剣の面々は知っているが、その貴族惨殺を女神に頼んだのは、他でもないニニヤなのだ。どうやらエ・ランテルに情報は来ているようだが、第一王子バルブロをいたぶり尽くし殺したことも、仲間たちは知っている。

幸い、疲れ切った組合長に気づいた様子はない。

「ああ。どうやら子供や使用人、囲われた娘らまでは殺されないらしい。惨殺の下手人は、彼らにカルネ村に行くよう言っているらしくてな。お前たちも見たそうだが、今のエ・ランテルには相当数のそうした連中が流れ込んできている。一度ここに来て、そうしてカルネ村に出発するんだ」

「そ、それで、私たちは何をすれば？」

ペテルが震え声で聞いた。

思いつきり当事者なのだ。

だが、組合長は緊張していると思ったのだろう。

「たいしたことじゃない。彼らの護衛という形で、カルネ村と行き来し、見知った情報を組合に報告してほしい。どんな些細なことでもいい。アダマントタイト級を逐一雇うわけにもいかん。お前たちにしかできない仕事なのだ」

「わかりました！ 相応の報酬がもらえるなら喜んで！」

ルクルットが大きな声で、軽く答える。

ニニヤの含み笑いを隠すためだ。

どのみち、ニニヤを今のエ・ランテルに置いておくのは不安しかない。

幸い、カルネ村の居心地は悪くなかった。

アンデツドの警護がない、都市の方が不安に感じるほどである。

こうして漆黒の剣は、カルネ村専門の冒険者として異例の昇進を遂げた。

これをやつかむ冒険者が下級の中にもいないでもなかったが……少なくとも金<sup>ゴールド</sup>級以上の冒険者は、同情やあわれみしか感じなかったという。

### 388：来ちやつた

「あの……儂らで本当によろしいのでしょうか」

「……………」

カジットが不安そうに言い、デイバーノックも深々と頷いた。存在自体忘れられているだろうと思っていたところ、女神直々に呼ばれたのだ。

事情説明をされても、力量不足では……と不安でならない。

「単なる魔術の力量ならば、残す連中で問題ない。魔法の深淵に臨み、新たな呪文を編み出さんとするお前たちが、今回は必要なのだ」

「おお……儂如きにそのような……」

「あちらが受け入れるか次第ではございますが。最大限の尽力を捧げましょう」

デイバーノックは他の六腕と段違いの境遇に、女神への忠誠を高めていた。

かつての八本指では、ほぼ監禁された戦闘兵器扱い。

今では同じ志を持つ魔術師仲間がおり、より上位の術師と話し合う機会も多い。

他系統の魔法詠唱者マジックキャスターも多数いるため、彼らとの談義から大きなヒントも得られる。

そして今回。

女神は魔法知識探求に熱心な二人を、帝国魔法省に派遣したいというではないか。

バハルス帝国、彼の「逸脱者」フルルーダ・パラダインとて、女神から派遣された者を疎かにできまい。二人にとって願ったり叶ったり——どころか、都合がよすぎて心配になる。

「よいか。今回の派遣は、お前たちの探求を深め、新たな呪文開発を進める目的がある。帝国で未知の新たな呪文を見つけたなら、自ら習得するか、あるいはスクロール等を手に入れて弟子たちに教えよ。役に立つ、立たぬの判断は不要だ。また、開発においても探求する分野はお前たち自身が望むものでいい。応用次第で使える術もあるだろう。」

思わぬ呪文がさらなる新呪文の切っ掛けともなりうる」

女神の言葉に、二人は真剣な顔で頷く。

判断は自らの習得かスクロール購入かで選べということだ。

そして、己らの呪文収集と呪文開発に、女神は期待をかけてくれている。

「お前たちが新たな術を手に入れて来ること、期待しているぞ。また、彼の皇帝を主君として誠心誠意仕えよ。密偵じみた真似などするな」  
功名心など考えず、探求に専念せよとの言葉。

二人にとつてはまさに望むところである。

「ははっ、承知いたしました！」

二人でひれ伏す。

かつて死者の大魔法使いエルダーリッチになろうとした男、カジット。

人の社会で知識を求めた死者の大魔法使いエルダーリッチ、デイバーノック。

カルネ村で魔法探求に没頭する二人は、奇妙な友情を育みつつあった。

ことの始まりは、ツアーとの会談から一週間ばかりが経った夜。

久しぶりに現れた女神の食事の折。

エンリとンファイレアをはじめ、多数のカップルが食事中の女神の前で婚姻の誓いを立て、夫婦となった。

たくさん夫婦になるものだと、感心していたモモンガだが。

アルベドからの熱視線を受け、その場の勢いで結婚したのだった。

無論、アルベドはすさまじい喜びようであり。

いろんな場所から忠誠心が溢れ出していたが。

モモンガとしては、とつくに夫婦以上だったのに……という気分である。

ともあれ、せっかく結婚したのだからと。

新婚旅行に、再び帝都に行くことにした。

そしてついにと、モモンガはアルシエに声をかけ。

また、カジットとデイバーノックに声をかけたのだ。



そして翌朝。

栄えある女神の同行者は前回と同じくエンリ、クレマンティーン。そして新婚旅行つながりでンフィーレア。

帝都で実家の妹らの様子を見に行くアルシエ。

さらに魔法省へ派遣させるカジットとデイバーノックである。

クロマルはいないが、不可視化した高位アンデッドは数体連れている。

「さて、今回は少し寄り道もしていこう。あの皇帝に土産も渡さねばならん」

「普通にお金を無心しても、問題ないと思いますが……」

「アルベドよ、ジルの金は帝国民の税金だ。我らが安易に奪ってよいものではない」

「私たちが行けばそれで十分価値はあると思うのですが……」

実のところ、カルネ村に現金はあまりない。

いくらかの財貨についても、エ・ランテル等で生活必需品購入や非常時の貯蓄とすべきと、女神自ら宣言している。村人の数も増えている以上、金属製品その他のために現金での購入が必須。王国貴族のよくな搾取としては、モモンガとしても本末転倒なのだ。

モモンガは、道中で皇帝に必要であろうものを調達し、今回は直接皇帝の元に向かった。

「——というわけなのだが、どうだろうか？」

突然、〈転移門<sup>ゲート</sup>〉で執務室に現れた女神とその一行に、ジルクニフは驚愕で飛び上がりばかりであった。

というか実際、飛び上がった。

同室していたロウネとニンブルも飛び上がった。

「ま、待っていただきたい、モモンガ様」

素で「様」を付けてしまっているが、それどころではない。

「ああ、すまないな一方的に話をしてしまって。人の礼儀には疎い身ゆえ、どうか許してほしい」

モモンガが頭を下げた途端向けられる、アルベドとエンリの殺意の

嵐。

精神防御のネックレスがなければ、恐怖状態に陥っていたこと間違いない。

「い、いやどうか頭をお上げいただきたい。私が問いたいのは後ろの方々についてなのだが……」

ジルクニフは背後に多数いる人外について問う。

彼らの存在で、広々とした執務室も狭苦しくなっていた。

「これがお前への土産だ、ジル。お前が働きづめでいなくてはならないのは、信用できる文官が少ないせいだろう」

「確かにそうだが……文官？」

モモンガの背後にずらりと並ぶ死者の大魔法使い。

皇帝の執務室に来る前、モモンガはカツツエ平原にてへ中位アンデッド作成〕を行い、12体の死者の大魔法使いを揃えたのだ。

〔死者の大魔法使いが14体？ いや、一体は似ているが人間か。これだけいると、じいでも勝てんのではないか？〕

数に含まれたのはカジットとデイバーノックである。

「魔法ばかりに目がいくだろうが、こやつらは知性においても優れている。身辺警護も兼ねて、お前の仕事を十分に補佐できるだろう。この12体の指揮権をジルに与えよう」

「あ、ああ……ありがとう」

〔脅迫か？ 脅迫なのか？ いや、しかしそんな悪意のある顔には見えん……！〕

啞然としつつ、生返事で背後を見る。

居並ぶ（ジルクニフ視点では）高位のアンデッド。

執務室の中、護衛と呼べるのはニンブルだけ。

身の危険を感じるべき状態だが。

〔まさか御方の厚意を拒むと……？〕

〔モモンガ様に恥をかかせるようなら……〕

アルベドとエンリの視線の方が、遥かに恐ろしかった。

「し、しかし具体的に何ができるかわからん。最初は魔法省の仕事など手伝ってもらってもいいだろうか？」

(じいに丸投げしよう)

「いや、それについてはこの二人……カジットとデイバーノックを、魔法省で使ってやってもらえないか。彼らには、共同研究者という立場を与えてもらえるとありがたい。人材として活用してかまわんが、新たな呪文を開発した際に、我々にも共有させてほしいのだ」

「それは……」

(むう、どうなのだ？　じいに任せきりだったからな……交換条件の価値がよくわからん。この場にじいを呼んで聞くべきなのだろうが、正直ろくなことになるまい)

あの暗黒神官によって、フルーダが重傷を負って半月も経っていない。

しかも、明らかにこちらが悪い状況であつたし。

同じことを繰り返す可能性が……かなり高い。

「そちらにも機密はあると思う。そうした呪文等を無理によこせとは言わん。だが、お前たち人間の英知が生み出した新たな呪文には、私も興味がある。何より私は彼らに、研究の環境を与えてやりたいのだ」

「も、モモンガ様……！」

「我ら如きをそこまで……！」

カジットとデイバーノックが感動の涙を流す。

アルベド、エンリがうんうんと頷き。

他の死者の大魔法使いにも、もらい泣きする者らがいた。

なお、クレマンティヌは隅で欠伸をしている。

ンファイレアとアルシエは空気に徹していた。

(え……アンデッドって泣くのか……?)

ジルクニフにとつて、常識を超えた光景であつた。

ミイラみたいなホラー顔から涙が流れているのは、シユールを通り越してギャグである。集団で目頭を押さえて肩を震わす姿など見ていると、警戒するのが馬鹿らしく思えた。

(元より、宮殿内に直接転移して来る女神を疑つても意味は薄い……普通に厚意と受け取った方がいいだろう。帝国に敵意があるなら、密

債を潜り込ませる必要もない。この場で我々を殺すのもたやすいのだからな。受け入れて活用するのが、度量の見せどころか。先日にごんざん醜態を晒した以上、分の悪い賭けでもなからう)

皇帝として、冷静に判断した。

「あいわかった。カジット殿、デイバーノック殿を魔法省の研究員として迎えよう。他の死者の大魔法使いの方々は、事務能力を測らせてもらった上で活用させてもらうが……かまわないだろうか？」

「無論だ。それと、突然押しかけてすまないのだが、もう一つ頼んでよいだらうか……」

上目遣いでモモンガが言ってくる。

殺人的な色香と愛らしさだった。

精神防衛がなければ、魅了されていただろう。

「なんだろう。あまり無茶な頼みは聞けないが……」

(くっ、先日も言っていたが、やはり何か政治的条件を?)

政治家として身構えるジルクニフ。

「実は、村では現金の蓄えがあまりなくてな……その、帝都で飲食したので金貨で……何枚くらい必要だ？」

「うーん、こないだくらいで夕飯も食べるなら2枚で十分かなー。服も買うなら、10枚以上あった方がいいよー」

クレマンティーヌが答える。

前回の残りは、増えた村民の生活貯蓄となっていた。

「今回、服は買わん。だからその、金貨で2枚ほど……もらえないか？」

本当に申し訳なさそうに言ってくる。

「金貨2枚？」

呆気にとられて問い返すジルクニフだが。

どうやら意図とは反対に受け取られたらしい。

「……露店だけなら銀貨でもいけるのではないか？」

女神は気まずそうに背後を見る。

「金貨100枚とか1000枚要求しても、別にいいと思うんだけどなー」

「税金をそんなに使わせてはいかんだろう」

小声だが、目の前なので丸聞こえである。

(子供か……?)

皇帝は呆気に取られた。

少なくとも皇帝として見る書類は、最低でも金貨数百枚単位の予算や事業ばかりだ。

金貨数枚と言う端数は、ほとんど気にも留めていない。

普通に考えて、執務室に転移して来るような身なら、脅迫半分に1000枚程度を要求してもまったくおかしくない。取引としても死者の大魔法使いを戦力として得られるなら、十分にお釣りがくる。ただ問題として。

皇帝は基本的に現金を持ち歩いたりしない。

「……おい、ニンブル。持っているか?」

「あ、はい」

似たような感想だったのだろう。

ニンブルが懐から2枚の金貨を取り出す。

「ん? お前は……四騎士の一人だったか。いいのか?」

「は。陛下は現金を持っておりませんので……ひとまずの立て替えとして」

2枚の金貨を手渡す。

柔らかく美しい女神の手に触れて、ニンブルは初めて恋を知った少年のように顔を赤らめていた。

「おお、そうか! ありがとう!」

金貨2枚で、女神が喜色満面となり二人に礼を言ってくる。

いや、言ってくる。

ジルクニフとニンブルは、今までの驚愕、恐怖、警戒が溶け崩れていくのを感じた。

ころころと変わる女神の表情は、宮廷に慣れた者にとってある種の毒だ。

(なるほど。一部の貴族が我が子や愛玩動物に夢中になるのもわかる。無防備な感情、仮面の無い反応がこんなにも心を癒してくれると

はな。あの日、私自身泣いて、眠ってしまったのも、これゆえか。もし、金貨2枚ではなく200枚なら……いや、そういう問題ではないか)

ジルクニフが感慨に耽る間にも、女神は言葉を紡ぐ。

「しかし、ジルは現金を持ち歩かないのだな。自宅とはいえ、皇帝などしている以上、何があるかわからんのだ。最低限の現金は持つておいた方がいいぞ。あと、彼にはきちんと金貨を返しておいてやってくれ。私はあくまで、ジルにその、まあ金の無心に来たわけだからな。偉そうに言えることでないが、部下に支払わせて、返さぬような主君になってくれるなよ」

「……………あ、ああ」

己を政治的に利用しようとした実母。

帝国を第一として助言してくる愛妾。

ただ一人、己を心配してくれる女神。

ジルクニフの目頭が熱くなった。

(母か……アンデッドどもを笑えんな)

「前より顔色はよさそうだな……あれからきちんと睡眠はとっているか？ 食事の時は仕事を止めて、食後も少し休憩をとるのだぞ。体が若いからと無茶をしてきたのだろうが、疲労は必ず溜まっている。週に一日、無理なら月に一日でも、日を決めてしっかりと休め。病人になつたつもりで、ただ寝転んでいるだけでも違うからな」

顔が近い。

煽情的な谷間が見える。

だが、それよりも邪心なく己を思いやってくれる言葉が。

地位も権力も財力も気にせず、ただ体調を思いやってみつめるまなざしが。

欲情よりも、嬉しさや安心感を覚えさせるのだ。

(あ、だめ泣く)

語彙が崩壊するのも無理はない。

「と……すまないな、今後の部下の前では甘えづらいだろう。また様子を見に来る」

潤みかけた目に気づいてか。

女神は皇帝の頭をやさしく撫でて、身を離した。

「あ……」

追うように手を伸ばしかけ。

ジルクニフは多数の視線の中と気づき、居心地悪そうに肩を戻した。

女神は、カジットとデイバーノックにもう一度声をかけ。

ジルクニフへと微笑み、子供にするように手を振りながら。

アンデッドらを残しへ転移門<sup>ゲート</sup>で去った。

女神の余韻を味わうように、ジルクニフはじつとその後を眺める。

残されたアンデッドたち（一人は人間だが）もまた、同様であった。

そこには奇妙な同調……あるいは連帯感があった。

「皇帝陛下、よろしいでしょうか」

瘦せこけた魔術師が、部屋の沈黙を破る。

おそらく、ジルクニフの切り替えを待ったのだろう。

「儂はカジット・バダンテール……元スレイン法国神官であり、また元ズーラーノーン十二高弟の一人でございます」

「我はデイバーノック。元は王国の犯罪組織、八本指は警備部門の幹部です」

「何!?!」

ズーラーノーンは最悪の死霊系魔術秘密結社である。

そして八本指は、帝国に麻薬を流す犯罪結社である。

どちらも、超々警戒対象。

ニンブルが慌てて剣に手を伸ばした。

ジルクニフが手を伸ばし、それを抑える。

ここで皇帝を襲えば、女神の面目は丸つぶれだ。彼らがそんなことを望むとは思えなかった。

「かつての立場にすぎませぬ。今の儂らはモモンガ様を崇める末席」

「モモンガ様が、御身に誠心誠意仕えるようおっしゃられた以上。我らは女神の前で口にすべきでない事柄を、御身に明かすべきと考えて

おりますれば」

「何……？ どういうことだ」

まさか、と思うが。

ジルクニフは政治家の頭に切り替える。

そうだとすれば……。

「ブローラーノーンは帝国で少なからぬ貴族や高位官僚を集め、邪神教団を運営しております。儂は異なる拠点にいたため、参加者の詳細まで存じませんが……拠点の場所と入り方、おおよその戦力については、お教えできましよう」

「八本指では麻薬部門と密輸部門、金融部門が、帝国に根を張っていました。生き残りは聖王国に拠点を移した様子ながら、未だ帝国内に末端組織が残るはず。可能な限り、その詳細をこちらに記して参りました」

デイバーノックが、ロウネに書状の束を渡す。

六腕で最も目端が利き、他部門にも通じていたサキユロントが軸となつて用意した書状である。

カルネ村で居場所を今一つ見つけられぬ六腕は、元同僚ながら優遇されている「不死王」を通じ、帝国に居場所を作ってもらえまいかと古巣を売ったのだ。

「……承知いたしました。直ちに記録し、信用できる衛兵を派遣しましょう。民へのアピールとして、四騎士も動かした方がいいですね」  
ロウネが緊張した顔になる。

カジットの言う邪神教団の内情次第では、再び肅清の必要があるだろう。

また、デイバーノックの情報は麻薬根絶の大きな鍵となる。

「真偽を確かめてからだ……まずは礼を言おう。協力、感謝する」  
「これより魔法省に務めさせていただく以上、陛下は儂らの主君ですからな」

「もつとも、我らの神は不変ですが」

ジルクニフの言葉に、カジットとデイバーノックが深々と礼をした。



さらにデイバーノックが続ける。

「我も王都の闇で活動してきた死者の大魔法使い。アンデッドをいきなり表で使うのは困難でしょう。我は仮面なりをつけて正体を隠しますが……この者らの能力を知るなら、適当な書類倉庫などでまずは整理の仕事でもさせればよいかと。不眠不休かつ飲食不要で働ける文官は、陛下にとって役立つとわかるはず」

元犯罪組織幹部ゆえの配慮である。

人間社会で活動するアンデッドとして、彼もいろいろと苦労しているのだ。

「おお、気遣いありがたい。だが、モモンガ様も心配くださった通り、帝国は人材不足極まっている。信頼の証として相応の仕事を任せるつもりだ」

「それはそれは、モモンガ様も喜ばれるでしょう」

ジルクニフが鷹揚に頷き。

カジットが人相に似合わぬ、好々爺然とした笑みを浮かべた。

裏にあるのは追従ではなく、女神への忠誠。女神を介したがゆえの、ジルクニフとの主従関係である。

「うむ。正直、お前たちを任された時はどうしたものかと思ったが……どうやらうまくやっていけそうだ。よろしく頼むぞ」

「こちらこそ」

「俗事には疎い身ですが、よろしくお願いいたします」

和やかな様子に、十二体の死者の大魔法使いは跪いて皇帝の命を待つ。

（陛下……上機嫌なのは結構ですが……悪の帝王みたいな絵面ですよ）

ロウネとニンブルは、その様子を少しひきつった顔で眺めるのだった。

その後、魔法省責任者として呼ばれたフルーダが仰天し。

女神と会談したという皇帝に対して、子供のような嫉妬を見せたり。

死者の大魔法使いエールダーリッチ十二体の支配権を与えられたと聞けば、ジルクニフを凄まじい怨嗟の顔で睨んだり。

いろいろあったのだった。

とはいえ、カジツト、デイバーノツクという人材を預けられた意味を聞くと、フルーダも奮起した。然るべき成果を見せれば、彼も女神に認められるだろうと。

なお、今後も女神がフルーダを避けること、言うまでもない。

ついでに、ジルクニフも、フルーダを少し避けるようになった。

そして一方。

女神たちは、先日食べ歩いた広場へと転移し。

上機嫌で露店で買い食いし、帝都民とも交流しつつ――。

「突然すまないな。先日の酒場――歌う林檎亭に行くから合流してもらえるか？ その後の経過を聞きたいし、決断したなら答えも聞きたいからな」

〈伝言〉でレイナースを呼び出していた。

### 39：美しさは罪

歌う林檎亭。

女神の訪れる酒場と知られ、賑わうそこに。  
再び女神が降臨したことで、帝都市民は沸き立った。  
誰もがその美しい姿に溜息をつき。

また慈愛あふれる振る舞いに感動し。

祝福を得た帝都について、誇りを新たにした。

そして、帝国四騎士の一人が、女神の客として訪れた時。

皇帝もまた、女神に非礼を働けぬのだと、噂した。

もつとも、彼の四騎士——『重爆』レイナースは、あくまで個人的に訪れたのだが。

彼女らは重要な話があるからと、二階の一室を借りて移る。

「借金は膨らむ一方の様子ですわ。使用人の維持はもうすぐ不可能となるでしょう。娘二人は、何度か姿を確認しておりますが……」  
「……」

ちら、とレイナースがアルシエを見る。

俯き、黙ったまま答えはない。

「よい、続けよ」

アルベドの肩を抱き寄せつつ、モモンガが先を促す。

周囲に聞かれぬよう、防音の結界は既に施していた。

「おそらく、売られるのは時間の問題かと」

「使用人らを解雇してもいないのにか？」

「そ、そう！ 使用人を先に解雇するはず！」

モモンガの言葉に、アルシエが乗じる。

彼女は両親を信じている……いや、信じたい。

「近年、同様の手口で破産した元貴族が複数いましたわ。また、今まさに破産しつつある者も。いずれも最初は我が子を『他の貴族へ行儀習い』に出しております」

「行儀習い？ ウーデとクレイはまだ5歳なのに……メイドにすると

？」

「いえ。奴隷として売るのですが、両親への方便としてそう言われま  
す」

「奴隷!？」

「債務奴隷ですわ。一般市民ではさほど珍しくありません。借金を返  
し終えれば解放される法です」

「借金は借金だからな。借りた以上、返す責任はある」

モモンガの声は冷淡だった。

襲われるカルネ村、搾取される王国民、虐待されるエルフ奴隷を見  
た時のような、怒りはない。

「そうして我が子を奴隷に売り、続いて妻を同様に。そして最後に己  
自身も他の貴族の家令や従者に身を落とすのだと信じ込んだまま  
……奴隷になるのですわ」

レイナースの口調も冷たく、淡々としている。

彼らは騙された被害者とも言えるだろうが、同情する気にはなれな  
い。同情するとすれば最初に売られる子供たちだろう。

「そんなに没落貴族がいるのか？」

「陛下の粛清の名残ですわね。どうしようもない連中は処刑しました  
が、無能なだけの貴族は領地没収に留めましたもの」

「なるほど……その連中を食い物にする奴らが現れ始めたわけか」

「深刻化していないだけで、一般市民にも被害はあるのかもしれない  
ん。目下調査中ですわ。ただ、我々の無能を晒すようですが……奴隷  
市場や該当貴族を調査したところ、奇妙な点が――」

「市場に出回ってなくて、貴族の家にもいない。破産した貴族なん  
て誰も調べなかったけど、よく見たら行方不明なんだよねー?」

それまで横で退屈そうにしていた、クレマンティーンが突如、話に  
割り込んできた。

「知ってらっしゃいますの!？」

レイナースにとってみれば、クレマンティーンは距離感のつかめぬ  
人物である。あれから王国貴族を次々と惨殺し、アンデッドに変えた  
という情報が帝国にも入っている。

女神の代理人として汚れ仕事をこなす存在。

先日、フルーダを単騎で倒したエンリより、危険な人物だろう。「んー、知ってるのはー、帝都で人間を生贄にする邪教団があるってだーけー♪ 確かメンバーは、ほぼ貴族と没落貴族だっけー？ 商人もいたかなー？」

「待って。奴隷に売られた後は、生贄として殺されてる!？」

最悪でも娼婦と生きていたアルシエが、愕然とした顔で聞いたです。

「たぶんねー？ 前もちよこつと聞いたんだけどさー。アルシエちゃんのお父さん、お友達の貴族と出かけると、お金つかってくるんだよねー？ 金貸しもいっしょにいてさー」

こくこくと、アルシエが頷く。

かつては世間知らずで学院の勉強ばかりだった彼女も。ワーカーとしての日々で、社会の暗い面を学んでいた。だから、クレマンティーヌの言葉から察してしまう。

「その貴族は……金貸しと組んでいる？」

「ぎーんねん。ちよつと足りないなー。たぶん、その貴族もー、金貸しもー、最終的には教団に生贄を提供するシステムだよー？」

貴族としての策謀にも長けたレイナスが、その情報をまとめる。

「つまり――」

教団の貴族らが、金銭感覚に欠ける没落貴族、裕福な家の子供などを見定め、散財させる。

金貸しが、持ち合わせの無い彼らに、高い利子で金を貸す。

この過程を繰り返し、最終的に「貴族の家でメイドとして雇う」という名分で債務奴隷として売らせる。

法的には、教団貴族が買い取った扱いで……生贄にするのだ。

おそらく、散財先となる店も、薄々システムに気づきつつ、大きな利ザヤを稼ぎ。邪教団へのリベートを渡しているのだろう。あるいは過去にその手口で破産させた者の財産を買わせ、債務を負わせ……破産時には回収しているかもしれない。だとすれば、帝都の質屋関係もシステムの端末として組み込まれている。

「しかし、そんな大規模な陰謀論めいた組織、あるはずが……」

帝都の治安は、近隣諸国でも法国に次ぐ。

生贄を捧げる邪教団など、あまりに荒唐無稽。

「軸はズーラーノーンだねー。帝国はズーラーノーンじゃ資金集めの場所だよー。不満だけ、たーっぷり溜め込んでる貴族から、なけなしのお金を搾り取っちゃうの。それに、王国の犯罪組織も、帝国にちよっかい出してたんだよねー？ 手を結まないほーが、不自然……じゃないかなー？」

その名前に、エンリと女神以外の面々が目を見開いた。

世界的に悪名高い死霊系魔法の秘密結社。

帝国では、活動が確認されずいた存在。

そして王国の裏を支配する犯罪組織、八本指。

「た、確かに麻薬を持ち込まれていましたけれど、帝都には……それに、貴族らがどうして邪教団などに」

「んー、アルシエちゃんなら、わかるんじゃない？」

絶望的な顔になっていたアルシエが、ぽつりと呟いた。

「皇帝陛下が、怖いから……」

「ぴんぽーん♪ 自分も粛清されるかわかんない。昔みたいな乱痴気騒ぎも、平民いじめもできなーい。だから隠れて、こそこそするんだよー」

「そ、そんな理由で同じ貴族を生贄に？」

「きっかけはそーんな感じだと思っようよー」

にんまりと笑いながら、クレマンティーヌは断言する。人の悪意について、己ほど熟知する者は少ないと自認しているのだ。

モモンガは、不快げに整った眉をしかめた。

アルベドが、気遣うように身を寄せ、髪や翼を撫でる。

「モモンガちゃんみたいなの女神。私みたいな人外のバケモノなら、王国でしてみたたく脅しつけられるんだけどー。皇帝ちゃんはおくまで、人間でしょー？ バレなきや大丈夫って、みんな考えちゃうんだよー」

「……………確かに、そうですわね」

レイナース自身も、呪われた己を見捨てた婚約者や家族に『復讐』を果たした。

人の善意や良心など、信じられるはずもない。

「それに、『逸脱者』フルーダ・パラダインの存在もあるかなー。高位の魔法詠唱者マジックキャスターが、人間の身で何百年も生きてるんだよー？ 魔法学院もある帝国なら、魔法をかじった人ほど、自分も同じよーに延々と生きられるーって、勝手に考えちゃうじゃない？」

「確かに、魔法学院で、そう考えてる者はいた」

「……………否定はできませんわ」

レイナースが、モモンガの『祝福』を拒みきれないのは、己が呪われたまま老いていくのではないかという恐怖ゆえ。たとえアンデッドと化しても、圧倒的強者かつ不老不死となれるならと。考えてしまふのだ。

そして、アンデッドへの忌避感も、目の前のクレマンティーンの自由さを見ていると薄れる。

「なるほどな。とはいえ、我らが手出しする必要はなからう。レイナースよ、今の情報はジルに伝えるがいい」

「承知いたしましたわ」

「あれー。私の出番かと思っただけどなー」

ステイレットを手の中でくるくると弄びつつ、クレマンティーンは肩をすくめた。

多人数を手加減なく誅殺できるなら、いい気晴らしと思ったのだ。

「確かに不快な話だが。王国のように弱者を食い物にしてはおらん。愚か者が騙されているだけだ」

「……………」

アルシエが、モモンガの言葉に一瞬だけ怒りを見せるが。

「は……………」

それは、アルベドとエンリの殺気を引き出すに十分なものである。

話に参加せずいたンフィーレアが、早くも結婚を後悔するほどの殺気。

「あ……………」

周囲の光景がぐにやあつと歪む。

嘔吐こそせずとも、膀胱が決壊し、尿道が弛緩する寸前。

「気を鎮めよ。身内、それも親を悪く言われては、仕方あるまい」

モモンガの言葉に、殺気が霧散する。

もつとも、続く言葉は厳しい。

「だが、アルシェよ。お前の妹たちはともかく、両親を救う気はない。ワーカーとして働いたお前は金の価値もわかっているはずだ。金貨2枚のため、私はジルに頭を下げた。そして金貨2枚に感謝をした。金貨2枚に私は、その価値があると思っっている」

「……そう、モモンガ様は……感謝を、していた」

アルシェの目に、涙がにじんだ。

己の親を思い出し、情けなくて。

尽きそうな愛想を、必死にかき集める。

けれど、この点だけは……モモンガは慈悲を見せない。

「お前の親は、お前からどれだけ金を受け取り、どれほどの感謝を見せた？」

「しかし、そろそろお金の価値もわかってくれるはず」

「無理だな。人間は変わるものだが、都合よくは変わらん。皇帝が悪い、己は悪くないと言い続けているなら……なおさら良くは変わるまい」

「それでも……」

「お前が何を信じようとかまわんが。妹らが、親の価値観に染まったなら、私はもう彼女らを助けんぞ」

「そんな！」

妹らはろくに外に出ていない。

なら、親と接していく中、染まってしまう可能性は……高い。

「ともあれ、邪教にせよ金貸しにせよフルト家にせよ……我々が手出ししては、ジルにいらん仕事を増やすだろう。できれば適当な人材を……ん？ ああ、そうか」

じつと、レイナースを見つめて、女神が頷いた。

「レイナース。今回の調査、よくやってくれた。お前は相応に社会や



政治にも詳しいようだな」

「は、はい。とはいえ、そちらのクレマンティーン殿ほどでは」

「謙遜するな。こいつは戦闘と裏社会はともかく、表舞台の政治はで  
きん」

「ぶー、ひどい言い方……あはっ♪」

不平を言いつつも、モモンガが手を伸ばしてくると嬉しそうに身を  
寄せ、膝に乗ろうとしてアルベドに小突かれている。その仕草は猫っ  
ぽく、アンデッドには見えない。

レイナースは考える。

愚かなフルト家。

歪んだ貴族たち。

呪われた己自身。

果たして、クレマンティーンを蔑んだり忌避したりする価値がある  
のかと。

そんな、レイナースの内心を見透かしたように。

「さて、以上を踏まえて……レイナース。それにアルシエも。私への  
願いは、まだ決まらないか？」

アルベドを抱き寄せ、クレマンティーンを撫でながら。

モモンガが問いかけた。

新婚旅行中のエンリとンフィーレアを帝都に残し、モモンガたちは  
カルネ村に戻っていた。

そして今、ニグンや村人ら総出の前で、大いなる儀式が行われたの  
だ。

その奇跡に、全員がまばたきさえ忘れ、どよめいた。

「こ、これがアンデッドの体……な、なんだか鎧に違和感があるので  
けれど……」

一瞬の死を迎えた後、〈高位アンデッド作成〉によりレイナースは文  
字通り生まれ変わった。

身を起こそうとするが、妙に体が動かしづらい。

ほぼ常に装備していたはずの甲冑に、酷く違和感を感じるのだ。

「ああ、すまん。その体では甲冑への適性がない。鎧を脱ぐがいい」

「そ、その前に鏡を……」

「はいはい」

軽い口調でクレマンティーンが手鏡を差し出す。

受け取って覗き込めば、そこには。

「……」

女神とは異なる方向性の、怜悧で蠱惑的で「魔性」と呼ぶにふさわしい美貌があった。

呪いは完全に消え、肌の血色こそ悪いが。絶世と言って不足の無い美貌。

レイナース自身が、見惚れてしまう美貌。

己の顔と信じられず、まばたき、口の開閉、鎧で重い手の所作などを繰り返し、確かめる。

面影はある……だが、細かな欠点が全てなくなっていた。

「よろしかったのですか？ 私たちに比肩する美貌を与えて……」

「外見的には、私もこっちがよかったな」

アルベドとクレマンティーンがそれぞれに、軽い不満を漏らす。

「私を与えられる中、最高の美貌を与えたつもりだ。レイナース、今のお前は墳墓トウラム・クイーンの女王。妨害と召喚に関する秘術系魔法を得意とする高位アンデッドだ」

モモンガが宣言する。

墳墓トウラム・クイーンの女王は、ニグンの地下聖堂クリプト・ロードの王と対になる高位アンデッド。支援と召喚を得意とする王ロードに対し、妨害と召喚を得意とする女王クイーン。しかも、フレーバーで「絶世の美貌を誇った古代の女王が、高度なミイラ化により美貌を維持して蘇った存在」と明記されている。

ペロロンチーノすら認めたゾンビ系唯一の美女モンスターだ。

魅了系スキルも所有するためだろう。レイナースには実際に「絶世の美貌」が与えられていた。

「も、モモンガ様……ありがとうございます!!」

「あ、ああ」

凄まじい勢いで頭を下げ、美貌を土に擦り付ける勢いでひれ伏す。不満を言われるかなーと思っていたモモンガは、ちよつと引いた。モモンガとしては、レイナース自身に合わせて僧侶や騎士系のクラスを持つアンデッドにしたかったのだが。

物理戦闘が得意な高位アンデッドはほぼ間違いなく、カースドナイトのクラスを取得している。レイナースが拒む呪いは、このクラスを介して彼女と一体化しているのだ。同クラスを持つアンデッドでは、呪いを受け継ぐ可能性が高い。ゆえに今回の選択は、当人のかつてのクラス構成を完全無視だ。正直、レイナースから文句を言われる覚悟もしていた。

「と、ところでその……なんとなく、第8位階の呪文が使える気がするのですけれど」

「その通りだ。今のお前は、第8位階までの呪文を用い、多数のスキルを駆使できる。強力なものはみだりに使わず、少しずつ使い方を覚えるがいい」

第8位階である。

フルーダが、第7位階が使えないと唸っているのを何度も見てきただけに、レイナースは眩暈がした。

ちらと鏡を見れば、悩まし気な超絶美人。

(これが……私……あああ……これが！)

正直、この美貌だけで、どれだけ感謝しても足りない。

どんな苦悩もゆるんだ笑顔になってしまう。

「こ、このレイナース・ロックブルズ。帝国四騎士を辞し、モモンガ様を守護すべく――」

「やめよ。お前はそのまま帝国に戻り、少なくとも後の者への引継ぎを行え」

「あ、あのさー、モモンガちゃん。たぶんこのレイナースちゃんを帝都に戻す方が大騒ぎになっちゃうんじゃないかなー」

クレマンティーンが助け舟を出した。

ある意味、かつて己が通った混乱である。

「人に危害を加えるアンデッドではないと、皇帝らに言うつもりだが

……」

「いやいやいや、私もそーだけど、レイナースちゃんも見た目アンデッドじゃないから、それは問題ないんだよー。ただ、すごい美人になったし、呪い消えたし、魔法使うようになったでしょー？」

「いいことだと思うが……」

怪訝そうにモモンガが首をかしげた。

女神は人の心がわからないのだ。

「まず、第8位階使えるからフルーダに襲われるよー」

「あつ」

それはかわいいそうだ。

「呪いなし、鎧なし、超美人化で、本人認定されないかもー」

「それはさすがに……ない……だろ？」

確かに変え過ぎたかもしれない。

女神が戸惑い、悩む。

アルベドがそんなモモンガを撫で、リラックスさせようとする。

「むう……レイナース、〈<sup>メッセージ</sup>伝言〉は使えるな？」

「は、はい」

頭の中を探ると、使えるところとわかる。

「派遣するつもりだった人材を一気に、帝国に渡そう。彼らにお前の引継ぎを行い、帝都で働かせるがいい」

「は？？」

レイナースは呆気にとられた顔で口を開けたままになった。

しかし超美人なので、そんな表情でも絵になる。

チラと、鏡に目を向け、内心でにやけてしまう。

その一方で。

モモンガは、控えていたニグンに合図をする。

「では、顔合わせだ」

「はっ。来たまえ、エドストレーム、ゼロ、サキュロント、ペシユリアン、マルムヴィスト」

モモンガが、デイバーノックに聞くまで存在を知らなかった5人が前に進み出た。



閑話2：激しい「喜び」はいらない……そのかわり

■ 『鬪鬼』ゼロ

(王都事変の数日後)

八本指、警備部門の長、『鬪鬼』ゼロ……か。

最高の精鋭、アダマタイト級冒険者に比肩する六腕……。

ははは……笑わせるよな。

もう、ずいぶん昔の話に思えるぜ。

いや、昔だったことにしたいんだ……なにもかもよ。

最初の失敗は、あのクソ王子への顔見せにコツコドールの裏娼館に行ったことだな。

胸糞悪い店だから、いつもサキュロントの野郎に任せてたのによ。

王族と顔をつないどきや、将来の戦士長もありうるなんて、アホらしい皮算用してたのさ。

密輸部門と麻薬部門——特にあのヒルマが来ないってのを、もつと真剣に考えてりや……あんな地獄を見ず、味わうこともなく済んだんだらうぜ。

畜生、あいつらは賢かったよ！

……そして俺はバカだった。

油断も慢心もねえとかうそぶいて、すっかり調子に乗ってたんだ。

クソ王子——バルブロは、本当にクズでな。

愛馬にも娼婦をあてがってやるとか言って、まだ見れる娼婦に馬の相手をさせやがった。

裏娼館の中に無理矢理、馬を引っ張り込んできやがったんだぜ？

アホだろ。

女を抱かせてやれって言われたコツコドールが、なんとか説得しようとしてたんだが。突き抜けたバカは、どうしようもねえ。ガキといつしよで、反対されりや駄々こねるんだよ。

呼ばれた馬丁なんて、泣きそうだったぜ。

王城付きの、ちゃんとした馬丁だったろうにな。

あの夜、あんなことに付き合わされたせいであんな……うげえつ。

す、すまねえ。

思い出すだけで吐き気が……。

あれが次の王だってんなら、この国は長くねえなって思ったよ。思った時点で、さっさと出て行きやよかったのに……。

クソツ！

ああ、そんなわけで俺たちや呆れて、クソ王子のご機嫌取りはやめたんだ。

傍にいちや、何を命令されるかわかったもんじゃねえ。

部屋の外で警護しとくつつつて、離れといたよ。

ロビーじゃ他部門の似たような連中が、たむろしてた。王子のおつきもいたから、あからさまに陰口を言えなかったが……まあ、目を合わせりやわかる。そいつらも含めてみんな、言いたいことありげな顔してたぜ。

きつと裏娼館まで来る道中も、クソ王子はろくでもねえ命令してやがったんだらうさ。

さっさと黒粉で薬漬けにしちまわねえとなつて、みんな目で言つてよ。領き合ったりもしたんだ。

そうして、俺たちがロビーに来てすぐ……クレマンティーヌさんが来たんだ。

正面から堂々として来たもんでな、てつきり他部門の伝令かと思つたよ。

あの人は、一瞬で転移したみてえにロビーの奥まで踏み込んでな。次の瞬間にや、ほぼ全員が倒れた。

いや死んでねえんだ。

全員、しつかり顎を砕かれ、頭揺らされて気絶したのさ。

あいつらも俺らも、あれで死ねてりやよかつたのにな……。

俺？

ああ、俺もやられたが……首の筋肉のおかげで、意識は刈り取られなかった。今ならわかるが、ザコだけ無力化するよう、手加減してくれてたんだらうさ。

ペシユリアンは全身甲冑で攻撃されず。

サキユロントとマルムヴィストは扉が開いた時、いつもの習慣で物陰に入ってた。

エドストレームは……あの場じゃ唯一の女で、あの格好だ。娼婦と思われたんだろな。

問題はデ이버ノックだった。あいつ、クレマンティーヌさんを見た途端……寝返ったんだよ。自分より格上のアンデッドだって、さつさと気づいたらしい。

全員倒れた後で気づいたが、入り口に……入り口に……ニヤさんも、い、いた。

お、おう、わ、わ、悪い。

あの人を、思い出すと、震えが、と、止まらねえんだ。

酒か、あ、ありがてえ。

……ぷはあ。

そ、そう。

そんで、デ이버ノックが寝返っても、5人いるから勝てるって思ってたんだよな。

ああ、身の程知らずはしつかり教えられたよ。

俺たちも、あいつに倣ってさつさと土下座でもしときやよかったんだ……本当にあの夜についてちや、後悔しかねえよ。あの日の俺に会えるなら、裏娼館に行かないようにするためだけでも……ぶちのめしてえ。

お、おい、それを聞くのかよ……クソ、まあいいさ。

アンタしか今の俺たちに、仲間はいねえんだからよ。

あの冒険者どもか？

あ、あれはお前、ニヤさんの仲間だぞ。

下手なこと言つて、ニヤさんに目をつけられたら……。

あ、ああ……大丈夫だ。

そりや直接戦えば勝てるかもしれねえ。

でもダメだ、ニヤさんの前に立つなんてできねえ。

クレマンティーヌさんの拷問は正直、俺たちもよくやるような、やられる覚悟もある類だったさ。そりや痛そうだなって思うがそれだ



けだ。修行の中でも、似たような目にあう機会なんざ、いくらでもあ  
る。アンタだつてわかるだろ？

けどよ、ニヤさんのは違うんだよ。

後で話、聞いてわかったけどよ。

あの人、姉が連れ去られてからずっと、貴族をどう痛めつけるか  
ばっか考えてたんだぜ。

拷問を実践してるだけの奴と、考え方も在り様も違うんだよ。

ほ、本気で苦しめに、いや壊しに……ああ、思い出さなくねえ！  
忘れてえ！

頼むから、他の奴に聞いてくれよブレイン！

■ 踊る円月刀<sup>シミター</sup> エドストレーム

(ツアー来訪中の頃)

はあ？ 男はもうこれ以上、面倒見切れないんだけど？

え、違う？

はあ、前にゼロとそんな話したんだ。それであたしに？

まあ、デイバーノツクは、カジツトとかいう魔法詠唱者<sup>マジックキャスター</sup>と楽しそう

にやってるものね。

ゼロ以外の三人だつて、言いたくないでしょうし……。

え？ あたしは、たいしたことされてないもの。

そりゃ、クレマンティーヌさんに手の爪全部剥がされたりしたけど  
ね。

十分に拷問だつて？

そうね……普通だとそうなんだけど。

この村に連れて来られたら、すぐエンリさんが治してくれたわ。

もう跡もないし、次の日にはあなたと模擬戦だつてしてたでしょ？

あいつらは寝込んでたけどね。

ニヤさんは……あたしが女だからって理由で、見逃してくれた  
の。本当、あれほど女に生まれてよかったって思うことはないわ。

他の連中を横で見てたら……うん、ラクさせてもらって悪いなつて  
気分よ。

夜にあいつら四人の相手してやってるのも、アレを見た同情みたいなものね。

心の傷が深すぎて、あたしがいないとダメになっちゃったもの。満更でもなさそう？

そうね。

前と違って、泣きついてきてる子供みたいなものだし。

あつ、あいつらには言わないでよ？

あたしに借りを作ってると思ってくれなきや困るわ。

ともあれ、あたしたちはクレマンティーヌさんにあつさり倒されてね。

武装解除されて、ニニヤさんとデイバーノックに見張られてたの。大量の護衛と付き人が全員動けなくなるトコ、しつかり見せられたのよ。

おかげで歯向かってても無駄って、よくわかったわ。

あたしもニニヤさんの拷問っていうか……虐待をちよつと見たら、さつさと知ってること吐いて。クレマンティーヌさんの拷問からも解放された。だから後は、見てただけよ。見るに堪えない地獄だったけれどね。

ええ、拷問なんかじゃないわ。

ひたすら痛めつけてたの。

えっ？　どんなことしてたか聞きたいって？

やめた方がいいと思うけど……。

とりあえず、クソ王子と貴族どもは、八本指の男連中に輪姦されたわ。

貴族連中は顎も砕かれなかったから、盛大に悲鳴をあげてたわよ。

コツコドール——奴隷部門の長も並べられてたっけ。

ええ、ゼロたちもさせられたの。

あの四人はみんなして第一王子様の穴兄弟ってこと。

知ってる？　王子っても美少年でも美形でもないのよ。

中身はガキで、体はゴリラ。そいつを無理やり掘らされるの。他の貴族もろくなもんじゃないわ。そいつらを、無理やり掘らされるわ

け。

しかも十二にフォークやらヤスリやら、添え木されるのよ。そんなので……するから、貴族連中は尻から盛大に血を嘔き出した。た。

もちろん、する方だつて嫌がつてたのよ。

ゼロなんて特にそうね。で、あんまり齒向かうから、二ニヤさんにお尻からステイレットねじこまれて。無理やり芯入りにされてたわ。そんなの見たら、嫌でもするしかないじゃない。

おかげで、ゼロは今でもあたしを抱きながら最中に思い出して、悲鳴上げながら泣きだしちゃうのよ。

そんなわけで掘られて裂けて流し込まれて……貴族連中は次々とまあ……尻から本来出るモノを出しちゃうじゃない？

そしたら二ニヤさん、向きを変えさせて……臭いから食えつて言うのよ。

吐いたら、それも食わされるし。

途中で気絶した下つ端なんか、あつさり動死体ゾンビに変えられて……死んでも掘らされるわけ。

その後で、いろいろ出した後の穴を舐めさせられたりもしてた……。

他にも、男の人が聞きたくないこと、いろいろさせてたわ。

普通の拷問でするようなことも、並行してやってたし。

実際、途中で壊れて、頭がおかしくなってる奴もいたわよ。

聞いてて気分悪くなつてきたでしょ？

実際にやらされたあいつらは、そりゃ思い出したくもないわよ。

アンデッドのデイバーノックにも同情されてたんだもの。

とはいえ、あいつがクレマンティーヌさんに陳情してくれたおかげで、それでもゼロ達はまだマシだったんだけど……。

二ニヤさん、仕上げは貴族連中の広がった穴にアシッド・アローの矢打ち込んでたわ。

人が一撃で死ぬような呪文じゃないけど……尻の中に打ち込まれたらどうなるかわかる？

腹の中が焼けて溶けて、延々ともがき苦しむの。

丁寧、打ち込んだ後は栓までしてた。

見てるだけで、あたし自身の指の痛みなんて、忘れるほどだったわ。悲鳴のあげすぎ、吐きすぎで潰れた喉から、一斉に殺してくれって叫ぶのよ。

貴族連中全員、二ニヤさんに土下座しながら殺してくれって懇願するの。

二ニヤさんの姉さんを、馬でアレしようとしてた王子はどうなったかわかる？

馬は出す量多いからね、女を犯させて見世物にする時だって……出す寸前に、調教師が抜くものよ。

中であんなの出されたら、腹が破裂するわ。

そう、王子は愛馬に中出しされたせいで臓腑を破裂させて……貴族連中以上にもがき苦しんでたわ。

それを見てる二ニヤさんの顔がね……うん、あれはあたしも、夢に見る。

それ以上に他の四人が、每晚誰かしら悲鳴あげて飛び起きてるけどね……。

とにかく怖いのよ。

クレマンティーヌさんの強さとか、女神様の凄さとは違って。

二ニヤさんは、とにかく怖いの。

頭の中にある責めを躊躇なく、嬉々として実行するのよ。

クレマンティーヌさんみたいに「喜ぶ」んじゃないの。

「嬉しい」って顔で、際限なく心の底まで痛めつけるのよ。

一晩で何人にしてたかわかる？

合計したら100人近くいたのよ？

それを念入りに全員、二ニヤさんは一晩中素早く動き続けて……！犯罪組織にいたから……拷問なんて見慣れてるつもりだったけど。あんなのは見たことなかった。

違うわね……行為の結果だけなら似たようなのも知ってる。でも普通、拷問って作業よ？

淡々と、する側がおかしくならないようセーブしてするものよ？  
たまにおかしい奴もいるけど、そういうのはやりすぎてすぐ殺し  
ちやうじやない。

あの裏娼館で最後に『使い潰す』時も、そういうのにあてがってた  
そうだし……。

なのにニニヤさんは……念入りに苦しめて壊すのを『嬉しい』つ  
て感じるのよ。

愉しいとか、欲を満たすとか、そんなのじやないの。

止まらずに殺さず痛めつけることを……悪意をぶつけ続けること  
を、嬉々としてできるの。

それが本当に怖い……。

明け方、クレマンティーヌさんがトドメを刺して、全員動死体<sup>ソンビ</sup>に変  
えたわ。

全員、クレマンティーヌさんに感謝してた。

あのまま放置してたら、まだ一日か……悪くすると数日、もがき苦  
しんで死ぬんだから。

王都でのその後は……先日からいるリグリットとかいうお婆さん  
に聞いたんじゃない？

### ■ 『幻魔』 サキユロント

(モモンガとツアーの会談翌日)

ブレインさん、俺たちもやるところから離れる算段が出てきました  
よ。

ととと、違いますって！

脱走とか怖いコト言わないでくださいよ！

に、ニニヤさんに聞かれたらどうしてくれんですか！

デイバーノックを通じて、八本指の残りの情報を売れるトコに売る  
だけですよ！

女神様は、帝国の皇帝陛下と懇意にしてらっしゃるんでしょう？  
そうそう。

帝都や皇帝をずいぶんと褒めてらっしゃったじゃないですか。

連れてきたワーカーとも、ちと話をしましてね。

ええ、あのヘツケランって戦士です。

なかなか世慣れた奴で、こっちの事情を話したら、相談に乗ってくれたんですよ。

デイバーノックは、ニグンさんから信用されていますし。

俺たちの残ってる手札は、古巢の情報くらいですからね。

帝国にや、そこそこ末端組織も……おっと、これ以上はさすがに言えませんが。

その対処に俺たちを売り込もうってことでさ。

クレマンティヌさんはまだ、王国内の掃除もあるでしょうし。

事情をわかってる俺たちが行った方が、仕事もしやすいはずでさ。

なんでこんな話をつて？

そりゃ、ブレインさんもどうですかって話で。

アンデッドがいりゃ、この村に俺たちみたいなの戦士はいらんでしよう。

特に俺は対人特化で、魔獣なんかの相手じゃ三流もいいところですからね。

村人の訓練だって、ペテルやヘツケランで十分でしょう。

集団戦術なら、ニグンさんがいりゃいい。

実質、農作業以外じゃブレインさんの修行相手してるばっかでしたからね。

俺たち、この村じゃあんまり役に立ってないじゃないですか。

そうですか。

いや、ブレインさんが来てくれりゃ心強いと思いましたが。

確かに御前試合での因縁も解決してませんでしたっけ。

俺たち五人で行くつもりで、動いときますよ。

ブレインさんが心変わりする時にや、帝国四騎士が九騎士になつてるかもしれないがね。

はは……。

わかってますよ。

よっぽどうまくいかなきゃ、そもそも帝都に送り出してもらえない

のは。

けど……こうして妄想でも前向きに考えてないと……。に、ニヤさんが同じ村にいるって思うだけで……。壊れちまいそうなんですよ。俺たち……限界なんです。

いつそアンデッドに変えてもらったら、ラクになれるんじゃないかってくらいで。

マルムヴィストなんざ、時々真剣な顔で毒を見えますしね。

俺だって毒を持つてるあいつを、羨ましいって思ったりもするんです。いざって時の逃げ道があるんですからね……。

ニヤさんの目がなきや、俺たちや生きてても酒に溺れるか……もつとヤバイ薬に手を出して、逃げ出してたでしようよ。

実際、エドストレームに慰めてもらって、甘えてますし……。

と、とにかく、村に残るならニヤさんを怒らせちゃいけませんぜ。エンリさんなら一思いに殺してくれるし。

クレマンティーヌさんなら、痛いだけで済みますからね……。

## 40：プランBでいこう

「彼らは犯罪組織、八本指に属していた者たちです」

「ええっ、八本指!？」

帝国でも悪名高い八本指の名に、レイナースは驚愕した。

彼女はまだ己がいかにも規格外か、よく自覚していないのだ。

かまわず、ニグンが紹介を始める。

「その中でも最強と呼ばれた六腕を連れてきましたよ」

「六腕!？」

「近隣諸国最高級の修行僧<sup>モンク</sup>ゼロ」

「うっす、よろしく」

「対人戦特化のマルムヴィストとサキユロント」

「二がんばります。よろしく」

「見た目が騎士っぽいペシユリアン」

「よっす、どうも」

四人が親しみを意識して挨拶する。

「彼らの保護者エドストレーム」

「よろ……ちよっ、保護者って何!？」

五人目が、より軽い空気を作った。

かつてなら、やたらニヤリと笑ったりして、只者ではない風に演出し、セルフプロデュースしていた五人だが。

ここは遥か雲の上の存在が多数。さらにもっと恐ろしいトラウマ対象（ニニヤさん）もいるカルネ村。

目の前のレイナースも女神のお気に入りであり、認識すらされない彼らとは別格だ。

そんな中で、反骨精神を發揮するには……彼らは少々、折られすぎている。

親しみやすい人間として振舞うことこそ、最も大事な処世術。

ニニヤさんも見てるし。

「肩書を聞いて、もっと張りつめた面々かと思いましたけれど。これなら、うまくやっていけそうですね。砕けた接し方をした方が、陛下



も喜ぶでしょう」

レイナースの言葉に、五人がぐつと拳を握る。  
つかみは上々だ。

「彼らは元々、都市で暗躍していた存在。戦争や怪物退治よりも、対人戦で真価を発揮します。また、裏社会での情報収集にも役立つでしょう」

「なるほど……今回の件ではうってつけですね。陛下に働きを見せる機会としても十分かと」

「うまくやっていけそうだな」

ニグンとレイナースのやりとりにも、モモンガが頷いた。  
交渉成立である。

三人としては単なる人材派遣だが。

六腕にとつては、逃してはならぬ蜘蛛の糸。

「よし、エドストレームよ。リーダーとして仲間を率い、レイナースに代わる働きをしてくるがいい。我々の害や恥とならぬなら、詳細はお前たちに任せる」

「え、あ、はい！ 承知いたしました！」

リーダー扱いに一瞬、戸惑うエドストレームだが。  
女神に口答えなど、許されない。

どうか派遣決定ほどありがたいことはない。

これで、ニニヤの目が届かない場所にいけるのだ。

ひとまずは愛想よく、六腕リーダーを任されるエドストレームであつた。

そして。

「さて、残るはアルシエだな。レイナースは決断したぞ。答えは出たか？ 先送りは勧められん。月日が経てば、叶えられぬ望みとなるやもしれんからな」

ずっと傍で俯いていた少女に。

モモンガは顔を向ける。

「私は——」

間を置いて。

アルシエが、振り絞るように口を開いた。

「ロケート・クリリーチャー〈生物発見〉ブレイナー・アイ〈次元の目〉クリスタル・モニター〈水晶の画面〉」

聞いたことのない呪文のオンパレードである。

アルシエは眩暈を感じていた。

「……どうだ？ この子らが妹で、間違っていないか？」

「すごい……ま、間違っていない」

モモンガは一瞬で、遠く離れた帝都にいるアルシエの妹たち——クーデリカとウレイリカを、目の前に映し出したのだ。二人は窓から外を覗いて何か言っている。

魔法で造られた画面は、窓の外までしっかりと映る。

それは……上機嫌で戻ってくる父と母、何かを抱えながら絶望的な顔をした執事のジャイムス。

（ああ……また何か買った。ぜんぜん、変わらない……私がいくら、稼いでも）

その二人の姿を見て。

アルシエの中でぷつりと何かが切れた。

それは両親への最後の絆の糸だったろうか。

ただ、窓の外を見て笑う二人を——あんな風にはいけないという、義務感だけ。

両親に書置きを残そうとか。

使用人たちが路頭に迷わないようカルネ村を教えようと思っていたが。

瞬時にどうでもよくなったのだ。

懐の中で用意した書置きを握りつぶす。

使用人に教えれば、借金取りに情報が洩れるかもしれない。両親がここに来るかもしれない。それは女神、エンリ、クレマンティーン……何より、妹たちに対する害悪だ。

だから。

「ありがとう……モモンガ様。妹たちを迎えに行っても……いい？」

「ああ。行って来るがいい。お前の決断に敬意を払おう。ただし長時

間は待たんぞ——〈転移門〉

あの暗黒の門が造られる。

画面の向こうの二人は気づかず窓を見ている。

もう迷いはない。

アルシエは、黒い空間の中に足を踏み入れた。

本当にあっさりと。

妹たちの着替えと、気に入りの品を手早く掴み。

〈転移門〉の効果時間が切れる前に、アルシエはさつさとカルネ村に帰って来た。

半ば閉じ込められるような生活をしていたクーデリカとウレイリカも、喜びはしゃいでいる。

黒い空間に入ったと思うと一瞬で異なる場所……帝都とまるで違う農村に出たのだ。

さらには、帝都でも見たことがないほど美しい女神。

しかも、二人と同じ双子らしい。

すっかり夢中になって、女神に駆け寄る。

「わー！ 女神様、クーデリカみたい！」

「本当！ 女神様、ウレイリカみたい！」

「ふ、二人ともモモンガ様とアルベド様に失礼——」

幼い双子の姉妹が、寄り添う女神の真似をして見せる。

アルシエが慌てて止めるが。

「ふふ、いや。よい。純粋な子らで安心したぞ」

「おかしな価値観に染まっていなくてよかったですね」

モモンガとアルベドは微笑み。

立ち上がって双子に歩み寄ると、抱き上げた。

なんといつでも100レベル戦士職の筋力である。

腰をほとんど曲げず、手の力だけで軽々と持ち上げてしまう。

「女神様つよーいー！」

「女神様きれーいー！」

使用人やアルシエより背の高い女神らに抱き上げられ、二人が嬉し

そんな声をあげる。

同じ顔の女神の手の中で戯れる、同じ顔の双子幼女。

太陽の下で見えるそれは、まさに神話的光景。

無垢な子らから褒め称えられて、アルベドの顔にも慈愛の笑みが浮かんだ。

「モモンガ様、アルベド様、妹たちがすみません！」

アルシエが何度も、頭を下げる。

その声は震えていた。

彼女の目には、女神（主にモモンガ）の魔力で妹が炙られているように見えるのだ。

ものすごく危険そうだし、正直こわい。

「何、気にするな。お前が守ろうとただけあって、いい子たちではないか」

「ええ、私もこの子たちを助けてよかったと思っています」

二柱はそのまま座り。

二人を膝の上に乗せる。

ちよこんと座り、抱きかかえられる双子。

そろいの人形を抱きかかえたような姿は実に微笑ましい。

「女神様おっぱいすごーいー！」

「やわらかーい！」

頭の上に乗る乳房について、幼女が無邪気にコメントする。

村の男たちは、幼女に嫉妬せざるをえない。

いや女だつて、女神の乳房に興味がある。

まだ比較的幼い子供たちに至っては、自分も甘えればいけるかなと打算的な考えを抱き始めるほどだ。

とはいえ。

アルシエは気が気でない。

すばやく駆け寄り、妹たちの靴を脱がせる。

ドレスを汚して機嫌を損ねれば、妹たちの命が危ないと感じたのだ。

「お姉さま、靴くらい脱げるよー」

「お姉さま、かほごー」

姉の心、妹知らず。

愛する姉に靴を脱がされながら、二人は女神の膝の上で、足をばたつかせる。

「め、女神様のドレス、汚しちゃダメだから。じつとしてて」

アルシエは必死だ。

脇とか背中とか、すごい汗をかいている。

「ははは、仲が良くて何よりだ。やはり姉妹ならいつしよにいないとな——っ」

びくつとモモンガが震える。

「ひっー」

アルシエが小さく悲鳴を漏らし、下半身も少しだけ漏らした。

「!?」

「あ……」

ウレイリカとクーデリカがきよとんと首をかしげ。

アルベドが痛ましげにモモンガを見た。

モモンガはそつと、気遣わしげにアルベドを向く。

「無神経なことを言つてすまない……私のせいで、アルベドは……」

天涯孤独だった己と違い、アルベドには姉と妹がいたはずだ。

名前は忘れたが、タブラ氏のこと。

きつと詳細な人間関係などを設定していただろうに。

己はアルベドの気持ちを考えず、はしゃいでいたのではと思いつつたのだ。

「モモンガ様、どうかお顔を上げてください」

(モモンガ様、どうかお顔を上げてください)

(真面目！ 真面目な思考を前面に！ 気張りどころよアルベド！)

(おつしやああああああああああああああああああああ！)

(押し倒したあいいいいいいいいいいいいいいいい！)

(モモンガ様だけいればいいですうううううううう！)

(姉も妹もいらねええええええええええええええええ！)

(うひよおおおおおおおおおおおおおおおおおお！)

分割思考法をフルに使い、七分割で理性を保つ。  
本来は同じ体を共有するアルベドとモモンガ。  
魔法で造った複製体に精神を分けても、強い感情は伝わってしま  
う。

今は隠さねばならないのだ。

「……………」

モモンガが、上目遣いで恐る恐ると言った風に顔を上げる。

真剣な様子のアルベドが、何を言うかと怯えているのだ。

「モモンガ様……………」

「アルベド……………」

拒まれるのでは、嫌われるのではと。

シモベに過ぎないアルベドに、モモンガが怯えている。

(……………く)

(無理無理無理無理！ 抑えきれないわ!!)

(モモンガ様ああああああああああああああ♡)

(愛愛愛愛愛愛愛愛愛愛愛愛愛愛愛愛愛い♡)

(愉悦うううううううううううううううううう♡)

(らめえええええええええええええええええ♡)

(くふーっ！ くふーっ！ くっほおおおお♡)

知的にモモンガをしつかり依存させようとしたアルベドだが、愛の  
前に全ては無力であった。

プランBに変更するしかない。

つまり、何も考えず衝動に身を任せるのだ。

「っ！ ……んんっ♡♡♡」

鼻から溢れそうになる忠誠心、かろうじて抑えながら。

アルベドはモモンガを強引に引き寄せ……………そのまま唇を食った。

村人やレイナースに囲まれた中で。

「んむっ!!? んんん?」

真面目な話をしていたつもりのモモンガが困惑するが。

アルベドが止まるわけもない。

思考を制御した以上、モモンガにとってもこれは完全な不意打ち。

そして。

(モモンガ様好き♡ 好き♡ 好き♡ 好き♡ 好き♡ 好き♡ 好き♡ 好き♡ 好き♡ 好き♡)

分割によって隠されていたアルベドの愛情が、好意が、慕情が、欲情が。

モモンガの精神に、一気に一気に叩きつけられる。

舌もねじ込まれる。

(あ、え？ あっ♡ アルベド……お♡♡)

蕩けていく主の思考が、アルベドの劣情をさらに高める。

おずおずと、モモンガの舌が受け入れ、絡み合ってくる。

しつこいようだが、村人らもみんな見ている前である。

だが、女神は完全に二人の世界に入り、淫らな粘液音を唇の間で響かせている。

クーデリカとウレイリカも、頭上の音を不審に思ったが。

きよとんとした顔で上を見ても、女神の豊満な乳房が遮蔽となって見えない。

(はーっ♡ はーっ♡ モモンガ様っ♡ モモンガ様っ♡)

分割思考が一極化された時、爆発的な意志の奔流が生まれた。

圧倒的感情が、モモンガの意志を押し流す。

アルベドの手が主の乳房に伸びて、無遠慮に揉みしだき始めても。

拒めない。

(アルベド♡ 許してくれるのだなっ♡ アルベドっ♡ 私も好きだぞっ♡)

(はい♡ 私も好きです！ 大好きです！ モモンガ様好きっ♡♡)

(はい♡ 私も好きです！ 大好きです！ モモンガ様好きっ♡♡)

アルベドにとっては、人間など未だ下等生物。

嫌う理由はなくなっても、好む理由もない。

愛する人の趣味に口出ししないだけである。

だから。

人間の前で何をしようと。

(知ったこっちゃねえええええ！ 愛の女神にジョブチェンジしま

しようモモンガ様あ!!)

そのまま、長椅子に押し倒していく。

モモンガに抵抗のそぶりはない。

まさしく据え膳。

村人やアルシエ、レイナーすらにとつてみれば真剣な顔になった女神が突然キスをし、そのままことに及ぼうとしているのだ。

何がなんだかわからない。

口出ししていいものかどうか、わからない。

このままなら村人の目の前で、女神の情交が始まっただろうが……。

ここで智将アルベド痛恨のミス!

胸を掴みながら押し倒したせいで、体勢がずれてしまっていたのだ

!

二人の幼女が、女神の行為をじっと見つめる。

「あー、女神様ちゅーしてるー」

「ウレイリカもしよー」

ちゅっちゅっ、と双子が女神を真似てキスし合う。

ご丁寧にも胸までさわりあっている。

意味も分からず真似をしているのだ。

そして。

幼い子供の発する、無邪気な言葉、無邪気な行動というものは。

いつだって穢れた大人の心に刺さる。

「……!」

モモンガが慌てて、アルベドから唇を離す。

二つの唇の間に、きらめく架け橋が渡された。

「あ……」

アルベドが残念そうに眉を寄せる。

彼女は魂を持って動き始めて実質1か月あまり。

子供の言葉など気にしない。

いつだって己の設定こそ第一。

「そ、そんな風に真似をしちゃダメだぞ。もうちよつと大人になって



から、な」

モモンガが顔を真っ赤にして、あたふたと幼女たちに言い。  
ウレイリカをそつと膝から下ろす。

「そうですね。確かに大人になってからの方がいいかと」

無然とした顔を何とか隠しつつ。

アルベドもクーデリカを下ろした。

「ま、まあ、とにかくよかったなアルシエ。レイナース、帝国は任せただ。そいつらを連れて、ジルクニフにしっかり引き継いだら、戻って来るがいい。では私は少し用があるので城に戻る――  
グレートター・テレポーター・シジョン  
へ上 位 転 移」

ものすごい早口で言っつて、アルベドの手を握りながら。

その場から消えてしまった。

「え……」

「ええ……」

残された一同が啞然としている中。

「女神様きえちやったね、クーデリカ」

「ウレイリカ、くつはいてないよー」

「お姉さまー、くつかえしてー」

二人の幼女の無邪気な声だけが、カルネ村に響いた。

## カルネ村の詳細

### ■カルネ村の人員配置

村の人員と役割です。

下に行くほど立場は低くなります。

同じ立場の場合、上の人ほど村の中での発言力が高いです。

コメントは村人視点を想定しています

### ●支配者

モモンガ様：最高の女神様、その意志は全てに優先される

アルベド様：女神様、モモンガの伴侶、村や人間には口出ししない

### ●大幹部

ニグンさん：超有能な軍司令官かつ外交官、超つよい

エンリさん：神官長、狂信者リーダー、超つよい（と思われる）

クレマンティーン：女神様のペット、王国掃除係、超つよい

レイナス：新幹部、帝国出向、大幹部内定済、たぶん超つよい

クロマル：神獣、エンリさんに貸し与えられてる、超つよい

### ●幹部（会議などに出席する）

モルガー：エルダーリツチのまとめ役、ムードメーカー

元村長：村人のまとめ役、エンリさんが出るまでもない問題処理

ンファイレア：薬師、エンリさんと結婚した勇者

ヘツケラン：帝都組の代表、コミュ力高い、いろいろ知ってる

ニニヤさん：外部代表？、実質幹部みたいな何か、こわい人

カジット：女神様に気に入られた魔術師、帝国に出向中

エドストレーム：主都組の代表（他がトラウマ持ちのため）、帝国出

向

### ●強者

イミーナ：帝都組、女神様からすぐく気に入られてる重要人物

アルシエ：帝都組、女神様が直接スカウトした有能な魔法詠唱者

ロバーデイク：帝都組、女神様が直接スカウトした神官、いろいろ悩み中

エルフドルイド：帝都組、ドルイドは農業的にマジ貴重なので重要人物

エルフ神官：帝都組、女神様に改宗したので敬意を受けている

エルフレンジャー：帝都組、イミーナと森に行ったりしてる

デイバーノック：エルダーリッチ、研究者、帝国に出向中

ブレイン：なんか強い戦士らしい、ほとんど働かない

サキユロント：王都組、コミュ力高め、帝国出向

マルムヴィスト：王都組、コミュ力高め、帝国出向

ゼロ：王都組、強いらしい、帝国出向

ペシユリアン：王都組、変わった武器を使う、帝国出向

ベリユース：デスナイト、エンリさんの護衛、元略奪者なので罪人

扱い

森の賢王：クロマルの交尾相手、たぶん強い、女神様に会ったことない

### ●外部協力者

ダイン：エ・ランテル冒険者、善人かつ貴重なドルイド

ルクルット：エ・ランテル冒険者、クレマンティーヌと仲がいい

ペテル：エ・ランテル冒険者、善人

### ●アンデッド

元村人エルダーリッチ：村人としてカウント、下位アンデッドの指揮役

エルダーリッチ：下位アンデッドの指揮役

アイボール・コープス：ニグンさん直属、姿を見たことないけどたぶん強い

ペイルライダー：エンリさん直属、女神の外出時護衛、たぶんつよい

デス・ナイト：モモンガが増やした、村の門番したり、労働したり

スケリトル・ドラゴン：カジツト使役、荷運びで活躍、魔法訓練にも使用

ハイレイス：カジツト使役、霧の中で村の外敵への警戒網を構築  
スケルトン・ウオリアー：村のメイン労働力

ボーン・ヴァルチャー：カジツト作、外部哨戒を主に行う

アンデッド・ビースト：カジツト作、森林部警戒を主に行う

レイス：カジツト作、霧の中で外部侵入者を襲うべく伏せられている

スケルトン：カジツト作、村の下級労働力

### ●その他

エンリ両親：一年以内に次の子が生まれそう、二人とも信仰系魔法使える

信仰系魔法使える村人：神官として普通の村人から敬意を受ける

ネム：エンリさんの妹、子供たちのリーダー、信仰系魔法使える

信仰系魔法使えない村人：外部から来た戦力外の人らより発言力高い

ラッチモン：村のレンジャー、アンデッド労働力で最近立場が軽い  
モルガーの妻：別の男とくっついた

カジツトの弟子：秘術系魔法使える、悪い人らじゃないけどコミュニケーション障気味

ツアレ：ニニヤさんの姉、大切に扱わないとニニヤさんがこわい

クーデリカ：アルシエの妹、女神に直接だっこされた、うらやまかわい  
わいい

ウレイリカ：アルシエの妹、女神に直接だっこされた、うらやまかわい  
わいい

元使用人：たいてい元農民なので普通に馴染みつつある

元奴隸、囲われもの：メンタルケア中、軽度の子らは村になじみつつある

元貴族子女：幼い子らは馴染んでる、令嬢や成長期の子らは隔意あり

■外部への評価

村人視点です。上ほど高評価！

●外部人物

ジルクニフ：女神様がめっちゃ褒めてた、すごい名君らしい

レイジー：ンフィーレアの祖母、村とは馴染みの人

イビルアイ：リアクシヨンの楽しいかわいい子、魔法も使うらしい

リグリット：村になじんでた元気な婆さん、アन्दッドと仲がいい

ガガーラン：村になじんでたいかつい姉御、面倒見がいい

ティア：村の外の女神ファン、視線でわかる

ティナ：もう一人に比べて理性的だった、印象薄い

ツアー：竜王らしい、ごはんとか食べない、会話もあまりしない

帝国隠密部隊：悪い人らじゃなかった

ラナー：一回だけ来たお姫様、女神様の方が美人です

ザナツク：新しい王、前よりはマシな政治しろよ

ラキユース：女神様の城を魔王城とか言った罰当たりな女

ガゼフ：女神様に叱られてたおっさん

バルブロ：ニニヤさんの伝説、クズだと思うけど同情したくもなる

フルト家両親：その逸話のおかげで、村に来た貴族子女らに同情的

になった

ランポツサ：ニグンさんに始末されたから、たぶん悪人だったんだ

ろう

フールーダ：女神様を不快にさせたモンスター、エンリさんに討伐

された

エルヤー：女神様を不快にさせたのに討伐されてないクズ

●諸国&都市への評価

カルネ村：この村に生まれてよかった！

帝都：すごくいい都市、村人たちの憧れ、行ってみたい！

帝国：すばらしい国らしい

評議国：女神様に挨拶に来た礼儀をわきまえてる国  
エ・ランテル：王国にしてはマシな都市  
竜王国：ニグンさんいわく危機に瀕してる国らしい  
法国：敵対はしてないけど、村を襲ったから悪い国だろう  
聖王国：女神様も知らないクセに聖王国とかwww  
王国：酷い国だったが、女神様のおかげでマシになりつつある  
王都：クソみたいなところ、女神様が行くようなところじゃない  
エルフ国：王国に準じる酷い国、エルフ奴隷は助けるべき

■レベルについて

村人視点じゃないです。

作者に認識間違いあるかもですが、だいたい以下の形で考えてます。

レベル100：モモンガ、アルベド、クロマル

(ユグドラシルカンストの壁)

レベル70程度：ニグンさん、クレマンティーン、レイナース

(高位アンデッドの壁)

レベル30程度：森の賢王、デスナイト

レベル25程度：ブレイン

(英雄級の壁)

レベル20程度：六腕(ばらつきあり)、エルダーリッチ

レベル15程度：エンリさん、フォーサイト、カジット

レベル10程度：漆黒の剣(当初より成長はした)

(修羅場くぐりの壁)

レベル5程度：ンファイ、ラッチモン、信仰系魔法使える村人

(鍛錬の壁)

レベル1〜3：ネム、ツアレ、ウーデ&クレイ、村に来た貴族子女  
とか

## ■村の産業

主にニグンが運営してる村の産業状態。

軍事：主にアンデッドと突出戦力のせいでめちやくちや強い

魔法：突出した術者がいるので高い

アルシエが才能ある者を見出して秘術系魔法詠唱者増やし中

宗教：村人は全員信者、外部から来ても半強制的に信者扱い

信仰系魔法の使い手がやたら多い

農業：アンデッドが耕作地どんどん増やし中、収穫にはまだ結びついてない

狩猟：活発化、食卓に肉が普通に出るようになりつつある

経済：まだまだ物々交換中心、しかし信仰と恐怖で労働意欲は高い

林業：アンデッドがどんどん切り出し中

建設：アンデッドと人間共同で新規住人のための建物を作成中

工業：簡単な木工品のみ可、金属はエ・ランテルに依存、石材もほぼない

教育：知識人がけっこう増えてるので識字率も上がりつつある

文化：貴族子女、貴族使用人らが徐々に持ち込みつつある

料理：女神のために急速に発展させつつある

娯楽：基本的にセクロス、貴族子女らがゲーム概念等持ち込みつつもある

## ■女神崇拝

### ●法規

実物の女神がいるため、その言動が直接に村の倫理規範です。

崇拝の内容はほぼそのまま、村の法律。

下記以外は基本的に、女神が来る前と変化なし。

ギルテイ判定ついたら、ニグンさんとエンリさんが裁きます。軽い

ギルテイなら村長が裁きます。外部から来て、強くないのにギル

テイ判定重ねると、女神の目に触れる前に処理されます。

・女神を悪く言ったらギルテイ

・女神を不快にさせたらとにかくギルティ（内容によっては重ギルティ）

- ・女神に性的視線を向けるのはOK（モモンガは無防備）
- ・アンデッドは女神の祝福なので大事に扱うこと
- ・ずっと働いてくれてるアンデッドに感謝を忘れないこと
- ・知性あるアンデッドは村人より格上
- ・全員最低限の軍事訓練はしておくべき
- ・女神に従ってるから王国に従う必要はない、納税の必要もない
- ・弱者や格下への搾取と虐待は重大ギルティ
- ・女神はごはん好きだから、村全体で料理を発展させるべし
- ・結婚はあくまで一対一、ハーレムは非推奨
- ・恋愛推奨、婚前交渉推奨
- ・同性愛OK
- ・双方納得の軽い肉体関係はOKだが、既に恋人いるなら要許可
- ・性暴力は重大ギルティ
- ・二股や不倫は当人ら全員の納得がなければギルティ
- ・亜人差別はギルティ

### ●女神の信仰系魔法

通常の神官と違い、対アンデッド系攻撃呪文を覚ええない。

このため、対アンデッドで強いロバーデイクは、ちよつと隔意を持たれがち。

以下、上から順にカルネ村の村人らの習得優先順位

- ・回復呪文（一般的なの、人間同士では重要）
- ・負属性呪文（対アンデッド回復、護身用攻撃）
- ・精神支援呪文（メンタルケア重点の人が増えたので最近需要がある）
- ・妨害呪文（アンデッドの後ろから敵にデバフを戦術のメインにしている）
- ・召喚呪文（ニグンさんがプロ、アンデッドがいるから優先度低い）
- ・支援呪文（アンデッドに適用されないものが多いため、優先度低い）



め)

## ■村の施設

### ●村の軍事的防衛

めちやくちや要塞化されたカルネ村の陣地内容。

街道側警戒網：アイボールコープス1体、ボーンヴァルチャー哨戒  
森林側警戒網：クロマル、森の賢王、アンデッドビースト

外部開拓区域：村外の耕作地、エルダーリツチ最低1体と下位アン  
デッド多数

外縁部大水濠：モモンガが超位魔法で作った村を囲む湖

街道側と森林側に細めの陸路で湖は分断されている  
形状としては村はφ型、村中央を水路が通っている

水濠濃霧結界：モモンガが超位魔法で常時発生にしたエリア効果

暗視無効化、火矢無効化、霧の中にレイスとハイレイ

スが常駐

女神の大城塞：カルネ村の街道側半円を防護する城塞、女神が住ん  
でる

女神以外は幹部しか入ったことがない

対森林防護壁：森林側半円を防護する木造堀、村人とアンデッドの  
共同作業

カルネ村大門：女神の城塞の正門、街道側、デスナイト常駐

カルネ村裏門：森林側への裏門、デスナイト常駐

## ●村内施設

城塞の扉：エンリとクレマンティーン以外開くことは許されていない  
扉

城塞前広場：女神が降臨する時、ご飯食べたりする

村人は一日三回はここで祈る、女神に捧げる模擬戦闘とかもする  
中央水路：モモンガの〈天地改変〉で村の中央を横切るように築か  
れた

村の両門とは180度交差しており、女神の城塞と木造塀の区切りでもある

エンリが水くみしていた井戸は既に水没

今は水路の水を魔法で浄化して生活用水に活用

神殿：エンリとンフィーの家、儉約のため他の家と特に変わらない

元はエルダーリッチになった村人の家を流用

村長の家：幹部会議の場所、外部からの客人が泊まる家でもある

蒼の薔薇とかツアーも泊まった

研究所：カジットとテイバーノックが常駐、他魔術師が知識交換する場所

今はカジットの弟子とアルシエが中心

アルシエに才能を見出された人々へ、魔法教育もされている

ログハウス：女神が来た後で保護された人々が暮らす

訓練場：元墓地、死者はアンデッド化されたので別途に活用

耕作地：壁の中にある耕作地、籠城時のためにけっこうな面積を確保

41……ところがどっこい……夢じゃありません……！！

レイナースがアンデッドと化して一週間が過ぎた。

トブの大森林では。

今、一人の野伏<sup>レンジャー</sup>が、涙を流していた。

「うぐ……うう……お、俺、立ち直れないですよ、クレマンティーンさん……」

「おー、よしよし」

ルクルット、本気の涙であった。

そんな彼の頭を、クレマンティーンが撫でる。

どうでもよさそうな態度だが。

彼女をよく知る者なら、殺しめせず宥める姿に驚愕しただろう。

その筆頭となる人物は……既に生きていまい。

「その……元氣だしましょうよ、ルクルット。ンフィーレアさんに比べたらマシですよ」

横で見ていたニニヤも、珍しく同情の声をかける。

「あ、あんな人外勇者といっしょにすんなあ！」

「あはは！ そりゃンフィーちゃんはずごいもんねー」

「そうでしょうか……あの人もかなり嫌がってましたが」

エンリと結婚したせいで、ンフィーレアは精神性においてセカイ系主人公の如き存在と考えられていた。

実際、彼は今回も危険な前線の方に向かってる。

後詰で、裏方として活動した漆黒の剣とは、ステージが違うのだ。

……彼が望んだ在り方かどうかは、さておいて。

「とりあえず、茂みに隠しましたよ」

「ご老人には申し訳ないが、今回ばかりは仕方ないのである」

ペテルとダイスが、茂みから出てくる。

女神が見てはあまりに見苦しいと、「それ」はアンデッド化して活用もされなかったのだ。

「うっ、うっ、お前らはそりゃいろいろ終わった後だから抵抗も少ないだろうけどよお」

ルクルットは涙声である。

「まー、私も今回はちよーつと残念な役回りになっちゃったしねー」  
肩をすくめながら、まだ撫でている。

なんだかんだで、彼女は面倒見がいいのだ。

「先輩も、お疲れ様でした」

「いやー？ 単に、あのクソ兄貴は、私の手で殺したかったなーってだけー」

泣いている男を気遣ったのか。

クレマンティーヌは、同じ笑みをよく浮かべるニニヤにだけ。  
その復讐者の顔を見せた。

「……………」

ニニヤのフォローで慣れたペテルとダインは、木石と化してやり過ぎず。

こういう時、余計なことを言っではいけないのだ。

かすかな地響き。

ずずず……と巨大な何か動く音がする。

「おお……凄まじいのである」

「あんなのと戦っても勝算十分だったなんて……女神様は本当にすごいですね」

森から突き出す巨大な影に、ペテルとダインは溜息をついた。

嫉妬する気にもならない。

影はゆつくりと、カルネ村に向けて移動している。

「よーし、うまくいったみたいだし。戻ろっかー。婆さんは蘇生できないよう壊したけど……ちやんと、埋めてきたんだよねー？」

クレマンティーヌが一度従者の動死体スクワイア、ゾンビに変えた上で、さらに破壊したのだ。一度アンデッド化したならば、通常の蘇生魔法は受け付けない。

「ドルイドの魔法を使ったのである」

「深い上に、通常の地面に戻ってますから。普通の調査方法じゃ見つからないはずですよ」

二人が頷いた。

「おーけー、おーけー♪ カイレの婆さんを潰せたのはホントに僥倖だよー。あれも手に入ったしねー♪」

森の木々を薙ぎ倒しながら進む巨大なそれは、生物とはとても思えない。

カタストロフ・ドラゴンロード

「破滅の竜王……本当にすごいですね」

「まー、これで法国のちよっかいも気にしなくてよくなるねー♪」

「ちよっ、クレマンティーヌさん」

まだぐずっているルクルットを、クレマンティーヌが引き寄せ、抱きかかえた。

お姫様だっこである。

「いや、さすがに男として恥ずかしいって!」

暴れるルクルットだが、彼女の腕力に敵うはずもない。

「さんざん、恥さらしなプレイしといて今更言うかー?」

「ちよ、クレマンティーヌさん、それは!」

少し、ルクルットの調子が戻る。

「まー、今日はあるたたちの中じゃ、お前が敢闘賞だしねー」

「そうそう。わたしなんて、あの服に〈清潔〉クリーンをかけただけですよ」

「私など死体を埋める穴を掘っただけである!」

「死体を運ぶしかしてないんだけど……」

「胸を張りなつて。あんたがささーつと、婆さんの服を脱がしたから、あれを支配下に置けたんだよー?」

「うぐ……く、口に出して言わないでくださいよ……ああああ、思い出したくねえ〜!」

ルクルットが顔をしかめつつ、頭をかきむしった。

久しぶりに、漆黒の剣の面々に、爽やかな笑いが起きる。

クレマンティーヌも、そんな輪に自然と交ざっていた。

今回、このチームの動きは。

カタストロフ・ドラゴンロード

老婆——カイレによる破滅の竜王精神支配が成し遂げられた直後を狙い、クレマンティーヌが奇襲。スキルでカイレを麻痺状態に陥らせ、拉致する。何が破滅の竜王の精神支配を解除してしまう

かわからない以上、殺害は危険と判断されていたのだ。

別動隊が分断し、そのままクレマンティーヌは戦線離脱。

後ろに控えていたエンリ、ンファイレア、漆黒の剣と合流する。

ルクルツトが、その衣装——全てを精神支配できる世界級アイテム  
傾城傾国を脱がせて。

老婆がいろいろと漏らしていたため、ニニヤが魔法で清め。

ンファイレアが装備し、カタストロフ・ドラゴンロード破滅の竜王を支配下に。

確認後に、クレマンティーヌがカイレを蘇生不可能な形で始末。

ペテルとダイスが、死体も隠した。

エンリとンファイレアは、報告と確認のため破滅の竜王の近く

——女神の元に向かっている。

森の中で、散発的に聞こえていた戦闘音は既がない。

漆黒聖典は既に始末されたのだろう。

「さーて、それじゃ凱旋しよっか♪ みーんなに、ルクルツトくんの脱  
がせっぷりを教えてやらないとねー♪」

「やめてくだ——ひいひい!?!」

言いかけて、ルクルツトの声は悲鳴に変わった。

クレマンティーヌが村に向けて、疾風走破し始めたのだ。

そんな姿も、残された三人は笑って見送り。

彼らは自身のペースで、カルネ村へと戻り始める。

その足取りは軽い。

今回の作戦のため、大量のアンデッドが森に放たれているのだ。

森の賢王も味方である。

道中でモンスターに襲われる心配などほぼない。

ニグンやアルシエ、レイナースから連絡がない以上、問題なく進ん  
だのだ。

全てがまるで夢。

まるで華々しい神話の世界にまぎれこんだよう。

たとえ限られた働きであろうとも、その一助となれた誇りが、三人  
の胸に宿っていた。

この世で誰より愛する人にぴったりと密着し。誰もが恐れる魔獣の背に（エンリの後ろだが）乗っている。いつもなら、少なからず誇らしい顔になっていただろう。だが、今は違う。

チャイナドレスを着ているし。

衣装の都合上、横座り……女の子座り。

深いスリットのせいで、少し風が吹けば見えてしまう。

というか実際、チラチラと見えている。

女性なら太腿の付け根の方で済むだろうが。

このひと月ばかりで急に酷使されたそれは、やたら黒くなっていた。

彼の体で最も鍛えられた場所と言えるかもしれない。

肌が白く、チャイナドレスが白いせいで、すごく目立つ。

恥ずかしい。

もう何度目になるだろうか。

ンファイレアは、妻に問いかけざるをえない。

「ね、ねえ、エンリ。そろそろ着替えちゃダメかなあ」

「ダメだって、女神様も言ってたじゃない」

夜には頼んでいないことまでしてくる妻だが。

女神の意志は夫より優先されるらしい。

実際、老婆が下着をつけていなかったばかりに……他の服を着ていると失敗するかもと、ニニヤたちの横で全裸に剥かれたのだ。妻は夫を剥くことに、手慣れてもいた。

老婆が脱がされる間、ンファイレアもまた脱がされていたのだ。

ニニヤが妙にチラチラと見ていたのが、印象に残っている。

「も、もうちょつとゆっくりにしようよ……風で、見えちゃうからさ」  
「森の中で何気にしてるの？ 別に誰も見てないよ？」

元から泉や川で水浴びする、田舎育ちのエンリにはわからない。

いつもスリットの深い法衣のまま、勇ましくクロマルに跨っているのだから。

ンファイレアは今、支配した破滅の竜王をその基準では微速と

カタストロフ・ドラゴンロード

言える速度にしているのに。エンリは普通にクロマルを駆けさせようとする。

何せ、女の子座りで乗っているのだ。

速度を上げられると、内股になってエンリにしがみつかねばならない。

夫として、男として、あまりに恥ずかしい。

「だ、だってこのままじゃ村に着いちやうよ?」

村人にこのチャイナドレス姿を見られたくない。

男として当然である。

というか、見たこともない上質の生地でできたチャイナドレスが、ンファイレアの股間をさらさら擦り刺激する。

変な性癖に目覚めそうで怖い。

実際、少し硬くなっている。

「このまま村に行くんだよ?」

何言ってるのといわんばかりに、エンリが残酷に断言した。

「嘘……だよ?」

ンファイレアの顔色は、青を通り越して白くなる。

「もう! 女神様が言ってたでしょ。それを装備してないと、効果は続かないんだから! ンファイが脱いだら、あれは止まらなくなつて、村にぶつかつちやうかもしれないんだよ?」

そう、エンリの言うことは正しい。

正しいが。

「ね、ねえ、それじゃせめて下着だけでも」

「そういう実験は村に帰ってからって、女神様が言ってたじゃない! 実験じゃない。」

夫のプライドの問題なのだ。

「じゃあ——」

「ほら、早く行こう! 最近、勘違いし始めてる元貴族もいるんだから! 女神様の力をしっかり見せつけなと!」

弱々しい夫の声は、妻の言葉に打ち消される。

問答無用とばかりにそのまま、クロマルがスピードを上げ始めた。



「ひゃああああ！ ダメえ！ 見えちゃう！ ていうか見えてるよお！」

「もう、自分のおちんちんでそんな大騒ぎしないでよ、ンファイー！」  
都市育ちと農村育ちの、意識の違いであった。

今でこそトイレが設置されたが、かつてのカルネ村では用を足すところを見られる時だって、ままあるし。水浴びを覗いたの覗かれたたので、騒ぐこともないのだ。

やがて少年の悲鳴は止まり。

（悪い夢だと信じたい……これは夢……きつと僕には秘められた女装願望とかあって、そのせいで……）

空ろな瞳で、ぶつぶつと呟くばかりになっていたが。

エンリは大仕事を終えた満足感で、まるで気づいていなかった。

森の中で油断なく監視を続けながら。

レイナースとニグンは互いを褒め合っていた。

「ニグン様、さすがでございました。指揮経験のろくくない身として、今回は勉強になりましたわ」

「いえ。おかげさまで、うまく物量作戦を行えました。上位アンデツドラのみの奇襲と勘違いしてくれたのは幸いですな」

女神が追加の集眼の<sup>アイボール・コープス</sup>屍を作成してくれたおかげで、強力な監視網を築けた。

漆黒聖典が破滅<sup>カタストロフ・ドラゴンロード</sup>の竜王に気をとられていたのも大きい。

おかげで、絶好の機会を狙い打てたのだ。

カイレが破滅<sup>カタストロフ・ドラゴンロード</sup>の竜王を支配下に置いた瞬間。  
青褪めた乗り手6体による一斉奇襲。

そして、わずかに遅らせてクレマンティーヌによる、カイレの無力化と拉致。

さらに、ニグンとレイナースは〈不死の軍勢〉<sup>アンデス・アーミー</sup>によって膨大な下位アンデツドを召喚し、漆黒聖典とクレマンティーヌを完全に分断。

追加で可能な限りの中位アンデツドを召喚してぶつけ続け。

二人は一切、姿を見せないまま……大量のアンデツドで漆黒聖典を

擦り潰したのだ。

「それにしても、まだ帝国で忙しかったでしょうに。今回は、私の我儘でお呼び立てして申し訳ない」

追加戦力として、レイナースを急遽呼び出したのはニグンだ。

「そんな、今回は私にとって重要なものを得ることができましたわ。やはり大規模戦術では、ニグン様の支援魔法の方が価値が高いですね。私の専門分野である妨害魔法では、姿を現さざるをえません」

「いやいや相手が対等かそれ以下なら、十分に有効ですぞ。自ら囚役として、敵陣を惑わすこともできましょう」

「帝国四騎士は、シンボルとしての強者でしたもの……実際に精鋭を率いていたニグン様の経験に、学ばせていただかねばなりませんわ」

「ははは。しかし、私では女神様の護衛はこなせませんな。レイナー殿の妨害魔法ならば、刺客や不埒者、女神様を不快にする輩を、いち早く無力化できましょうぞ」

「ありがとうございます。女神様の護衛となれるよう、私も努力いたしましょう」

二人の距離は近い。

互いに互いを褒め合う言葉が、自然と口から出る。

これは、二人の種族によるフレーバーテキストゆえであった。

上位アンデッドモンスタークリプトロード地下聖堂の王と墳墓の女王は、どちらも遺跡に眠る太古の王族という設定。そして、両者が同じ場所にいたなら夫婦だろうと明記されている。同じ主に作られ、同じ場所で戦うなら……二人は夫婦同然であった。

今回の作戦においても、お互いが阿吽の呼吸で動ける。

なぜか相手の行動が察せられて。

長年のパートナーのように動けるのだ。

「はは。このようなアンデッドになって、神話の如き戦いをするとは……思ってもみませんでしたな」

「まったくですわね。これほどの力を得るなんて……そしてモモンガ様はこれ以上とは」

残った高位アンデッドたちが、漆黒聖典の装備を回収している。

そのアンデッド一体でも、帝国軍全軍を容易に滅ぼすだろう。

「この力が必要な敵が、この世にどれほど存在するか……疑問でもありませんがな。それに今回のように、実際の戦闘をせずとも勝利は掴めましようぞ」

「……そうですわね。それも、元々個人で動いていた私には、まだまだ難しいやり方ですけど」

「何。学ぶ時間はいくらでもありません。我々はもはやアンデッドとなっておりまからな」

「ふふ、では帝国からこちらに戻りましたら……ニグン様が教えてくださいませんか？」

「無論、私でよければ。元よりレイナース殿は名高き帝国四騎士。すぐに私に追いつけるでしょう。むしろ、追い抜かれぬよう精進せねば」

「あら、ニグン様が努力なされては、私など置いていかれてしまいますわ」

そつと、互いに手を重ねる。

恋ではない。

そんな熱い感情は、精神抑制された二人にはない。

どちらも、互いに互いの異性の好みからは外れている。

他を利用し、任務を優先する冷酷な指揮官。

誰も信じず、目的のため手段を選ばぬ騎士。

その本質も、正反対と言えよう。

だが、それでも。

ニグンとレイナースは、互いに傍にいたかった。

傍にいと、安心できるのだ。

相手の傍が、居場所のように思える。

ささくれた現実生きて来た二人にとって。

まるで運命で約束されたような相方との、この時間は……本当に、夢のようで。

だから。

カタストロフ・ドラゴンロード  
破滅の竜王がカルネ村に進む後を。

高位アンデッドらに、装備と遺体を回収して先行させ。二人でゆつくりと。

互いに愛情を込めて語り合いながら、カルネ村に帰還するのだった。

(もうすぐずっと二人でいられるなんて……本当に、夢のよう……) 心の中でも、互いを想いながら。

フォーサイトの面々は、今回の経緯をただ眺めているだけだった。すべてが終わった後も、しばらくはぼんやり眺めるばかり。

最初に口を開いたのは、意外にもアルシエ。

「……実際、女神様がいる時は、もう何も心配しなくていいと思う」  
もう全部あいつ一人でいいんじゃないかな宣言である。

「そうね。討ち漏らしが出たら……って聞いたけど」

「ミンチよりひでえや。装備はすっかり残ってるから、あいつら相当すげえ装備で固めてたんだろな」

「しかし、戦術的に有利だからと、あれほどのアンデッドを扱うのはやはり……」

漆黒聖典がいた場所を、しげしげと眺めながら三者三様に呟く。

イミーナは、実質何もしていない脱力感。

ヘツケランは、女神側にいるという安堵。

ロバーデイクは……まだまだ悩んでいた。

「けど、私たちがここに呼ばれた意味を考えておくべき」

アルシエが、冷静に言う。

さすがに女神の膨大な力も見慣れた。

妹たちが女神にじゃれつくのは……今でも怖いが。

「……実力を見せつけとくってこと？」

イミーナの言葉に、アルシエがこくりと頷く。

「まあ……俺たち、女神様の力とか知らないしな……」

「明らかに只者でないのは、よくわかりますけれどね」

ヘツケランとロバーデイクも頷く。

あの巨大な怪物により、森は広範囲にわたって荒れていた。

カラストロフ・ドラゴンロード  
破滅の竜王が養分を吸い取ったのだろう。

一面が枯れ木の森と化している。  
特に湖のあった場所は酷い。

リザードマン  
そも、今回の事態を最初に告げて来たのは、この湖に棲む蜥蜴人  
だった。

彼らの代表が、最初にクロマルと森の賢王に接触。

カルネ村へと案内されてきたのだ。

彼らの話では、湖のほとりに巨大な植物モンスターが現れ、森を枯  
らしているという話だったが。

「確かにあの、カラストロフ・ドラゴンロード破滅の竜王を支配下に置きましたが……」  
実行したのはニグンとクレマンティヌとンフィーレアだ。

それに、あれは戦力の増強ではあっても。

助けを求めた者たちへの救済ではない。

「これほどの破壊と災厄の後では……」

ロバーデイクが痛ましげに湖跡を見る。

水が完全に枯れて、枯れた水草と干物のようになった魚が底に積  
もっている。

干からびた湖の縁は半ばひび割れ。

その荒廃した臭いが、ここまで漂ってくる。

ほとりには、多数のリザードマン蜥蜴人が絶望して、地に膝をついている。

彼らは湿地に棲み、魚を食べる種族。

湖そのものがなくなった今、新天地を探し旅立つか……このまま滅  
ぶ他ない。

「……そうね。いくら力があってもこんなの、どうしようもないわ」

「女神様は死を司るって言ってたし、さすがにこりや専門外だろうな」

悲痛な面持ちで、荒れた光景を眺めるイミーナ。

ヘツケランが彼女の手を握り、諦めるよう諭す。

そんな時、湖跡の上。

空中に何かがふわりと飛来した。

「あれは……モモンガ様とアルベド様？」

二柱の女神が寄り添い合って、浮かんでいる。

二柱は、じつと湖の様子を見ていた。

その目も、フォーサイトと同じものを映し。

同じように思っているのだろうか。

「湖を救えなかったと、彼らに告げにきたのでしようか」

ロバーデイクが、わずかな失望を感じつつ呟く。

と。

突如、女神の周囲を無数の魔法陣が球状に取り巻き、回転を始めた。

「え？ 何あれ。アルシエ、魔法なの？」

「し、知らない……すごい魔力……っ、だ、第十位階より上……」

「えっ、俺たちここにいて大丈夫なのか？」

「し、しかし、退避するにも——」

戸惑い、ただ身構えるしかできない。

女神をとりまく魔法陣は力を高め。

内に輝きを孕み……もう女神の姿も見えない。

その魔法陣が限界まで魔力を高めた瞬間。

「っ——！」

世界そのものを変えるような、膨大な力が発せられ。

目の前の枯れた湖を侵食し。

荒廃した場所を……“作り変える”。

「……え？」

「うそ……」

ヘツケランとイミーナが、眩きを漏らす中。

アルシエとロバーデイクは、ありえぬ光景に言葉すら発せぬまま、

へたり込んだ。

湖がある。

太陽の光に水面がきらめき。

魚が跳ねる。

干からびた岸辺すら、肥沃な泥に戻っている。

荒廃した臭いはない。

ただ爽やかな水と生命の匂いだけが、ある。

「夢でも見てるのか……それとも、さっきまでののは幻……か？」

ヘツケランの問いに、誰も答えられない。

幻だったなら、その方がわかりやすい。

だが、リザードマン 蜥蜴人らも啞然としている。

彼らが故郷を見誤り、惑わされるとは思えない。

「あの村の周りの湖も、城塞も、モモンガ様を作ったって言ってた……  
本当に、何も無いところに、創った？」

うわごとのようにアルシエが呟く。

だとしたら、それは本当に神の領域。

湖や城塞があるなんて聞いたことはなかったが。

女神が創ったとは信じていなかった。

きつと何らかの元からあったものを活用したと思っていたのだ

しかし、これは……。

そんな思いを察したかのように。

宙に浮かぶ女神が、荒廃した森の上空へと滑るように移動する。

再び魔法陣で包まれる女神。

(あの枯れ木の森には私だつて入った……幻じゃないわ。樹は完全に  
朽ち枯れて、地面はひび割れ……)

再び、あの力が放たれる。

「あ……あ……」

「うそ……だろ……」

啞然としていたリザードマン 蜥蜴人たちのざわめき、祈るような声も聞こえる。  
「森が……」

森が、完全に元の……荒廃前の鬱蒼と茂る森に、戻っていた。

(神話……これは神話の領域……私は神話の世界に踏み入り、真の神  
と話をしたのですか……！)

ロバーデイクはいつの間にか、地に伏して。

一心に祈りを捧げていた。

己の神ではなく……自ら議論を交わしてくれた彼の女神へと。

「ふう。今日の〈ザ・クリエインジョン 天地改変〉はここまでだな」

「お疲れ様でした、モモンガ様」

ぴったりと寄り添ったアルベドが、超位魔法を連続行使したモモンガをねぎらう。

「何、ニグンたちのおかげで、あのレイドボスと直接戦う必要もなくなったからな」

「あれを手に入れられたのは僥倖でしたね。破滅の竜王などと呼ばれながら、植物モンスターだったとは驚きました」

「まったくだな。ツアーに聞いたが、厳密には竜王でもないらしいし」「一定以上の強さのモンスターは全て、竜王と呼ばれるのでしょうか」

世界を汚すの歪めるのと言われては困るので、事前にツアーに話は通している。

モモンガはすっかり忘れていたが、ニグンがそのあたりのやりとりもしてくれた。

漆黑聖典を始末することについても、むしろ歓迎されたようだ。

一応最終的には、ツアーと直接の話もしている。

「しかし、お前と別行動の時を考えて、切ったままだった攻性防壁だが。どうやら随分と覗かれていたらしい」

「モモンガ様との時間を覗くなんて不埒な連中ですね」

正直、アルベドとしては露出プレイも大いに推奨なので、気にしてはいないが。

モモンガが気分を害しているなら、乗るべきである。

今回の漆黑聖典襲撃への反応を遅らすため、モモンガは破壊力優先で攻性防壁を発動させていた。

実際、これにより法国では巫女姫二人とその護衛らが爆死。

神殿自体もほぼ崩壊していた。

ついでに、日課のように女神を調べていた帝国の逸脱者も酷い状態になったが……高レベルな彼は、かろうじて行動不能ダメージに抑えられていたという。

「うむ。目下、お前とは離れるつもりもない。どうしてもという時は、私の中に……いや違うな。アルベドに、本来の体に戻ってもらおうぞ。今回のような世界級アイテム持ちに狙われて、お前が洗脳されたりしていたら……私は……」



「も、モモンガ様っ……」

(ももももモモンガ様っ♡)

(くふーっ！ くっほお♡ んほおおお♡)

(あ、やば、忠誠心が下からこぼれそう)

(ていうか膝までできてるし。足先から地面に糸引いたらばれるし)

感極まったアルベドが、ひしと抱き着きつつ。

少し不自然な内股になった。

「それにしても、レイドボスに世界級アイテムか……。今回は首尾よく全て手に入れられたが。少し、この世界を見下しすぎていたかもしれないな」

「そうです……ね」

こればかりは、ずっと色事にかまけたアルベドの責任でもある。

しゅんと、落ち込んでしまう。

「そんな顔をしないでくれ」

「はい……」

そんなアルベドを、主は優しく抱きしめてくれる。

「とりあえず、情報は重要だ。あの漆黒聖典とやらも適当なアンデッドにするでしょう」

「残念ですが、少し外に目を向ける必要もありそうですね」

今回も、ニグンとクレマンティヌ、ツアーからの情報あらばこそだった。

モモンガとアルベドだけなら、カタストロフ・ドラゴンロード破滅の竜王を倒して終わっていただろう。

魔法で探った限り、相手は80レベル以上90レベル以下といったところ。

100レベル2人でも、時間はかかるが勝てる。

アルベドがクロマルに騎乗すれば、余裕だったろう。

だが、タイミングが悪ければ、その隙について漆黒聖典により……アルベドが精神支配されていたかもしれない。

「強者、アイテム、プレイヤー……はあ。私はアルベドがいれば、それでいいのにな」

「くふーっ！ 私もモモンガ様さえいれば、かまいません！」

今回のような脅威を、初期に見つけていたら……二人で誰もいない場所にこもって隠れただろう。

「夢のような世界、夢のような時間と思っていたが……ここもやはり、<sup>リアル</sup>現実”か”」

初めて感じた明確な脅威。

最悪の予想。

モモンガは、ここが都合のいい夢ではないと……初めて実感していた。

42：言い忘れていたな、私は非常に我儘なんだ

カタストロフ・ドラゴンロード

破滅の竜王を村の遥か南方へと移動させた後。

モモンガは黒い城塞に戻って、考える。

思えば。

鈴木悟は、ユグドラシル終了からずっと、この異世界に来たことを真面目には考えなかった。

誰も来ないまま全てが終わる喪失感に。

思ってもみなかった、ありえない変事。

自然に満ちた見知らぬ異世界へ転移し。

体が女性——それもサキュバスになり。

混乱の中で童貞（処女？）を喪失して。

そのまま美しい恋人に溺れ続けていた。

全てが思い通りになって。

誰もが己を愛してくれる。

受け入れ、讃えてくれる。

目障りな者がいれば、簡単に排除できる。

「……ずっと、夢の中にいるようだった。何もかも、都合がよすぎて。神様になった気分だったんだ」

モモンガは呟き。

アルベドの髪を撫でる。

「……………」

アルベドは、口を挟まない。

最愛の人が思いに耽るのを、邪魔したりしない。

「私は、アルベドを……ずっと都合よく考えて、都合よく求めて、都合よく溺れていた。お前を書き換えた時から、私は神になったと錯覚していたのだろうか」

あるいは、彼女が動き、意志を伝え始めた時から。

モモンガは彼女を都合よく変えて。

彼女の言葉と態度に接して。

自らを上位者と信じ込み、全てを見下してしまっていたのだ。

「モモンガ様は私にとって、ずっと神……いえ、神以上の存在です。それは、モモンガ様が私に愛を刻まれる前から、決して変わりません」  
「……そうか」

沈黙が続いた。

本来、臆病で慎重なモモンガを、奔放な女神に変えたのはアルベドだ。

この全てが不明の世界。

だが、草原ですらモンスターの気配のない世界で。

数日を経ても、何者も襲つてもこない世界で。

己たちが上位者である可能性は高いと判断した。

モモンガから臆病さをなくさせるよう……アルベドは性経験のない主を誘惑し。挑発し。溺れさせ。そして、己の騎獣を使って間接的に犯しすらしした。

そう、クロマルが二人を犯したのは習性ゆえではない。

主たるアルベドが、そう命令したのだ。

万一にも孕まないよう、騎士スキルでモモンガの卵子をカバーリングもしている。

アルベドの方は仮に孕んでしまっても、複製体クローンを作り変えてもらえばよからうと考えたのだ。

幸い、孕んだ気配もない。

目論み通り、モモンガは様々な抑圧から解放された。

本来の彼ならありえないほど、気ままに振る舞った。

神として振る舞い、讃えられ、崇められ。

アルベドと愛と色に溺れ続けた。

それが、傾国の美女として設定されたアルベドなりの……主を思いやった、最大限の奉仕であり。

主に与えられる「救い」だったのだ。

（あの判断に後悔はないわ……モモンガ様に様々な情報や感情を隠してもきた。それらも必要だったと信じてる。けれど——）

今日、あの忌々しい連中によって、主の夢は覚めた。  
覚めてしまった。

かつての在り方を、取り戻しつつあるだろう。二人の間に今もつながる、精神のつながり。モモンガの感情が、アルベドには感じられる。敵対心はないが。

何か強く迷い、困惑している。

疑念、不安、恐怖。

アルベドを疑っているのか。

彼女には、いくつも……身に覚えがあるのだ。

主が沈黙を破った。

「……………アルベド」

「はい」

短くとも、互いに強い覚悟を込めた一言。

モモンガは悲痛な顔で、見つめてくる。

アルベドは拒絶への怯えが、顔に浮かぶ。

だが、主の言葉は……想定と違った。

「まず、体を返そう。解除するぞ」

「え——」

アルベドの宿っていた肉体——魔法で造られた複製体が解除される。

着けていた装備が床に落ち。

アルベドの精神が本来の体へ……モモンガと共有される。

モモンガの感情、意識がアルベドにも流れ込んでくる。

だがそれは酷く暗く冷たく。

どこかアルベド自身に似て。

己に近似するがゆえ、容易には読み解けない。

（モモンガ様!?! モモンガ様!?!）

意識の中で呼びかけるが。

返答はなく。

「〈複製体作成〉」

「モモンガ様!?!」

モモンガの精神が、アルベドの肉体から去った。

意識の中の叫びがそのまま、声となる。

肉体の共有が絶たれ……先ほどまでのように、複製体の中にモモンガの意識が宿ったのだ。

「ふむ……元よりそういう魔法だが。アルベドの体にいた時と変わらん」

生み出された肉体に宿り。

裸体のまま首を傾げる。

「これで、私は……体を奪い続ける。横暴な主ではなくなったな」

「モモンガ様……あのままでも、私は——」

「いや。それはお前の肉体だ。私の肉体は……人としても、死の支配者としても、既に失われた。私自身が亡霊……夢のようなものだったのだ」

「そのような言葉、どうかおやめください！」

「……そんな私が、お前の主として振舞い。神を名乗って調子に乗っていたのだ……傍目に見れば、さぞや滑稽だったろうな」

「モモンガ様は多くの人間を幸せにしております！ どうして笑われるはずがありませんようか！」

「だが、私が私を認められんのだ」

「わ、わかりました！ そのつらさ、私が必ずや慰め申し上げます！」  
なぜか、アルベドは焦っていた。

酷く、嫌な予感がする。

「今夜はやめておこう……少し頭を冷まさねばならない」

「で、ではせめて、その御体でも、これをお持ちになつてください！」

ワールド  
世界級アイテム、真なる無を差し出す。

「いや、それはお前が持つておけ。本来はお前に与えられた品だ」

「え……？ あ、ああ、確かに。今回二つも世界級アイテムを手に入れたのでした」

熱くなり過ぎたか。

らしくない、ミスだと思ったが……嫌な予感は強まるばかりだ。

裸体のモモンガが、先刻手に入れた聖者殺しの槍を、手に取る。

漆黒聖典の隊長が装備していた品。自らの存在と引き換えに、相手

を絶対消滅させる世界級アイテム。

世界級アイテムを装備していれば、世界級アイテムの効果を防げるのだから、ただ装備しておくだけでも価値はある。

「よし、この肉体でもアイテムボックスは使えるな。收容可能量は……アルベドのままか」

確認するように言いつつ。

「これは使用禁止とするぞ。アイテムボックスに入れておく。お前にも装備はさせん」

無造作に聖者殺しの槍を、アイテムボックスに仕舞い込んだ。

「えっ？ も、モモンガ様？」

「ダメだ。お前が消滅する可能性は絶対残さん。それに、法国から回収した品を神が使うなど、格好悪いだろう」

さらに、傾城傾国——あらゆるものの精神を支配できる世界級アイテムも、アイテムボックスに入れる。

ンファイレアから装備を外しても破壊の竜王が暴走しないことが立証された以上、無理に装備し続ける意味はない……が。

「同じくこれも、あれを操る時以外は不要だ。仕舞っておくぞ」

「お待ちくださいー！」

アルベドが悲鳴混じりに叫ぶ。

「……どうした」

ゆっくりとアルベドを見やる目は、どこか空ろで。

転移以来、ずっと宿していた輝きを失ったよう。

「御身を！ 御身を守る世界級アイテムが必要です！ 御身に何かあれば——」

「いらん」

「なぜですか！ 私は——」

「お前が私を守るのだ。この体が破壊されても、お前の中に戻るだけだろう。これも100レベル戦士職の肉体に変わりはない」

「それでも、万が一が——」

「不要だ。私は……本来は人でありながら、人の視点を失っていた。許せぬ敵が現れればともかく……しばらくは、私自身を人の身とす

る。それに、装備は死ねば落とすが……アイテムボックスは蘇生しても戻る。死んだままなら消滅するだろう。あれらが消えるのは、悪いことでない」

すがりつくような言葉を、決して続かせない。

モモンガは、アルベドを抱きしめた。

欲望はない。

ただ、愛情を込めて抱きしめる。

その気持ちは、アルベドにも伝わる。

伝わるが。

「モモンガ様、どうか——」

「ダメだ」

言葉は変わらない。

抱きしめながら、モモンガは呟く。

互いの顔は見えない。

アルベドの耳元に呟かれる、その声は震えていて。

肩に、雫が落ちてくる。

(泣いているの……？ モモンガ様を……私が、泣かせたの？)

泣きたい気持ちで懇願していたのは、己はずなのに。

主から伝わるのは後悔、悲嘆。

アルベドの頭の中が、真っ白になった。

優秀なはずの知性が、働かない。

震える声で、嗚咽をこらえながら、主は続ける。

「リアルここが現実だ」というなら。私はお前を都合よく貪ってはならなかった」

「私はモモンガ様にとって都合のいい存在でかまいません」

反射的に答えてしまうが。

「ダメだ、私が許さん。私はお前を信じていなかった」

「……………」

嘘だ。

疑念の欠片も抱いていなかったと、アルベドは知っている。

全てをさらけ出し、感情も共有しているというのに。



「私はお前を利用するばかりで……ただの道具のように考えていた」  
「……………」

嘘だ。

あれだけ愛していると言って。

過去を忘れようと、アルベドにすがりついていたのに。

「お前が大事なのに、お前を守ろうと……ろくにしなかった」  
「……………」

嘘だ。

ニグンと戦った後、法国の情報を得た後。

アルベドに単独行動はさせず、ずっとくつついていたのに。

「私の命は、お前に預ける。お前を信じる。何より……私は……」  
「……………」

(この人は……)

ずっと、自分自身こそ最も信じられないのだと。

アルベドはようやく悟った。

だから、いなくなったギルドメンバーを信じ続けて。

今も、アルベドを信じようとしている。

モモンガが疑っているのは、アルベドではない。

モモンガ自身を、疑っている。

アルベドを守れず、失ってしまう未来に不安を感じ、恐怖している。

「私は、目の前でアルベドを失いたくない……」  
だから。

万一の時があれば、アルベドは生き残っても。

己が先に死ぬようにしようというのだ。

シモベとして、主にさせてはならない考えだ。

許されない。

己自身が許せない。

なのに、アルベドは嬉しく感じてしまう。

それが、おぞましい。

「モモンガ様……それは、我儘というものです」  
絞りだすように。

主と己、両方への……せめてもの抵抗として。  
言うが。

「知らなかったのか？ 私はとても我儘なんだ」  
「……………」

それも嘘だ。

嗚咽をこらえながら、言うことではない。

全てはアルベドのために――

アルベドの体から力が抜けた。

（私が、追い詰めてしまった……このやさしい人を……泣かせて。私を優先させて……。私が独占なんかせず、他の愛する人を見つけておけばそれで、少しは違ったはずなのに。私だけを愛してくれる、この方を……。ただただ傷つけて。こんなにして……。なんて、無様な……。しかも、それが「嬉しい」？ ありえない……。ありえない。本当に我儘で度し難く、醜悪なのは、私なのに……）

モモンガの――かつての己の肉体にしがみつくようにして。

アルベドは泣いた。

子供のように泣くアルベドを、モモンガが撫でる。

撫でるモモンガも嗚咽を漏らし、力なくすがりつくように

（こんな汚い私を……。モモンガ様は……。どうして……。モモンガ様がどうして、こんな汚い私のために……。泣いて）

（こんな私を、勝手に愛させて……。挙句、今もアルベドを泣かせている……。私は本当に……。どうしようもないな）

己自身が醜くて、悔しくて。

二人は同じ気持ちで、互いを崇め、己を貶め。

そんな気持ち互いに伝わり、ぐちゃぐちゃに混ざり合い。

二人で、泣いた。

お互いの顔を見ぬままに。

その夜、おそらくは轉移以来初めて。

二人は密着すれど交わらず。

一夜を過ごした。

城塞の外で日も昇る頃。

「……今までの私は、一人で夢を見ていただけだ」

「……私も、同じかもしれない」

「そうか。なら今日から。今日からは、二人で見よう」

「はい……！」

そして、一人きりの神遊びが、二人の旅路に変わる。

### 43：考える、考える、マクガイバー

モモンガとアルベドに大きな変化があった翌日。

カルネ村を覆う、黒い城塞。

その玄関ロビーには堂々たる円卓が配置され、今回の話し合いに呼ばれた者たちが座していた。

女神モモンガ。

女神アルベド。

バハルス帝国皇帝ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルニクス。

アーグランド評議国永久評議員ツアインドルクスⅡヴァイシオン  
(甲冑)。

神官長エンリ・エモット。

元スレイン法国陽光聖典隊長ニグン・グリッド・ルーイン。

元スレイン法国漆黒聖典クレマンティヌ。

元バハルス帝国四騎士レイナス・ロックブルズ。

元ズーラーノーン十二高弟カジット・デイル・バダンテール。

ほとんどがカルネ村関係者とはいえ、そうそうたる顔ぶれ。

「……………」

外様の両者に、エンリは剣呑な目を向けていた。

地位など関係ない。女神の聖域たる城塞内に、外部の者が踏み入ったことに義憤……いや、嫉妬を覚えていたのだ。

とはいえ、彼らは女神の客人。エンリとて表立った無礼は見せはしない。見せはしないが……人心掌握に長けた皇帝は無論、いろいろ浮世離れた竜王の目にすら狂犬具合は明らかであった。

もつとも、アルベドもまた同様の気持ちを隠していたのだが。

それぞれの内心をよそに、モモンガが口を開く。

「ジル、ツァー、急に呼び出して申し訳ない。それにカジットも、仕事  
中にすまないな」

外部から来た三人に、モモンガは深々と頭を下げた。

いつもと違い、頼んで来てもらったのだ。

偉そうな態度をとるわけにはいかない。

「いや、カルネ村は一度来なければと思っていたところ。転移魔法で送り迎えしてもらえらるなら、業務にも支障はない」

「モモンガ様から呼ばれた以上、それ以上の仕事などございませぬ」

バハルス帝国皇帝たるジルクニフが鷹揚に頷き。

カジットは今も、モモンガを最優先すると断言した。

「外にあった樹の件も聞きたかったからね。こうして集めてくれて助かるよ」

ツアーは興味深げに見回しながら言う。

皇帝と竜王は、モモンガとニグンの〈転移門<sup>ゲート</sup>〉によってカルネ村を訪れたのだ。

ジルクニフは護衛として四騎士の他三人も来ていたが、城塞内への同伴は拒まれて村で滞在中である。

とりあえず超高位アングェッドになって凄まじい美貌を得たレイナスに、帝国勢は全員仰天した。

「まさにその点……そして、スレイン法国についても話すべく、今回は集まってもらった。我々だけで進めるには、大きな話でもある。ジルとツアーの意見や要求も聞いておきたい」

女神は互いの翼をかすかに触れ合やすのみで、いつものようにべつたりと触れ合っていない。

それだけでも、今回の会談が真面目なものだと女神を知る者（特にツアー）は気づくだろう。

全員が居住まいを正す。

「とはいえ、戦略や知性においては、私よりもアルベドが優れているの  
でな。アルベドよ、よろしく頼む」

「では、ここからは私が——」

アルベドが言葉を継ぐ。

エンリたちを含め、カルネ村関係者には衝撃だった。

今まで、モモンガは常に物事を主導していた。アルベドは、モモンガ以外とほぼ会話しない。常にモモンガに付き従ってきた。彼女はモモンガにしか関心を持たず。モモンガへの無礼がない限り、他者に

は無関心と見えたのだ。

「――以上が、法国が称するところの『カタストロフ・ドラゴンロード破滅の竜王』に関する経緯です」

包み隠さず、アルベドは漆黒聖典を殲滅したこと、彼らの所持するワールド世界級アイテムにてこれを支配下に置いたこと、漆黒聖典隊長の所持していた世界級アイテムも手に入れたこと、わかりやすく説明した。

世界級アイテムを知らぬジルクニフやカジットらのため、その詳細もここで説明している。

手に入れた『傾城傾国』と『ロンギヌス聖者殺しの槍』の、おおよその能力についても説明した。

「君たちがプレイヤーということとは、元から持っていた世界級アイテムもあるんだろう？ その二つを合わせて君たちは、合計三つの世界級アイテムを持っているということかな？」

おおよその説明が終わると同時に、ツアーが問いたです。

彼にとつて、放置できる問題ではない。

「……はい。もう一つはこの『ギンヌンガガフ真なる無』。任意の武器に形態変化可能な、対物体に特化した破壊不可能の武器です。この城塞も含め、城の一つくらいは粉碎できるでしょう」

アルベドが短い杖を取り出し、手の中でハルバードに変えて見せる。

「はあ!？」

ジルクニフが目を剥く。いつも帝国内に持ち込んでいる彼女の武器が、そんな危険物とは知らなかったのだ。

帝城の中で持ち歩いていたのも見ている。

というか、同じハルバードを威圧目的で構える様子を見たこともあった。

「なるほど。さっきのに比べたら危険性はなさそうだね。それよりも法国から手に入れた二つを――」

能力を聞くと、ツアーは頷き。より危険な二つについて話を続けようとするが。

「待て！ 待て！ ものすごく危険だろう！」  
ジルクニフが遮る。

ツアー以外の者らも、こくこくと頷く。

先の二つはジルクニフらにとってまさに神の世界の品であり、正直よく把握できない。

「傾城傾国」は「一人だけ絶対精神支配できる品」。

「聖者殺しの槍」は「ハイリスクなすごい即死武器」である。  
命の価値が低い人類にとって、それほど規格外とは思えない。

だが「真なる無」は、都市や城を破壊して幾百幾千の命を奪いうる最悪の戦略兵器である。身一つで来ていると思っていた外交官が、ミサイルを持ち込んでいたと知ったようなものだ。

価値観の差を察したアルベドが困った顔になるが。

「そうかなあ。たぶん、その気になればこの二人も私も、似たような破壊はできると思うし。人に貸すような品でもないから、安全だと思っよ」

ツアーが淡々とフォローとも言えないフォローをした。

「それはそうかもしれんが……」

「そうなの？」と思わずモモンガを見るジルクニフ。

女神はきまり悪そうな顔で、苦笑して見せた。

（あ……できるんだ）

ジルクニフは足元がいろいろ崩れていくように錯覚した。

「そういう存在を洗脳して操ったり、一兵卒に消滅させられる方が怖いんだよ」

ツアーが当たり前のように言う。

確かに、そんな存在が誰かに操られたり、あっさり殺される方が問題だろうが。

しかし、ジルクニフとしてはどこまでも納得いかない話である。

「はい。言いたくはありませんが、どちらも私たちにとってすら致命的な品です。この点を知ってもらいたくて、外部の身であるお二人も呼びました」

「弱点なら教えず、全能な存在と思わせておくべきではないか？」

ジルクニフが限りなく本心で言う。

その方が何かにつけ、やりやすいはずだ。

「この二つで終わりなら、それもよかったでしょう」  
「……………」

法国がまだ同等の品を秘蔵しているかもしれない、ということだ。

「その二つ、私としては評議国で保管させてほしいんだけど」

「それはできません。既に言った通り、私たちにも致命的な品ですの  
で」

予想できた回答ゆえ、ツアーは甲冑のままわずかに肩をすくめた。

会談はアルベドとツアーを中心に進み始める。

「この二つについては我々も今後は使用しない方針です。可能なら破壊しておきたくもありませんが、世界級アイテムの破壊は基本的に不可能ですので……………」

「いや、使わないならいいよ。もし使うなら、連絡して用途を教えてください  
しいかな」

あつさりと認めたツアーに、モモンガはアルベドの背後で小さく頭  
を下げた。

同じく「破滅の竜王」を自衛以外に用いることについて、「傾城傾  
国」の使用の内とあつさり認められた。ただ「竜王」と呼ぶのはや  
めてほしいとのことと他の名を考えることになったが……………」

「では、これが本題ですが……………プレイヤーがそれぞれ世界級アイテム  
をもって訪れるということは、これまで現れたプレイヤーの数だけ世  
界級アイテムが現存するということですか？」

(きたか……………)

黙ったまま、ジルクニフは二人の言葉を吟味し始める。

「いや、消費されて消えたのものもあるね。この世界を「穢した」のは、主  
にそれらの消費アイテムだよ」

「それでも相当数の品が遺されているでしょう。スレイン法国はそれ  
らを確認しているのですか？」

「彼らは六大神の遺志を継ぐ国……………だったからね。最大で六つは持つ  
ているかな？ 今回二つ奪われたから最大四つだね」



(過去形？ 今は違うのか。法国の方針と、六大神の思想が異なる？) 言葉の端々から、隠れた情報を探る。

「我々の持つ数は明かしました。評議国ではどの程度をお持ちですか？」

隠すかと思われたが……ツアーはあっさりと数を明かす。

「ただ、私の知らない品もあるかもしれない。他の国や組織が持っている場合もあると思うよ」

「……ズーラーノーンの盟主が世界そのものに匹敵する品を持つという話は聞いております。また、より恐るべきアンデッドの魔術結社があるという噂も。おそらくそ奴らも持っている可能性がありますな」  
カジットが口を挟んだ。

「帝国に、そんな品はない。王国も、少なくとも国庫にはないだろうな」

ジルクニフもここで宣言する。

あつたら、王国をとつくに併呑している。というか歴代皇帝の誰かがさつさと貴族を粛清していただろう。王国側とてそれは同じだ。

「プレイヤーがいたあちこちに、世界級アイテムは点在してるはずだよ。私も、気長に探してはいるんだけど……法国がそれ以上を回収している可能性は高いね」

ツアーの言葉に元法国のニグンとクレマンティーヌへと、全員の視線が向く。

「私はアイテムの回収を命じられたことはありません。亜人が稀に持つ品は回収しましたが。そんな規格外な品があれば、とうに噂になっていたはず……」

「アイテム回収の任務は、裏じゃけっこうあつたよー。私が昔ドジ踏んで捕まったのも、そーゆー任務だったしー。でも、そんな規格外の品を回収したって話は、私が知ってる範囲じゃなかったと思うなー」  
殲滅任務に特化していたニグンより、クレマンティーヌの方が情報は深い。

だが。

「あくまで最近はなかった、程度ですか」

「強いアイテムがあるなら、人類を守る我々が使うべき一つで動き方だからねー。でも、隊長とカイレの婆さんくらいしか、規格外の装備は許されていないしね。あの番外ちゃんだって、そういうのは持つてないと思うよー?」

「見せ札は奪いました、隠し札がどれだけあるか……ですわね」  
アルベドが、眉を寄せる。

チラ、と彼女の目がジルクニフを見た。

「両女神殿はスレイン法国に攻め込みたいのか?」

ふとした疑問を、皇帝は問う。

「えっ、そうなのかい?」

ツアーが首をかしげた。

「いえ。しかし、危険な品を持つなら、情報を判明させておきたいのです。おそらく漆黒聖典とアイテムの返還を求めて、近日中には使者が来るでしょうから」

「完全に安全な交渉を求めるとは、贅沢な話だな」

今まで帝国や王国相手はそうだったのかと、口には出さずジルクニフがぼやくように言う。

「危険度が大きいなら、私はモモンガ様とここを逃れ、誰も来ない場所にこもりたいくらいですが……」

「そ、そんな!」

エンリが絶望的な顔になる。

なお、ツアーとしては正直そうしてくれた方がありがたい。

「……私としても、中途半端な救いは与えたくない。神を名乗った以上、それなりに面倒は見るつもりだ」

黙っていたモモンガが、宣言する。

「モモンガ様……!」

エンリやニグン、レイナス、カジットが感涙にむせぶ中。

ツアーは呆れたように溜息をついた。

そんな中、ジルクニフだけは冷静に状況を分析し、考える。

(結局、私はなぜ呼ばれたのだ? 確かにこの情報を知っておけるのはありがたいが……正直、災害レベルで我々ではどうにもならん。世

界級アイテムなど、我々が手にしても、持て余すだけだ。見つけた場合に献上しろと？ 確かに隠し持って、女神や法国に睨まれるよりはいい。釘を刺されずとも、贈り物として身の丈にあつた人材や品を引き換えにもらつた方が、国益となるだろうな。法国も同じように、秘蔵の品を手離せば……ん？)

何か引つかかった。

今回の発案者は、おそらくモモンガではない。

冷たく理性的かつ情の深いアルベドだ。

過去に見た経験から、彼女はいわばモモンガの愛人兼秘書官。

ジルクニフやツアーが呼ばれたことに、大きな理由があるはず。

考えなければならぬ。

モモンガの慈愛は、今は与えられていない。

溺れるのではなく、考えるべく、呼ばれたはずだ。

(腐った王国貴族を粛清し、皇城にも転移して訪れる女神がなぜ、法国との交渉をそこまで警戒する？ 決まっている。彼女はこれまでの形に則れば、直接、使節に会わねばならない。使者を行き来させるにも、アンデッドや狂信者ではこじれるだけだろう。ゆえに、女神は法国使節を攻撃するか、直接会うかしかない。未知の戦力相手に、攻撃は避けたいだろうな。そして、直接に会つた時に世界級アイテムとやらを使われれば……なるほど。国家間の外交問題と考えればいいわけか。つまり私に期待されているのは……)

思考は一瞬。

まだ誰も発言していない。

ジルクニフは背筋を伸ばし、発言した。

「ならモモンガ殿。ここは今までの恩返しとして、私に任せてもらえまいか」

「ジルが？ どうするつもりだ？」

きよとんとした顔でモモンガが訊ねる。

その表情で、皇帝は癒される。ただ働き……ではない。

彼女からはすでに十分すぎる恩を受けた。

もう一人の女神——アルベドは全て理解しているのだろう。

皇帝の言葉を促してくる。

「国という看板を使うのだよ。つまりモモンガ殿が直接には法国と関  
わらず済むよう、我が帝国が間に入るのだ」

評議国では法国と平和な話し合いなどできまいからな、と口には出  
さず。

ジルクニフは、己の土俵で話を始めた。

## 44：天下三分の計

会議は手短かに終わり、黒い城塞は再び二柱のみの場所となる。

外の穢れを払うように、彼女らは浴室に向かい。

広い浴槽にて、身を寄せ合っていた。

「お疲れだったな、アルベド。私の我儘に付き合わせてすまなかった」  
「そんな……モモンガ様のお役に立てる以上の喜びはありません。それに、すべては今までの行いあればこそ。私では、命令はできても自主的な協力を得られなかったでしょう」

アルベドが自ら交渉の中心となったのは、ラナーの相手をして以来。

ツアーがあっさり納得したのも、ジルクニフが自ら仲介役を無償で買って出たのも。

モモンガのこれまでの行ないゆえ。

「……ありがとう」

「あつ♡ え……っ？」

水音すらたてずに、ぴったりと密着して頬ずりし、首筋にくちづけるモモンガに。

アルベドは「なぜか」過敏に反応してしまう。

そんな反応に、アルベド自身が戸惑い、慌てる。

「どうした？ アルベド」

「い、いえ……ひゃうっ!?!」

互いの乳房の先端が触れ合うだけで、びくりと身が震えて小さくのけぞる。

湯の中でかくかくと腰を使ってしまう。

軽く気を遣ったのだ。

高い知性を持つはずのアルベドにも、何が起きているのかわからない。  
い。

「らしくないな。混乱しているのか？」

「はっ♡ はっ♡ も、申し訳ありません——んいひいひいひい♡

♡♡」

モモンガの指が、湯の中で踊った。

それだけで正体を失い、激しく反応し……果ててしまう。

冷静に分析する余裕すらない。

「昨夜は重い雰囲気で、キス程度しかしなかったからな……そのまま服を着て互いに抱きしめあい眠ったな」

「そ、そうですが……も、モモンガ様、もしや私に何かし——ああああああ♡♡」

指先で簡単に鳴かされ、よがらされてしまう。

「私は何もしていないぞ？　さんざんしたのはお前だろう？」

「えっ、ひよおおおおほお♡♡♡」

冷静に言葉の意味を考えようとしても、アルベドの体は絶えず襲う快楽に抗えない。

主の前で見せるべからざる、蕩け——というより獣じみた表情を見せてしまう。

対するモモンガは、見たことのない嗜虐的な笑みを浮かべていた。

「この世界に来て一か月以上……お前と体を別にしてから、ずっと二人で交わっていたな」

「あっ♡ ひゃい♡ ひょうれふっ♡」

モモンガの指使いが激しくなり、ぱちやぱちやと湯が波打つ。

アルベドは全身をひくつかせ、小さな絶頂の連続に襲われながら、必死で答える。

実際、大半の時間を触れ合い、貪って過ごしていた。

「互いに貪り合う……というよりは、随分とお前に貪られていた気がする」

「しょ、しょんなつもり、ああああああ♡♡♡」

抗弁を、快楽で押しつぶされる。

実際、衝動のままモモンガをしゃぶり尽くし、奉仕と称して快楽を与え続けたアルベドである。この一か月以上、モモンガはほぼずつと受け身であり、アルベドから奉仕という名の愛撫と攻めを受けていた。

己が至高の御方に奉仕させるなど……と考えるアルベドは、たとえ

始まりがモモンガの積極的行為であろうとも、すぐに攻めへと転じたのだ。モモンガに己の思いつく限りの快楽を与え、また自身の衝動のまま体を貪ってきた。

攻めのSもSMのSも、サービスのS。

寝食不要の肉体ゆえに、眠る時間すらなく。

失神しても、さらなる絶頂で起こされて。

わずかな外に出た時間以外はひたすら、アルベドの淫魔攻めでドロドロのぐちゃぐちゃにされてきたモモンガ。痛みすら適量なら快楽と感ずるようにされ、穴という穴をかき混ぜられ、ほじられてきたのだ。

そしてそれは同時に、全てアルベドの本来の肉体に行われた行為。

人間ならば狂い死ぬほどの快楽調教。

「その体はよく感じるだろうか？ お前がずっと開発してくれたのだからな」

「ひっ♡ ひへっ♡ そんなにやっ♡」

ただでさえ淫魔の体は感じやすく、しかも性的成長性が異様に高い(らしい)。

性的変化は、ユグドラシルのシステムに「存在しない」分野。

攻め一方かつ不変の複製体クローンだったアルベドとは違う。

モモンガの——そして本来のアルベドの肉体は感度が上がり、反応が艶めき、性癖が広がり、弱点が増やされていた。

そう、モモンガはシステム外での「成長」を身を以て味わっており。

今、その成果をアルベドに見せつけているのだ。

「私をずっと気持ちよくしてくれたお前への、せめてもの礼だ。今日から私が、お前をよくしてやろう♡」

「あっ♡ あおおおおっ♡♡」

にやあつと意地悪く笑うモモンガの表情だけで。

アルベドは魂まで果ててしまう。

今までの精神的な服従ではない。体そのものが快楽を、主からの愛撫を期待している。

すべてを以て主に屈する悦びに狂わされながら……アルベドはさらに下品に鳴きわめくのだった。

一方、そのころ。

バハルス帝国帝都、帝城奥。

城砦を出て転移した各首脳陣が、対外政策のすり合わせをしていた。

「確かに、森妖精王の今の在り方を問題視するのはわかるよ。直接滅ぼしたり暗殺するなら一言ほしいけど……交渉材料に使うくらいなら問題ないね」

「ありがたい。帝国も、森妖精を奴隷とする制度を近く廃止する。債務奴隷と同じ扱いとし、人権を与えること約束しよう。まだあらゆる種族とはいかぬが、評議国とは仲良くしたいし……女神の元にいる森妖精への姿勢にも影響する」

「山小人との国交を回復されてはいいがですか。意図せずとはいえ、王国北部の大貴族は粛清により消えました。アゼルリシア山脈北部を我々が平定すれば、両国による北部掌握は容易でしょう」

ツアー、ジルクニフ、ニグンの三人である。

ジルクニフの後ろには秘書官のロウネが控え。

ニグンの後ろには帝国の事情にも詳しいレイナースが控えている。万が一にもスレイン法国に知られぬよう、会議室にはニグンとレイナスによって、強固な対占術結界が張られていた。

そもそも帝城内に直接転移してきた以上、この極秘会談を知る者など帝国にもほとんどいない。

「帝国は私が行った粛清により、未だ変革の最中。多民族化へ進めるにも、困難はあるまい。帝都では女神殿の降臨で、亜人へのイメージ自体上昇している。闘技場でもトロールがチャンピオンとなっているのだしな」

「ちょうど森林の蜥蜴人リザードマンに外を知りたいという者もいました。彼らを帝国に留学させてもいいですな」



「いいね。帝国の豊かさは、僕も聞いているよ。評議国からも、適任と思える者たちを送ろう」

「文化や思想に合わせて、互いに技術なども入るはずだ。魔法学院への留学という体裁をとってもいいな。こちらから、希望者を評議国に送ってもいい」

「我々が持ち掛けた話ゆえ。互いに人員と準備を決めていただければ、私が《転移門》で両国をつなぎましょう」

「本国の評議会に持ち帰る必要はあるけど、問題なく通ると思うよ。希望者を審査して、なるべく多彩な種族で交流させたいね」

評議国にとってみれば、人類圏を多民族化させる一步。

提唱者は「ぶれいやー」でもない、人類の君主だ。反対する理由も、うがった見方をする理由もない。ニグンの言葉も、この世界に根付いたものであり、異様な発案や、規格外の技術でもなかった。

評議国と帝国は、間に王国と山脈を挟むため、直接交流が難しい。《転移門》の使用も、乱用でなければ時間の短縮と安全確保の範疇と言えるだろう。

帝国にとってみれば、これは技術や文化の推進。

しかも、問題発生時には女神の戦力と魔法が味方となってくれる。何より、評議国と太いパイプを得れば、狭量な法国に利用され続けるよりよほど大きな国益となる。

それに、帝国としては国際的に聞き出すべき話は多い。たとえば。

「そういえば竜王国について、評議国と女神殿はどのようなにお考えなのだろう？ 彼の国がビーストマンによって陥落すれば、次は我が帝国が矢面となる。法国はこの事実を必ず突いてくるだろうからな」

帝国と評議国の関係について、話が一段落したところで。

ジルクニフはなにげない風に切り出した。

竜王国は帝国に隣接しており、目下ビーストマンによって滅ぼされんとしている。滅べば、次は帝国がビーストマンと領土を接するのだ。

「ドラウディロンには悪いけど、評議国としても私としても動けない

ね。あの国に起きているのは、単なる弱肉強食。自然現象だよ。種族間での文明の興亡は古くからあった。ビーストマンに味方はしないけど、人類に味方もできない」

「なるほど。多くの種族を抱える評議国であれば、当然だな」

（予想通りか……評議国にとつて大きな存在でなければ、我々も助けは得られまい。これはお互い様だろうが、な）

予想通りの答えに、ジルクニフは頷く。

「モモンガ様も現状では手を出しますまい。女神は自ら御前にて願ひ訴える者がいれば、その願いを吟味し、叶えるのです。竜王国が直接に救いを求めねば、手出しはいたしませぬ」

「ふむ……」

（つまり、助力を歎願させればよいということか。あの女が、無駄な若作りをしなければ通りそうだな）

無難な答えだなと思案する皇帝だが。

「え？　じゃあ王国に手を出したのも、望まれたからなのかい？」

ニグンの言葉に、ツアーが首をかしげた。

「はい。王国に手を出したのは、あくまでモモンガ様に貴族の専横を訴えた者がいたゆえ。また今回、森妖精王を懸念するのも、先日帝国内で保護した奴隷たちの言葉ゆえです」

「へえ。じゃあその訴えがなかったら、キーノとリグリットが騒いだ王国の事件もなかったんだ？」

「とはいえ、遠からず徴税吏なり討伐軍と衝突していたでしょうな。その意味では、やはり今回の方が無駄な犠牲を出さずに済ませられたと信じております」

「そういえば、レイナースも直接に願ったのだったな」

ふとかつての部下たるレイナースを見る皇帝。

「はい。モモンガ様は願いの叶え方をまず説明し、よく考えて決めるようおっしゃいましたわ。その上で、己の仕事を放り出さず、きちんと引継ぎをせよとも」

「ん？　しかし、引継ぎはしていなかったのではないか？」

「はい……この通りアンデッドになりましたし、思わぬ美貌をいただ

いたため、混乱させるのではないかと思い、避けました。モモンガ様はその代わりとして、陛下に多くの人材を提供なされたのですわ」

「……………聞いておらん」

「モモンガ様は、恩に着せたくなかつたのでしよう」

「……………」

六腕もカジツトも、帝国に大いに役立つてくれている。

さらに追加が送られた死者の大魔法使いも同様だ。

正直言つて、忠誠心に問題のあつたレイナースより役に立っている。

邪教団や裏組織を掃討し、帝都の膿を払えたし。皇帝の仕事量もかなり減つた。

六腕の内、五人には表の地位を与えてみようとも考えているほどだ。

「ああ、しかし例外がありましたな」

ニグンが思い出したように言う。

「皇帝陛下、それにあのフォーサイトというワーカーチームには、モモンガ様が自ら積極的に動いておりました」

そして、エンリヤクレマンティーヌから聞いたという当時の状況を、ツアーにも語る。

帝都に始めて現れ、フォーサイトに会つたまで。

皇帝と会つたまでの話だ。

帝都での散策、イミーナとの遭遇、エルヤアの撃退、アルシエの事情……………皇帝を褒めたたえたことなど。フルーダについては皇帝のために伏せつつ、説明する。

「へえ。モモンガはかなりの善人なんだね。完全な信用はまだできないけど、好感は持てるよ。差別主義者をこらしめたっていうのもいいね」

ツアーが少し嬉しそうに言い。

「……………政治の舞台には触れさせぬようせねば、な」

ジルクニフは真剣な顔で、呟いた。

「最後となるが、あのカルネ村は名目上のみであれ、未だ王国領だ」  
「帝国から王国への、内政干渉になるということですか」

今後の方針もおおよそは決まって。

ジルクニフは最後の——そして最大の懸念を口にした。

ツアーは既に己の分野は済んだと、半ば聞き流している。

「帝国が強引に接收したことにしてもよいが……できれば独立国となっても構わない」

「……おそらく、モモンガ様やエンリ殿は独立にあまり積極的でないでしょう。いえ、国際政治の場に立つことを望まれぬと言うべきか」  
「あー、うん、王様になるってめんどくさいもんねえ」

ツアーも同情半ばに頷く。八欲王の如く自ら王になろうとはせぬからこそ、モモンガへの警戒心は薄い。個人で責任を負ったり、面倒を抱えたくない……というのは、ツアーが評議国を今の政治形態にした主たる理由の一つでもあるのだ。

「女神は御二方の国ならばともかく、法国や王国との交流は望んでおりませぬ」

「それはそうだろうか……」

そのために、この会議は行なわれているのだ。

確かに法国と交流せねばならぬ立場など、望むまい。

とはいえ、帝国が口出しするにも名分が必要だ。

帝国へのエ・ランテル割譲を強制し、カルネ村を帝国領とするは可能。だが、問題視される法国側の使節来訪へは間に合うまい。強引にするならば、先日の略奪を帝国軍によるものとして泥をかぶる覚悟が必要だ。

軍事行動により、既にカルネ村は占領下にしてきたと強弁せねばならない。

女神のためとはいえ、今後を考えれば帝国としては避けたい。

そんな皇帝の内心を汲むように、ニグンが言葉を続ける。

「ゆえに、提案ながら……別に首都を構えた上で、カルネ村を別の国家の一部にできればと考えます」

「別の首都だと？ 都市まで一夜で築けると言うのか？」

「あまり大規模な力を振るってほしくはないんだけどね」

ニグンの言葉に、ジルクニフが疑問を、ツアーが苦言を呈する。

「いえ。カルネ村は元より、森の賢王なる高知能の魔獣によって守られておりました。これにより、彼の魔獣殿に、まずカルネ村の支配権があつたこと主張いたします」

「む？ さすがに魔獣を王としては、法国の反感が強かろう」

「魔獣って言っても、モモンガほど強くないだろ？」

意図がわからず、首をかしげる二人。

「森の賢王は、新国家の将の一人にすぎませぬ。先ほどの話題にも出たアゼルリシア山脈、およびトブの大森林すべてを領土とする、〃人類が知らなかった〃多民族連合国家を名乗るのです。法国はある程度の戦闘行動はしてきたものの、どちらの詳細も把握しておりませぬ。首都は森林奥か山小人の都とすれば、時間を稼げましょうぞ」

山脈と大森林は、帝国と王国を隔てる要害。

これらがまるごと一つの国家として多民族国家として宣言すれば……両国の軍事バランスは崩壊する。

人類圏から見れば帝国は孤立し、王国は評議国と新国家という多民族圏に挟まれるのだ。人類全体の危機であり、人類に友好的に見える女神を刺激するなど不可能な状況が発生する。

「なるほど……なるほどな。ははは！ 最後の最後でよくもしてやってくれたものよ」

「ははあ。これで評議国が支持する理由ができて、帝国は新興国を警戒しているように見えるわけだね」

ジルクニフが思わず笑い。

ツアーが一気に関心を向け、身を乗り出す。

「元より偽装した法国兵に荒らされた地域だ。ろくに守れなんだ王国に対し、〃認知されていなかった大国〃が、村を守ったという名分も立つ。適当な〃王〃が別にいれば、モモンガ殿が前に出ずともよからう。帝国は領土を接する身として混乱して見せ、消極的な日和見の姿勢を見せればよいわけだな」

帝国はただ被害者の立場でいればよいのだ。

皇帝として上機嫌に言う。

「森の賢王殿を名目上のカルネ村を含む領主とし、政治的立場を持たせませす。モモンガ様は……まあ、彼の国の知られざる神という立場でかまいますまい。君主が別にいるというのに、神が政治の舞台に立つなどおかしい話ですからな」

「そうだね。モモンガには今の立場でいらつた方が、私も助かるよ」

「陽光聖典も漆黒聖典も、領土侵犯による不幸な衝突の結果、殉職したというわけだな」

三人が悪辣な笑みを浮かべた。

「いいね！ 私としても、それなら文句はない。モモンガが過度の干渉をせず、多民族国家として人類圏に楔を打ち込んでくれるなら、何よりだ。できれば本当にそういう国家を築いてくれると嬉しいよ。百年もすれば、王国だって多民族化するだろうしね」

ツアーにとつてみれば、王国と帝国がじきに評議国同然と化すということ。

竜王に征服欲はないが、人類種が醜く争い続けるよりは似た価値観を共有する範囲を広げた方が、世界だって守りやすい。人類圏の改竄された十三英雄の物語だって、しっかりと訂正できるだろう。なによりモモンガや帝国が、消極的にでもツアーに賛同してくれば百年後に来るプレイヤーの察知も容易になる。

「未来を考えれば、異種族の浸透を避けるべきかもしれないが……山脈と森林すべてに防備など不可能だ。しかも未知なる新たな神が降臨し、帝都にすら現れる。既存の神を捨て、彼の神に祈る民すら現れかねんだ。こんな絶望的状况で、彼の国を刺激したりできるはずもない」

おしまいだあ、とジルクニフが両手をあげておどけて見せた。

既に百年ごとに現れるプレイヤーについては聞いている。

ならば法国よりも評議国に付いた方が確実。モモンガという神にも、国家としていち早く恭順すべきだ。女神と竜王が、皇帝の後見人になってくれるのだ。百年後の皇帝が凡夫であろうと帝国は繁栄で

きるだろうし、暗愚が生まれる可能性も摘める。

「お二方が帝国の多民族文化に賛同くださればこそ、この案を持ち出せた次第。無理ならば、女神殿にはしばし帝都に避難ただかねばなりませんでした」

不敵に笑いつつも、軽い様子でおどけるニグン。

「おや、そちらの方が私個人には魅力的な話だったな」

ジルクニフが心底残念そうに言う。

実際に個人としては女神の傍にいたかったが……当人の心境や立場、帝国の未来を思えば、この上ない正解を引き当てたはずだ。

「さて、忙しくも楽しくなりそうではないか。ツアインドルクス殿、内幕についてはくれぐれも……」

「うん。一部の古い竜王以外には言わないよ。多民族国家が生まれるだけで、評議国としては応援するには十分だ」

竜王が楽しげに頷く。

「書類関係はこちらで用意した方がよかろうな。国法などは、多民族を擁する名目で、評議国に做すべきではないか？ いきなり王を決めるのも面倒だろう。複数の評議員がいるとし、適当な奴を随時増やした方がよい」

「そうですね。まずは森の賢王殿と……蜥蜴人の代表。他にも適当な者を見つくるっておきましょう」

こうして女神の知らぬ内に、新たな国家が生まれるのだった。

なお。

己も知らぬ内に政治的立場を与えられた魔獣は……。

「アーッ!! クロマル殿ッ！ 激しすぎるでござる!!」

女神の淫気に充てられた雄に蹂躪されていたのだった。

とはいえ、これはカルネ村多くで散見された状態。

ハッスルしたモモンガと、受け身に回ると弱かったアルベドにより、いつも以上にたいへんなことになっていたのだ。

「ひぎひぎひぎひぎ！ エンリー！ ちぎれちやうよおおお！」

「ちよつ！ クレマンティーヌさん、何イラだつてんすか！ あひつ  
!？」

おかげでいろいろと汚い悲鳴も聞こえるが、平和なカルネ村であつた。



閑話3：言葉の意味はよくわからんがとにかくすごい自信だ

時は少し巻き戻り。

カタストロフ・ドラゴン・ロード  
“破滅の竜王” および漆黑聖典の討伐後。

村では祝いの宴。

女神は早々に城塞へと戻った後。

大幹部らは、宴の輪から外れ集まり……消音結界を張った状態で、今後を話し合っていた。

「クソ隊長とクソ兄貴をぶっ殺せて超サイコーな気分なんだけどさくら。これ、ぜーったい法国から何か言ってくるよねー？ 番外ちゃんとか来たなら、あたしらでもやばくなーい？」

「ああ、番外席次はともかく……法国の使節は間違いなく来るだろう。とはいえ、法国はモモンガ様の「コウ・セ・ボツヘキ」により痛手を受けたはず。詳細についてはわかっていまい。各神官長の合議、戦力の決定なども行えば……どれほど早くとも数日はかかるだろう」

クレマンティーンの言葉に、ニグンが頷いた。

「連中の装備は法国の秘宝ばつかだもんねー。それだけでも返せつつうるさいよー？」

「しかし、モモンガ様も重視されていたあの衣服と槍は、手放せませんわよ」

二つの品の危険性については、軽く魔法で分析したレイナースも承知している。

法国は無論、誰の手にも渡せる品ではない。

「森林での事故として、知らぬ存せぬで通せれば何よりですけど……あの樹を操作している以上、無理ですもの。こちらは一村、あちらは強国。高圧的になる可能性も高い。とはいえ受け流しつつ、こちらの力を見せつけければ。認識を改めるはずですよ」

「たとえ形式的にでも、法国に膝を折りたくはありませんね」

レイナースの言葉に、エンリが冷たい表情で呟く。

女神降臨のきつかけとなった襲撃。モルガーその他の村人が殺され。他の村人も心に傷を負い。近隣の村が多く滅ぼされ、死者を出した。あのような凶行をした国を、許せるはずがない。しかも女神ではない、利権にまみれた神を崇める総本山だ。

女神信徒の筆頭としては、存在自体を認めたくない。

「無論、屈する必要などありません。少々の方便で、引き立ててやればよいのです。スレイン法国の理念上、明確な敵でもない相手と激突しての戦力消費は避けたいはず。森妖精の国、アペリオン丘陵、ピーストマン……それにこのトブの大森林。彼らが戦うべき敵は他にいくらでもいるのですから」

傾いた太陽で長い影を作る『破滅の竜王』を眺め、ニグンが諫めるが。

その最後の言葉に、エンリは引つかかるものを感じた。

「そういえばトブの大森林って、どこの領土なんですか？」

「帝国と王国の両方が領有を宣言していますが……さしたる開拓もできずにいる状態ですわ。実質上、誰の領地でもないかと」

「人間はとも生きてけない秘境って言われてるもんねー」

「我々はさんざん巫人討伐に入った場所だがな」

「なんか、あたしにだけ口調がぞんざいじゃね？ ニグンちゃん」

そんなやりとりを聞いて、エンリはぽつりと呟く。

「ニグンさん、私たちって王国に税は納めず、独立する方針でしたよね？」

「村が小都市程度まで発展してからか、あるいは王国と衝突あるいは威圧外交の上で……ですな。国際的には『起きている反乱に王国が気づいていない』という扱いでしょう。独立するにも王国の動きを待ちたいところですね。現状で法国とこじれば、後の独立も面倒になつてしまう」

現状確認を兼ねて説明するニグンだが。

エンリは政治がよくわからない。

とりあえず、女神の降臨したこの地が、下劣な国の下と考えられているのだだけわかった。



「のですね」

「ありがとうございます」

言葉の意味はよくわからないが、とりあえず褒められているらしいのでお礼を言う。

「いや、わかかんねーんだけど。説明してくんない?」

(うん、私もわかんない……)

クレマンティーヌに、内心で同意するエンリ。

ニグンが呆れたように溜息をついて、説明を始めた。

「いいかね、クレマンティーヌ。エンリ殿はあの大森林を我らの領土と定めたのだ」

「いや、そりゃわかるけどさ」

(ちよつと言っただけで、別に定めたわけじゃ……)

クレマンティーヌと共に、エンリもいぶかしげに説明を聞くしかない。

「この森林は事実上の中立地。誰の領土とも言えん。時折、亜人討伐に入っていた陽光聖典も、法国上層部も、その奥の詳細などまったく知らないのだ。王国も帝国も、領土宣言すれど中に入れずいる」

「そりゃそーでしょ。中は亜人やモンスターでいっぱいじゃん」

内心でエンリも、クレマンティーヌに頷く。

「つまり、新たな国が領有を宣言しても何の問題もない……いや、違う。エンリ殿がおっしゃるのはこういうこと……大森林には、人類の知らぬ国が既にあつたのだ」

「はあ!？」

(はあ!?)

驚きながら無表情を維持するしかないエンリ。

「無論、そんな国はない。先に宣言だけして、おいおい作って行けばよいのだ」

「ああ、時間稼ぎってわけ」

(びっくりしたあ……そっか。すぐに会わせろって言われないうようにするんだ)

「このくらいはわかる。」

もともとの森の奥に女神の本拠があると詐称するという目的と、実質同じだ。

「そして、大森林そのものが国土なら。勝手に踏み込み暴れた漆黒聖典が討たれるのは、領土防衛上当然の成り行きだろう」

「なるほどねー。森のどこが重要拠点かなんてこつちが勝手に決められるんだし。大事なトコで暴れたから、やむをえずって言えばいいわけだー」

(そっか、勝手に来た悪い人ってことにできるんだ)

理解したクレマンティーンが悪い笑みを浮かべる。

エンリも納得し、頷いた。

「ふふ、ここまで想定済みとは、さすがエンリ殿ですな」

「皇帝が女神と良好な関係を築いてくれたこと、心から感謝しますわ」

「やっぱエンリちゃんすごいねー」

「ふふ」

(いや、そんな期待されても……)

とりあえず笑顔でごまかす。

暗黒神官衣装と、内心を隠す硬い表情ゆえ、酷く邪悪な笑みになってしまったが。

そのままいくらかの話が続き。

今回得た、規格外のアイテムについて話が及んだ。

「後は法国によるアイテムの返還要請ですな。これは適当に時間を稼ぎつつ、紛失した扱いにすれば……」

「待ってください」

そこで、エンリは咄嗟に言葉を挟んでしまった。

特に何の考えもなく、反射的に。

法国憎しの念だけで言ってしまった。

「どうしましたの?」

「紛失でグレーにしとくのが定石じゃないの?」

三人の視線がエンリに向けられる。

先刻の独立時の話もあり、妙に期待を向けられている気がしたが。

エンリとしては、法国には敵意しかないのだ。

「あの品が、樹を操ってるのは明らかですよね？」

「それはそうですが。持っていれば返還を迫られるものですし、モモンガ様が支配下に置いたとでも称しておけば、交渉は容易でしょう。法国の譲歩を引き出せる自信もありますよ」

アイテムについて知らぬ存ぜぬを通すべきと言うニグンだが。

「ダメです」

エンリはきつぱりと断じる。

「信徒たる我らが、モモンガ様の力を詐称するなどあつてはなりません。また、スレイン法国はかつて村を襲い、女神様に天罰を受けた仇敵。彼らに譲歩しては、犠牲者にもモモンガ様にも申し訳が立ちません」

その表情は既に村娘でなく、狂信者のそれ。

「アイテムや装備の確保は明確に宣言してかまいません。死体は完全に破壊したとしましょう。魔獣か妖巨人トロールに喰われたとしてもいいでしょう」

「そ、それでは返還要請に対して宣戦布告に等しい返答となりますぞ」「そーだよ。あたしらより強いのが出て来るかもだし」

法国の潜在戦力を知るニグンとクレマンティーヌが慌てる。

「ニグンさん。今まで陽光聖典は森林に入って亜人やモンスターを狩っていたのですよね？」

「そうですね……」

「我々に賠償や返還を求めるなら、法国も今まで殺した我が国民への賠償や遺産返却をすべきですよね？」

「「えっ……」」

三人が悪魔を見る目で、エンリを見た。

「ぼ、冒険者は国に属しませんよ、各軍について……いや、しかし森から出た小鬼ゴブリンや人食い大鬼オーガの被害分を支払えと返される可能性が……」  
「冒険者が国に属さないように、森から出た者たちも属さない……いえ、追放者としませうか。彼らについて問題視するなら、もちろん冒険者が討伐した分も返してくれるのですよね？　そうそう、冒険者

は討伐時に耳などを切り落とすと聞きました。そのように遺体の一部を持ち去った以上、それも返してくれませんか？ ——という形でどうでしょう」

巫人の連合国家があると名乗ってしまえば、確かに彼らは国民。法国や冒険者は、自衛のため立ち向かった兵士を殺害し略奪してきた侵略者という位置づけになる。

最初から巫人を下に見る、普通の人間には決して出ない発想。

アンデッドとなった三人が、異様な寒気を感じて震えた。

日は暮れつつある。

夕陽を背に、逆光となったエンリが、アンデッド以上のおぞましい怪物に見えた。苛立ったように肩をゆする姿に、恐ろしい威圧感がある。

実際、性欲の強いエンリはさっさと会議を終わりにし、夫に跨りたくて仕方なかった。

「え、エンリちゃんこわ……」

「お、おそろしい……さすがはエンリ殿です」

「そ、それならば、アゼルリシア山脈も入れてしましましょう。帝国はかつて山小人<sup>ドワーフ</sup>と取引しておりました。彼の地も森林と共に独立したとすれば、広大な領土を持つ一国と名乗れますわ」

レイナースが、同じく秘境である山脈を推す。

エンリとしては正直これ以上、面倒な話を続けたくない。遠くの山脈とか好きにすればいい。今日はンファイアもそれなりに活躍したし、宴に出ず家に引きこもっているのだ。彼もしたがっているのだろう。早く帰って合体したい。

「では、そのようにしてください」

会議を打ち切るような、苛立った口調でぴしやりと言い。

そのまま席を立ち……背を向けた。

と、エンリの足が止まる。

「あ……一つだけ。スレイン法国が女神様に会わせるよう言ってきた場合ですが」

「「ははっー」」

三人はすっかりエンリを格上と認め、主に対するが如く返答する。「女神様に見合う存在——六大神のどれか一柱を連れてきたら会つてよいとしてください。使い走りや神官長如きが、女神に会えるなどと不遜な考えを起こさないように」

苛立ちと憤怒を込めた、冷たい宣言と共に。

エンリは己の住まい……神殿に帰って行つた。

沈黙のまま、他の三人は見送り。

彼女の姿が消えてから。

「……エンリちゃんやばくない？」

「さ、さすが女神様から最初にその才を見出された方……」

「ただの村娘が一國を相手にあんな考えを持てるものですか？」

「この策謀は、間違いなく世界を一変させるでしょうな」

「国際関係、軍事バランス、ゼーんぶめちやくちやだねー」

「アンデッドとなった私たちには望む変化ですけれど」

三人がエンリへの評価を改めて高め。

今後の方針について話し合い、皇帝や竜王に《伝言》ホットラインを開いて打ち合わせる。翌朝には女神からも彼らを集めても会議を行う旨が伝えられるのだ。この打ち合わせは大いに英断だったと言えよう。

同時に、蜥蜴人の代表者や森の賢王の活用も固まっていた。

一方で、悪のカリスマ全開で神殿に帰ったエンリはといえば。

ノーパンチャイナドレスチンチラ凱旋を恥じてひきこもるン  
ファイレアに、襲いかかっていた。



## 45：大丈夫だ、問題ない

帝国と評議国との会談を終え、帰還したニグン。

素早く森林および山脈の調査部隊を選出し、翌朝の出発を指示する。

森の賢王には湖でリザードマン蜥蜴人の代表を連れて帰らせる。訪れるであろう法国の使節が、顔を合わせられるようにだ。

フォーサイトはクロマルと共に、大森林内で協力的な亜人の代表、知性あるモンスターを探索。地位を与えるに値する者を、多様な種族で用意する必要があるゆえに。

クレマンティーンと漆黒の剣は、アゼルリシア山脈への探索。ドワーフ山小人の都市探索、および地位を与えるに値する者の探索。長期間の任務であり、一か月単位で帰れぬ可能性がある。

これらは法国の訪問に対し、いるべき人材の帰還を急がせた結果であり。

クレマンティーンと漆黒の剣は、長期不在でもカルネ村に影響が薄いと考えられたがゆえの配置。

「山小人の都市を探し出すは困難だろうが……道中で協力者を得ることもできるだろう。モモンガ様の名前を出してもかまわん。クレマンティーンよ、任せたぞ」

「いや、そりゃニグンちゃんとレイナスちゃんが残るのはわかるし、エンリちゃんだって動かせないってわかるよ。わかるけどさー」  
そう。

山脈探索とはいえ、途中までは森の中を全員で進むことになる。

つまり同行するのはフォーサイトと漆黒の剣、そして――

「拙者として森ではひとかどの強者！ けして足手まといにはならぬでいゃるよー」

「お前じゃねーよ」

抗議する巨大ハムスター……森の賢王に、脱力して答え。

クレマンティーンは、視線をもう一頭の魔獣に向けた。

「MUGEN?」

「なんで、こいつと組まなきゃいけないんだよ!」

唸り、首をかしげるクロマルにツツコミを入れる。

かつて受けた暴行により、クレマンティーンにとつてこの強大なバイコーン双角獣はトラウマ対象。戦闘力でも格上だし、いつまた同じ目に遭わされるかと気が気でない。正直、近づきたくない。見たくもない。

「つんでれというやつでござるな。同じ雄に乗られた雌として、それがしも共感——」

「だまれ。ころすぞ」

「ひいひいひい!!」

語彙が小学生になったクレマンティーンの殺気に、森の賢王が恐怖の悲鳴をあげた。

「お、俺は気にしないっすよ。クレマンティーンさん」

「お前にフォローされるのかよ……」

ルクルツトの言葉に、深々と溜息をつく。

この村に来た時の状況——クロマルに（性的に）こらしめられた一件は、村人には周知の事実。ルクルツトに限らず外来者だって、既に聞き知っている。それゆえ、クロマルは女性全般に避けられており、平気で騎乗するエンリには、この上ない畏怖が抱かれるのだ。

クレマンティーンと親しい村人がいないのも、それが理由である。そして新たに来る人々は、彼女による王国貴族拷問を目の当たりにした者ばかり。良い噂など立ちようもない。

「ま、まあ湖まで行ったら、別行動でいいんじゃない?」

数少ない例外のイミーナが助け舟を出す。

それとて同じ女性としての同情。特に仲がいいわけではない。

「森林で二手に分かれて行動した方が、確実。該当目標を手に入れたら、ニニヤから〈伝言メッセージ〉で連絡してほしい。たぶん、山脈に行く前に帰還許可が出るはず」

アルシエが、イミーナに同調する。

実際、山脈探索は将来の布石であり、一日を争うものではない。森で適当な代表者格を集める方が重要なのだ。効率性を考えるなら、別

行動は妥当である。

「……ありがとねー」

ここには漆黒聖典のような、押しつけがましい連帯感はない。女神への帰属意識は、クレマンティーヌとて持っている。

実力者として評価を得ている。

好き勝手しても許されている。

復讐とて、仲間の手で成し遂げられた。

法国にいた頃に比べれば、破格の待遇だ。

恵まれている。

幸運。

そう言ってしまうのはたやすいだろう。

けれど、彼女には今どこか満たされぬものがあり。

魂にぽっかりと穴が開いたように空虚。

ここ数日は己らしく振舞ってはいたが……急に己が己でなくなつたように、感じられてならないのだ。

半ばアンデッドになつたクレマンティーヌにとって、食事は……不要ではないが、欠かしたからとすぐ倒れるものでもない。

明日の準備を理由に、一足早く彼女は仲間の輪を離れた。

明日の朝から出発とあつて、夕食会にはすぐ、出陣組も解散となる。長期不在となる者は、それぞれに村の知り合いと別れを惜しむのだろう。

パーティーでの野営となるため、欲求が募らぬようにと濃厚な一夜を過ごすカップルも多い。

フォーサイトも漆黒の剣も、それぞれの住まいに戻る……中。

漆黒の剣の野伏<sup>レンジャー</sup>であるルクルットは、夕食会にいなかった女性の姿を探して、村の中を歩く。

この村に、彼女の住まいはない。

いつも、村の守りとして広場や裏門の辺りにいるのだが……。

「だーれ、探してんのー?」

「うわっ、お、驚かさないでくださいよ」

音もなく屋根から跳躍してきたクレマンティーヌが、背後からルクルットを抱きすくめていた。

アンデッドになってなお、彼女の体は暖かくやわらかく……いい匂いがする。

「毎回、よく驚くねー。それに毎回すーぐ、こっちも反応するしー♪」  
「そつ、そりやあまあ、俺は凡人だしっ」

ぴったりと後ろから密着されて反応した下半身を、無造作に掴まれる。

悲鳴じみた声を抑えたルクルットだが。

「んー？ 凡人がこんな場所について場違いだーとか思ってるわけー？

まあ、英雄や準英雄ばっかの魔境だもんねー？」

「……俺は二ニヤみたいなの過去も、ないし……軽いノリで英雄に憧れて、冒険者になっただけだから……」

そんなものは、常から抱え続ける軽い愚痴にすぎない。

遠慮なく動く女の手には、男の息遣いは荒くなる。

「はー。二ニヤちゃんねー。二ニヤちゃんかー」

「く、クレマンティーヌさん？」

なぜ二ニヤの名前を出すのだろうか、いぶかしげに後ろを見ようとすが。

「……まーいつかー」

「あいたつー！」

ばかりとけっこうな強さで尻を打たれてしまう。

「たーまーにーは……外じゃなくてベッドでしなーい？」

ゆらゆらと身を揺らすクレマンティーヌ。

背に当たる肢体がくねり、擦りつけられる。

まだ握られたままのルクルットは、さらに反応してしまう。

「は、はい」

今一つ経緯がわからないまま、ルクルットは己にあてがわれた小屋へと彼女を案内した。

実のところ、彼の寝床に女が来るのは……いや、そもそもこの二人がベッドを共にすること自体、これが初めてなのだった。

少し後。

つまり事後。

跳ね上げ窓から差し込む星明かりが、二つの裸体を照らす。

クレマンティーヌは外を見るでもなく……ぼんやりと天井を眺めている。

「ど、どうしたんですか、クレマンティーヌさん。らしくないっすよ」  
「……らしくないかー」

ごろんと横向きになつて、声をかけたルクレットを見てくる。  
じつと正面から、至近距離で見つめ合う。

「ほ、ホントにどうしたんです」

どぎまぎしながら、ルクルットは再度問う。

さんざん関係を結びながら……こんなふうにしつと顔を見つめ合つた記憶はない。

最中や事前なら、こんな距離もしただらうが。

事後、クレマンティーヌはさつきと立ち去つてしまう。

余裕をもつて向かい合つた記憶など……思えばなかった。

「……アンタにとって、あたしってどーんな風に見えるワケ？ あたしらしくーって、どうしてたらしいのかなー？」

「い、いやそれは……」

ルクルット視点では、踏みつけてきたり、跨つてきたり、寸止めを繰り返してきたりするのが、いつものクレマンティーヌだが。さすがに空気は読む。そんな言葉を求めているわけじゃないと、わかる。

「あたしも、いろいろイヤな過去があつてさー。殺したり拷問したりするのが、だーい好きで愛してたんだよねー」

「ま、まあニニヤも世話になつたから……それは知ってるっすよ」

ルクルットは鈍い男ではない。

言葉の隅……「愛してた」という過去形を聞き逃さない。

「そーそー。ニニヤちゃんといっしょだねー。いろーんな遺恨の相手や、関係ない人を痛めつけてさー。ぐちゃぐちゃにして、命乞いさせて、ぶっ殺して……鬱憤晴らして八つ当たりを繰り返してたんだー」

「王国貴族にしたみたいに……ですか」

そーなんだけどねー、と疲れた笑顔になる。

少なくともルクルツトは、見たことのない表情。

「……飽きた」

「飽きたって……」

軽いノリで皮肉を言おうとしても、正面から見つめてくる彼女の貌は真剣。

「ちよーつと前まで、さ。アンタだって踏みつけてる時は、踏み潰してやろうか本気で迷ってたし。やってる時だって、そのまま腕とか切り飛ばしたらどんな顔するかなーってけっこう考えてたんだよねー」

「そ、そーなんすか」

「そーなんだよー?」

さすがに声が震えるし。

いろいろ縮み上がる。

軽く答えられても、ぜんぜん安心できない。

「い、今はそうじゃないってことっすよね」

真顔で見つめられる。

数呼吸。

いやもつと過ぎたろうか。

「……そうだよ」

ようやく出た答えは、なぜか年下の……いや、子供のような震えた声だった。

ぽつり、ぽつりと言葉が続く。

「漆黒聖典のクソ隊長とクソ兄貴が、あたしのずーつと殺したかったヤツでさ。あいつら、あの時に……ミンチになってただろ?」

「見た時すげー喜んだのに、すぐいろいろどうでもよくなって……あたしがあたしじゃなくなったみたいで……気持ち悪い……何もかも、なくなったみたいな感じ」

「王国貴族でもう一生分、拷問しまくったからかなあ。なんか、痛めつけたり殺したりしたいって思えなくなつて。したいことが全部からっぽになつて」

「モモンガちゃんも、すぐ引きこもって話できねーし、撫でてくれねーし……あたし自身があたしをわからなくなったら、もう……あたしつてどこにもいないみたいじゃねーか」

「なんか今、自分のふりをしてる人形になってるみたいな……アンデッドだから当たり前だけど、ただの動いてる死体みたい。自分でもよかったんだ……ただ、ああ言つといた方が、あたしらしいなって……あたしらしいって何なんだ？」

「あたしも、世界も、今までした何もかも、なんかスカスカの穴だらけになって。お前だけ、なんか勝手に寄つて来るからこうしてるけど……ぜーんぜん、埋まらなくてさ……寝ないからわかんねーけど、寝たらそのまま消えてなくなりそうっていうか……なくなりたいっていうか……」

涙は出ない。

アンデッドだからではなく。

ただ、からっぽなだけだから。

からっぽなことがつらくても。

からっぽだから、何も出てこない。

しかし、彼女からは確かに何かの流れでいて。

彼女の存在感は、かつてなく薄く。

儂い。

ルクルットが眠れば……目を醒ました時にはこの世から消えてい

そうにすら、見える。

「クレマンティーヌさん」

あふれ出す言葉が途切れた時。

ルクルットは、横たわったままの彼女の上のしかかっていた。

クレマンティーヌなら、身体能力だけで容易に、払いのけられるだろう。

だが、投げやりな視線を向けるだけで。

彼女は何もしない。

する気力がないのか。

「俺が……！」

言葉が続けようとして、やめる。

理屈で埋めるべきじゃないと思ったから。

だからただ、ルクルツトは……相手の名を何度も呼び。

ひたすら全身全霊で……彼女を求めてみせた。

翌朝。

ニグンたちは既に他の準備に奔走している。

出発するメンバーを見送るのは、当人らと縁のある村人のみ。

そんな中で彼らは出発するのだが……。

「お、おい大丈夫かルクルツト」

「だ、大丈夫だ、問題ない」

虚ろな目と、小鹿のような足取りで現れた仲間へ、ペテルは心配げな声をかける。

どう見ても大丈夫ではない。

「大事な出発前に何してたんですか」

「一行の目である野伏<sup>レンジャー</sup>として、大きな問題」

ニニヤとアルシェが咎める視線を向けるが。

当人は気づいてすらいない。

言葉も聞こえていないようだ。

代わりに。

「あー。まあ途中までイミーナちゃんがいるしねー。このバカがダウ  
ンしたら背負ってくなりするから。ほつといていーよ。回復も使わ  
なくていいから。行くよー」

クレマンティーンが、ひらひらと手を振って二人を鎮める。

「そういうことなら、それがしがs——痛いでござるー！」

背負って行こうと言いかけた魔獣が足を踏まれた。

レベル差があれば足を踏むだけでもダメージなのだろう。

もう一人の野伏たるイミーナはと言えば、軽く肩をすくめるのみ。

ヘツケランとロバーデイクも小言を言いかけたが……イミーナの  
視線を追って黙る。



ふらつくルクルツトの手が、そつとクレマンティヌとつながれて  
いるのが見えたのだ。

こうして、総勢9人と1頭と1匹からなる調査部隊がカルネ村を出  
発した。

## 46：拙者にときめいてもらうでござる

トブの大森林。

人類が未だ全てを知らぬ秘境。

数多の亜人と怪物がひしめく魔境。

どれほど実力をつけようとも種族の実力差は大きい。

数日前は「破滅の竜王」により破壊されたが、女神モモンガの奇跡により、森はかつての生命力を既に取り戻していた。

熟練の冒険者として本来ならば警戒し、休憩を挟みつつゆつくりと分け入るが当然。

かつての竜王討伐においても、冒険者らは一泊の野営を挟みつつ分け入ったのだ……が。

今では村と森の間に「破滅の竜王」進行による道もあり。最短距離でサクサクと進む。

「〈方角探知〉。間違いない、この茂みの向こう」

「〈植植物操作〉——賢王殿、先行をお願いするのである」  
「承知でござる！」

復活した森で閉ざされた場所も、今の面々には障害と呼べない。

ファイター レンジャー  
戦士2人、野伏2人、魔術師2人、神官1人、森祭司1人、英雄級の魔獣一体。

さらに、保護者として超逸脱級のアンデッドと魔獣。

襲撃するような愚かな怪物はいない。

「湖の水面が見えたでござる！」

「あと一歩だな。アルシエもニヤ君も休憩入れなくて大丈夫か？」

「問題ない」

「わたしも大丈夫です！」

村でパワーレベリングしてきた漆黒の剣も、プラチナ級どころかミスリル級と呼べる実力をつけつつある。

「おーい、そろそろ着くみたいだよー？ 起きとくー？」

「ふあっ!？」

もつとも、そのメンバーの一人たる野伏は、保護者の背中で眠っていたが。

強く咎める必要もないほど、順調な行程であった。

朝に出発。

昼食休憩を挟み。

少し日が傾いたところで到着。

まだまだ空は明るい。

元より「破滅の竜王」討伐を乞い願ったのは<sup>リザードマン</sup>蜥蜴人たち。

女神の使いが来たとなれば、総員にて歓待するが道理。

昼過ぎの到着から夕暮れには……諸部族が集まり、使いを迎えた。

交渉役は、森の賢王とイミーナ。

クレマンティーンも横にいるが、主な交渉は一人と一匹に任されている。人間でない方が、亜人との仲介役として安心してもらえるだろうとの配慮だ。ロバーデイクでは宗教家として面倒が起きるかもしれない。魔術師の二人も交渉は得意でない。

イミーナは、ワーカーとしての経験もあり、交渉もそれなりに慣れている。世間知らずで交渉に慣れぬ森の賢王への補佐役でもあった。

「——というわけで、モモンガ殿は村に来てくれる者を求めているでござるよ」

「将来的には、さらに外へ交流に出てくれる人材も求めているわ。できれば若くて森の外に関心を持っている人がいいんだけど」

対するはリザードマン五大部族の長。

「おお！ 俺は行くぞ！ まだまだ強くなりてえからな！」

「森と大湿地を救ってくださいった方の望みとあらば、我ら総員で向かうも視野に入れるが……」

「十分な水場があるなら、子供を含め数百人単位の移民を提案するわ」  
「ところで亜人全般となると北部のトードマンにも声をかけるのですかね？」

「あれら、かわく……にがて。りくち、すすめない」

胸襟を開いているとの証か。

五人の族長は一行の前で、堂々と内輪の話を晒す。

事前の打ち合わせもない会話だ。それぞれ内心の打算はあれど、内部の問題や他種族については正直に明かす。

「ふーむ。トードマンとはそれがしも見たことがない種族でござる。リザードマンなら」

食べたこともあるでござるが、と言いかける魔獣の口をふさぎつつ。

イミーナが言葉をつなぐ。

「私もレンジャーとして、この森の中で見た記憶はないわ。でも、先日の『破滅の竜王』討伐の時は、あなた達リザードマンに交じってなかった?」

チラと背後の仲間に目を向けたが、他の者は首を横に振っている。漆黒の剣は湖の傍まで来ていない。フォーサイトの他の面々として、リザードマンの詳細まで見ていなかったのだろう。

ここでは、イミーナしか見ていない種族というわけだ。

「かつて我らとトードマンはたびたび衝突し、険悪な状態にあった。あの災いでは、どちらも干上がった住まいから這い上がり絶望していたがな」

「とーどまん、おおぜい、みずににげた……みず、かれた。ぎせい、おい」

「彼らは水中活動が得意だけど、乾燥した場所で一定期間を過ごすだけで死んでしまうわ」

「女神様の村にも……トードマンは自らの足で行き来はできないでしょうね」

リザードマン族長側の言葉に嘘はない。

しかし、これは明らかな売り込みであり。

己たちこそが湖の主であると、女神から認められんとの思惑が透けて見える。

帝都でも熟練のワーカーだったフォーサイトや、元漆黒聖典のクレマンティーヌからすれば、微笑ましいレベルの狡猾さだ。不誠実を咎めるほどのものでもない。

むしろ、十分に正直に教えてくれている。

「そう。じゃあ、女神さまの元に……まずは代表者格で何人か来てもらえる？ もちろん、全員じゃなくていいんだけど」

「湖というナワバリは維持してほしいでござるよー」

リザードマンと遺恨があり、行き来にも問題あるなら、トードマンを無理に誘う必要はない。なるべく早く他種族の代表格を村へ……それが、ニグンの指令だ。

こちらの焦りを悟らせなければ、それでいい。

「なら、俺が行くぜ！ 元は旅人だ。文句ねえだろ？」

異様に大きな片腕を持つ巨漢の族長ゼンベルが名乗り出る。

「旅人？」

「この大湿地を出て行った者ですね。ゼンベルはあの遠き山に住む山小人の元へ向かい、帰還しました」

細身の族長スーキュが説明した。

アゼルリシア山脈探索を任務とするクレマンティーヌが反応する。

「えっ？ ちよ、ちよーつと待って。おにーさん、ドワーフのところにいったんだー？」

「おう！ 行ってきたぜ！ あの岩だらけの山をひたすら登ってー」

ゼンベルが胸を張り語り始めるが。

瞬時に彼の背後に回り込み、肩をがっちり抱きかかえるクレマンティーヌ。

「いやー。それも含めてちよつと詳しく、教えてほしいんだよねー……ていうか、おねーさんと一緒に山まで来てほしいんだー」

「そうね。申し訳ないけどゼンベルさんには、今回もつと大切な仕事をお願いしなければならなかったわ」

「な、なにに!?」

思惑を外され、戸惑うのも当然か。

クレマンティーヌはすさまじい強者のオーラを隠さず、にやにやと上機嫌に笑っているが。だが、彼女をよく知らないリザードマンにしてみれば。

「ま、待ってくれ。そいつは誰にだってそういいう口のきき方なんだ！」

「女神様とその使いを愚弄する意図はありません。どうかお許しください」

「そんなでも、我々の中では最強格の戦士でしてね。どうしてもということなら……」

「すきゅー、だめ。ここは、いちばんとしよりが……」

パニックになりかける。

「いやいやいや。別に殺さないって。ほんとにお仕事お願いしたいんだってば」

「ええ。私たちはドワーフにも会いに行くべく、この人数で来てるの」「村に向かう者は拙者が護衛するでござるよ！」

クレマンティーナが慌てて、ゼンベルから少し距離を取る。

イミーナと賢王も、フオローした。

「森林と山脈、様々な種族で交流できればって話なの」

「そーそー。だから、モモンガ様がドワーフに会いたがってるんだよー」

「む？ 会いたがってるのはニグ——痛いでござるー！」

クレマンティーナ率いる山脈組には思わぬ奇貨。

そして、イミーナとしても助かる。

ゼンベルという族長は、他の四人に比べてあまり理性的なタイプに見えない。彼らには教えていないが……連れていくリザードマンの

一人は、公的には種族全体の代表と称されるのだ。

小鬼ゴブリンや人食オーい大鬼ガの長に知性は期待できない。話し合いすら困難な可能性が高い。ゆえに、それなりの人材がいる種族には、相応の人物を求めたいのだ。

そんなわけで、どうにか誤解を解き。

ゼンベルにクレマンティーナの部隊について行くよう、納得させたのだった。

そうして。

クレマンティーン又は、ゼンベルと話し込み始めている。  
イミーナと賢王も、改めて族長らと細部を話し合う。

「他にも元旅人で、さほど年配でない人がいればお願いしたいんだけど……」

「体力に自信がなければ、それがしの背に乗るといいでござる！」

「ならば、俺の弟がいい。あいつなら、モモンガ様にも無礼はないだろう」

いかにも古強者といった様子の族長シャースーリユーが、推した。

「ザリユースですね。先日の避難誘導も見事でしたし、若く強い」

「ならば決まりだな。あいつの見識を広げれば、俺たちの発展にもつながると信じている」

「わ、私も！ 私も外に興味があるわ！」

と、慌ててアルビノの族長クルシュが口を挟む。

話の流れや空気を壊す、唐突な言葉だ。

会話していた面々が、クルシュに目を向ける。

沈黙。

己の発言にびつくりしたように、彼女は口を空けたまま硬直し。

他の族長はそんなクルシュを見て、どこか微笑まじげな様子。

「彼女は、俺たちの中じや最高の祭司だ。役に立つだろう」

「族長を二人出せば、面目もたちますね」

「たびびと、ほかも、さがす。わかもの、むかわせる」

どこか、のどかな空気だ。

女神の使いに対する緊張感が、ほぐれたようにも見える。

身内特有のそんな様子に、イミーナと賢王は首をかしげた。

「随分と部族同士で仲がいいのね。もうちよつと、誰が行くか揉めるかと思っただけど」

「それがしと命のやりとりをした人間や亜人には、見苦しく仲間割れをする者も少なくなかったでござる。彼らを思えば、モモンガ殿の見込まれた種族だけあってリザードマンは実に見事！あっぱれ天晴でござるな！」

「いやあ、まあ……な」

「そう、ね」

きまり悪げに、シャーソーリユーが尾を軽く揺らし、目を逸らした。  
「あの『破滅の竜王』の件がなければ、我々の間に戦争が起きても、おかしくありませんでしたね」

スーキユが、肩をすくめた。

黙っていてもわかること。

後で知られる方が問題だ。

「どういふことでござるに!」

感受性豊かな魔獣が驚き、問う。

ただ一匹限りの強力な個体として生きて来た彼女には、集団性というものがわからない。強者として必要なものは力づくで手に入れてくればいいだけ。これだけ多くの仲間がいながら、仲間同士で殺し合う亜人や人間の行動は理解不能である。

「なかまのかず、ふえてた……けど、なかまのかず、へった」

「この大湿地は多くの恵みを与えてくれる。でも、養える数には限度があるわ。そして、私たちの数は限度に達しようとしていたの」

「俺たちの数に対して、魚が足りなくなっちゃったんだな」

「むう。繁殖のしすぎとは……贅沢な悩みでござるな」

森の賢王にとつてみれば、呆れるしかない。

クロマルと交尾を重ねてはいるものの、同種でない以上難しかろうと……彼女はある種の諦観を抱いている。

「そ、そうね」

イミーナが気まずそうに頷いた。

カルネ村に来てからほぼ毎晩、ヘツケランとしている。

それに、半森妖精<sup>ハイフェルプ</sup>で、かつ野伏のイミーナは感覚が鋭い。村のあちこちで、時には日中ですら、情事の声を聴く。もう一人の野伏、ルクルトの消耗についても察しているし。賢王がクロマルに犯される声もさんざん聞いているのだ。

「とはいえ、生き物として子孫を残さなくてははいけないわ……」

同じく妻帯者として気まずそうにする族長らの中、既に羞恥を味わったクルシユが突如呪文を唱える。



有害な呪文ではなく、占術系。

それも背を向け、己の同族に対して使って見せる。

グレート・デイクト・ライフ  
「上位生命探知」——あちら、あちら、その人も、こちらも」

精密に見分けられる生命探知呪文は、妊娠状態を明らかにする。

周りを遠巻きにするリザードマンを次々と指さし示す。

白い背を向け、己の背負う同族の命を、示す。

「——あれら全てが身ごもっているメスなの。あれほどの危機があったからこそ、子を残そうとする者は増えるわ」

私もいきなり口説かれてるし……とは、口に出さないクルシュ。

女神の救いがなければ、ろうそくの最後の輝きの如く、あの日会ったばかりのザリユースと情熱的に交尾に及んでいた可能性はかなり高い。

どさくさにまぎれたような口説きだったが。

思い出せば、いろいろと熱くなるのだ。

そんな考えにとりつかれたせいか。

くるりと振り向き、リザードマンの繁殖状況を説こうとしながら。

本来は解くべき呪文を、発動させたままだった。

「だから私だって、近くオスを迎えて子を為さなければと……あら？」  
まだ沈黙の続く面々に生命探知を使ってしまった。

そして、気づく。

クルシュは、気づく。

リザードマンにおいて、祭司とは医師でもあるのだから当然に。

説教じみた言葉を紡ごうとしていたが。

笑顔になり、一人と一匹を見つめた。

イミーナと魔獣は、首をかしげる。

「あんなことを言っただけでイミーナ殿、森の賢王殿……お二人も孕んでるのね」

「はっ？」

「まだまだ宿ったばかりの子かしら。今は大丈夫だけど、体調には気をつけ——」

「はあああああああ!?!」

突然の二人の大絶叫。

カルネ村側、リザードマンを問わず何事かと目が向き。

駆けつける者たちとている。

だが、それも次の瞬間。

大きな歓声となって、宴をなお盛大なものに変えるのだった。

47：世界は美しくなんか無い。そしてそれ故に、美しい。

リザードマン  
蜥蜴人による歓待の翌朝。

多くの者が、飲みすぎて転がり。

森の賢王も、思わぬ懐妊に喜びすぎて眠っている。

そんな中、調査隊の面々はアルシエを中心に集まっていた。

村への報告を行っているのだ。

（ほう？　まずはおめでどうと言っておこう。だがイミーナ殿の帰還は認められん）

〈伝言〉メッセージ　ごしのニグンの言葉に、アルシエは目を見開いた。

「ど、どうして？　身重だし、休んだ方がいい」

（まず、彼女は魔法で調べるまで、自覚症状の類はなかったのだろうか？　ワーカーとしての君たちは体調不良を抱えたまま、この調査に出るようなチームだったのかね？）

「それは違う。イミーナ自身問題ないと言っている」

（ならかまうまい。人間の妊娠期間は長い。よほど辛くなければ、いつも通りに過ごした方がよからう）

「森の調査は、いつも通りではない」

（もちろんだ。森で居続けろと言ってはいない。もし体調に問題が出れば、即座に帰還を許可する）

「しかし、万一があつてからでは遅い」

（悪いが、目下はこちらの方が危険なのだよ。法国が表立った手段を取るとは限らない。刺客が入り込んだり、毒を流される可能性とて皆無ではないのだ）

「えっ」

（モモンガ様に対し、そのような手を取る可能性は限りなく低い。彼らは人類至上主義で、森妖精エルフとは戦争中。イミーナ殿に絶対安全とは言い切れん。帝国のエルフ奴隷がどう手に入れられ、どう扱われていたか、君なら知っているだろう）

「そんな……」

帝都で生まれ育ったアルシエにとって、法国は遠い異国。

文化の差を知識としては知っていても……その差別が、仲間に降りかかるとは考えていなかった。

（皇帝陛下も竜王殿も、我らに協力してくださいださっている。だが、今はカルネ村自体が準備に奔走しており、万全とは言えん。法国の側から見れば、隙を晒しているとも言える）

「じゃあ、そちらの準備が済んだら戻らせてほしい。イミーナだけいいい」

（考慮しよう）

「あと、森の賢王も妊娠した」

（なに？）

思わぬ懐妊情報。

予想以上の移民希望者。

そして妊娠を自覚症状なくとも確認できるクルシユという人材。これらにより、昼過ぎ。

カルネ村から、リザードマンの集落へと〈転移門〉が開かれた。黒い穴を通じて現れたニグンたちの前には。

移民希望のリザードマンの若者が数百名。

リーダーは、クルシユとザリユース。

さらにザリユースが飼う多頭水蛇ヒドラのロロロもいる。

「交渉がうまくいった様子で何よりだ。これで最低限の準備は済んだと言ってもいい」

思わぬ戦力と人数に、ニグンの顔にも笑みが浮かぶ。

もつとも、リザードマンらの表情は硬い。

まだ見ぬ土地への恐れもあり、半ば女神への生贄の如き心持なのだろう。

残る者たちとは今生の別れの如く、視線や言葉を交わしている。

（彼らの不安を払拭し、短期間で対等のように見せねばならん……これらも重要な課題か）

森の賢王やイミーナは既に彼らと打ち解けたと聞いているが……と、派遣した者らを見れば。

「しかし、それがしが子を宿すとは……目が覚めても夢ではなかったでござるよ。クロマル殿お……！」

「MUGREEN」

「くっ……承知！ 村に戻れど、夫たるクロマル殿のご武運を祈らせていただく次第！ それがし、妻として必ずや立派な御子を産むでござるー！」

「MUUU……」

「ひゃっ、くすぐったいでござるよー♡」

森の賢王は今回、リザードマンと共に〈転移門〉でカルネ村へと帰還するのだ。

二体が別れを惜しみいちゃついている……のだろうか。

種族が違いすぎる上、一方は会話できないので、よくわからない光景になっている。

その一方で。

ニグンと共に来た他の者——の大半が、微妙な空気になっていた。

「ご、ごめんね。急をお願いすることになったみたいで」

「いえ……法国の人が来るかもしれないそうですし」

「法国はいや……いや……」

「い、イミーナさんは、モモンガ様の大切な人ですから」

「アルベド様とエンリさんに殺されそうだから、その言い方やめて

……」

森妖精<sup>エルフ</sup>の三人と、イミーナには互いに気まずさがあった。

特にエルフたちは言葉にわずかな棘を、含めてしまう。

「あ、あー、森は俺がついてくぜ！ お前らは、山脈の方についてつてやれよ」

「そうですね！ 法国と顔を合わせないように、というならその方がよいかとー！」

事情を知るブレインとロバーデイクが、人員配置についてフオローし。

「確かに当てもないので助かるんですけど。いいんですか？ エルフの皆さんは森の方g——」

よくわかっていないペテルが、ロバーデイクに口を塞がれる。

「いえー。イミーナが傷を負わないよう、後衛を増やすより戦士がいてくださった方が助かりますー！」

「そりやそうだな。あの神獣様がいたって、壁役が多いにこしたことはねえ」

「……そーだねー。こっちは探索で2チームに分けて動いたっていいわけだしー」

ロバーデイクの焦りから何かを察したか。

ヘツケランとクレマンティーヌも同意した。

「ブレインはカルネ村でも(女神の使徒を除けば)最強格の戦士。ぜひついてきてほしい」

アルシエもよくわかっていないなりに、話に合わせた。

「……エルフとハーフエルフって仲悪いんすか？」

「黙つといてー」

小声で尋ねるルクルトに、クレマンティーヌは短く答え、睨んだ。自ずとチーム分けも変わる。

森林探索：クロマル、ブレイン、ヘツケラン、イミーナ、ロバーデイク、アルシエ

山脈探索：クレマンティーヌ、ゼンベル、ニニヤ、ペテル、ルクルト、ダイン、エルフ3人

カルネ村・森の賢王、ザリユース、クルシユ、ロロロ、その他リザードマン数百

「精神的に問題ある者について、こちらも考えておく。彼女らは、現状でもそれなりの戦力だ。お前なりに鍛え、立ち直らせてやってくれ」  
「無茶言うねー」

ニグンの言葉に、クレマンティーヌはげんなりとしつつ。

ぞろぞろとカルネ村に向かうリザードマンを見送った。

移り住んだ者への保証——一応の人質も兼ねて。

一行はその一日を、リザードマンの集落で過ごす。保存食がある程度受け取ったり、酒や水の汲み置きも必要だ。そうして翌朝にそれぞれ、別方向へと出発するのである。友好関係を結んだ以上、この集落では夜番も必要ない。一行はゆつくりと休む、はずだったが。

「ルクルットちゃん、ちよーつと付き合ってくれるー?」

「うえ? ちよ、ちよつと、明日からマジな探索つすよ!」

「おー? いつものガツツキはどーしたのー?」

「だ、だつてさすがに!」

「いーからいーから」

漆黒の剣が休む小屋から、ルクルットが連れ出される。

「や、やっぱり、ルクルットのやつ、クレマンティーヌさんと……なのか?」

「センパイ、ルクルットのこと名前で呼んでたし……」

「事実は小説より奇なり……であるな」

見送る三人は、なんともいえない顔であった。

クレマンティーヌは湿地帯の中を大きく跳躍し、離れた浮島へと至る。

「ここならいつか……おい、声は小さめにしな」

「いや、ヨソにいる時に、あんな声出しませんって。クレマンティーヌさんこそ……」

ばしんと尻をはたかれる。

「バーカ。いつまでやってんだよ。エルフの件、お前わかってんのかつて確認。あそこじゃ、隣の小屋で寝てるあいつらに聞こえるかもしれねーだろ」

「え、エルフ? イミーナさんとか空気悪かった件つすか」

期待していたルクルットは、露骨に残念そうな顔になる。

「そーだよ。あの魔獣をあつちが連れてく代わりに、あたしが受け持ったけどさー。あいつら、けつこう危ういよー? 余計なこと言っ

たら、面倒になるから、しっかりわかっとけって言ってたんだよ」

「余計な事って……？ 別にエルフ差別とかするつもりは、ないっすよ。イミーナさんとも普通にやってたじゃないですか」

精神的に問題がありそうなのは、イミーナと会話していた時も。明日からの探索について話し合った時も。

うすうす感じたことではある。

ニニヤに近いが、ニニヤより虚ろな、危うげな顔をしていた。

三人が三人とも、だ。

「あのエルフが帝国で奴隷だったってのは、知ってるよねー？ どーゆー扱いか、わかるー？ あと、エルフの国ってどんなか、知ってるー？」

「……いや、よくは。ニニヤの姉ちゃんみたいな目に遭ってたってことですか？」

「あー……ニニヤちゃんから聞いてるかなー？ ま、あそこまで悲惨じゃないんだけど……いや、ある意味じゃあれより酷いかもねー」

エルフの王は、同族の娘と片端から交わり、子を産ませ。

産まれた子も、産んだ母も、法国との前線に送り込んで……強制的な戦いの中で強者を生み出さんとしている。戦いの中でさらなる力を見せれば、また子を産まされ。再び前線に送られるのだ。

このため、エルフの国では基本的に“王のお手つき”の女しかない。

戦争で捕虜となったエルフはそのまま奴隷となり、法国内で使われるか、帝国等に売られる。

「なんだそりや。それで国になるのかよ」

「ま、これについては目の敵にしている法国にも理があるよねー。で、そんな頭おかしーやり方だから、エルフの奴隷ってのは女子供ばっかしでさー。しかも大半がそこそこ戦える……あの子らみたいな感じなんだよー」

「つまり、あいつらは生まれた時からそんな環境にいたワケか？」

「エルフは長寿だから断言できないけど、たぶんねー。それで、売られた後だけど……」



帝国のエルヤー・ウズルスについても、クレマンティーヌは知らぬでもない。

法国内でも、いずれかの聖典にスカウトしては……という話があった。かつては己に比肩しうる戦士の一人として、情報を集めてもいたがゆえ。

その人品についても、把握している。

「……って奴が、あの子らの元ご主人様ってワケ。ニニヤちゃんが聞くと殺したがるから、ナイシヨにしとこーねー？ モモンガ様にも、気分悪くしないよーに黙ってたんだし」

「そ、そりゃわかったけど。でも、モモンガ様に助けてもらったんだろ？ じゃあ、なんでそんなこと教えるんだ？ 誰も知らない方がいいじゃん」

「さつきから、内心かなり怒ってるねー？ そうやって対等の口調になっしてくれてる方が、おねーさんは嬉しいなー」

「ちや、茶化さないでくだ——くれよ！」

律儀に言い直したルクルットの頭を、にやにやと撫でてから。

クレマンティーヌは冷たい表情になった。

「そー。知らない方がいーんだよ。でもさー、しばらくあたしたちは、あの子らと組むわけじゃん。危うい状態だから……あんまり、壊れないよう扱ったげないでしよー？」

「べ、別に、そんなこと言われなくても、冒険者として過去を探ったりは……」

「ちがうちがーう。過去じゃなくて今、いや未来かな？ すごーく話題にしちゃいけない話ができちゃったんだよー」

「……どういふことだよ」

じつと、正面からクレマンティーヌが見据えてくる。

「ロバーデイクとンファイレアが、カルネ村で何をしてたか知ってるー？」

「も、元奴隷とか娼婦の、治療をしてたんだろ？」

唐突な質問だ。

彼らのしていたことなど、村人なら誰でも知ってる。

「実は治療だけじゃないんだな。ルクルットちゃんは、あんまり世の中の中の裏側、見ない方？ あの二人は意外とそのへん、しつかりしてたよー？ オトナになるなら、そゆトコも見ないとねー」

「治療以外に何を？ え？」

（実は女に手を出してたとかかって話じゃないよな？）

混乱してしまう。神官と薬師が、他に何をするというのか。

「はー。お前ら、ニニヤちゃん以外ホントに夢見る若者だよねー。前のあたしが見たら、めっちゃくちやに痛めつけて殺してたんだろなー……。ま、だから、ルクルットちゃんは、あたしなんか声かけてくれたんだろけどねー」

「えっ、えっ」

クレマンティーンが、愚痴半分に不貞腐れたような顔になる。

彼女とて、こんな話はしたくないのだ。

これで察してくれれば……それでよかったのだが。

ルクルットは、まるでわかっていない様子で混乱している。

「村に来た女どもの大半は、腹にガキがいたんだよ。クソどもに無理やり孕まされたのがな」

「は……？」

「それを始末してたのが、あの二人。だーから、二人とも元奴隷連中から、それなりの敬意を持たれてるんだよねー」

「え？」

世界が美しくなんてないと、忘れていた。

理解に時間がかかっていた。

「イミーナの種族って何だっけー？」

ハーフエルフ  
「半妖精」

「あのエルフ連中の腹にいたのは、何だと思う？」

「……………ハーフエルフ？」

「ハーフエルフのイミーナは、愛する男と結ばれて子供ができたんだよ。本人は幸せそうで、嬉しそうでさー。村としても、おめでたいよねー。村に戻ったら、幸せな結婚もするんだろねー？」

「……………」

「一方で、あいつらはってーと王様に無理やり子供産まされて、子供はとりあげられ、本人は奴隷にされてー。おまけにクソ野郎の子供も孕まされ、その子を……始末して、今はモモンガ様にすがりついてるってワケ」

「……………」

返事はない。

心の準備もなく、さらけ出された裏側に。

吐き気すら伴うおぞましさを感じ、震えるしかない。

何に震えているのか。

怒りか、恐怖か、怯えか、嫌悪か。

だが、間違いなくルクルツトは……ニニヤの姉についても含め。多くに目を背けていた。

かつて、エ・ランテルにいた頃なら、気づいて当たり前だったのに。なにもかも忘れて、英雄志願の子供の気分で居続けていた。

「おーい」

「……………」

耳元に呼び掛けられるが。

ちらと目を動かすしかできない。

なんと答えればいいかわからない。

「イミーナの話も、あの魔獣が孕んだ話も、道中の話題にはするなって言ってるんだよ」

「わかった」

強張った声。

「出発はちよーつと遅らすから、他の二人にもよろしくねー。ニニヤちゃんには、あたしから言っとくからさー」

実のところ、ペテルとダインは元奴隷の娘と深い関係になっていいる。それなりの裏事情も聞いているはずだ。彼女らに関わろうとせず、クレマンティーヌに声をかけたルクルツトが……カルネ村で最も裏事情に疎い男、なのだろう。

おかげで衝撃から立ち直れず、生返事をしつつ頷くしかできない。「はー……………」

そんな様子に、クレマンティーヌは深々と溜息をつき。

「……………おわっ！」

突然、ルクルットを仰向けに蹴り転ばした。

「おい。朝もその面してたら、はったおすぞ、てめえ」

「もう蹴ってるし！」

その衝撃でようやく我に返るが。

「うるせえ。お前が悩んだってしよーがねーんだよ。ンファイーレアも、ロバーデイクも。ニニヤちゃんだって、お前らにそんな相談しねーし、期待もしてねーんだよ。口をすべらすなって、釘さしてんのがわかんねーのか？」

「そりゃ、わか……………ちよおおお!？」

股間をぐりぐりと踏みつけられ、悲鳴をあげる。

「いつつも、あたしに会う時はガチガチのクセしやがって。何、顔といつしよにしよぼくれさせてんだ？ あーん？」

「あ、あんな話聞いてそんな……………」

「ほー。それじゃ村に帰るまでずーとあたしと、何もナシで大丈夫ってワケー？ あのエルフ連中といつしよの限り、そーゆーの一切ナシだよー？」

「えっ、いや、それはっ！」

しっかりと反応し始めるそれを、鼻で笑うクレマンティーヌ。

「そーそー、いつも通り、そーゆー顔でいりゃいいんだよ。話題だけ気をつけな」

「は、はいっ」

結局、ルクルットが寢床に戻ったのは、それなりの夜更けだったという。

48：みんな いっしょうけんめい たたかっている

「快樂も激しすぎると、つらいというか……苦しいだろうか？」

「ひやめ、ひやめてっ……！」

「ダメだ。お前もやめてくれなかったからな」

「んいぎいひいひいひい♡♡♡♡」

冷酷な主の声に、アルベドは二重三重の意味で達し。

のけぞって突き出した舌さえ吸われ、溺れる。

最初の内は残っていた冷静な部分も維持できず。

並列思考をする余裕もなく。

ただただ、主に貪られる。

一方その頃。

城砦の外、ザリユースとクルシユ、そしてニグンが話し合う。

「救援を求めた折にも見たが……ニグン殿、この湖を我々に？」

「我々では釣りくらいしかできんのでな。上が霧のため、船を出すにも適さん」

リザードマン  
蜥蜴人が暮らせるよう、既に霧の中の死霊<sup>レイズ</sup>らは退かしている。

「住居は勝手に建てていいの？」

「本来は村に住んでもらうべきだが……思わぬ人数だ。湖畔や水路沿いの区画をいくつか提供しよう」

「あまり岩場でない方が助かるな」

「とはいえ、クルシユ殿の魔法は我々にも重要だ。できればザリユース殿も含め、二人には村に住んでほしいのだが」

クルシユへの期待は大きい。

彼女は早期の内に、妊娠を見分けられる。

現に、村の重要人物たるエンリにも懐妊の兆しありと宣言した。

村の労働力を安定させるには、早めの情報が不可欠。また、かつて悲惨な境遇にあった者らも、素早い処置で母体の負担を最低限にできる。新たに愛を育み、想い人の子を授かるため、クルシユは重要な存在なのだ。



ドマンが先に来てくれたのだ。他に、水辺に強い種族が加わる予定もない。ひとまずは水場を獲得しても問題あるまい」

「ありがたい。それならば、魚を増やす手段もあるだろう」

「そうね。ひとまず、いくつかの小集団に分け、個別に水場を与えていけば……」

「ああ、溜め池もいくつか作成している。いずれはそちらも拠点に使ってくれたまえ」

「至れり尽くせりだな……」

「番兵を逐一配置するよりは安かろう。我々は田畑や飲用に使う水が必要なのだ。水をやたらと汚さねば、魚を採ったからと文句は言わんよ」

「いずれにせよ、まずは生活を始めてから……ね」

「そうだな」

実際の生活を始めれば、細かな問題は多々あるだろう。

だが、食糧不足が見え始めていた故郷より、未来はある。

人間と混じつての生活を強いられるわけでもないのだ。

彼らは新たな日々に向け、確かな希望の灯を得た。

「——っ♡ふーっ♡」

「まったく。わかったか？ 今度から私にも、あまり激しくするなよ？ 私はこうして、アルベドと離れず……共に穏やかな時間を過ごせることが、大切なものだからな」

「ひゃ、ひゃい……♡」

「よしよし♡ん……♡」

「あっ♡ひあっ♡」

モモンガの攻めが終わり、穏やかな愛撫とキスのみを与えられるのだが。

三日三晩狂わされたアルベドは、何をされても痙攣し、軽い絶頂を繰り返してしまう。

何をされても、達する状態になってしまっているのだ。

優しく肌を撫でられ、甘いキスを受けるだけで。

激しい攻めを想起し、体が反応してしまふ。

イミーナたちが森林探索を始めて三日が過ぎた頃。

「ははーっ、このリユラリユース・スペニア・アイ・インダルン。御身らに絶対の忠誠をば誓わせていただきます！」

「西の魔蛇」と呼ばれたナーガが、その巨体を縮こまらせていた。

一瞬で空間を超えたのか。

今いるのは、森の外。

水路が絡み合う平原である。

「忠誠を誓う必要はない。私はニグン・ルーイン。お前と共に女神モモンガ様に仕える身だ」

「も、モモンガ様、ですか」

「そうだ。偉大なる女神は慈悲深い。供物も奴隷も求めぬ」

「で、では、儂は何をすれば……」

周りに人間が見えたため、人間風情の使い魔と侮ったが運の尽き。

彼の魔獣にはあらゆる魔術が効かず。

手下どもも簡単に無力化され。

無謀にも立ち向かった人喰い大鬼どもは挽肉と化した。

ならば人間どもを人質に……と手下を向かわせたが、奴らもそれなりに手ごわく。それより前に、魔獣に肉薄され白旗を上げたのだ。

そのすぐ後、異様な黒い空間が現れ。

魔獣と共にいた人間どもに、入るよう言われた。

そして今……空間を潜り抜けた先、明らかに尋常でないアンデッドらしき存在がいる。

あの空間を作ったのは、目の前の男だろう。

ナーガが小手先の術を使ったからとどうにもなるまい。

「今まで通り森を支配していればよい。ただ、我らが女神がお前の上にいると忘れぬことだ。そして、我々がお前を呼ぶとき、拒否は許されん」

「ははーっ、全て仰せのままに！」

よくわからないが、無茶な要求ではない……ように聞こえる。



リユラリユースはプライドをかなぐり捨て、土に額を擦り付けた。  
「我が女神は、配下たる者に限りなく慈悲深き御方。森に大きな問題があれば解決してくださるだろう。現状での問題や異常があれば言うがよい」

「先日森で起きた、恐るべき大魔樹の暴走が大事件でございましたが……なぜか魔樹は消え、森も元に戻っております。目下は大きな問題もないかと」

お前らが来た以外はな！とは口に出さない。

「ほう……あれのことか？」

「は？ な……あ、あれは……！」

男の指さす方を見れば。

あのおぞましい魔樹が、村を守るかの如く立っているではないか。  
「あの魔樹はモモンガ様によつて鎮められ、この地を守るべく配置された。もはや森を破壊したりすまい。女神に救いを求めたりザードマンたちに感謝するのだな。さもなれば、魔樹は森全てを滅ぼしていただろう」

「お……お……」

リユラリユースは絶句し、呆然と……あの森を破壊した恐怖。おぞましき魔樹を眺めるのだった。

「そろそろ、お風呂に行きましょうか？」

互いの汗や唾液で、匂いをまとい始めている。

アルベドとしては少し、気になるところだが。

「ん……もう少し。もう少し、こうしてお前の香りに包まれていたいのだ」

そう言われては、抗えない。

「もう。そんな風に髪に顔を埋められていると、モモンガ様の顔が見えませぬのに」

「ずるい言い方をする」

「ふふ。さんざんモモンガ様に意地悪されてしまいましたから」

「お前の方が意地悪だったろう」

「そんなことはありませんよ。私は親切ですから……ふふ、さんざん攻めてばかりで疼いてらっしやることも、察していますよ」

「ひゃっ♡ うう……や、やりすぎるなよー!」

「ええ。ではお風呂に向かいながら……まずは一度、気を遣っていただきましよう♡」

「し、仕方ないな……」

ひさしぶりの受け身に、期待してしまうモモンガであった。

さらに三日が過ぎ、イミーナたちは帰還した。

もう一体の支配者を置き土産に連れて。

「ぐわあー、バ、バカなこのグ様が……!」

小さな人間風情に吹き飛ばされ、「東の巨人」と呼ばれた妖巨人トロールが呻きをあげる。

「賢王殿とリユラリユース殿は聞き分けがよかったのだが。こういう手合いがいると、かつての我が活動にも意義はあったと安心させられる」

「あ、あんな臆病者どもと俺をいつしよに……ぎやああああ!」

ニグンが錫杖を振るい、トロールを打ち据えた。

圧倒的な能力値差に頼った、力任せの攻撃。

それだけで空間が消滅したかのように、その肉が抉えぐれ爆はぜる。

火でも酸でもない攻撃ゆえ、すぐにトロール特有の再生が始まるが

……。

「再生阻害」〈苦痛増大〉

「ひ!? いだいいだいいだいい!」

傍にいたレイナースの呪文が再生効果を封じた。

トロールの再生能力は強い。

肉体の損傷はすぐに圧倒的な回復力で打ち消されるため、炎や酸でなければ痛みすら感じない……のだが。回復封じのデバフにより、通常の生命と同じ苦痛を味わわれる。

「とりあえず暴れないよう、四肢を奪っておくでしょう」

次々と四肢が破壊される。

「ぎゃあああああ!! いでええええ! どごいっだああ! お前ら、俺を早く助けろおお!」

手下に助けを求めるが、ここにいるのはグだけ。

そもそも、森をうろつく人間を手下らと囲んだ後……共にいた魔獣にさんざん痛めつけられ、手下も散り散りに逃げたのだ。

再生能力でどうにか意地を通していたグだが、最後には魔獣に蹴り飛ばされ……妙な黒い穴に放り込まれた。

そして穴を通って出て来た場所が、ここである。

「残念ながら、お仲間のいる森は遠くですよ。モモンガ様の耳障りにならぬよう、外部への音も封じておりますし」

「我らに従属を誓うまで、付き合ってやろうではないか。どうしても無理だと言うなら、君にはこのまま……そうだな、再生能力を利用して魔獣なり魔樹なりの栄養源となってもらおうか。殺しはせんよ、安心したまえ」

「ぎゃあああああ!!!」

森の一角を支配したトロールが泣きわめき叫ぶ。

「イミーナ殿たちも戻った。法国も未だ来ず」

「あちらが拙速を尊んでいれば、少し困りましたが……どうやら万全の体制を整えておけそうですね」

雑談交じりで与える責め苦。

日が暮れ、夜明けが訪れるより早く。

「東の巨人」グは、女神への服従を誓った。

そしてさらに一日が過ぎ。

「はあ……♡ 気持ちよかったぞ♡」

「その賞賛に勝る喜びはありません」

「こら。嘘を言うな。今だって攻める一方だったから少し不満なのだらう?」

「そ、そんな……これは『喜び』、あれは『悦び』ですから」

「悦びはいらないか?」

「……欲しいです。もう、本当に意地悪ですね、モモンガ様」

「ふふ、だがまあ……今日あたりは食事もしたい。気分を切り替えてから、また楽しもうではないか」

「外はまだ朝のようですが」

「ああ、朝のうちに言っておいた方がいいだろう。準備もしておいてもらえるしな……〈伝言〉<sup>メッセージ</sup>」

あの自虐的な気持ちはすっかり去った様子で。

アルベドとしても喜ばしい。

食事の提案は、アルベドを休ませる意図もあるのだろう。

〈伝言〉の間も、モモンガはアルベドの髪や肌を撫で続けてくれている。

多幸感に、アルベドは目を細めた。

「ニグンさん！ モモンガ様が今日の夕餉に降臨なされるそうです！」

エンリへの神託に、村中がいろめきたった。

「さすがはモモンガ様！ 大森林の主だった連中を全て支配下に置いたこのタイミングとは！」

「エンリさんは懐妊報告もしなければいけませんもの。雑事は私とニグン殿にお任せくださいませ」

ニグンとレイナースを中心に、アンデッドらが外部の労働に出される。

村人らは女神を迎えるべく、最大限の歓待準備を進める。

特に料理は、アンデッドには参加できない。村人の領域だ。

「ンフィーの子ができたって報告しなきゃ……」

「それがしも懐妊報告でござる！ クロマル殿の主に、元気な子を産めるよう祝福をもらおうでござるよ！」

「わ、私も……しないのかな？ ま、まだ現実味がないっていうか、恥ずかしいんだけど……」

妊娠宣告されたエンリ、森の賢王、イミーナがそれぞれに喜びを見せ。

「いよいよ、あの奇跡を起こしたモモンガ様を間近で見ることになる

のか」

「失礼がないよう気をつけないと……不興を買えば、どうなるかわからないわ」

リザードマンたちは不安を抱え。

「め、女神様が儂如きそのように気になされずとも……」

「お、俺が顔を見せて、殺されないか……？」

〈転移門〉で顔合わせに呼び出されたリユラリユースとグは、絶望的な面持ちで立ち尽くすのだった。